

---

# 太陽の愛 月の恋

玉紀 直

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽の愛 月の恋

### 【Nコード】

N3041F

### 【作者名】

玉紀 直

### 【あらすじ】

「俺と「恋愛」しようよ。「姉さん」「そう言っつて義理の弟である正臣は義理の姉である真理を犯した。義理の姉弟になってから、何故か執拗に真理に嫌がらせをする正臣。やがてその正臣の過去の事件を知った真理は……。憎しみ」が愛に変わる。「復讐」が恋に変わる。「義理の姉弟」という微妙な関係の中で揺れる、ちよと悲しい恋物語です……。ただ今、のんびりと本文手直し中。お話の内容は変わりません。現在、第14話まで手直し済。

1. 「どっぴつて?」

「お酒は飲む! 煙草は吸う! ケンカはする! 不良だわ愛想は無いわ! おまけに、義理とはいえ、自分の「姉」を犯っちゃうなんて! 信じられない! 何考えてんのよ! バカア!!!」

立花真理は、今自分が出せる精一杯の声を振り絞って怒鳴った。

とはいえ、その声にあまり迫力は無い・・・。

無理も無い。ついさっきまで、犯される自分のささやかな(?) 抵抗として、さんざん叫び声を上げていたのだ。

普通ならばソプラノ系の良く通る声なのだが、今の真理の声はかすれてしまい、まるで風邪で声が出なくなる寸前のようになっている。

ひどい有様は声だけではない。

真理の体には、まるで手で紙でも引き裂いたかのような滅茶苦茶に引き裂かれた服の破片が、辛うじて少しはり付いているだけ。

散々暴れたので、ベッドの上もぐちゃぐちゃだ。

本来ならば真理自慢の綺麗なセミロングのストレートヘアも、乱れに乱れて見る影も無い。

くりっとした可愛らしい大きな瞳も、今は泣きに泣いて真っ赤に

なっている。

ただ、この真つ暗な部屋の中では、そんな真理の悲惨な姿も見えずらいだろう。

「聞いてんの？何とかいいなさいよお！正臣まなおみい！！！」

ベットの上で座りこみ、自分を抱き締めながら最後の気力を振り絞り、思いつきり真理は怒鳴った。

・・・そして「彼」を睨みつける。

今、自分を散々、陵辱して犯した少年。・・・。

真理の「弟」である、立花正臣たちばなまなおみを。

上半身裸にジーンズ。ブロンズ系の金髪。グレーのメッシュが入っている。

真理が言うように「愛想の無い」目で、正臣はまるでバカにするかのようにフツと笑った。

「・・・楽しかったよ。「姉さん」・・・」

「・・・！」

そのまま部屋のドアを開け、前髪の間からチラッと真理の姿を一瞥いちべつして部屋を出て行く。

さっきまでの騒がしさが嘘のように、そこは静寂に包まれた。

ベットの下に転がった目覚まし時計の秒針の音だけが、やけに大きく部屋の中に響く。

「・・・どうして・・・？」

自分を抱き締める真理の指に力がこもる。血が出そうなくらい、

指が肌に食い込んだ。

「どうして・・・？」

誰も答えてはくれない。質問を繰り返す真理の瞳から、散々泣いて枯れてしまったかと思われていた涙が零れ落ちた。

「どうして・・・こんな事になっちゃったの・・・」

真つ暗な部屋の中と同じように、心が真つ暗になりそうな真理の姿を、窓から入り込む月明かりだけが、優しく照らしていた・・・。

すべては、あの日から始まった・・・。

あの日。真理の母親と、正臣の父親が再婚して、義理の「姉弟」になった。

そう・・・。あの日から・・・。

1・「どうして?」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

今回、玉紀の作品を初めて読んでくださっている方、はじめまして。

読んだ事がある、と言う方、今回も有難うございます。

ちょっとショックなシーンからスタートしました。

これからこの2人が色々な出来事の中で気持ちを交わして行きます。

でも、こんな2人が仲良くできるんでしょうか？

恋愛、といっても、姉弟ですし・・・。（義理ですが）

どう考えても惹かれ有ってはいませんし・・・。

・・・それはまた、後ほどの話で・・・。

2. 「太陽みたいな・・・」

「はい！！校門閉めるよー！早く入ってー！！」

良く通るソプラノ系の声が、朝の校舎前に響き渡る。

その声と、学校から鳴り出したチャイムの音に急かされる様に、まだ校舎内に入っていない数人の生徒達が校門目指して走り出した。

「チャイム鳴り終わっちゃうよー！ほらー、早くー！！」

鉄製の門に両手をかけて、駆け込んでくる生徒達を笑顔で急かす。声は大きいが体はどっちかと云うと小柄。おそらく150センチ位しかない。

「日野先輩、おはようございます！！」

1年生らしき少女が挨拶をしながら飛び込んできた。

「こら！風紀委員が遅刻スレスレでどうするの！！」

注意の善なのに声はあくまで明るい。

制服の左腕に「風紀委員長」の腕章を付けた彼女、日野真理は、城南高校3年生。

1年の頃から風紀委員を務め、その明るさと気さくさで「太陽みたいな先輩」と下級生に慕われている。

朝、登校時間終了のチャイムと共に校門を閉める。その後来たものは遅刻扱いになる。遅刻者チェックは風紀委員長の大切な仕事だ。チャイムが鳴り終り、真理が半分校門を閉めかけた時、100メートルくらい先に一生懸命走ってくる男子生徒を見つけた。

「・・・・・・・・」

真理は門を閉める手を止めると、足元に落ちていた小さな紙ゴミを、ゆっくりと拾い上げ「あ、ゴミ落ちてたあ」と呑気のんきに呟いて手

の中へ握る。そうしてる間に、最後の男子生徒が門の中へ走りこんできた。

「あら。セーフ。良かったね」

真理がにこつと笑う。すっかり遅刻だと思っていた男子生徒は、嬉しそうに笑い真理に一礼すると、また玄関に向かって走って行った。

「おいおい。今は、アウトだろ。日野」

呆れたように腕を組んで近寄ってきたのは、国語教師で風紀顧問である、井関恭吾だった。

「いいえ。門を閉める前に入っただけです。セーフですよ」

そう言っただけで門を閉め、通学路を左右見渡す。もう、走ってくる者はいない。

「今日は、遅刻者無さそうですね」

につこり笑う真理を見て、井関は頭を掻く。

「『太陽みたいな先輩』か……。お前が下級生に慕われるわけだよな……」

城南高校は遅刻に厳しい。あまり遅刻にチェックが付くと内申にも響く。

遅刻がちな生徒にしてみれば、遅刻者を出すまいと頑張っている真理みたいな存在は、大変助かる。

生徒達が喜ぶ姿は井関も嬉しいが、あまり甘いチェックを見逃しすぎると、今度は井関自身が生徒指導部の主任に叱られてしまう。

新卒でこの高校に赴任して、今年で3年目。

まだまだ微妙に立場は弱い。

「今日も遅刻「0」つと……」

クリップボードに挟んだチェック表に「0」を書きこんで、真理は肩にかかった髪をボールペンを持った右手でいじった。

セミロングのストレートヘア。

前髪も同じ長さで揃えられているが、顔の輪郭に沿ってシャギーが入っているので特にジヤマにはならない。

綺麗な髪は真理の自慢でもある。

そんな真理の横顔を、井関は黙って眺めた。

真理が入学した年に、井関も新任教師としてこの学校に来た。

学校に慣れるため、という事で、新任早々、風紀委員会顧問という大役を任された。初年は前年までの顧問が付いていたので何とか助かったが、2年目からは1人。

不安で元気が出なかった、2年目最初の風紀委員会。

そんな井関に明るく声を掛けたのが、1年の時から風紀委員を務め、今年2年生になった真理だった。

「先生。今年もやるんですか？私もなんですよ。同じ「2年生」です。一緒に頑張りましょうね」

本当に「太陽」のような明るい笑顔で。

あの笑顔に、僕は救われたんだ。

その時から、井関にとって真理は、生徒以上にちょっと気になる存在になっている。

しかし当然ながら、教師という立場柄そんな事は口に出せる筈も無く、この思いは井関の胸にしまわれたままだ。

「さーて、私も教室に・・・」

腕の腕章を外そうとした時、いきなり校門がガチャンという大きな音を立てた。

真理が驚いて振り返る。校門を登り飛び降りてきたように身を躍らせ、校内に入り込んできたものを目にした時、真理はその眩しさ

に一瞬目を細めた。

何・・・？誰？

その眩しさは、その者の髪が太陽に反射した物だった。

その者。・・・その少年は、校内に入り込むと制服のズボンに付いた泥を軽く払う。

ブロンズ系の金髪。・・・左側にグレーのメッシュ。

城南高校は詰襟の学生服だが、もちろん着てはいない。ただ中のシャツを着て胸の辺りのボタンを止めただけと云う、だらしの無いいでたち。

どうひいき目に見ても素行の良い部類の生徒ではない。

そういえば、2年生にこんな感じのグループが有ったっけ・・・。

真理はちよつとためらったが、気を取り直し、毅然きぜんとした態度で少年の前へ歩み寄った。

「残念だけど。門が閉まった後に入ってきたから遅刻よ。生徒手帳出して」

学年氏名を確認するために、生徒手帳を出してもらわなければならぬ。

真理が手を出すと、少年は愛想の無い声で、

「持ってない」

と言った。

「生徒手帳携帯は校則でも定められている生徒の義務です。じゃあ、口頭でいいからクラスと名前・・・」

「うるせえな・・・」

ボードに書き込もうとペンを持ち直した真理の台詞は、少年の言葉に遮られた。

「口うるせえんだよ・・・ちっちゃいセンパイ」

からかうように身をかがめて、目にかかる前髪の間から真理の顔

を覗き込む。その目の鋭さに真理はちよつとビクツとした。

「ふーん……。あんた、意外と可愛いじゃん……」

「やめないか。立花」

少年が真理にからみかけたのを見て、井関が間に入ってくる。

「クラス確認はしなくてもいい。こいつは僕のクラスの生徒だ」

「先生の？じゃあ、2年2組の……」

「2年2組。立花正臣。今日の遅刻者リストに書いておいてくれ」

「は……。はい」

「書いたら教室に行きなさい。後はいいから」

「解りました」

助かった……。心の中でそう思いながら、真理はボード片手に校舎へ向かって走り出した。

その後姿を、少年　立花正臣が、じつと見ている事にも気づかずに……。

「珍しいな。立花。お前が朝から、それも校門から入ってくるなんて」

井関が声を掛けると、正臣はフンツと鼻を鳴らす。

「ちよつとな……」

そうしてもう一度、真理が走り去ったほうへ目を向ける。

ちよつと真理が玄関から校舎内へ入る姿が見えた。

「一目……。見ておこうと思ってさ……」  
そう言ってニヤツと笑った。

太陽みたいな先輩……。か……。

「太陽みたいな……」

口に出し、その言葉があまりにもおかしいとでも云うように、今度は声高らかに笑い出した。

楽しそうな笑い声ではなく・・・。

バカにしたような、笑い声だった・・・。

2・ 「太陽みたいな・・・」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

とりあえず二人は出会います。

正臣は真理の事を知っていましたが、真理は知りません。

真理にちょっと思いを寄せる井関先生も気になるところではあります。・・・。

・・・でもその話しはまた、後ほど・・・。

### 3・「よろしく」姉さん

「本当にすまないね。真理ちゃん」

さつきから何度目だろう……。真理はちょっと苦笑する。

「いいんです。気にしないで。おじさ……」

「おじさん」と言いそうになって、ハッと気づき、改めて背筋を伸ばし言い直す。

「お父さん」

何のためらいもなく、笑って自分を「お父さん」と呼んでくれる。そんな真理を、立花正孝は本当に嬉しそくに眺めた。

嬉しげなのは正孝だけではない。

テーブルを挟んで正孝の向かい側、真理の横に座っている真理の母親、真澄ますみも嬉しかった。

真澄が夫に先立たれたのは、真理がまだ5歳の時。

看護婦だった真澄は、それから女手ひとつで真理を育ててきた。

一方、正孝は11年前に妻を亡くした。小児科の開業医ということも有り、忙しさであまり構ってやれないが息子が一人いる。

1年前に正孝が総合病院の小児科へ臨時の出張医として出入りしていた時に、ちょうどそこに勤めていた真澄と出会った。

同じような境遇の二人がお互いの思いを交わすのに時間はかからなかった。

真理が真澄から「再婚してもいい？」と相談されたのは3ヶ月ほど前だ。

もちろん真理に反対する理由などない。

今まで10年以上、自分を育てるために頑張っていた母が幸せになれるのだ。真理は嬉しくてたまらなかった。

真理の「おめでとう。良かったねお母さん」の言葉を期に、真澄は総合病院を辞め、今は正孝の小児科で勤務している。

それから忙しい正孝の仕事の合間をぬって、2週間に一度くらいこうしてレストランで食事を一緒にしている。

そして今日、二人は婚姻届を出した。

今日から正式な夫婦となり、真理に父親ができた記念すべき日。

いや・・・それと、もう一人・・・。

「今日ぐらいは来るように言っといたんだけどね・・・」

正孝が諦め気味に溜息をつき、自分の横、真理の正面の席に目をやった。

食事をするのは大抵いつも同じ店だが、その席が埋まったことは一度もない。

そこは、正孝の一人息子が座るために空けてある席だった。

「大丈夫っ。どうせ、これから一緒に住むんだし。引っ越したら会えるし」

真理は、息子を一度も同席させることができなかつた自分を責めているかのような正孝を、元氣付けるように持ち前の明るい声を出した。

「私より年下なんでしょ？弟ができるのね」

「高校2年だから、一つ下だね」

「仲良くできるといいな。私も一人っ子だったから」

「・・・」

そんな無邪気な真理の言葉に、何故か正孝はためらいを見せた。

「・・・実はね・・・真理ちゃん・・・」

正孝がそう話を切り出そうとしたとき、

「あー、ハラへった！」

機嫌の悪そうな声を出して、正孝の横、真理の向かい側に、一人の少年が無造作に座った。

「おい！こつち！一人分追加！」

片手を上げ、近くにいるボーイにコース料理の追加を告げる。

真理は、その少年から目が離せなかった。

・・・まさか・・・。だって・・・。

「よく来てくれたな」

正孝が、てつきり来ないだろうと諦めていた少年、自分の息子の肩をたたいた。そして、まるで反応を見るかのようにチラッと真理の方へ目をやる。

真理はといえば、大きな目を見開いて少年を見ている。

うそ・・・。だって、この人・・・。

少年はびっくりしたように自分を見ている真理を見て、ニヤッと笑った。

「・・・今朝は、どうも・・・」

ブロンズ系の金髪。左側にグレーのメッシュ。

「ちっちゃい「センパイ」」

立花・・・正臣・・・。やっと名前を思い出す。

・・・そうだ・・・。この人も「立花」。・・・でも、まさか・・・。

「驚いたかな？知っているかどうか分からないけど、この子は君と同じ高校の2年生なんだ。名前は正臣。立花正臣だ」

父親の気を使うような口調に、正臣はにやっとした。

「大丈夫だよ親父。俺、朝この『先輩』に遅刻チェックされて、顔も見られてるから」

真理の方へグツと身を乗り出す。

「一目で分かったよなあ？」

真理は言葉が出ない。

何て言ったら良いか分からない……。

この人が、私の「弟」になるって事？

視界の隅で、真澄が心配そうな顔をしているのが映った。

お母さんを心配させちゃいけない！そう思った真理は、ごくりと喉を鳴らすと、少々引きつってはいたが自慢の明るい笑顔を作った。

「びつくりしたけど、君が弟になるんだね？宜しくね。もしかしてこの事知ってたから今日の朝、校門から入って私の事見に来たんじやないの？言ってくれば良かったのに」

何となく気まづくなっているこの場の雰囲気を、少しでも明るくしようと、真理はひとり元気な声を出す。

「私も一人っ子だから、弟が出来て嬉しいよ。……あっ、そうか、姉弟だけど、歳もひとつしか違わないし、私の事は『姉さん』でも名前でも、どっちでもいいからね。……私は、うーん、弟だから『正臣』って呼ぼうかな？」

一人でベラベラ話を進める真理を、正臣は黙って眺めていたが、やがてフンツと鼻を鳴らすと椅子へ乱暴に寄り掛かった。

「……よろしく……」『姉さん』

「……宜しくね。正臣」

「姉さん」って、呼んでくれた……。

真理はちよつとホツとした。

「いつ、引っ越してくるんだっけ？」

片腕を背もたれに引っ掛けて、もう片方の手でジーンズのポケットから煙草を取り出す。

「ここ、禁煙席だよ。正臣。……っていつか、まだ17歳でしょ？」

すかさず真理が注意をするが、それを聞いて正臣は喉の奥でクツクツと笑い出した。

「さすがに風紀委員長だよな。……うざってーえ」

「お母さんと真理ちゃんか引っ越してくるのは、明後日の土曜日だよ。正孝が正臣の煙草を取り上げる。」

「家族が増えるんだ。お前も、そのつもりで居なさい」

明後日から、正孝が開業している「立花小児科医院」に隣接した自宅で、4人家族としての生活が始まる。

ベッドや机などの大きな家具はすでに配置されているので、引越すとはいつても、後は片付けだけみたいなものだ。

「楽しみだな……」

正臣はそう言って正孝の手から煙草を取り返すと、ポケットにしまい、再び真理を見る。

「こんな可愛い『姉さん』と、一緒に住めるなんてさ」

正臣の口調がどこかおかしいような気がして、真理はドキツとした。

その時、正臣の前に料理が運ばれてきて、会話は中断された。

食事がもう最後の方だった真澄と真理に、ウェイターがデザートを選択を訪ねる。

ケーキの種類を何にしようかと、真澄と楽しみに話している真理を見ながら、正臣は呟く。

「あいつ、学校で『太陽みたいな先輩』って言われてんだぜ……」  
その言葉を聞いて、思わず正孝が正臣の横顔を見る。

「……太陽みたいな……。ってさ」

憎々しげな声。

そんな息子を見ながら、正孝の脳裏に「ある思い出」が蘇る。  
自分の顔が蒼白になっていくのが感じられ、思わず顔を伏せた。

正臣が、真理を見つめている。

冷たい、感情のない、瞳で……。

3・「よろしく」姉さん」「（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

このお話で「太陽」はちょっとしたキーワードです。

さて二人は「義理の姉弟」「」になりました。

うまくやっけていけるんでしょうか？

真理は親に気を使い頑張りそうです、正臣は……？

ちよつと無理っぽい……？

……その話はまた、後ほど……。

#### 4. 「明日、楽しみにしてるよ」

「じゃあ、今日から名字変わるの？」

鞆を後ろ手に持ち、足元の地面を軽くけりながら、太田綾は小首を傾げた。

「うん……。まあね」

校門に手を掛け腕時計に目をやり、真理は曖昧な返事を返す。

「でも、3年生だから卒業するまで学校では『日野』で通させてもらうことになってるの。色々と面倒だからね」

「ふうん。そうだよねえ。先生方もいきなり名前が変わったら間違っちゃうもんね」

綾は真理のクラスメイトで、仲の良い友達の一人だ。

今朝登校して来た時、いつものように校門の所に立っていた真理が、何となく元気が無いような気がして声をかけた。

「んで？そんな元気の無い顔してるのは何でなの？」

「そんな元気の無い顔してた？」

「してた！してた！「太陽」に雲がかかってたよ！」

綾がちよつと大袈裟に、両腕を広げておどけてみせる。それを見て真理がくすつと笑った。

「あ！ちよつと笑った！」

「……綾」

「真理らしくないって！そんな顔！校門前でいつもの声が聞こえないと、朝って感じがしないじゃん」

真理も元気で明るい性格だが、綾も負けてはいない。

真理はスーッと息を吸い込むと、校門前の通学路に向かって、まだ呑気に歩いている生徒たちへと思いっきり叫んだ。

「はい！登校時間終了5分前ですよ！！急いでねー！！」  
響き渡る、ソプラノ系のきれいな声。

「うーん。城南高校の朝、って感じ！」  
綾が嬉しそうに言う。そんな綾を見て、真理がやっとなんか笑顔になった。

真理の心の中に引っかかり続けて、真理から元気を奪っていたもの……。

それは、昨日の正臣だった。

正直、うまくやっていく自身は、「ある」「ない」で言えば、「ない」。

しかし、正臣のことで自分に気を使う正孝や、親の再婚で環境が変わる真理を心配する真澄を見ていたら「自分が頑張らなきゃ」と思う。

お母さんに心配掛けちゃいけない……。お父さんにも……。

「おっ。いつもの日野が帰ってきたな」

校門前で挨拶指導をしていた井関が、5分前ということもあり、校門内へ入ってきた。

「日野が元気ないと、先生も寂しいぞ」と、言ってしまったからハツとする。

何言ってるんだ！僕は！！

「そうですねー。真理らしくないですよねー」  
「ごめんね。綾」

しかし、井関が気にするほど真理も綾もその言葉の意味には気づいていない。井関はちよつとホツとした。

「おそいなあ……」

真理が腕時計を見ながら呟く。

「どうした？そういえば日野、チェックボードは？」

5分前だというのに、真理の手には遅刻者用のチェックボードが握られていない。

「実は用紙を間違ってしまったて……。さっき、1年の子に風紀委員室に取りに行ってもらったんですけど……。まだ戻ってこないんです。もう15分位たつんですけど」

「おかしいな。じゃあ、僕が見てくるよ」

そんな井関を真理が両手で制する。

「いいえ。先生はここにいてください。私、見てきますから」

綾にちよつと手を上げて見せて、真理は校舎のほうへ走り出した。

「やめて……。！やだつ……。！」

風紀委員室に行くには、生徒玄関から行くより横を回って裏庭側へ入り、職員玄関から入ったほうが早い。それを知っている真理が、裏庭側に回った時、その声は聞こえた。

「いいから……。大人しくしてろつて……。」

裏庭側すぐの所に職員玄関はある。その目の前には木や茂みが植え込まれており、壁のようにこちらからの視界を遮っている。声はそこから聞こえた。

ただ事じゃない気配に、真理は思わず茂みを手でよけ、その先を覗き見た。

「……。！」

思わず目を見張り、足が一步後ろに引く。

少年が4人。どう見ても素行の良い部類の少年達ではない。

そのうちの1人が、1人の女子生徒の体を大きめの木に押し付け、口を手でふさぎながら、もう一方の手をスカートの中へ入れている。

泣きながら抵抗しているその女子生徒は、真理が探しに来た1年生だった。

「何してるの!!」

真理は何も考えず、駆け寄って少年を押しのと、女子生徒の腕をつかみ引き寄せ、力なく泣き崩れそうになっているその体を支えた。

「あなた達!校内でなんて事してるの!!」

そのまま2、3歩後ろへ引く。

「何だあ?邪魔してんじゃねえよ!!」

押しのけられた少年が怒鳴る。と、

「やめろ」

リーダー格のような少年が口を挟んだ。

その少年を見て、真理は思わず女子生徒を抱きかかえている手に力を込めた。

「・・・正臣・・・」

呟いてから、ハツとして女子生徒の顔を覗き込む、

「大丈夫?歩ける?行きなさい早く。先生呼んできて」

「・・・せんぱ・・・先輩は・・・?」

女子生徒はすっかり怯えきっている。

「私は大丈夫だから。早く行きなさい。先生呼んできて」

背中をポンツと押す。女子生徒は転がるように走り出した。

「何だよ!イイトコロだったのによお!!」

体格が良い分、よっぽど血の気が多いらしい。女子生徒に絡んでいた少年、達也が、いきなり真理の肩をつかんで投げ飛ばした。

そのまま木の幹にぶつかる。思いつきり背中を打ってしまい、真理はちよつと顔をしかめた。

「誰かと思つたら、3年のセンパイじゃないっすか」

傍で見ていた肩にかかる赤系の長髪の少年、健が、ちよつと大袈裟な口調で真理を指差す。

「ああ。朝、キンキン声出してるウルセー女だろ！」

面白そうにそう言ったのは、木に寄りかかつて腕組みをしている正臣の横に、従つように立っている4人の中では一番小柄な少年、秋光だ。

「ダメだなあ。センパイ……」

達也が、その場から動こうとしていた真理の体を両手で木に押し付けた。

「やりたい盛りの男の子のジヤマしちゃあ……。責任取ってくれる？」

「やめろつて。達也」

その時、正臣が再び達也を止めた。

「何だよ正臣。さつきからよお」

「そいつ。俺の「姉貴」だ」

「はあ？」

達也が素つ頓狂な声を出す。他の2人も驚いたように真理と正臣を見た。

「うちの親父が再婚して、昨日出来たてホヤホヤの『姉さん』」

「マジイ!？」

達也がゲラゲラ笑い出す。

「いいなあ、正臣!こんな可愛い『姉さん』と一つ屋根の下かよ!」

「明日からな。うらやましいだろ」

「すっげえイイな!!オレ、毎日お前んトコに泊まりに行こうかな!!!」

楽しげに言つて自分の体で真理の体を押さえつける。

真理が小柄な分、体格の良い達也に押さえつけられると本当に身

動き一つ出来ない。

「なあ？お姉様。かわいい弟のトモダチの相手もしてくれよ・・・」  
「・・・や・・・っ！やめっ！！」

真理が両手で達也の腕をつかみ、自分から引き離そうとするが、もちろんそんな事くらいではビクともしない。かえって真理が抵抗するのを楽しんでいるかのようにも見える。

達也の体を離そうと必死になっている真理の視界に、正臣が映った。

正臣は腕を組んで黙って見ている。口元に笑みを浮かべながら。

・・・正臣・・・。

さっきのように「やめろ」と止めてくれるかと少し期待していたが、その気配はまったく無い。

どうしよう！！

さすがの真理も泣いてしまいそうになった。その時、

「やめないか！お前たち！！」

そう叫んで、達也の肩をつかみ真理から引き離したのは、さっきの女子生徒から事情を聞いて駆けつけた井関だった。

「・・・セ・・・ン・・・先生・・・」

真理がホツとして、力が抜けたようにその場に座り込む。

「何をやってる！お前たちはささっと教室に行きなさい！！」  
・・・大丈夫か？日野」

「いい気になってんじゃねえよ！！」

2度もイトコロで邪魔が入り、よほど頭にきたのか、達也が井関に殴りかかろうとした。その腕を正臣がつかむ。

「・・・『日野』じゃねえよ・・・。センセイ・・・」

長めの前髪の間から、井関を睨み付ける。2人とも180センチ近い長身だ。背の高さが同じ分、2人の目もばっちり合う。

「……『立花』だ……。俺の姉さん、だからな……」

「学校では『日野』で通す事になってる……」  
風紀委員長として教職員全般に評判の良い「日野真理」が、2年の不良グループのリーダー「立花正臣」と「姉弟」になったという話は、今朝の職員室での一番の話題だった。もちろん井関もその話は知っている。

「俺と『姉弟』だなんて認められねーってか？片や優等生。片や劣等生だもんな」

そういうと、他の3人を顎でしゃくる。

「おい。行こうぜ」

最後までイトコなしの達也がチツと舌を鳴らした。

「そっだ『姉さん』」

座り込んで立ってないでいる真理の横を通り過ぎようとして、正臣は一度止まり、チラッと真理を振り返る。

「……明日。楽しみにしてるよ……」

真理は何もいえない。

明日……。

明日から私……、正臣と一緒に家で暮らす……。

あの正臣と、一緒の家で……。

「……」

真理は、何故か身震いがした。

何か、自分がとんでもない状況に置かれているような気がしてきたのだ。

「日野。大丈夫か？」

井関がしゃがみ込み、真理の肩に手を置く。

「日野？」

誰の声も頭に入らない。ただ、正臣の言葉だけが頭の中を駆け巡る。

・・・明日。楽しみにしてるよ・・・。

4・「明日、楽しみにしてるよ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

ちよつとづつ、正臣の本性が見えてきて、真理は困っています。

正臣の仲間も、怪しげですし・・・。

真理を助けられるのは、誰なんでしょう・・・。

・・・その話はまた、後ほど・・・。

5・「ぼやけた・・・月？」

「思ったより早く片付いたわね」

真澄は嬉しそうに言って、大笹おおひさに大盛りにした蕎麦そばをテーブルに出した。

「おいおい。多すぎやしないかい？」

正孝がびっくりしたように言う。

「だって、正臣君も夕飯の時は居ると思ってたから・・・」

その名前を聞いて、台所で蕎麦ツユの用意をしていた真理の手が止まる。

引越しの土曜日、残りの荷物と一緒に立花家へ入ったとき、正臣は居なかった。

聞くところによれば、土日などを含めても、正臣はあまり家には寄り付かないらしい。

正直、真理はちよつとホツとした。

朝から片付けは順調に進み、夕方には真理がもらった部屋もすっかり綺麗に片付いた。

2階の、今まで空き部屋だったという所が真理の部屋になった。ドアの左横にもう一枚同じドア。そこは、正臣の部屋だという。

「おまたせー」

明るく一声掛けて、蕎麦ツユと薬味をテーブルに並べる。そんな真理を、正孝は笑顔で眺めた。

「何年ぶりだろうな・・・。こんな楽しい食卓は」

「これから、ずっと、だよ。お父さんっ」

「真理ちゃんは・・・本当に良い子だね・・・」

そう言ってから、正孝はちょっと寂しそうな顔をした。

「アレも……。昔は明るくていい子だったんだが……」

「アレ」とは、正臣の事だろう。

真理は昨日の正臣を思い出した。

真理が危険な目に合っているにも、手を出す訳でもなくただ黙って見ていた正臣。

薄ら笑いさえ浮かべて……。

わかんない子だよね……。

何を考えてるんだか、本当にわからない……。

髪の色と目つきは怖いけど、整った顔はしてるよね。普通にしてたら、きつとカッコいい子なんだろうな……。

お父さんの子供なんだから、普通にしてたら、頭が良くて優しい子なのかもしれない……。

お父さんが言うように、明るくていい子なのかもしれない……。

でも、……。だからって、私に何か出来る訳じゃない!!

真理は思い直すように席に座って、箸を取った。

「さーて、食べよ食べよ! いただきまーす!」

「ねえ、真理」

食後の食器を洗う真理の後ろから、やっぱり余ってしまった蕎麦を、違う容器に移し替えていた真澄が声をかけた。

「んー? なあに?」

水が少し冷たく感じられるようになってきた。日中は暖かくても、やっぱり9月。秋なんだなあ……。としみじみ思う。

「大丈夫？」

その言葉に、一瞬手が止まる。が、すぐに食器をゆすぐ手を動かした。

「何がー？何か心配？思いつかないけどー」

母が自分に気を遣っているのはわかっている。

ずっと頑張ってきた母のためにも、自分がこの環境に慣れていかなければならない。

正臣の事さえ気にしなければ・・・大丈夫・・・。

「真理・・・」

真澄が後ろから、娘の両肩に手を置いた。

「ありがとう・・・」

お母さんの為にも・・・。

後片付けで疲れたせいもあって、その日真理がベットに入ったのは夜の10時頃だった。

それからどの位経っていたのかは解らない・・・。

真理は、かすかに感じた何かの気配でふと目を覚ました。

ポーンとした視界に、何かの姿が目に入る・・・。

私の・・・すぐ前に・・・。何か・・・？

「あれ？起きたの？」

その声で一瞬にして目が覚める。反射的に勢いよくベットから身を起こした！

正臣?!!!

正臣が真理のベットに腰を下ろして、暗闇の中で真理を見下ろしていたのだ。

「寝てていいぜ」

「な・・・何してるの・・・」

正臣はグツと真理に顔を近付けた。

「あんたの顔。見に来たー」

真理は顔をしかめる。・・・お酒臭い・・・。

「ひ・・・人が寝てる時に失礼でしょつ。勝手に部屋に入るなんて・・・」

「いいじゃん別に。『姉弟』だろお。それに、昨日言ったら、『明日楽しみにしてる』って。だからあ、わざわざあんたの顔見に早く帰ってきたんだぜえ」

「正臣。・・・酔っ払ってるでしょ・・・」

正臣はフフンと笑うと、

「酔ってるよあ・・・。お姉様・・・。っと!」

と言って、いきなり真理のパジャマの襟元を両手でつかみ、ポタッが飛び散るほどの力で左右に引き裂いた!

ビリッ!

暗闇に布が引きちぎれる音が響く!

「・・・!」

驚いて息を呑む。声を上げようとするより先に、正臣が耳元でコソコソ話しをするように言った。

「大声出すと・・・。下に聞こえるぜ」

「・・・」

出しかかっていた声が止まる。

「まだ2人とも起きてたし。・・・どうする? 叫ぶ?」

叫べば間違いなく両親は駆けつけてくる。しかし、こんな姿を親

に見せるわけにはいかない。真理はグツと下唇を噛んだ。

正臣はニヤツと笑うと、左右に引き裂いたパジャマを真理の腕ごと後ろへ回した。布に巻き込まれて、真理の腕は動かせない。

暗闇の中、上半身半裸状態で小動物のように怯える真理の姿が、正臣の目に映る。

「・・・けっこうイイじゃん・・・」

満足げに呟くと、真理の左側の首筋に唇を付ける。

真理の体が、大きく震えた。それと同時に正臣の唇が、痛い位に強く首筋に吸い付く。

「い・・・や・・・!」

真理が震えているのを見て、正臣は小さく笑いながらその手を離す。

真理は慌てて、引き裂かれたパジャマの前を合わせた。

正臣はベットから立ち上がると、まだ小さい笑い声を上げながら窓辺へ立ち、カーテンを半分開けた。

「見ろよ」

真理が正臣を見る。

窓から入る月明かりが、正臣を照らしている。

「嬉しいな・・・今日は月が明るい・・・」

・・・月？

「月はな・・・いつも空に浮かんでんだ・・・でも昼間は太陽が明るすぎて、月の明かりを隠しちゃおう・・・」

何、いつてるの・・・？

「月は……太陽の影さ……。いつも太陽に隠れてなきゃならぬい……」

カーテンを閉める。再び部屋の中に薄い暗闇が戻った。

「あんたは……」「太陽」なんだろう？……じゃあ、俺は「月」だ……」

ハッキリと正臣の表情を確認する事は出来ない。しかし、正臣の口調がどこか寂しげに聞こえた。

「俺は。暗闇で光る、ぼやけた月にしかなれない……」

正臣……？

正臣がそのまま部屋を出て行く。

真理はパジャマの前を押さえながら、今、正臣が言った言葉を繰り返した。

「ぼやけた……月？」

月は、太陽の影？何のこと？正臣……。

翌日から数日間、真理は左側の肩にかかる髪を異常に気にしていた。

首元から後ろへ髪がずれそうになると、押さえて前へ持ってくる。

「真理、髪はすっかりいじってるのって、情緒不安定な証拠だよ」と親友の綾に言われたくらいだ。

そうしてしまうのも無理は無い。

真理の左の首筋には、正臣が付けたキスマークが赤紫色になって色濃く残っていたのだから。

それから一週間ほど。

特に正臣が変わった事をしてくる事もなく、毎日が普通に過ぎて

いった。

平穏な日々、真理が何となく安心感を感じ始めていた時。

ソレは、起こった……。

5・「ぼやけた・・・月？」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

もう一個のキーワード「月」が出てきました。

このお話しで

真理は「太陽」

正臣が「月」

です。

次回、「事件」が起こります。

正臣が、動き出します・・・。

・・・その話しはまた、後ほど・・・。

6・「恋愛」しんじせー」

「ああん！もつとお！」

部屋のドアを開けようとしていた手が止まる。

誰でもいきなり「そんな声」が部屋の中から聞こえてくれば驚くだろう。

真理も例外ではなかった。

学校から帰り、自分の部屋の前に来たたん「声」は真理の部屋の中から聞こえたのだ。

「ああ！あつ！！！」

叫び声にも近いようなソレは、ドアを通して聞こえてくる。

テレビなどから聞こえてくる物ではない。その声はあまりにも生々しい。

真理は恐る恐るゆっくりと自分の部屋のドアを開けた。

「・・・！」

思わず鞆を落とす。

バサツツという大きな音に、ベットの上で裸の体を絡みつかせていた2人が振り返った。

「・・・何い・・・」の女

うざったいとも言つように文句を言う少女。多分、今の大きな声の主だろう。

幼い表情。真理より明らかに年下。もしかしたら中学生位かもしれない。

「よお。おかえり」

その少女の足を抱え上げ、どう見ても「行為」の真っ最中だった

のは正臣だった。

「もお終わるからさあ。ちょっと待つてるよ」

特に焦る様子もなく、ニヤっとして再び少女の上で動き出す。

「あ・・ん！ちよっとお正臣い！あの女見てんじゃん！」

「見せてやれよ」

「ああ・・・！！」

ボタン！！真理は耐え切れなくなって後ろ手にドアを閉めた。

「ねーさん！どーしたー！他人のセックス見てコーフンしたー？」

「やだー！」

ドアの中から2人の笑い声がする。

真理はそのまま階段を駆け下りた。

洗面所へ飛び込むと、水の蛇口をひねり、勢いよく流れ出る水を  
手にとって何度も何度も顔にかけた。

髪にまで水が飛んで、ビチャビチャになった自分を鏡に映す。

まだ頬が上気して赤くなっている真理がそこに映っていた。

顔が熱い・・・。両頬を手で押さえる。

テレビや映画でなら見たことはあるが、他人のセックスなど見た  
のは初めてだ。それも目の前で。

真理は恥ずかしくてたまらない。

それにしても・・・。真理はタオルを手にとると、ちよっとなだめ  
に顔をぬぐった。

人の部屋で何してんのよお！！！！

30分くらい経っただろうか。リビングで雑誌をめくっていた真理の耳に、少女の鼻歌と、玄関のドアが大きく開閉する音が聞こえた。

「どつやら帰ったらしい。」

雑誌を閉じて溜息をつく。

「・・・もう、部屋に戻ってもいいかな・・・。」

立ち上がり、リビングのドアのほうを振り返ってドキツとした。そこに、正臣が立っている。

上半身裸にジーンズ。ドアに寄りかかり煙草を燻らせて。

「終わったぜ・・・。」

正臣はニヤッと笑った。

「ひ・・・人の部屋で、へんな事しないでよね。」

正臣から顔をそらす。あんなシーンを見てしまった後だからだろうか？顔がまともに見られない。

「別にいいじゃん。アンタの部屋になる前、俺よくあそこでやってたし。」

「自分の部屋があるでしょ！彼女にだって失礼よ・・・人の部屋なんて・・・。」

「かまわねーよ。やれば。別に俺の女じゃねーし。」

「え？」

正臣は真理の前に立つと、煙草の煙をふーっと吹きかけた。

「あれ。達也の女。」

「・・・なっ・・・ゴホッ・・・。」

煙で声が出ない。身近に喫煙者のいない環境で育ってきたので、煙草の煙は苦手だ。

「と・・・友達の彼女に？」

目にまで煙がしみてきて、真理は手で煙を払った。

「いいだろ？俺のほうを感じるって言うしょ。向こうだって喜んで

んだから」

調子に乗って、もう一度煙を吹きかける。真理は逃げるように後ずさった。

「アンタだって、感じさせてくれる男のほぅがイイだろが」

「そ．．．そういう事は、恋愛中の好きな人とするモンでしょ．．．」

煙で息が苦しくなりながらそう言つと、正臣を押しつけて廊下へ飛び出していく。

そんな真理を見ながら、正臣はちよつと考え込んだ。

「あいつ．．．もしかして．．．」

走るように階段を登っていく真理を見ながら、正臣は呟く。

「ふーん．．．」

ニヤツと笑い、おかしそうに肩を震わすと、手にしていた煙草の灰がその場にパラパラと落ちた。

「そうかあ．．．」

部屋に入って、真理はまず一番に大きく窓を開けた。

部屋中の空気が淀んでいる様な気がしたのだ。

汗のような、体からにじみ出る何とも言えない臭いが、部屋の中に充満している。

ちよつと冷たい新鮮な空気と夕日が、開けた窓から流れ込んでくる。真理はその空気を肺いっぱい吸い込んだ。

窓を背にして立つと、さっきまで2人がいたベットが目に入った。

シーツ、変えたほぅが良いよね．．．。

そう思うと、いてもたってもいられない！真理は勢い良くベットからシーツをはがした！

もう！何なのよ！よりによって、人のベットで！！

シーツを換える前に、制服を脱いでブラウスとスカートに着替える。

もうすぐ6時。病院が終われば、両親も帰ってくるだろう。

正臣……。今日は家に居るんだろうか……。

いつもほとんど家に居る姿を見かけないので、たまに居ると何となく怯えている自分に気づく。

弟なのに……。何でこんなに怖がらなきゃならないんだろう……。

正臣は、今まで真理の周りには居なかったタイプだ。

もともと父親の居ない環境で育った真理は、男性への免疫があまりない。

男の子と付き合ったことがない訳ではないが、キス以上に進展したことはない。

母親を心配させないように、ずっと「優等生」を通してきた。そのせいか本当に正臣のようなタイプは苦手なのだ。

ベットのシーツを敷き直しながら、真理は深い溜息をついた。

と、その時、真理の携帯が鳴った。母の真澄からだ。

診療時間ぎりぎりで重症の急患が入り、処置後の経過を見ていなければならぬので、帰りが遅くなる。という。

「もしかして、12時近くになっちゃうかもしれないの。シチューが作ってあるから、それ食べててね」

「うん。解った。頑張ってるね、お母さん。お父さんにも言っといて……よりによって、こんな日に……」

真理は更に重苦しくなる気持ちのまま、電話を切った。

コンコン。何かを叩く音がした。  
コンコン。・・・ドアにノックの音。  
コンコン。今、家に居るのは・・・。

「おい！姉さん」

正臣！？

「返事くらいしろよ」

面倒くさそうな声とともに、正臣がドアを開けた。

「…………ごめん……。ノックなんてするからびっくりして……」  
正臣は相変わらず上半身裸にジーンズといういでたちで、腕を組  
みながら入ってきた。

「…………何？」

恐る恐る聞くと、正臣はチラツとベットの方へ目をやる。

「ふーん……。シーツ、変えたの？」

「当たり前でしょ」

「別に変えなくてもよかったのに」

「？」

何を言いたいのか良く解らなかったが、一緒の家に居る以上、気  
まずい思いもしたくなかったので真理は極力明るい声を出した。

「あ……。あのね。今お母さんから電話があつて、急患があつて、  
帰ってくるのが夜中になるかもしれないだつて。だから、お夕飯  
食べててっていうから、一緒に食べようよ。私、用意するから」

「ふーん……。夜中？」

「考えてみるとさ。2人だけで食事するのなんて初めてじゃない？  
お母さん、シチュー用意しといてくれたんだつて。私、暖めてくる  
から」

そう言つて正臣の横を通り過ぎようとした時、正臣が真理の腕を  
ぐっつつかんだ。

「何？正臣……」

そのまま部屋の中へ引き戻される。

「正臣？」

正臣は無言のまま、ジーンズのポケットから、手のひら半分くらいの長さがある小さな棒のようなものを取り出した。

キュツと握ると、パチンと音がして、同じくらいの長さのナイフの刃が飛び出す。

「いいだろ？買ったばかりでさ」

「な……何に使うの？」

「色々さ……」

一歩、真理に近づく。思わず真理は一歩後ろに引いた。

「切れ味。試してみたいんだよね……」

また一歩、真理に近づく。

今度は真理が一歩後ろへ引く前に、すばやく彼女の腕をつかんだ。

「どうせ2人でするなら……。違う事しようぜ……」

薄笑いをうかべてそう言うと、真理の服の上で線を引くようにナイフの刃を滑らす。

切れ味の良いソレは、薄い布一枚を簡単に切り裂いた！

「なっ！」

驚いてつかまれた腕を振りほどこうとする真理を、更に引き寄せ、ナイフの刃を滑らせる。

もう一回……。もう一回……。

その度に真理の服は布切れのようになって床に落ちていく。

「何するの！正臣！」

真理の慌てる様子を見て、正臣が喉の奥でクククと笑い出した。

「『恋愛』しよつぜ！』姉さん』！」

6・「」恋愛「しよげー!」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

次回、真理がかなり可哀想です。  
それ以上は語れません……。

……それではまた、後ほど……。

7・「・・・最低・・・」（前書き）

注意

R-15指定をさせて頂いていますが、今回「無理やりな性表現」を含んでいます。苦手な方はご注意ください。

7・・・最低・・・」

「俺と『恋愛』しようぜ！『姉さん』！」

「何言つて・・・！」

真理がつかまれたままの腕を振りほどこうとするが、すればするほど正臣の手の力は強まり、その腕に痛みを与えた。

正臣が操るナイフは、面白いように動き真理の服を切り裂いていく。

切り裂くブラウスの布がほとんどなくなってしまつたと、次の獲物を求めるかのようにブラジャーの背と肩紐部分を切り落とした！

「やっつ・・・！」

真理がつかまれていない方の手で自分をかばおうとした瞬間、正臣は真理をそばにあったベッドの上へ突き飛ばし、間髪を入れず彼女の上に馬乗りになると、今度は真理のスカートを切り裂き始めた！

「やめて！正臣！」

正臣はやめない。相変わらず喉の奥で笑っている。

「いいなあ！切れ味バツグンじゃん！！」

「いやあ！！」

衣服を切り裂く正臣の手を止めようと手を伸ばすが、その度に突き飛ばされてベッドに押さえつけられる。そのうちに真理の体には、布の破片しか残っていない状態になってしまった。

「正臣い！！」

真理は出せるだけの声で叫ぶ。

「やめてっ！！お願い！！！！」

正臣はナイフをジーンズのポケットに入れると、真理の上に馬乗りになって両肩をぐっと押さえつけた。

「お前・・・言っただじゃん。『恋愛中の人とするもんだ』・・・つて」

「・・・・・・・・」

「だからさあ・・・」

真理は言葉が出てこない。代わりに、大きく見開いた目から涙がぼろぼろ流れ始めた。

「俺と『恋愛』しようよ！『姉さん』！」

そう言うつと真理の唇に自分の唇を重ねた。

決して優しいキスではない。唇を押し付けて舌で口腔内を犯すだけの、荒々しいキスだった。

「・・・・・・・・ん・・・や・・・やだあ！やめっ・・・・・・・・」

首を激しく左右に動かして、やっと唇を離す。

「何言ってるの！『姉弟』でしょ！バカ言わないでよ！！！」

「『義理』だろ！関係ねえよ！！！」

声高らかに笑い出す。

「だいたい！こんな状態の女目の前にして、やめる男がいるか、つての！！！」

真理の上に押し掛かり、再び唇を重ねると、急ぐようにジーンズを脱ぎ捨てた。

なんとか正臣の体をどかさそうと、両手に力をこめて押し戻そうとしたり、両足をばたつかせてみたりするが、一向に効き目はない。

正臣にとつてみれば、自分より30センチ近くも小さな、それも「女」を押さえ込むなど雑作もない事なのだ。

「いやあ!!--」

唇が離れて、真理がひときわ大きな声を上げた。

その瞬間!

「.....!!!!--」

真理が大きく目を見開いて、息を止めた。

「.....いつつ.....!!!--」

正臣の腕をつかみ、激しく首を左右に振る。

「.....たつあ.....!イヤああ.....!!--」

今まで何とか正臣から離れようと動いていた真理の動きは止まり、正臣の腕をつかむ手にだけ力がこもる。

自然に下半身が引きつるくらい伸びて、身動きができない。

「いやあああ!!--!!!--」

首を振るのも辛くて、真理はただ叫ぶことしか出来なかった。

ただ涙だけが、真理の瞳の横で流れる。

そんな真理を上から眺め、正臣は満足そうにニヤツと笑った。

「.....イタい?.....」

事もあるうに正臣は、まだ何の準備も出来ていなければ一度も誰の進入も許したことはない真理自身の中へ、いきなり自分自身をねじ込んだのだ。

真理の体を、焼け付くような強烈な痛みが下半身から全身に広が

った。

「やっぱ……ヴァージンだったんだ……」

「……ま……さ……」

「ラッキー。俺、ヴァージンの女初めてだ！」

嬉しそうな声を上げて、荒々しく動き始める。

最初の痛みも冷めやらぬうちに、更に新たな刺激が加えられ、その引きつるような痛みには真理の体は硬直した！

「や……めて……！お願い……！動かないで……！」

「あー！やっぱ、イタイんだ！本当なんだな！最初は痛い、って  
！！」

「やだあ！やめて！正臣！！」

正臣はやめない。むしろ真理が叫べば叫ぶほど、暴れば暴れるほど、面白がって下半身を激しく動かす。

「い……やああ！！」

真理の声がだんだんと擦れてくる。

悲しくて……。

悔しくて……。

どんどん流れ出る涙は、真理の髪までつたい濡らした。

引き離そうと抵抗を試みていた腕の力もだんだんと尽きてきた。

「やめてえっ！正……臣……」

泣き声なのか、叫び声なのか、もう判別は不可能だ。

「最初だけだろ？我慢しろよ……」

抵抗する力が尽きてきたのを感じると、正臣は押さえつけていた体をちよつと離して、手のひらにちよつと収まるくらいの真理の乳房を、ぐつと強くつかんだ。

「……やっ……」

乳房をつかまれた痛みより、下半身の痛みのほうが強い。

その痛みのでいで痛感が麻痺してきて、真理はだんだん意識が朦朧としてくるのを感じた。

「やっぱりキツイな。初めての女って」

正臣の声が、ちょっと遠くに感じる。

正臣は数回大きく動くと、「んっ！」と息を詰め、真理の中に自分の欲望を吐き出した。

ちよつと肩で息をついて、ブロンズ系の金髪の間から真理の顔を見下ろす。

今、自分が陵辱した少女の顔を……。

涙と脱力感。

犯されたという事実には打ちひしがれているであろう少女……。

真理の顔を……。

しかしその顔は、すっかり陽も落ち、暗闇だけが流れ込んでいる部屋の中でははっきりとは見えない。

「感謝しろよ」

正臣は真理の上から下りると、さっさとジーンズをはき始める。

「せつかく取り替えたシート。汚さないように『中に』出してやってたからさ」

「……最低……」

真理はそう呟いて、ゆっくりと、ゆっくりと、身を起こした。

腰を起こした瞬間、腰から下半身にかけてがズキッと痛みが走る。

「あんだなんか……」

自分で自分の体を抱きしめる。

今、自分の「義弟」に弄ばれた、自分の体を……。

「あんな……なんか……」

声がかすれ、喉が痛んだ。

「お酒は飲む、煙草は吸う、ケンカはする、愛想はない、不良だ！おまけに義理とはいえ自分の『姉』を犯っちゃうなんて！信じられない！何考えてんのよ！バカア！！」

真つ暗な部屋の中。明るい月明かりだけが、部屋の中で真理の姿を照らしていた。

ベッドの上に座り込んで、自分を抱きしめたまま、いつたいもうどのくらいそのままにいるのだろう……。

どんなに自分を抱きしめても、どんなに一人で涙をながしても、自分で自分に問いかけても……。

これは、事実……。

自分は、犯されたのだ……。

それも、「弟」、に……。

「……最低……」

真理はもう一度そう呟いた。

かすれた・・・泣き声で・・・。

7・「……最低……」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

最後のほうの真理の叫びの後が、1の「どうして?」「とつながり  
ます。

最悪の状態です。

真理は立ち直れるんでしょうか?

でも、正臣はこれだけでは終わりません。

……その話はまた、後ほど……。

8・「」挨拶にまいりました！」

「おっはよーございまーす！センパイがたー！！」

その日の朝。城南高校3年1組の教室は、予想もしない訪問者たちの登場でざわめいた。

大袈裟に両手を広げながら教室へ入ってきたのは、2年の不良グループの一人、秋光だ。

「あれー？あいさつナシっすかー！」

赤い髪を揺らして健が続く。

最後に、正臣と達也が並ぶようにして入ってくると、教室内のざわめきが大きくなった。

「うるせえよ！！」

そのざわめきがカンに触るのか、達也が怒鳴る。

教室内が一瞬にして静まった。相手は2年。こちらは3年。しかし、こういった手合いには関わりたくない。

「なあ……」

静まり返った教室で、正臣が誰にでもなく問いかける。

「真理の席。どこ？」

「具合でも悪いのか？」

井関の心配そうな声に、真理はチェックボードから顔を上げた。

「私……ですか？」

逆に聞き返され、井関の顔があからさまに曇る。

「日野以外に誰がいるんだ」

「すみません……」

元気がないなら元気付けようと思っていたのに、今度は謝られてしまい、井関はどうしたらいいのか分からなくなった。

校門でいつも通り生徒に声をかける真理は、ただ見ているだけでは別に変わった様子はない。

ただ時々、フツと何かを思い出すように、悲しそうな顔をする。

その顔を、いつも真理を見ている井関は見逃さなかった。

「大丈夫です。何でもありませんから……」

遅刻者「0」を書き込みながら、井関に笑いかける。

「本当か？ 具合悪いなら保健室に……」

井関がそう言うって真理の肩に触れた瞬間、真理の体が大きくビクッと震えた。

「いやっ！」

反射的に井関の手を払いのける。井関は驚いて手を引つ込めた。

「……日野……？」

真理がハツとする。

「…………ごめんなさい……。先生……。私……」

肩に触れられた瞬間、真理の頭と体に昨夜の正臣の仕打ちが生々しく蘇ったのだ。

自分を押さえつける、手の感触。

無理矢理、押し入ってきた、正臣自身の感覚……。

体中を襲った、痛み。

悲しさと

悔しさ

思い出すだけで、体が震える。

真理と井関の間に気まずい空気が流れる。

と、その時、

「真理！」

息を切らして、綾が走り寄ってきた。どうやら、教室から走ってきたらしい。

「綾。どうしたの？」

「教室来て・・・ヘンなのよ！早く！」

綾は随分と慌てている。息も絶え絶え、真理に問い掛けた。

「真理。2年の立花ってヤツと、何かあるの?!」

「・・・立花・・・」

「なんか知らないけど、3年の、うちのクラスで、仲間同士で溜まつてるのよ！あんたの席で！」

「・・・なんで・・・」

真理は夢中で走り出した。

何？今度は何なの？正臣！

真理が生徒玄関のほうへ消えると、綾は井関の腕をひっぱった。

「先生も来てよ！あの4人、先生のクラスでしょ！」

「おねーさま、」登場！ようこそー!!」

真理が息を切らして教室に飛び込むと、ちょうど教室の真ん中辺りの真理の席で、4人が集まっていた。その中で秋光が大袈裟に歓迎の声を上げる。

「……何してるの……？」

シーンとした教室に真理の音が響く。

真理の机の上に正臣が腰をおろし、その周りに3人が従うように立っている。

そしてクラスメイト達は、そんな4人を遠巻きにして見ていた。

「遅れましたがー！ご挨拶にまいりました！」

いきなり正臣が机から下りて教室中に、いや、廊下で「何が起こったのか」と覗き見ている他のクラスの生徒たちにまで聞こえるように大声を出した。

「みなさーん！風紀委員長で優等生の『太陽みたいな先輩』と評判の日野真理サンは、この俺と『姉弟』になりましたー！『姉さん』をよろしくおねがいしまーす！」

そう叫んで真理を指差す。静まり返っていたはずの教室がざわめいた。

「姉さんも、イジワルだなあ」

正臣が真理のほうへ歩み寄ってきた。

「俺と『姉弟』になった事、内緒にしてんだろ？立花真理お姉さん」  
「……正臣……」

正臣が真理を覗き込むようにちよつと身をかがめる。ブロンズ系の金髪の間から見える目が、笑っている。……バカにするように……。

「いいつスねー！カワイイ姉さんと一緒にー！」  
健が冷やかしの声を出す。

「それも義理の姉だぜ！なんかムラムラ来ていいよな！！」  
秋光が健の肩に手をかけると、二人が悪ふざけを始めた。

「『姉さん！』」

「『ダメよ！正臣！』・・・なんつってな！」

寸劇のようにふざけて抱き合い、離れてゲラゲラ笑い出す。

真理は言葉が出ない。泣きそうになるのを必死で堪えるかのよう  
に両手を握りしめた。

「お前たち！何してるんだ！！」

教室に井関が飛び込んできた。ゲラゲラ笑っていた二人も、笑う  
のを止めて井関を見る。

若いといえど教師の端くれ。「先生」が来た、という事で、周り  
にいた生徒たちの間に、ちょっとホツとした空気が流れた。

井関も今飛び込んできたので、今までにながかったのかは解らな  
い。

しかし、蒼白になって佇む真理を見れば、ただ事ではないという  
事が解る。

「立花・・・。お前は何だっけそう、日野に絡むんだ・・・」

正臣はフンツと鼻を鳴らすと、教室の出入り口に立っている井関  
に近づいた。

「センセイこそ・・・。何で俺が真理にかまってる、必ずジャマ  
すんだよ・・・」

「お前が日野に嫌がらせばかりするからだろう」

「・・・それだけかあ・・・？」

正臣は面白そうに笑って腕を組むと、井関を指差した。

「お前！俺の『姉さん』の事、好きなんだろ！！」

「・・・なっ！」

先生？真理は泣きそうになっている大きな目を見開いて、井関を振り返った。

「だーから、ジャマすんだろー！」

「バカな事言ってるんじゃない！」

「あわててる！あわててる！おつもしれーえ！！！」

井関は、面白そうに笑い声を上げる正臣の胸倉をつかんだ！

「お前！！！」

「何だ？！センセイが生徒を殴るうってのかよ！おい！」

正臣が怒鳴る。その言葉に井関の動きが止まった。

「フン！」

井関の手を振りほどく。

正臣は気を取り直したように真理の隣にやってきて、いきなりその肩を抱いた。

「でも。ザンネンでしたー！真理のヴァージン、俺がもらっちゃったもんねー！！！」

「！！！」

「それも昨日！なあー真理　！サイコーだったよなーあ！！！」

仲間の3人が、冷やかすような歓声を上げた。

「よっ！正臣！かっこいいー！！！」

「オネエチャン犯っちゃうなんてサイコー！！！」

真理は、今出せる力の全てで正臣を突き飛ばした！  
その反動でよろけ、そばにあった教卓にしがみつく。

体中の血が引いていくのが解る。

足がガクガクと震え始めた。

「……出て行きなさい……」

震える声で、正臣を睨み付ける。

「……ここは……。ここは3年の教室よ！自分の教室に戻りなさい！正臣ー！」

教室中が、いや、廊下まで、シーンと静寂が走った。

「わかったよ……。姉さん」

正臣がくすつと笑って咳く。

その小さな咳きさえ、この静まり返った教室にはとても大きく響いた。

正臣が他の3人を顎でしゃくる。

4人が出て行くと、真理は一気に力が抜けてその場に座り込んだ。

「真理！」

綾が駆け寄ってくる。

真理はシヨックで体が動かない。

「真理！大丈夫？真理！」

綾の声が、どこか遠くで聞こえるようだ……。

「……姉弟だって……」

「……犯っちゃったんだって……」

「……やらしー……」

「……コワイよねえ……」

ヒソヒソ囁く周囲の声など、今の真理の耳にはまったく聞こえない。

打ちひしがれたように座り込む真理を見て、何も出来なかった自分を責めるように、井関は下唇を噛み締めた。

8・「し」挨拶にまいりました！」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

誰にも知られたくないことを、

みんなの前で言われてしまいました。

とばつちりは井関先生にまで降りかかってきました。

真理を好きなことまで当てられて……。

真理はどうするんでしょう……。

……その話しはまた、後ほど……。

9・「道具でいればいいんだよ」

「嬉しいわ。夕食の時に家族みんなが揃ってるなんて」

真澄はご飯をよそった茶碗を、ダイニングテーブルの椅子に座った正臣に手渡した。

「ここのところ、ちゃんと家に来てくれるもんね」

「どういう心境の変化なんだ？」

ちゃんと家に居ることを不思議がられるのも困ったものだ。

正臣は箸を手にとって、もう片方の手で金色の頭を搔く。

「別に」。親父と2人の時は、家に帰ってもつまんねーから帰ってきてなかっただけさ。・・・でも、今は・・・」

隣に座っている、真理の顔を覗き込む。

「姉さんもいるしさー。帰ってきて誰かいるって、いいじゃん」

正孝と真澄には、正臣が普通に真理に笑いかけているようにしか見えなかったに違いない。

前髪の間から正臣の目を見たのは、真理だけだ。

その、人を馬鹿にしたような目を・・・。

真理は今すぐに正臣を殴ってやりたい衝動に駆られたが、両親と一緒にいるということもあり、それをグツと堪えた。

「良かったわ。真理と正臣君が仲良くなってくれて。本当は心配だったのよ。・・・本当に、良かった」

真澄の嬉しそうな声が、真理の耳に痛いほど響いた。

「なかなか、うまかったろ？」

夕食後。部屋に戻って、鞆の中身と明日の時間割を合わせている

と、正臣が真理の部屋に入ってきた。

「そうね……。いい子っぽくて、気持ち悪かったわ……」

「感謝しろよ。お前の大好きな『お母さん』を心配させないよう  
に手伝ってやってんだぜ」

「……………」

真理は正臣に背を向けたまま、黙々と鞆の中身を入れ替えた。

あの出来事から10日ほど経っているが、あまり家に寄り付いて  
いなかったはずの正臣は、連日夕方になるとすっかり家に居る。

ただ……。それにはもちろん理由がある。

「なあ……。真理」

正臣が後ろから真理の体に手を回す。真理の体がびくつと大きく  
震えた。

……………また……。今日も……？

正臣の手が服の裾から入り込む。そのまま両手で、真理の両胸を  
撫で上げるように揉みしだいた。

「……………やめて……………」

「大きい声出すなよ……。聞こえるぜ。親父と、大事な母さんに  
な」

「……………いや……………」

両手で正臣の手をつかむ。ささやかな抵抗で出す声は、小さすぎ  
て咳きにしか聞こえない。

なすすべを持たない真理を見て、正臣は満足げに笑うと、後ろか  
ら机の上へ真理の上半身を押しあげつけた。

勢い良くスカートをまくり上げる。

「……………やっ！まさお……………み……………」

大きな声を出しそうになって、思わず自分で自分の口をふさぐ。

「いつも通り」いきなり正臣が真理の中へ入ってきた。

「……!!」

叫び声を上げられない真理は、ただ必死に机の端にしがみつく。正臣の息遣いと、正臣の動きに合わせて揺れる机の音だけが部屋に響いた。

「……やめ……てえ……。正臣……」

きちんと閉めていなかった鞆の中から、教科書がこぼれて机の下に落ちた。

「……正……臣……」

もう涙も出ない。

ここ最近、正臣が家に居る理由はひとつ。

真理を陵辱する為……。

「お前さあ、不感症？全然声ださねえのな」

勝手なことを不満そうに言いながら、それでも真理の中で動くことを止めない。

初めての時から、ただ自分の中に苦痛が訪れるセックスしか知らないのだ。

感じる。と、言うほうが無理だろう。

「ま。いいけどさ……」

肩で息を付いて正臣の動きが止まる。終わったらしい……。

「女なんてさあ……」

上半身を机に押し付けられたままの真理の髪を、なでるように触る。

「男の道具でいればいいんだよ……」

そのまま髪をわしづかみにして顔を上げさせ、真理の唇に唇を押し付けた。

「女なんて皆同じだよ。普通の女だろうが、『太陽』だろうが……」

「

「失礼します」

生徒指導室を出て、真理は大きな溜息をついた。

その日、朝登校していきなり生徒指導の主任である先生に呼ばれたのだ。

「真理」

今登校してきたらしい。綾が真理のそばに走りよってきた。

「クラスの子に真理が指導部に呼ばれたって聞いてさあ。どうしたの？」

「朝、校門に立つの、しばらくやめなさい、って……」

「何で？城南の朝は真理の声から始まるのよ！」

綾は本気で驚いている。しかし真理は、そう言われるのではないかと、最近秘かに感じていた。

「……変な噂が……たってるし……」

正臣が教室へやってきて真理との関係を公言してから、その話はどんどん広がり、3年のみならず、1年や2年の一部にまで広がっている。

朝、校門前で真理が挨拶の声掛けをしても、挨拶を返してくれる生徒はほとんど居なくなった。

それだけではなく、クラスでも真理に関わるうとする者はほとんど居ない。

皆、へたに真理に関わって、正臣に目を付けられることを恐れているのだ。

「綾もさあ……」

真理は、綾から数歩離れて立ち止まった。

「私に話かけるの、やめなよ」

「・・・真理？」

「綾にまで、何か有ったら、大変だもん・・・」  
そう言って、背中を向けて歩き出す。

「どうして・・・真理・・・」

後ろから、綾の声が聞こえる。

「どうしてあんたって、いつもそうなのよ！どうして人のことば  
っかり考えて自分のことは考えないの！」

真理はその声を振り切るように走り出した。

「どうして・・・そんなに優しいのよ・・・」

綾の声は、泣き声に変わっていた。

「なあ、正臣」

いつもの裏庭の茂みで、4人は煙草を燻らせていると、達也が探  
るよつに正臣を見て話しかけてきた。

「んー？」

正臣が木に寄りかかって、新しい煙草に火をつける。

「お前のネエさんよお。いい加減そろそろやらせるよ」

「ダメだ。アレは俺の『道具』だからな」

「チエツ！お前だってオレの女に手え付けてるくせによ！」

達也が舌打ちする。正臣は煙草の煙を大きく吐くと、ちよつと考  
えてにやつとした。

「・・・そうだな・・・。いいぜ・・・」

ホームルームが始まる15分前。教室の席で本を見ていた真理は、  
教室の中が何となくざわめきだしたのに気付いた。

どうしたんだろう。顔を上げようとした瞬間、自分の前に誰かが

立った気配がする。

見上げると、そこに正臣が立っていた。どうやらこれがざわめきの原因らしい。

「何してるの？15分前よ」

「ちよつと来いよ」

「・・・お断りよ。何の用？」

再び本に目を落とすと、正臣が周りに聞こえるように言った。

「いいぜー。真理が来ないなら。代わりに友達にでも来てもらおうから。確かいつつもくつついてる女、いたよなあ！」

綾?! 真理は慌てて立ち上がり、正臣の背中を押した。

「行くわよ! 教室出てよ!!」

正臣を廊下まで押し出す。

廊下へ出ると、正臣は「来い」とでも言うように、顎で廊下の先をしゃくって先に歩き出した。

「あれは・・・」

それを見た井関が、思わず呟く。

チャイム後に遅刻者チエックをしていた井関は、生徒玄関から正臣と真理が出てくるのを目にしたのだ。

今頃、どこへ行くんだ・・・。

校舎の裏庭側へ歩いて行く正臣の後を連いて行きながら、真理は何か嫌な予感がした。

正臣が茂みの陰に入って行く。

その後が続くと、いきなり背中をドンと押された！

バランスを崩すように数歩前に出た真理が顔を上げる。目の前に正臣の仲間が3人立っていた。

「な・・・何？」

思わず正臣を振り返ったその時、横に回った健が、真理の足を引っ掛けるようにすくった！

「！」

そのまま芝生の上に転倒する。

何が起こっているのか理解できなくて、困惑した表情で顔を上げた真理の目に映ったのは、まるでこれから何か愉しい物を見学するかのように、のんびりと笑みを浮かべて煙草に火をつける正臣の姿だった。

「・・・言っただろ？『道具』でいればいいんだよ・・・」

他の3人が真理に近づいて来た。

訳もない恐怖が、真理の中に一気に湧き上がる。

「何・・・？ねえ・・・」

正臣が大きく煙草を吸い込む。そして・・・

「さあ！」「姉さん」「ショータイムの始まりだ！！」

9・「道具でいればいいんだよ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

真理は、人に心配を掛けたくない、傷つけない、と常に思っている優しい子です。

正臣はそれにつけこんでやりたい放題です。

真理が誰にも言えないと思つて。

さて、次回、真理に助けは訪れるのでしょうか？

・・・その話しはまた、後ほど・・・。

10 「先生……」

「……」  
ズツ……。

真理は座り込んだ体制のまま、無言で後ずさりした。今、やっと、自分が置かれた状況が理解できたのだ。

目の前には、正臣の仲間が3人。当の正臣は、木にもたれて面白そうにその状況を眺めている。煙草の煙を吐きながら。

「……や……だ……」

ズツ……。

もう一度後ずさる。

真理の頭の中に、これから自分に降りかかってくるであろう出来事が浮かび上がる。それは、あまりにも残酷な……。

私は、この3人に……。

まるで救いを求めるように、真理は正臣を見た。

「……やめさせて……」

ズツ……。

もう一度後ずさる。

が、背中が木の幹にぶつかった。

もう、後がない。

「やめさせて……。正臣……」

正臣はただ黙って煙草の煙を見つめている……。

「正臣！お願い！！」

泣き声にも似た声で真理が叫んだと同時に、達也が真理を芝生の上へ押し倒した！

「やっ……。！！」

達也を押し戻そうと伸ばした手は、健につかまれ頭の上で押さえ付けられた。そして、暴れだしそうになっていた両足を、秋光が押さえる。

「しっかり押さえとけよ！」

達也は楽しそうに言うつと、真理の制服のブラウスを両手でつかみ上げ、ボタンごと左右に引きちぎった！

「いやぁー！！」

身動きしようとするが、達也が馬乗りになっているうえに手も足も押さえつけられている。唯一首だけが抵抗を許され、左右に動くだけだ。

「やめて！はなしてえ！！」

「いいなあ、その顔！もつと嫌がって見せるよ『お姉様』！」

達也の楽しむような声と他の2人の笑い声。それを見ながら正臣は鼻でフンと笑った。

上半身をはだける様にブラウスの前を全部引きちぎると、今度はその手を制服のスカートにかけた。

「い……。や……。っ！！」

あまり大声ばかり出されるとまずいと思ったのか、両手を押さえていた健が片手で真理の細い両手首をつかみ上げ、空いたほうの手で真理の口をふさいだ。

もう声も出せない。

真理の視界の端に正臣が映った。ただ黙って腕を組んで見ているだけの正臣が。

正臣？・・・どうして！どうしてこんな事まで？！！

真理の下半身が全て露わになるくらいスカートが捲り上げられ、その下の小さな下着に達也が手をかけた。その時だった！

いきなり達也の体が真理の上から飛ぶように転がり落ちたのだ！続いて、秋光、健、と、真理の傍から押し退けられる。そして、

「いい加減にしないか！お前たち！！」

絶叫して真理を庇う様に立ちはだかったのは、正臣たちの担任、風紀委員顧問の井関恭吾だった。

「先生・・・」

真理は、引きちぎられたブラウスの前を両手で押さえながら身を起こした。

走ってきたからか、それとも、あまりにも酷い仕打ちに憤慨しているのか。井関の息は荒く、達也達を力一杯押し退けたその腕は震えていた。

「いい加減にしろ！なんて事をしてるんだ！！」

「見りゃあわかるだろうが！！」

達也が立ち上がりながら、イラつくように怒鳴った。

「やっていい事と悪い事の区別も付かないのか！！最低だろう！！こ

んな事!!」

「あー!!うるせえ!!!」

いきなり、今まで黙って見ていた正臣が、苛々するように声を荒げた!

「うるせえんだよ!井関!!てめえ、いっつもいっつもジヤマばっかしやがって!!!」

井関の方へ早足で近づきながら、正臣はズボンのポケットから何かを取り出した。

軽く振るとパチンという音がしてナイフの刃が飛び出す。それは、以前真理の服を切り裂いたナイフだった。

「あーあ、キレちゃった」

「しーらねツスよお」

秋光と健が面白そうに言うと、

「やっちまえよ、正臣!!」

達也が叫んだ。

正臣は井関の前まで来ると、ぐっと睨むように目を覗き込み、喉元にナイフを突きつけた!

2人とも同じような身長だ。顔を突きつけあうとこれでもかとはばかりに目が合う。

「ジヤマすんな……。てめえにやカンケーねえだろうが」

冷たい刃先が井関の喉に当たる。ナイフを持つ正臣の手を井関がつかんだ。

「日野は僕が顧問をしている風紀委員の委員長だ。関係はある」

「とにかくウゼエんだよ!!!」

つかまれた手を振りほどき、正臣は井関を蹴りつけた!

その勢いで芝生に膝を付いた井関の肩を、再び蹴るように踏みつける!

「！」

「やめて、正臣！」

真理が飛び出して、井関を踏みつける正臣の脚を退かそうとつかんだ！

「離せよ。真理」

「駄目だよ……。こんなことしちゃ、駄目だよ……」

「離せて言うてんだ！！」

真理の手を、蹴るように振りほどく。その反動で転倒しそうになった真理の体を、井関が受け止めて支えた！

「とにかく……。日野にこれ以上おかしなマネはするな！」

真理を庇う様に自分の後ろへ回す。それを見て正臣が憎々しげに舌打ちした。

「井関……。テメエよ……。本当に真理に惚れてんじゃねえのか……」

「そうだ」

正臣が嫌味半分で言った言葉に、否定の言葉は返ってこなかった。

「僕は、日野が好きだ！だからお前たちがしていることは許せない！どうだ？これで満足か？！」

真理は驚いたように井関の背中を見つめた。

先生が？私を？

もつと驚いた顔をしたのは正臣だ。

しかしその表情はすぐに嘲笑うかのような顔に変わる。

「……アホらし……。やってられっかよ」

そう言うのと、ナイフをポケットにしまった。

「おい、行くぞ」

他の3人を顎でしゃくつて歩き出す。3人は面白くないといった顔をして後に続いた。

そんな正臣の姿が見えなくなると、井関は振り返り真理の肩をつかんだ。

「大丈夫か？日野。大丈夫だったか？」

「……先……生……」

真理は自分を心配してくれている井関の顔を見つめた。

心配そうに、優しい顔で真理を見ている。

こんなに……誰かに優しくされたには、どのくらいぶりだろう……。

真理の大きな瞳から、一気に涙が溢れ出した。

「先生……」

涙はどんどん流れていく。悲しくて出る涙ではない。

それはおそらく井関の優しさに触れた安心感から、流れ出る涙……。

「ごめんな」

井関はそう言うと、涙が止まらない真理の顔を、隠すように自分の胸の中へ抱きこんだ。

「今まで……ちゃんと庇ってやれなくて、ごめんな……」

真理が井関のシャツの胸をつかむ。

「先生……有難う……。正臣を止めさせる為に、あんなこと言うてくれて……」

泣きながら真理は井関に。礼を言った。

「真理が好きだ」と言った事を、正臣に対して、売り言葉に買い言葉で返したただけなのだろうと思ったのだ。

「違うよ・・・」

しかし、井関は、真理の言葉を否定した。

「止めさせる為なんかじゃない・・・」

頭に回していた手を肩に回し、傷ついた真理の体を優しく抱きしめた。

「僕は、本当に日野が好きだ」

10・「先生……」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

井関先生、言ってしまいました。

これで真理は少しでも救われるんでしょうか？  
でも正臣がこれで引くとは思えないですし。

……その話はまた、後ほど……。

11・・・ありがとう。先生」

「井関先生は急用でちょっと間に合わないそうなので、朝のH、Rは、先生が代行するから。じゃ、出席とるぞ」

その朝、二年二組の教室に現れたのは、井関ではなく副担任の川村だった。

他の生徒達は皆席に着いているが、例の4人は別で、廊下側一番後ろの立花正臣の席に、他の仲間三人が溜まって何かを話している。当の正臣は椅子に座って腕を組みながら、睨み付けるように川村を見ていた。

ああ。何でよりによってこのクラスの副担任になんてなってるんだろう……。なるべくそちらを見ないようにしながら、川村は出席を取り始めた。

今年、新卒でこの高校に赴任した川村は、いきなり副担任という大役をもらったが、よりによって問題児が4人もいるクラス。

担任の井関が3年目なので、はっきり言って問題児を4人まとめて押し付けられたような形だ。

「井関のヤツよお。急用だってよお。『姉ちゃん』とイイコトしてんじゃねーの？」

達也が喉の奥で笑いながら、正臣に耳打ちした。

その途端、正臣が勢い良く椅子から立ち上がる。

椅子が倒れ、教室中に大きな音が響いた。驚いた生徒達が一瞬音のしたほうを見たが、すぐに目を逸らす。皆、関わりたくはないのだ。

「た・・・立花君・・・？」

川村が恐る恐る声をかけた。自分は何か気に障る様な事を言ってしまったのだろうか？

川村は内心、心臓がドキドキしている。出席簿を持つ手が知らずの内に震えた。

しかし正臣は、そのまま無言で教室を出て行ってしまったのだ。

「おい、正臣」

いきなり出て行った正臣を追うように秋光が廊下へ出るが、正臣は止まる事無くスタスタと一人で歩いて行ってしまった。

「なんだあ。あいつ」

そんな様子を見ながら、何かを考えていたような健が自分の長い赤毛を指に絡めながら呟いた。

「あいつ、何か最近、おかしースね」

それを聞いて、達也がちよつと考える。

「・・・荒れてるよな。あの『姉ちゃん』と住み始めた頃からじゃねーか？」

「少なくとも、無理矢理、女犯つちまうようなヤツじゃなかったっすよ。・・・達也ならともかく」

「うるせえよ！」

達也がちよつと大きな声を出して、川村がまたビクツとした。

校舎から出ると、正臣はそのまま校門へ向かって歩き出した。

校門を出る直前の場所でピタツと立ち止まる。

そこは、以前いつも真理が風紀委員長として生徒たちに声をかけていた場所だった。

朝の空。眩しい太陽を見上げる。

「おはようございまーす」よく通る、明るいソプラノ系の声。  
真理の声が頭の中に響き渡り、その太陽の様に明るい笑顔が脳裏に浮かぶ。

正臣の唇の端が少し綻んだ。

それは、真理どころか仲間達でさえ見たことの無いような、安らいだ表情。

しかし、次の瞬間、脳裏に浮かんだ真理の笑顔に「ある女性」の笑顔が重なり、正臣の表情は凍り付いた。

その「女性」が真理の声で言う。

お前なんて。暗闇で黙ってる。月でいればいい……。

「とりあえず、ブラウス貰ってきたから。着替える」

井関は今、保健室から貰ってきた着替え用のブラウスを真理に手渡した。

「僕は部屋の外に出てるから。着替えたら声かけて」

言いたい事だけを言って、そそくさと教室を出て行く。

そんな井関の後姿を見送って、真理は改めて自分の無残にも引きちぎられたブラウスを眺めた。

三人の男に押さえ付けられた時の、恐怖と悲しさが蘇ってきて身震いする。

そして、無表情だった正臣の顔……。

それらを振り払うように、真理は着替え始めた。

裏庭側、職員玄関から入ってすぐのところにある風紀委員室。

授業が始まっている時間なので当たり前だが、今は真理と廊下に出ている井関以外は誰もいない。

委員会の時だけ出される机や椅子は、教室の後ろへ下げられ、長机が2台とパイプ椅子が数脚出っばなしになっている。廊下側のスチール棚には、風紀委員用の資料や印刷物、腕章などを入れておくケース。

「先生。いいですよ」

ブレザーの襟を直しボタンを止めながら、真理は廊下に居るはずの井関に声をかけた。

周囲が静かなせいもあり、その声は必要以上に教室内に響く。

しかし、井関が入ってくる気配は無い。

聞こえなかつたのかと思ひ、真理が出入り口のドアを開けようと手を伸ばした瞬間、勢い良くドアが開き、驚いた真理は思わず一歩後ろに引いた。

「あ、ごめん。びっくりした？」

井関が両手に保温用紙コップを持って立っていた。

「はい。日野の分」

コップのひとつを真理の前に差し出す。コップの中では温かいコーヒーが湯気を立てていた。

「職員室にコーヒー取りに行つてさ。考えてみたら、両手塞がっててドア開けられなくてさ。やっと開いたよ。足で」

困ったように笑いながら、今大活躍したらしい右足をブラブラさせる。真理が思わず吹き出した。

「やだあ、先生つてば」

くすくす笑う真理を見ながら、井関はドアを閉めた。

「久しぶりに見たな」

コーヒーを一口飲んで、息と一緒に言葉を吐く。

「日野のそんな笑顔」

「先生……」

真理が笑うのを止める。

井関は真理の背に手を当てパイプ椅子を引き寄せると、座るよう  
に促して、自分も真理の向かい側に座った。

「大丈夫か？」

さつきから何度この言葉を繰り返したか解らない。

井関は、国語教師のクセにもう少し気の利いた言葉は思い付かな  
いものかと、自分で自分に心の中で文句を言った。

「はい。先生が止めてくれたから、助かりました。……ありがと  
うございます」

真理はそう言って頭を下げる。助けてもらったのに、まだ礼を言  
ってなかったのを思い出したのだ。

井関は紙コップを両手でちよつと強く握にぎって、聞きたくても聞き  
づらかった言葉を口にした。

「日野……。この間、立花が言った事は本当なのか？」

頭を上げようとしていた真理の動きが止まる。

正臣が真理の教室まで来て、体の関係を持ったことを公言した事  
を言っているのだろう。井関はずっと、この事が気になっていたの  
だ。

「……本当です……」

真理が小声で答えた。今日のあるところを見られてしまった後  
では、隠してもしょうがない。

「もしも、立花と一緒に暮らしていて、そんな事があって辛いなら、  
親御さんにも言ってみたらどうだ？ 言いづらかったら先生が……」

「駄目です！」

真理は思わず大声を出してしまった。

「お母さんには……言わないで。先生……」

再婚して、やっと幸せになったお母さん。私のせいで、その幸せを壊す訳にはいかない。

「大丈夫ですから……。だから」

「わかったよ」

井関は少し椅子をずらして、真理の膝が触れるくらいの近さまで近寄った。

「でも、もし、また辛いことがあったら、僕に言ってくれないか？」

「先生……」

真理が井関の顔を見る。井関は真剣な表情で真理を見つめていた。

「僕は、この学校に来てから、何度日野の笑顔に助けってもらったか解らない。……日野の、太陽みたいな笑顔に……」

「……」

「僕が、日野を好きだっけって言ったことは迷惑だったら忘れてくれていい。本来教師として言うっちゃいけないことだ。でも僕は、日野が笑えないくらい悲しくて辛いことがあるなら、助けになりたいんだ。何かしてやりたいんだ」

「先生……」

「笑ってほしいんだ……お前に……」

井関がどれだけ真剣に言っているのか。目の前にいるだけで痛いほど伝わってくる。真理は大きくなり始めた胸の鼓動を抑えることが出来なかった。

切なくて……。嬉しくて……。

どう言葉で表現したら良いか、解らない……。

真理は少し体を前に倒して、井関の胸に自分の頭をつけた。

「日野？」

「・・・ありがとう。先生」

それは、井関も久しぶりに聞く。真理の穏やかな明るい声。

「・・・ありがとう。先生」

そう繰り返す真理を、井関は無言で抱きしめた。

11・」・・・ありがとう。先生」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

真理と井関先生がどうなるのかも気になるところですが、途中に少し出てきた、正臣の奇妙な行動も気になります。

さて、ここから3人の関係はどうなるのでしょうか・・・？

・・・その話しはまた、後ほど・・・。

12・「優しく・・・キスして」

「センセイには、イイコトしてもらったか？」

その日、家に帰った真理をいきなり馬鹿にするような口調で出迎えたのは正臣だった。

玄関からすぐのリビングの入り口に寄り掛かり、腕を組みながら制服姿で煙草をふかしている。

「随分早かつたんだね。帰るの」

「朝、面白いもん見れると思ってたのによお。ジャマが入ってツマシネーから途中でフケた。ウチの担任、朝来なかったからよお。てつきりお前とイイコトしてんだと思っただぜ」

ちよつと肩を揺らして笑う。

「着替えのブラウスとか持って来てくれたりしてただけよ」

真理は玄関のドアを閉めて靴を脱ぎ、部屋へ行くのに正臣の横を通り過ぎようとした。しかしその腕を正臣が掴む。

「お前、井関の事・・・好きなのか・・・？」

「!・・・あなたに関係ないでしょう・・・」

グイッ!

いきなりその腕を引っ張られ、真理はリビングの中へ突き飛ばされた!

バランスを取る間も無く、傍にあったソファにぶつかり、よろけてそのまま座り込む。

「そりゃあマズイだろ。姉さん・・・」

正臣は真理の傍に近寄りながら、煙草をソファの前のテーブルにある灰皿に押し付け、金色の前髪の間から冷たい目で真理を見た。

「俺と『恋愛』しようぜ……って、言っただろ？」

静かな声でそう言い放つと、ソファの上に居た真理をその場に押し倒した！

馬乗りになって、乱暴に唇を奪う。

「なのに、他の男と『恋愛』したら、マズイんじゃないの？」

「……恋愛、の意味、解って言ってる？」

正臣はハツと吐き捨てるように笑うと、

「所詮、やっちなものは同じじゃねーか！キレイゴト言ってるじゃねーよ！」

そう言いながらスカートを捲り上げる。しかし、正臣の動きはそこで止まった。

いつもは抵抗する真理が、抵抗どころか声も上げない。

「何だよ……。大人しいじゃん……」

真理は正臣を見上げながら、両手で正臣の頬に触れた。

「……する事は同じかもしれない……。でも『恋愛』でするキスは、もっと優しいよ……」

正臣は驚いた顔で真理を見たが、その手を振り落とすように真理から離れ、さっさとリビングから出て行ってしまった。

真理はソファから起き上がると、捲くれ上がったスカートを直し、自分で自分の体を抱きしめた。

その体には、今日井関に抱きしめられた腕の感触が、まだ残っている。

知らずの内に笑みがこぼれる。

この腕の感触が、真理に勇気をくれた。

「笑って欲しいんだ。お前に」頭から離れない井関の言葉が、声が、真理を勇気付けた。

・・・負けない・・・。

真理は、正臣の姿が消えたりリビングの出入り口を眺めながら、自分を抱きしめている腕に力を込めた。

「やっぱり、日野に手伝ってもらうと早いな」

井関は嬉しそうにそう言って、真理の後ろから手元の集計用紙を覗き込んだ。

「朝の挨拶に立てないから、委員長としてこの位しないと」  
毎週末に、その週の分の遅刻者数等の集計をする。

真理が朝の遅刻者チェックに立たなくなつて、確実に遅刻者は増えているので、集計がちょっと大変だ。

「早く、朝、また出られるといいな」

その言葉に、真理が井関を見上げにこつと笑う。

「はい」

井関が好きな「太陽の笑顔」だ。

この数日、放課後にこの風紀委員室に来るのが、真理と井関の約束のようになっていた。

井関に会って、その優しさに触れるたび、真理にもだんだんと以前のような笑顔が戻っていった。

笑顔が戻る原因がもうひとつ。

あの日以来、正臣が真理に手を出してこなくなつたのだ。

家にも帰って来るし、相変わらず仲間とも付き合っている。しかし、真理に触れようとしない。

それが何故かは解らない。  
けれど真理は、そんなことより放課後のこの時間が毎日楽しみで  
たまらなかった。

井関に会って、話しが出来ると思うと、毎日放課後が待ち遠しい。

私は、先生が好きなんだろうか……。

そう考えるだけで、ドキドキする自分に気付く。

「日野が居ないと遅刻者が増えて困るよ」

井関はパイプ椅子を引つ張ってきて、真理の横に座った。

「見逃す人が居ないですからね」

真理がくすくす笑いながら、ボールペンを走らす。最後の集計の  
数字を書き終えペンを置くと、その手を井関がつかんだ。

「先生？」

真理が井関の顔を見る。

井関が少し寂しそうな顔をしていて、胸がドキツとした。

「……明日は、会えないな……」

今日は金曜日。土日は休み。月曜まで会えない。

真理はちよつと下を向いた。

「しょうがないです。我慢します」

「僕は、我慢できない」

井関がまるで子供のワガママのようなことを言う。

実際、真理に自分の気持ちを伝えてから、井関の真理に対する思  
いはどんどんと大きくなっていった。

「教師だから」と自分を抑えていた理性のかたはとつくに外れて  
しまっていた。

「真理……僕は……」

「先生……」

いきなり名前で呼ばれ、驚いて井関を見る。

そんな真理の唇に、井関は自分の唇を重ねた。

風紀委員室は、裏庭側の職員玄関のすぐ横にある。

真理がここに来るときは、一度生徒玄関から出て、職員用玄関から入りなおすようにしていた。

帰り支度をして玄関から出ると、冷たい風が吹いてきてちょっと身が竦んだ。赤い夕日が妙に眩しい。

風は冷たいが、真理の頬はまだ熱いままだった。

井関の唇の感触が、まだ真理の唇に残っている。

ガサツという音がして、目の前の茂みが動いた。

真理は一瞬ビクツとした。

その茂みの向こうは木々などでこちらからの死角になっていて、正臣たちが溜まり場になっている所だったからだ。

「遅いお帰りだな」

そう言っつて、茂みの向こう側から正臣が顔を出した。

早足で真理に近づいてくると、

「来いよ」

と言っつて、有無を言わせず真理の手をつかみ、茂みの中へ引っ張る。

「ちょ……」

他の三人も居るのではないか。

もしかしたら、また襲われるのではないか。そんな恐怖が湧き上がる。

しかし、そこに他の三人は居なかった。

ちよつとホツとしたのもつかの間、正臣が真理の体を木の幹に押し付けたのだ。

「何やってたんだよ」

怒ったような口調。

「・・・な、何って。委員の仕事よ・・・」

「お前。毎日風紀委員室行ってんだろ。毎日やる事なんてあんのか」  
「よ」

「何で知ってるの・・・」

毎日風紀委員室に行ってるなんて事は、誰にも言ったことはない。ましてや井関に会ってるなんて事を言えるはずも無い。

「正臣？」

もしかして、毎日見てた・・・？

正臣は答える代わりに、真理の顎をつかむと顔を近づけた。

真理はちよつと肩を竦めた。また苦しいくらい乱暴にキスをされると思ったのだ。

「・・・！」

驚いて思わず目を見開く。

正臣が真理にしたのは、優しい、唇をなぞるようなキス。

舌でなぞり、時折唇を吸い上げる。

「正臣・・・」

あまりにも意外な行動に、真理はいささか呆然とした。

しかし正臣は、次の瞬間、真理のスカートを捲り上げ始める。

「・・・や・・・何？」

「何日やってねーと思ってるんだよ」

「し……知らないわよ。そんな……。やめて……」

正臣は真理の体を木の幹に押し付けたまま、片足を抱え、いつも通りにいきなり真理の中へ押し入ってきた。

「……！ま……さっ……」

こんな所では大声なんて出せない。真理は出そうになる叫び声を、下唇を噛んで耐えた。

正臣が動いたたびに、枯れ葉がパラパラと舞い落ちる。

「正……臣……」

真理が何とか声を出す。そして正臣を見上げた。

「……キスして……」

いつにない真理の要求に、正臣の動きが止まる。

「優しく……キスして……」

犯される辛さを少しでも和らげたいかのように、真理は正臣の首に腕を回した。

正臣が唇を近づける。

「優しく……ね……」

真理の腕が正臣の頭を抱く。

「……キスして……」

正臣の唇が優しく真理の唇に触れ、愛撫するような優しいキスを繰り返す。

そして、正臣は再び真理の体を突き上げた。



12・「優しく・・・キスして」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

正臣の様子が、ちよつと変です。

妙に真理と井関先生のことを気にして・・・。

うまくいき始めている、真理と先生ですが、

次回、先生が暴走します。

・・・その話はまた、後ほど・・・。

13・「好きなのか?!」

「あら、一緒に帰ってきたの?」

その日、まるで一緒に仲良く帰ってきたかのように、同時に家へ着いた正臣と真理を見て、母の真澄が嬉しそうな声を上げた。

「あなた。真理と正臣君がね・・・」

姉弟が仲良く帰宅、というのがよほど嬉しいのか、真澄はリビングの奥に居る夫の正孝に報告しに行こうとするが、思いなおしたように、

「2人とも、早く着替えてきてね。お夕飯にしましうね」

二人にそう言うてから、リビングの中へ入っていった。

正臣が、無言で靴を脱いで廊下を歩き出す。何となく真理もその後が続いた。

別に・・・。一緒に帰って来た訳じゃないんだけど・・・。

真理は何となく赤くなってしまった。

裏庭での行為が済んだ後、正臣はしばらく真理にキスをし続けた。真理が要求した、「優しいキス」だ。

その後、家へ帰るために歩き出したが、なんと言っても2人とも帰る家は同じだ。

話すことは無くとも、何となく一緒に帰る風になってしまふ。

真理が気になったのは、三十センチくらい身長差がある真理と正臣では、あきらかに歩く早さが違うはずなのに、普通に二人並んで歩く形になっていたことだ。

まるで、真理に合わせるかのように、正臣はゆっくり歩いていた。

「なあ。真理」

真理が部屋へ入ろうとした時、自分の部屋のドアノブに手を掛けたまま、正臣が声をかけてきた。

「何？」

そう言って正臣の方に顔を向け、真理はドキツとした。正臣が真剣な顔をしてこちらを見ている。

「井関と会うのやめろよ」

正臣は知っているのだ。真理があ部屋で、毎日井関と会っていることを。

「ど、どうして、正臣にそんな事言われなきゃなんないの……」

正臣は無言のまま部屋へ入っていった。

真理の心の中に釈然としないものが残る。

正臣の様子がどこかおかしい。さすがの真理もそう思った。

長く感じる土日が過ぎた。

月曜の朝、ちよつと早く学校に着いた真理は、校門前にまだ井関が出ていないのを確認し、そのまま風紀委員室に向かった。

真理の携帯に、井関からメールが入っていたのだ。

「月曜の朝。少し早く行って風紀委員室で待ってるから」と。  
放課後じゃなくても、井関に会えるのは嬉しい。

真理ははやる気持ちを抑えきれないかのように、風紀委員室のドアを開けた。

「先生」

ガランとした静かな室内に、真理の高い声が響く。部屋の後ろの窓辺に、井関が立っていた。

「おはようございます」

中に入って井関のほうへ歩いて行った真理は、いきなり井関に腕を引かれ、そのまま抱きしめられた。

「真理……。会いたかった……。」

井関が切なそうな声を出して、腕に力をこめる。

「先生……。」

真理は井関の腕の中へ自分自身を預けた。と、井関が真理の顔を上げさせると、その唇にキスをした。

会えなかった二日間が辛く、その二日間を埋めるかのような、ちよつと激しいキス。

その激しさは、真理の唇の端から、ちよつと苦しそうな吐息を漏れさせた。

ふいに、井関の手が真理のブラウスの襟元にかかる。キスをしなから、ゆつくりとその手はブラウスのボタンを外し始めた。

「……。先生……。？」

真理が驚いて唇を離れた。井関の唇は真理の耳元に移り、首筋をなぞる。

ブラウスのボタンを外し終えた手は、真理の体を弄り始めた。

「真理……。好きだよ……。」

「先……。生……。ダメ……。誰か、来たら……。」

「真理……。」

井関は聞かない。真理は井関の背広の背をグツとつかんだ。

「好きだよ……。」

井関が繰り返す。

窓側の壁を背にして真理の体が崩れ、その場に座り込む。  
教室の冷たい床の感触が背に当たり、自分の上に井関の体が覆い  
被さってくるのが解った。

井関は正臣と身長や体格が似ている。一瞬正臣の体の感覚が思い  
出され、真理は目を閉じて体を硬くした。

「真理……」

井関の優しい声がして目を開く。

目の前に井関の顔があった。愛しそうに自分を見ている目があっ  
た。

「好きだよ……」

井関はそのまま、真理に体を重ねる。

「……先……生……」

教室の冷たい床の上で、真理は井関を受け入れた。

朝からそんなことがあって、一日中井関のことが頭から離れず、  
その日どういう風に過ぎていったのか、真理はよく覚えてはいない。  
考えてみれば、正臣の乱暴なセックスしか知らない真理にとつて、  
今日の出来事は、初めて自分を大事に抱いてもらえた物ではなかつ  
たろうか。

今日の放課後は職員会議があるので、明日の朝また会おう。と約  
束をして別れた。

朝の体の余韻がなかなか冷めやらぬまま帰宅した真理を迎えたの

は、正臣だった。

「おかえり「姉さん」」

正臣も戻ったばかりか、まだ制服姿だ。

「ただいま……。早いね。正臣」

何となく正臣の顔が見られない。真理は目を逸らしたまま正臣の横を通り過ぎようとした。しかしその腕は、またもや正臣につかまれる。

「井関には会うな。って言ったろ……」

「あ、会ってないわよ。今日の放課後行ってないし……」

「朝行つたる。風紀委員室。朝っぱらから『仕事』って言うのも無いよなあ」

「いったい、どうしてそんなに見てるの？」

真理は胸がドキドキした。正臣が朝の出来事を知っているのではないかと思ったのだ。

「真理……お前……」

しかし、顔を逸らして、いつもと違う真理の様子に、正臣は何かを感じ取った。

「井関に何かされたのか？」

ビクッ!!

意識しないうちに真理の体が震えた。朝の事を思い出し、顔が赤くなる。

「キスでもされたか……?」

真理は答えない。答えられる訳が無い。

何も無い、と平然と答えられれば良かったのだが、それが出来るほど、真理は強かではなかった。

「それとも……」

「……」

何も答えない真理に、正臣の表情が険しくなる。

つかんでいた腕を引くと、リビングに押し込めソファの上に押し倒した！

「真理お前。井関と、やったのか？」

「・・・正臣・・・」

明らかに、正臣は怒っている。いつもは、笑って自分を犯す正臣が。

「なんでだよ・・・」

真理を押さえ付けている手が、怒りで震えているのが解る。

「何であんなヤツに！」

いきなり真理のブラウスを引き裂いた！その乱暴な迫力に、最初の頃の恐怖が蘇った！

「正臣！いや！」

「好きなのか？！あいつのこと！好きなのかよ！！」

「やめて、正臣！！」

そのままブレザーとブラウスを一緒に剥ぎ取り、真理の体を抱きしめる。

「正臣！いやあ！はなして！！」

朝、優しく抱かれた感触がまだ残っている。その上から正臣に乱暴に抱かれる事が、今の真理には耐えられなかったのだ。

「おねがい！やめてえ！！」

正臣の手がスカートの中に入り込んだ。その時！

「正臣！！！！」

いきなり絶叫するような声がして、正臣の体が真理の上から転がり落ちた！

真理は一瞬何が起きたかわからなかった。

そして、今、目の前にある光景を信じたくなかった。

ソファから転げ落ちた正臣。

正臣の前に、正臣を真理から引き離れた人物。

「何をやっているんだ！お前は！！」

父、正孝と、そして……。

「真理！」

自分の傍に駆けつけて、泣きながら自分を抱きしめている……。

「……お母さん……」

一番見られたくない人が、そこにいた。

13・「好きなのか?!」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

先生と関係は持ってしまうわ、

親に正臣との事はばれてしまうわ。

真理、ピンチです・・・。

それにしても正臣はどうして怒ってたのでしょうか？  
次回、その正臣の秘密が明かされます。

・・・でもその話しはまた、後ほど・・・。

14・「太陽って、何？」

「正臣！！」

正孝の声は、怒鳴り声というよりも叫び声に近かった。

自分の息子がしていたことが信じられない、というような叫び声。今、自分が見たものが間違いであって欲しいと願うかのような。。。

「真理ちゃんは・・・お前のお姉さんなんだぞ！」

正孝に突き飛ばされて座り込んでいた正臣が、ゆっくりと立ち上がる。背中でも打ったらしく、片手で背中をさすりながら薄笑いを浮かべた。

「だいたいよあ・・・。年頃のオトコノコとオンナノコ、一つ屋根の下に置いといたらマズイって思わなかった？」

「正臣君！！」

正臣のふざけた言葉に、真理を庇うように抱きしめていた母の真澄が、泣き声で怒鳴った。

真理はソファの上に座り込んだまま動けない。

母を心配させたくなくて、母の幸せを守りたくて、真理は正臣の仕打ちに耐えてきた。

しかし、その母が、今自分を抱きしめながら泣いている。

「お母・・・さん・・・」

「真理・・・真理・・・」

自分の名前を何度も何度も呼びながら、頭をなでる。

小さな子供を庇うように。慰めるように。

「お母さん……」

真理の見開かれた大きな瞳から、涙が零れ落ちた。

こんな結果を望んでいたんじゃない！

お母さんを泣かせたかったわけじゃない！

そんな母娘の様子を見ながら、正臣はチツと舌打ちした。

「なあ、親父」

ポロポロ涙を流す真理を見たまま、正臣は憎々しげに父親に声をかける。

「女なんて皆同じだよ。辛い時にちょっと優しくされたら、すぐ誰にでも脚開きやがって……」

真理がびくつと震えた。涙が止まらない瞳で正臣を見る。

正臣はずつとそんな真理を見ていた。

憎々しい目、いや、どこか悲しそうな目で。

「普通の女だろうが、『太陽』だろうが、同じなんだよ。所詮、男の道具にされてるって事にも気付かないで……」

正臣の声が震える。そして、父親を悔しそうな顔で睨み付けた。

「……そんな事、あんたもよく知ってるよなあ!!」

正孝が目を見開いた。

正孝の脳裏に「ある女性」の笑顔が浮かび上がる。

「太陽のような」笑顔が……。

「出て行きなさい……」

正孝の声が震えた。握り締めた両手が冷たい。自分で自分の血の気が引いていくのが解った。

「今すぐここから出て行きなさい!!」

本当ならば、義理の姉に酷い仕打ちをした息子を殴り飛ばして「もう帰ってくるな！」と怒鳴ってしまいたい。けれど、それが出来ない理由が彼にはあった。

正臣は何も言わず、早足で部屋を出た。

部屋を出る瞬間、真理の顔をチラッと見る。

その目と真理の目が合った。

金髪の前髪の間から見えた、今にも泣き出してしまいそうな目。そんな正臣の目を見るのは、初めてだった……。

「正臣……」

思わず真理が呟く。

その呟きを消そうかとするように、真澄が娘を抱きしめる手を強めた。

玄関のドアが大きく開閉する音がリビングまで響いた。

その後は、ただ時計の秒針の音だけがその空間を包む。

正孝は震える手を、抱えるように頭に当て、そして真理のほうを向くとその場に座り込み頭を下げた。

「すまない！真理ちゃん！」

まるで土下座のように。

「すまない！本当にすまない！！」

頭を床にこすり付け、見るほうが可哀相になるくらい悲壮な声。

「すまなかった……。こんな……。こんなことに……。正臣が、

こんな……」

信じたくない。自分の息子がこんな酷い事を。

しかし、これが、現実。

「……お父さん……」

「幸せ」の裏に、「犠牲者」がいた。現実。

「はい、真理」

優しく、まるで壊れ物にでも触る様に、真澄は真理に温かいカフエオレが入ったマグカップを持たせた。

こんな状況では仕事にならないと、まだ診療終了まで一時間ほどあったのだが、患者も居なかつたので正孝は病院を閉めた。

元々、今日は早めに閉めて4人で食事にでも行こうか、と夫婦で話していたらしい。

学校から帰ってきてるであろう子供たちにその話しをしようと病院を抜けて自宅に顔を出した。そのときに聞こえたのだ。「やめて、正臣！」真理の声が……。

真理も着替えを済ませ、今三人がリビングに揃っている。

「真理ちゃん」

真理が座るソファの正面で、正孝は重々しく口を開いた。

「正臣が……君にあんなことをしたのは、初めてではないんだろ  
う……?」

真理は無言で頷く。

今更、隠してもしょうがない。そんな真理を見ながら、真澄が思わず口元を手で覆った。

「だらしのない父親だと思っているだろうね……。息子がこんなことをしているのに気付かないなんて……。こんな事をしてしまっても、殴る訳でもなく……」

真澄が正孝の前にコーヒーを置いた。

正孝は真澄の顔をまともに見られなかつた。真澄も同じだ。

「正孝の息子」が「真澄の娘」を犯した。

たとえ夫婦であつても、その事實は二人の間に大きな溝を作る。  
真理はそんな両親を見て、胸が苦しくなった。

「お父さん……。教えて欲しいことが有るの」

真理が、手の中のマグカップから立ち上る湯気を眺めながら、正孝に問いかけた。

正孝が身を乗り出す。ずっと黙つたままだった真理が、やっと口を開いたのだ。

「『太陽』つて……。何？」

正孝の動きが止まる。

「正臣は、私が学校で『太陽みたい』つて言われてるのを気にしてた。それがシャクに障るみたいに……」

真理はさつき、正臣が言っていた事を思い出した。

「普通の女だろうが、『太陽』だろうが、おなじなんだよ」

「正臣は自分のことを『月』だつて言ったこともあるの」

「俺は、ぼやけた月にしか、なれない……」。

正孝は諦めたように椅子に座りなおした。

大きく息を吐いて、横に立ったままの真澄を見上げる。真澄が心配そうな顔で正孝を見ていた。

「座りなさい。君にも、ちゃんと聞いて欲しい……」

これからする話しは、真澄にも話した事は無い。

真澄は無言で真理の横に座った。それを見届けてから、正孝は真理に向かって口を開いた。

「……『太陽』つていうのは、11年前に死んだ私の前の妻。つ

まり、正臣の母親のことだ。．．．とても明るい人でね。看護婦をしていたが患者にも人気があったよ。子供達には『太陽みたいな看護婦さん』なんて呼ばれてた」

真理は、辛そうに話し始めた正孝の話しを、黙って聞いていた。

「正臣が六歳の時に、彼女は死んだ。．．．自殺だったんだ。．．．  
．．．正臣の目の前で、自殺したんだ」

「今日は月が出てねーな．．．」  
煙草の自動販売機に寄り掛かって、火のついていない煙草を啜えながら、曇った夜空を見上げ正臣は呟いた。

十月の風が冷たい。なのに制服のシャツ一枚で飛び出してきてしまった。

煙草を口の先で遊ばせながら目を閉じる。

ライターを忘れてきた。火をつけることも出来ない。

そういえば、真理、煙草の煙、苦手そうだったな．．．。

何となく笑顔になる。と、その時、カチツという小さな音とオイル臭い匂いがして、正臣の煙草の先に火が付けられた。

目を開くと、そこに達也が立っていた。後ろに健と秋光もいる。

「サンキュー」

煙草を啜えたまま片手を上げる。達也がライターをしまいながら、ちよつとからかうように言った。

「悪さしすぎて、姉ちゃんにでも追い出されたか？シケた顔してるぜ」

「似たようなもんだな．．．」

「だったらよお。遊びに行こうぜ。お前最近付き合い悪かったし。」

ウチの女も来るんだけど、友達何人が連れてくるって言ってたからよお。いい女いるかもしんねーぜ」

正臣は一度煙草を大きく吸い込んでから、煙と一緒に言葉を吐いた。

「そうだな・・・」

14・「太陽って、何？」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

お父さんの、正臣に関する話は次も続きます。

正臣の全てがわかった後、真理はどうするんでしょう・・・？

・・・その話はまた、後ほど・・・。

15・「正臣は、悪くない」

「私が、悪かったんだ・・・」

正孝の声まさたかが震える。決して思い出したくない過去。

しかし、話すためには、全てを思い出さなければならぬ。

正孝が小児科医院を開業したのは12年前。小児科医として優秀だった彼は、仕事に夢中になっていた。

妻とは結婚6年目。一人息子の正臣は5歳。

明るく元気な妻に良く似て、よく笑うとても人懐ひとなつっこい少年だった。

病院の仕事は好調。正孝は子供に懐かれやすい性格で、感じが良い。そのせいか地元だけではなく、口コミで遠くから通ってくる親子も増えた。

大変だったが、仕事は楽しくやりがいあふに溢あふれていた。

仕事に夢中にあるあまり、正孝は、妻と息子のことを忘れた。

仕事ばかりの夫に、だんだんと寂しさで妻の笑顔が減っていく。

少しでもそんな彼女を元氣付けようと、友人たちが彼女を遊びに連れて行ったのは、ホストクラブ。

そこで彼女は、一人の青年と出会う。

彼は彼女より3つ年下の26歳。青年はとても優しく、彼女の寂しい気持ちを、夫への不満を、包み込むように受け入れてくれた。

やがて2人は関係を持つ。

「ずっと一緒にいよう」という彼の言葉に、一年後彼女は家を出る決心をする。

しかし、気になるのは正臣のこと。

母親にとっても懐いていた正臣。彼女もそんな正臣を生きがいのように大切に思っていた。

「正臣も連れて行こう」そして、6歳の正臣を連れて家を出る。

正孝が、妻がそこまで追い詰められて家を出てしまった。という

事に気付いたのは、この時だった。

しかし、正臣を連れられた彼女を、彼は否定する。

「子供なんて必要ない」と。「お前だけじゃないなら、もういい」と。

あまりにもあつさりとした結末。

彼は、「医者の妻」と付き合っている、という肩書きと、「彼女の体」だけが有れば良かったのだ。

夫に気に掛けてもらえない寂しさで、冷静に周りが見られなくなっていた彼女は、やっと、そのことに気付く。

そして彼女は、絶望したまま、車が激しく行きかう車道に、歩道橋の上から身を投げた。

正臣の、目の前で……………。

「私が……ちゃんと気付いてやれば……」

うつむいた正孝の膝ひざに、涙の粒が落ちた。思わず真澄は立ち上がると、正孝の前に屈かがみ、その肩に手を置いた。

「あなた……」

真澄の声も震えている。

「……正臣が、笑わなくなったのは、それからだ……。ずっと、ずっと、あの子の心の中には、母親が自分の目の前で自殺したという思い出が残っている。私のせいでそんなことになってしまったかと思うと……。私は……。こんな、真理ちゃんにこんな酷ひどい事をしたのを見ても、本気であの子を責めることが出来ないんだ……。……すまない、真理ちゃん！本当にすまない！！！」

正孝は顔を上げられない。あまりにも自分が不甲斐ふがいな無くて、真理の顔を見ることが出来ない。

「妻の葬式の時、正臣は一切泣かなかった。口も利きかなかった。ただ、一言だけ私に言った。「僕は、太陽の陰にいる月なんだって」。「その形も分らないくらい、ぼやけていればいいんだって」って。

「・・・きつと、自分が母親と一緒に居たことで、母親が好きな人に嫌われた、と思ったんだろう。・・・我を忘れた母親に、何か言われたんだろうと思う。何か、正臣の心に残る様な事を・・・」

正孝は両手で顔を抑えた。

「もう・・・いいよ。・・・お父さん」

真理はゆつくりと言葉を出した。

頭の中が真つ白になった気分だった。

ただ、真理の大きな瞳からは、さつきから涙が流れて止まらない。

「正臣は・・・私と死んだお母さんを、重ねてただね・・・」

「太陽みたいなの・・・」その言葉に引つかかっていた理由が解つた。

「女なんて男の道具でしかない」そんなことを言つて、自分を犯し続けた理由が解つた。

「優しくされたら、誰にでも足開げやがつて」そんな酷い言葉を、泣きそうな顔で言つた理由が、今、解つた。

「正臣は、私を使つて、死んだお母さんに復讐ふくしゅうしていたのかも知れないね・・・」

好きな人に捨てられた母親に、きつと正臣は酷い事を言われたのだろう。酷い仕打ちを受けたのだろう。

「正臣は・・・悪くないんだよ・・・」

涙が止まらない。自分を犯し、酷い仕打ちをし続けた正臣の事なのに、真理の瞳からは涙が流れ続ける。

「正臣は、傷ついただけなんだもの・・・」

小さな正臣は、どんなに辛かっただろう。どんなに苦しんだだろう。

大好きな母親が、自分の存在のせいで絶望して自殺した。それも自分の目の前で。

「正臣は、悪くない」

真理は、目の前で泣き崩れる父と母に。そして、自分に言い聞かせるようにそう言つた。

・ねえ……。正臣……。

「あー、つき出てるー」

カラオケボックスの小さな窓から見える月を見つけて、その少女は色々とデコレーションされて重そうな爪がついた指を窓に向けた。少女の上で動いていた正臣の動きがフツと止まり、窓の外に目をやる。

さつきまで曇っていた空が晴れて、ぼんやりとした月が暗闇に浮かんでいる。

「ねえ、はやく……」

動きを止めた正臣に、少女が続きをせがむ。いつもの達也の彼女ではない。名前も知らないがその友達らしい。

「やめた」

「え？」

いきなり正臣は少女から離れると、さっさと自分の制服のズボンを穿いて部屋を出てしまった。

「ちよつと！バカにすんじゃないよ！！」

ドアの向こうから少女の怒鳴り声が聞こえる。

正臣は外に出ると、ちよつと身震いした。アルコールで体の中が熱い分、外の空気が冷たく刺さる。

ゆっくり歩きながら空を見上げた。

空には月。ぼんやりとした……。薄い月。

……。あの日も、こんな月だった……。

「お前なんか、連れてくるんじゃないやなかった！」

正臣の頭の中に「声」が響いた。

6歳の時からずっと、彼の中から消えない「声」。

「お前なんて見たくない……。お前なんて、あの月みたくにばやけていればいいのに……。太陽の陰でいればいいのに……。そしたら、お前の存在なんて無くなるのに……。私の前に出

てこないで！」

狂ったように泣き続けた母。

6歳の時に正臣が受けた、「正臣」という存在の「否定」。

「自分は居ないほうがいい人間なんだ」という思いが、6歳の正臣の心の刻まれた、残酷な思い出。

「自分が居たから、お母さんは不幸になったんだ」という、純粋な少年の心に落とされた影。

信号が青になる。しかし、正臣は動かない。

ただ、月を見詰めている。行きかう人が、そんな正臣を不思議そうに眺めていった。

「ばいばい。正臣」。

そう言って、歩道橋から身を投げた母。

自分を愛してくれていたはずだった。

自分も母が大好きだった。

「恋愛」が母を変えた。

本物ではない「恋愛」。

幼い頃のこの思いはトラウマのようになり、年頃になっても正臣の心を離さない。結果、正臣は「女」と云う者を「性行為の道具」としか見られなくなっていた。

「恋愛」で「する」のも。ただ「する」のも。所詮、セックスは同じ……。

「「恋愛」でするキスは、もつと優しいよ」。

急に頭の中に真理の言葉が思い浮かび、正臣はハッと息を呑んだ。

「優しく、キスして……」

真理の顔が思い浮かぶ。

何故か真理としたキスの感触が唇に蘇ってきて、思わず手で口を押さえた。

正直、彼自身、女性にあんなキスをしたのは初めてだったかもしれない。

その思いを振り切るように、黄色信号で歩き出す。

そしてその足は、家のほうへ向かっていた。

15・「正臣は、悪くない」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

正臣の幼少時代が明らかになりました。

真理はどうするんでしょうか？

正臣の心の中に、時折見え隠れする真理への気持ちの変化は？

・・・それはまた、後ほど・・・。

16・「俺に抱かれないの？」

「真理、どこに行くの！」

手に持っていたカフェオレのカップを空にすると、真理は立ち上がりリビングを駆け出した。後ろから母の声が追いかける。

玄関のドアを開け、急いで外に出た。

家の門を飛び出す。左右の道を交互に何回も見ると、

「正臣……」

呟いてから、外の空気がとても冷たいのに気付いた。きゅっと身を縮める。

飛び出してはみたものの、正臣が今更居る訳はなかった。

……どこに行っちゃったのかな……

諦めて門の中へ入ろうとした真理は、視界の端に誰かが道の向こうから歩いてくるのを捕らえた。

暗闇の中、病院の看板の上に付けられた照明に照らされて、金髪の髪が光った。

思わず手を止めて振り向く。

制服のズボンに手を入れて、正臣がゆっくりと歩いて来のだ。

「何やってんの。お前」

門に手を掛けて、びっくりしたように正臣を見上げている真理に、正臣は相変わらず愛想の無い声で問いかけた。

「遅刻じゃねーんだから。門開けるよ」

その言葉に、真理はちよつと笑ってしまった。愛想はないが、悪びれたところも無い。

さっきの事も気にしている様子は無い。

真理は両手を正臣の頬に当てた。

「凄く冷たくなってる……。ずっと、外に居たの……？」

冷え切った体に、真理の手の温かさが頬から流れ、正臣は思わず目を閉じた。

と、その時、正臣の唇に、フツと温かいものが触れた。

驚いて目を開くと、真理が、自分の唇を正臣の唇に重ねている。

ほんの数秒キスをして、真理は唇を離そうとした。しかし、正臣は自分の頬に触れている真理の手を押さえ、そのままキスを続けた。

正臣の、煙草とアルコールが混ざったちよつと苦い味と、真理のカフェオレの甘い味が、2人の唇の間で絡まった。

正臣は、優しく真理の舌を吸い上げてから呟いた。

「・・・甘い・・・」

真理の顔が赤くなる。つい自分から唇を付けてしまった。

「お前さあ・・・」

正臣は頬に付けられていた手を、つかんだまま外し、そのまま引き寄せ、真理の体を自分と密着させた。

「俺に、抱かれないの？」

真理が赤くなつたままの顔を逸らすと、正臣はちよつとニヤツと笑い、真理を横に避けさせ門を開ける。

「いつでもご希望に沿うぜ。」「お姉さま」「

「待って、正臣」

正臣を追って歩き出す。そんな二人を玄関の中で迎えたのは父と母だった。

正孝が正臣の顔を黙ってみる。正臣も何も言わず父の顔を前髪の間から見た。

「お・・・お父さん。正臣、帰ってきたんだよ。・・・正臣、外、寒かったでしょ。上がって、ほらっ。・・・お母さん、正臣にカフェオレ淹れてあげてっ。お母さんのカフェオレ美味しいから」

気遣うように真理が一人で喋り出す。今出せる、精一杯の明るい声。聞いている者が皆元気になるような「太陽のような」明るい声。

「風邪ひくぞ」

正孝は一言そう言うとりビングへ戻っていった。真澄が心配そうに一度真理を見る。真理が「大丈夫」とでも言うように頷くと、そ

れを見てキッチンへと入って行った。

真澄が淹れた、マグカップいっぱいのカフェオレを、正臣は3分も掛からず飲み干すと、一言「うまかったよ」と小声で言っ自分  
の部屋へ戻っていった。

再びリビングには3人だけの沈黙の時間が戻ってきた。

「真理ちゃん」

正孝が口を開く。

「しばらくの間、学校から帰ったら、家ではなくて病院の方へ来て  
いたらどうだろう?・・・そうしたら、正臣と2人つきりになるこ  
ともないし・・・」

「そうしよう?真理」

母が懸命に自分に承諾くわくちやくを求めているのが解わかる。しかし、真理は首  
を横に振った。

「ううん。ありがとう。でも、大丈夫」

「真理・・・」

「お父さんとお母さんに見られちゃったんだもん。正臣だって、も  
うこんな事しないよ。きっと・・・それに、正臣から逃げるの、  
嫌なの・・・」

「こんな事しない」そんな確証かくしやうはどこにもない。

しかし真理は、今、正臣から目を逸そらせなくなっていた。

正臣と、ちゃんと向かい合いたい。そんな気持ちが真理の中で生  
まれ始めていた。

「きっと、大丈夫」

そう言っ、真理は笑う。両親を安心させる為ために。「太陽のよう  
な」笑顔で。

「正臣」

呼びかけて正臣の部屋のドアをノックする。

返事は無い。寝てしまったのだろうか。

「ドア、開けてもいいかな……。でも返事が無いし、勝手にあけるのも失礼だし……。でも、正臣はいつも私の部屋に勝手に入ってくるし……。じゃあ、いいかなあ。」

ドアの前で開けようかどうか迷っていると、突然ドアが開いて、正臣がすばやく出て来た。まるで部屋の中を見られたくないかのようになり、急いで後ろ手にドアを閉める。

「なんだよ……」

ちよつと眉をしかめる。ジーンズにTシャツ姿。寝て居た訳ではない様だ。

「あ……。お風呂は入ったほうが、体が温まって良いよ、って言うおもうと思って……。でも、返事が無いから、寝ちゃったのかな、って……」

真理が少々引きつった笑顔でそう言うと、正臣は面倒くさそうな顔で頭を掻いた。

「……。さつきも言ったけどよ」

真理の顎をグイッとつかんで顔を近づける。

「俺に抱かれないの？」

「ち、ちがつ……」

ちよつと苛ついたような正臣の迫力に、思わず一歩引く。

「違う」と言おうとしたが、その言葉が出きらないうちに、正臣は真理を、真理の部屋の中へ押し込めベッドの方へ突き飛ばした。

真理の体がベッドの上へ放り出される。慌てて体を起こそうとしたが、その甲斐も無く正臣が真理をベッドに押さえつけた。

「お前、さつきから妙に俺にかまうじゃん。何なんだよ……。犯してほしいんならそう言えよ……」

「ち、違うの……。私は……」

「それともアレか？親に怒られた可哀相な弟を、慰めてやろう、とか思ってるのか？お姉様よお」

怒ったような口調が、ふざける様な口調に変わる。

「じゃあ・・・慰めてよ・・・。オネエサン・・・」

「正臣・・・っ・・・」

両親の前で「もうこんな事しない」と言ってしまったている手前、下手に大声を出して、またこんな姿を見せる訳にはいかなかった。

正臣が、ジーンズを半分だけ下ろしたような中途半端な形で真理の中に入ってきた。

なんの準備も出来ていない体に入ってこられるいつもの痛感つうかんに、真理は目を閉じ眉を寄せる。

また、自分勝手に貫つらかれ続けるのかと思い、真理は正臣の両肩をグツとつかんだ。

しかし、正臣はなかなか動かない。

真理は目を開けて正臣を見上げた。正臣が上から真理を黙って見ている。ちよつと切なそうな目で。

「なあ。真理」

正臣の静かな声。

「もし、俺が、「恋愛」でするセックスが出来たら・・・」

真理の肩を強く押さえつけていた力が弱まり、片手を真理の頬に当てた。

「お前・・・。井関と会ったの、止やめるか・・・？」

「・・・正臣？」

正臣が何を言おうとしているのか解らない。

多分、正臣も何故自分がそんな事を言っているのか解らない。

そんな気持ち振り切るように、正臣は真理の中で動き出した。

16・「俺に抱かれないの？」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

正臣の過去を知って、真理は正臣と向かい合おうとしていました。

けれど、小さい頃のトラウマが強すぎる正臣にそれが通用するのでしょうか？

真理に対する気持ちの変化は続きます。

・・・その話はまた、後ほど・・・。

17・「真理は返してもらおうぞ」

「遅刻ギリギリじゃないか。風紀委員長」

井関いせきのからかう様な口調に、真理は思わず赤くなって笑った。

「すいません。寝坊しちゃいました」

昨日色々ありすぎて、正直まこと、疲れた。真理が寝坊をするなど、本当にめつたに無いことだ。

登校時間終了まで後5分。本当なら30分くらい前に来て、風紀委員室で2人で会う約束をしていたのだが、今日は真理の寝坊で、その約束は果たされなかった。

「放課後。なっ」

井関が真理の身長にあわせるように、ちょっと屈かがんで小声で言った。

「はい」

真理が笑顔で答える。

ちょっと見ただけでは、教師と生徒が話をしているだけにしか見えない。だが、小声で話し、なんとなく違う雰囲気かきの2人を見て、一部の生徒は首を傾かげて通り過ぎていった。

出席をとりながら、井関はいつものように教室中を見回し、例の問題児たちが教室に居いないことを確認した。

居いない時は、出席をとる時も飛ばして名前は呼ばない。

最後の生徒の返事を聞いて、井関が出席簿を閉じた時だった。

「あー！ダルー！」

前のドアが勢いよく開き、金色の髪をグシャグシャと掻かき回しながら、正臣が教室に入ってきた。

教室内に緊張した空気が走った。

「お前だけか？立花。珍しいな」

井関が声をかける。正臣は教卓に肘をかけて、グツと井関の顔を覗き込んだ。

「ごめんなー。センセイ。寝坊してサア・・・」  
そこから小声になる。まるで井関にだけ聞かせるように。

「夜遅くまで「姉さん」とイイコトしてたら、眠れなくてさあ・・・」

出席簿を持つ井関の手がぴくつと震えた。真理も今朝「寝坊した」と言っていたのを思い出す。

正臣は、ちよつと顔をしかめた井関を面白そうに見ると、小さく肩を震わせて笑いながら、自分の席へと歩いていった。

「最近遅刻者の増加が目立っていますので、その改善策として、何か意見はありませんか？」

コの字型に組んだ机の委員長席で、真理は他の委員達に意見を求めた。

今日は定例委員会の日だ。

風紀委員室には、1年から3年まで各クラス2名ずつ出される風紀委員18名と、顧問の井関が揃っている。

「あ・・・」

意見の手が上がらない中、1年生の女子が、先輩方を差し置いて発言しても良いものかと恐る恐る声を出した。

「日野先輩は、どうして、朝のチェックに来なくなつたんですか？」

真理がその生徒を見る。その子は以前、正臣の仲間の達也に悪戯されている所を、真理が助けた1年生だった。

「日野先輩が、また朝のチェックに立ってくれば、遅刻は減ると思っています・・・」

「無理だよ」

その言葉に答えるように口を挟んだのは、2年生の男子だった。

「委員長は校門になんて立てないさ。立たせてもらえる訳が無いだ

る？こんなに噂うわさになってんのに。委員長はな、ウチのクラスの立花  
つていう……」

「根本ねもと！」

その生徒の言葉を遮おさえる様に、井関が大きめの声を出した。この生徒は正臣と同じクラス、つまり井関が担任を務つとめるクラスの委員で、根本というらしい。

真理と正臣が姉弟で、体の関係まであるという事は、正臣が真理のクラスで公言こうげんしてから、ずっと噂になり続けている。2年3年ではほとんどの生徒が知っているだろう。1年生に広まるのも時間の問題だ。

「でも先生。本当のところ、こういった噂のある人が、風紀の委員長つていうのは、どうなんです？」

根本が井関に言い返す。噂を知っている2、3年生がざわめいた。真理はちよつと困った顔をした。朝のチェックに立つ事を禁止された時から、もしかしたら自分が委員長でいることにクレームが出るのではないかと覚悟はしていたのだ。

「みなさん」

ざわついた委員達を制するように、真理は持ち前のよく通る高い声を張り上げた。

「皆さんが、私を不適任と思うなら、いつでもリコールしてくれて  
かまいません。私はそれに従いますから」

そう言つて根本の方を向くと、にっこりと笑った。

根本自信、1年の時から憧れあこが、風紀委員に立候補する原因を作つた「太陽のような先輩」の笑顔だった。

「どつしてあんなこと言つたんだ」

委員会が終わつて部屋に2人つきりになると、井関が尋ねた。

「あんなこと、つて？」

真理が資料用のプリントを片付けながら逆に聞く。

「リコールしてくれ。みたいな事」

真理は困った顔で、プリントを机の上でトントントンと揃えた。

「だって、しょうがないですよ……」

プリントを胸に抱いて、フーッと諦めたように息を吐く。

「事実だし……」

その言葉に井関は眉をしかめた。今朝正臣が自分を挑発するような態度を取ったのを思い出したのだ。

真理と正臣の関係はまだ続いている。そう思うだけで悔しさが込み上げてくる。自分は何も出来ないのか。と。

「真理」

井関は真理の腕を引くと、その体を抱き締めた。

突然の事に、真理が手にしていたプリントが落ちて床に広がった。

「先生……」

真理は井関に、正臣の事を話してみようかと一瞬思った。

しかし自分自身、正臣と向き合おうと決めたばかり。

まだ井関に言う時期ではないだろうと思ひ、言うのをやめた。

「僕は……何もできないのか？」

抱きしめたまま真理の髪を撫でる。綺麗なストレートヘア。顔を寄せるとふんわりとシャンプーかスタイリング剤かの良い匂いがする。

「そんな事無いよ。先生。……先生と居ると、とても落ち着くの。凄く慰められる。っていうか、元気が出る……」

井関の、真理を抱きしめる手の力が強くなった。しかし、井関の胸の中で真理は正臣の事を考えていた。

「あいつのこと、好きなのかよ！」怒っていた正臣。

どうして怒ったの？悲しそうな顔で……。

「井関と会うの、やめるか？」切なそうな目。静かな声。

正臣……。もしかして……。

真理がひとつの答えにたどり着きそうになった時、突然、風紀委員室のドアが勢いよく開いた。

驚いた2人がパツと離れる。

「・・・お邪魔やまだった？」

そこに正臣が立っていた。片手をドアに掛けて、鞆かばんを片手に薄笑いを浮かべている。

「正臣、どうしたの？」

「委員会。終わったんだろ？」

「終わったけど・・・。後片付けが・・・」

真理の言葉が言い終わらないうちに、正臣は入り口近くに有った真理の鞆を手にとると、井関から引き離すように真理の腕を引き寄せ、自分の腕の中へと抱きこんだ。

「帰ろうぜ」

そして井関を睨み付けると、

「真理は返してもらうぞ」

そう言つて真理の腕をつかんだまま歩き出した。

「ちよつ・・・ちよつと、正臣いつ・・・」

真理も引きずられる様に歩き出す。

2人が居なくなると、井関は今の正臣を思い返して悔くやしそうに下唇を噛かんだ。

「真理は返してもらうぞ」その口調は、弟が姉を連れに来たものではない。

そう・・・。まるで・・・。

「あいつ、なんのつもりだ・・・」

思わず口から出る。

誰が聞いても判わかる。

まるで、自分の「恋人」を取り返しに来たかのような、強い口調だったのだから。

17・「真理は返してもらおうぞ」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

正臣が心なしか井関先生を攻撃し始めました。

真理が正臣の心の変化に気付きます。

でも、正臣自信、自分の行動の変化に気付いて  
いるのでしょうか……。

……それはまた、後ほど……。

18・「私の事、好きなの？」

「ま、まって……。ちよつと、待つて。正臣！」  
引かれる手の進む速度に、真理は小走りに着いて行くのがやっとだった。

真理の手を引いている当人、正臣は、まるで早く風紀委員室から真理を遠ざけたいかのようにズンズン早足で歩いていく。

「正臣つてばあ……」

半分引きずられるように足を進める。中途半端な歩調に足が纏れそうになる。

すれ違う生徒達が、「何だ？」という顔で見ているのが解る。

「優等生と問題児」の違いはあれど、2人とも校内では有名人だ。

その2人が、何故一緒に歩いているのか。それも、優等生が問題児に引つ張られている。

二人の噂を知っている者は、眉を顰めたりニヤニヤしたり。知らない者は不思議そうに眺めている。

「まーさーおーみーい！」

今にも足が纏れて転びそうになり、真理はちよつと大きめの声を出した。と、そのとたん、正臣がピタツと止まる。

ドンツ！勢いの付いていた真理は、そのまま正臣の背中にぶつかってしまった。

「……いたあい……」

ぶつかつた顔を、片手で押さえる。

「3年の玄関ソツチ」

正臣はそんな真理にお構いなしに、3年生玄関を指でしゃくると、さつさと2年生玄関の方へ歩いていく。

「本当に、一緒に帰るの……？」

顔を押さえたまま、真理はポツリと呟いた。

特に何かを話す訳ではない。

しかし、間違いなく真理と正臣は、2人並んで家路いえじを歩いていた。真理は横を歩く正臣の顔をチラツと見上げた。

無表情で真正面を向き、ただ黙々と歩いている。しかし、その歩調と速度は、間違いなく真理に合わせている。

先週も、こんな事が有ったっけ。

先週の金曜日。真理がはじめて井関にキスをされた日。

正臣が真理を待ち伏せして、裏庭で真理を犯した。しかし、その時に、正臣は真理に「優しいキス」をしたのだ。

その後二人は一緒に帰った。ちょうど今と同じように。

2人並んで。正臣が真理の歩調に合わせて歩いたのだ。

考えてみると……。あの時から、正臣、先生を気にするようになったんじゃないだろうか……。「会うの止める」とか言うようになって……。

考えが進むうち、あるひとつの答えにたどり着いて、真理は思わず赤くなった。

正臣。もしかして……。

「いやだ！行かない！」

2人で歩き続けて、ちょうど「立花小児科医院」に近くなってきた時に、その声は聞こえた。

声のしたほうを見ると、病院の門の辺りで一組の親子がもめている。

5、6歳の男の子と母親。

「注射いやだ！行かない！」

「インフルエンザのお注射しないと、病気になっちゃうよ！」  
注射を嫌がる男の子に、若い母親は必死だ。

その様子を見て、真理はクスツと笑った。

「インフルエンザ予防接種よぼうせつしゅの時期だもんね。そういえば、小さい子は2回しなきゃならないから親も大変だよ。小さい子は注射嫌い

だもん」

正臣を見上げると、正臣も、病院に入る入らないで戦いを繰り広げている親子を黙って見ている。

「そういえばお父さんが、予防接種してあげるから時間が空いたときに病院においで、って、言ってたよ。正臣、今週中にでも一緒に・  
・・」

真理がそこまで言った時、正臣は注射でもめている親子のほうへ歩き出した。

「おい。坊主」

親子の後ろで立ち止まり、男の子に声をかける。

いきなり金髪の怖い風のお兄さんが現れて、親子の動きが止まった。反射的に母親が息子を庇かばうように腕の中へ入れる。

「大丈夫だぞ。ここの医者、優しいし。看護師さんは注射すんのウマイから」

その風貌ふうぼうのわりには話し方が優しく、安心した男の子が、母親の腕の中から正臣の前へ出て来た。

「いたくない？おにいちゃん」

「ちよつとだけ、イテーけど。目えつぶって、3まで数えたら終わる」

「本当？」

「おう。本当だ。嘘だったら、にいちゃん、この髪、真っ黒にしてもいい」

男の子が笑い出した。そうして思い直したように母親のところへと戻り、正臣に手を振る。

「ばいばい。おにいちゃん。痛くても3まで数えるよ」

「おう。がんばれよ」

正臣がちよつと手を上げると、母親がお礼を言つかのようによろしく下げ、そのまま病院の中へ入っていった。

「・・・正臣・・・？」

真理が呆然ぼうぜんとした顔で正臣の背中に声をかける。我ながら間抜けまぬ

な声を出しているような気がした。

「あの……。すごいね……。正臣。……。びつくりした……。」

正直、親子の方へ歩いていった時、正臣が子供に「うるせえ！」と怒鳴るのではないかと思ったのだ。

しかし、正臣の意外な行動に、真理は何か見てはいけないものを見てしまったような、微妙な気持ちだった。

「親父が小児科医だから。ガキは慣れてんだよ」

正臣が振り向かないまま答える。

「それにしたって……。いつもと違ってたから……。」

真理の知っている、無愛想で、いつも唇に薄笑いを浮かべている

正臣とは、全然違う正臣。

とてもじゃないが、いつも嫌がる自分を有無を言わず犯してしまふ人間とは思えなかった。

「うるせーな……。」

正臣はそう吐きすてると、背中を向けたまま家の門のほうへ向かった。

「親父に、余計な事言っんじゃねーぞ」

家の門に手を掛ける。寒さのせいか、それとも照れているのか、後ろからチラッと見える耳が赤い。

正孝に今の事は言うな。という意味だろう。

親にそんな事をした自分の姿を知られるのが嫌なのだろう。

「私は？」

正臣の後ろを付いて歩いていた真理は、玄関の前まで来て、さっきからこちらを振り向かない正臣の、Gジャンの背中をつかんだ。

「……。私には、見せても良かったの……？」

正臣がドアに手をかけたまま止まる。

「私には、正臣のあんな姿見せても良かったの？」

「……。」

「ねえ。正臣……。」

真理は気になってしょうがなかった一言を、口に出した。

「私の事、好きなの？」

「くだらねー事、言ってんじゃねーよ！」

数秒間の沈黙の後、正臣はそう叫んでドアを開け、自分の背中をつかんでいる真理の手を、振りほどくように家の中へ入っていった。真理が玄関先で立ちすくんでいるうちに、早足で階段を上がっていく。

「正臣……」

言っちゃいけない事だったんだろうか……。  
でも、正臣。

真理は心の中で正臣に話しかける。

直接、答えが聞きたかったの……。

先生が私のことを好きだと、正臣にハッキリと言ったあの日から、  
正臣の態度は変わったんだよ。

キスの仕方も……。

私を見る目も、優しくなった……。

その分、先生を見る目がきつくなった。

まるで、嫉妬しつとしてるみたいに……。

「正臣……」

答えを聞かせて……。

あなたの口から……。

私の事、好きなの？

18・「私の事、好きなの？」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

怖い系が子供に優しい。って、ちょっとベタでしたか？（笑）

まあ、彼は小児科医の息子なんで。

勘弁してください。（笑）

実は、子供に優しい理由は、他にあつたりしますので。

真理が正臣の「もしかして」の気持ちに気付きます。

正臣の答えは・・・？

・・・それはまた、後ほど・・・。

19. 「嫉妬なんかじゃねえよ！」

「気にいらねえ……」

その日、朝から正臣は不機嫌だった。

物凄い憎々（にくにく）しげな顔をして、いつものたまり場で、腕を組みながら煙草を啜（くわ）えている。

「何だよ？なんかやるなら手伝うぜ」

達也が我先（われさき）にと寄ってきた。最近、正臣があまり付き合いが良くない事もあり、毎日退屈でつまらない。

健と秋光も同じらしく、正臣の顔を興味ありげに見た。

正臣は木に寄り掛かり、枯れかけの茂みの隙間（すきま）から見える校舎を睨（にら）み付ける。校舎の、ある教室の窓。風紀委員室の窓。その教室の中にいる、2人のうちの1人を。

「……返してもらおうぜ……」

私の事、好きなの？

正臣は、常に形を変えて漂う煙草の煙を眺めながら、昨日の真理の言葉を思い出していた。

……そんなの、解らない……。

女なんて皆、俺の道具でいい。そうとしか思ったことは無い。

好きだの嫌いだの。そんなものは解らない。

真理の笑顔が思い浮かんだ。泣いた顔が思い浮かんだ。犯されて自分を睨み付ける目が思い浮かんだ。

煙草を摘みながら、唇に指を当てる。

いつでも思い出せる。真理の唇の感触。

柔らかくて、温かい……。

私の事、好きなの？

今の正臣には、自分自身答えなど出せない。

解らないのだ。

ただ、解ることは……。

自分が「道具」として犯し、自分だけが触れ続けた真理に、他の誰かが触れるということが許せない。気に入らない。

「痛い目みせてやるよ……」

真理は、他の誰にも、触れさせない……。

それはちょうど、2時限目が始まったばかりの時だった。

2年2組は現国の授業。

言わずと知れた、クラス担任、井関の授業時間だ。

「じゃあ、昨日の続きから。教科書開いてるかー？」

井関の軽快な口調で授業が開始されようとした時、物凄い音を立てて前のドアが開いた。クラス中の注目が集まる。

そこには、正臣を先頭に、当クラスの問題児達が立っていた。生徒達が萎縮して静まる中、井関が普通に声をかける。

「4人お揃いか。席に着け。まだ授業は始まったばかりだから、出席扱いにしといてやるぞ」

そう言つて教科書をめくり始めた時、いきなり達也が、井関の前にある教卓を思いつき蹴り飛ばした！

ガターン！！と大きな音がして、教卓が倒れる。教卓に近い前の席の生徒達が、驚いて飛び退いた。女子生徒から悲鳴が上がる。

「何をするんだ！」

井関がちよつと険しい顔をする。と、正臣が井関のネクタイを力一杯引つ張り、自分の前に引き寄せた。

「井関い……。」「かえしてもらおう」「ぞお……」

顔を突きつけて睨み付けるように言った後、正臣は思いつきり、井関を殴りつけた。

「日野さん」

2時限目の授業が中盤に差し掛かった時、教室に伝言を伝えに来た教師がやって来て、真理が呼ばれた。

「ちよつと、生徒指導室に行ってください」

「生徒指導室？」

ちよつと教室内がざわついた。こんな授業中に？それもよりによつて何故、生徒指導室？

真理が不思議そうな顔をしていると、その教師が言いづらそうに言った。

「2年の・・・立花君が・・・」

「すぐ行きます！！！」

その名を聞いて、真理は慌あわてて立ち上がった。

何があつたかは、生徒指導室に入ったとたん何となく解かった。生徒指導室の中で、正臣が椅子に座っている。足と腕を組んで。退屈そうに。

そしてその前にある机を挟はさんで、生徒指導部主任の佐藤と、井関が立っていた。

「先生、それ・・・」

思わず口から出る。井関の口元には大きなガーゼが当てられ、ちよつと腫はれたようになってる。

井関がちよつと困ったように笑った。

「本来なら、親御さんと呼ぶところだがな。立花がどうしても君を呼べと言つてね・・・」

佐藤が呆おろれたように言い、正臣の頭を手でぺしつと叩いた。

「つてーな！生徒叩いていいのかよ！」

「生徒が教師を殴つて良いと思つてるのか！！！」

生徒指導部主任教諭「鬼の佐藤」が負けじと怒鳴る。教師になって30年。この手の生徒とは嫌というほど付き合っている。今更喜欢

に言わせておくほど甘くは無い。

「殴つたの？どうして?!」

真理は正臣の前に立って、両肩に手を置き正面から顔を見る。と、正臣が甘えるように言った。

「ねえさーん。手えいたい」

「え・・・?」

「殴つたほうもサア、痛いんだよ。ほら、右手痛い」

右手を軽く振ってみせる。

「何言つてんの。先生のほうがもっと痛いわよ。どうして殴つたりなんかしたの?」

「姉さんの為」

「・・・え?」

正臣が顔を上げて佐藤を見る。

「さとーセンサー、知ってるかぁー。いせきセンサーはなー、俺の姉さんに・・・」

「スイマセンでしたあ!!」

正臣が何を言おうとしているのかを悟つた真理は、正臣の言葉を遮る様に前に立ち、よく通る大きな声で謝つた。

「弟がとんでもないことをしました!本当に申し訳ありません!私からもよく言っておきますので!!」

深々と頭を下げる。それを見て、佐藤が溜息をついた。

「本当に。何でお前達みたいな正反対同士が姉弟になんてなったのか・・・。日野にしてみれば迷惑この上ないだろうに:」

「そんな事・・・ないです」

「まあ、立花も、成績は良いんだから、その「やんちゃ」な所だけ直せや」

佐藤がもう一度、正臣の頭をぺしつと叩いた。

「いてえつつつてんだろ!!」

「ほれ。すぐそうやって噛み付く。血の気が多すぎるんだ。献血にでもいって社会に貢献しろ!その素行を何とかしないと、内申点に

ひびいて大学になんて行けないぞ！」

真理が頭を上げる。え？大学？正臣が？

「あの……。正臣、成績良いんですか？」

キョトンとした顔で井関を見ると、井関が、知らなかったのか？、  
というように首を傾げた。

「このまま維持できれば、大学圏内だよ」

「だーからー、このやんちゃ坊主のままじゃ駄目だといつとる！  
お姉さんも良く言い聞かせておいてくれ！」

3 発目。正臣の頭を叩く。

「いてえつつてんだろがよ！てめえ！！」

「正臣い！！」

立ち上がって佐藤に食って掛かろうとした正臣を真理が止めた。

佐藤が腕を組んで溜息をつく。

「他の3人は教室で暴れただけなので各自そのまま帰したが、立花  
はとりあえず、自宅謹慎だ。一人で帰す訳にはいかないので親御さ  
んを呼ぼうとしたら、君を呼べと言われた。……そういう事だ」

「あの……。責任もって、弟を家まで連れて帰りますので」

真理はもう一度頭を下げた。

「先生。本当にごめんなさい！」

生徒指導室を出てから、真理は廊下で井関に頭を下げた。

「こんな事、先生にするなんて……」

「何で謝ってんだよ。真理が」

廊下の窓側に寄り掛かっていた正臣が口を挟む。

「当たり前でしょ！正臣、何をしたか判ってないの！」

「わかってるよー」

おどけた口調。喉の奥でクククと笑い出した。

「俺はー、大事な姉さんにくつついてきた、スケベ教師退治しよう  
としただけー」

「正臣！いい加減にして！」

正臣の言葉を止めると、真理は改めて井関を見た。

「ごめんなさい……」

辛そうな真理の顔を見て、井関は優しく笑った。

「いいんだよ真理。君が謝らなくても」

真理の頬を優しくペシペシと叩く。真理が恥ずかしそうに笑った。

「先生……。痛そう……」

井関の口元に貼られたガーゼに手を触れると、井関はその手を優しく握った。

「大丈夫だよ。すぐ治る」

そんな2人を見て、正臣が眉をしかめた。

……。何だ？すっげームカムカする……。

無性にイライラする……。

正臣は、腹の底から込み上げて来る理解不能な感情を振り切るように、いきなり真理の腕を引き、自分の方へ引き寄せた。

「帰ろうぜ！真理！！」

「嫉妬か？立花」

「！」

ささやかな仕返して井関が放った言葉は、思いのほか正臣の心に響いた。

……。嫉妬……。？俺が……？

「嫉妬なんかじゃねえよ！」

そう叫んで、真理の腕を引き歩き出す。

「正臣？」

不思議そうに真理は声をかけた。

井関の姿が見えなくなると、いきなり正臣は人気の無い廊下で真理を抱き締めた。

「……。ま……。正臣？」

真理の体を抱きこみ、手を頭に当てて、自分から離れないように抱き締める。

離れるな……。この腕から出て行くな……。

意識しないうちにそう心の中で叫んでいる自分に気付く。

俺は、何を考えてる……。

井関の言葉が頭の中で回った。

「嫉妬か?」……嫉妬……?

「嫉妬なんかじゃねえよ」

まるで自分に言い聞かせるように呟いて、腕の中に抱いたままの真理にキスをする。

真理に、乱暴なキス、が出来なくなっている自分に気付く。

真理の柔らかで温かい唇を、乱暴に奪う事が出来なくなった。

この、優しい唇、の感触を壊したくない。

いつの間にか正臣は、そう思うようになっていた。

19・「嫉妬なんかじゃねえよ！」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

正臣、井関先生にあたりまくりです……。

「嫉妬じゃない」と自分では言っていますが……。

この後、2人にとって重要な出来ごとがおこります。

2人はいつ心を通わせることが出来るんでしょうか……。

……それはまた、後ほど……。

20・「私が「太陽」になるから」

「正臣、コーヒー淹いれてあげようか？」

家に帰って、玄関の鍵を閉めた真理は、靴を脱いでいる正臣に声をかけた。

自宅じたく謹慎きんしんということ、真理が早退して正臣と家へ帰ってきた。

まだ午前中。両親に、正臣が先生を殴ったなんて言う心配するの、真理は「言っちゃ駄目よ」と正臣に口止めした。

「ちよつと寒かったね。あつたかいコーヒーでも淹いれてあげるから、着替かえたら下りてきて。あ、部屋に持つてく？」

「部屋は駄目だ」

間髪かんぱつ入れず返事が返ってきた。部屋に何かあるのかしら？真理がちよつと興味を持った時、正臣が廊下らうかに上がりながら振り向かずに言った。

「ココア」

「え？」

「ココアがいい」

「正臣ってさ、甘い物、好きなの？」

リビングで、湯気ゆげが立ちのぼる温かいココアのマグカップを正臣の前に置きながら、真理はちよつと控えめに聞いた。

「悪い？」

「悪くないけど・・・」

何か昨日から正臣の違う顔ばかりを見せられて、真理は少々、呆ぼう然ぜんとさせられてばかりだ。

子供に優しいところ。成績が良いところ。甘い物が好きと  
いうところ。

「ガキの頃。寒い時に良く飲んだ」

そう呟いてココアに口を付ける正臣を見て、真理は、あっと気付いた。

きつと、死んだお母さんが良く作ってくれたんだ……。

真理は自分のカップを持ちながら、正臣の向かいのソファに腰を下ろした。

カップの湯気をフーッと吹いて、ココアを少し口に入れる。

温かく甘い味が、口に中いっぱい広がった。

「正臣ってさあ、他に何好き？」

正臣がカップから口を離して真理を見る。長めの前髪の間から見える目を「いきなり何だ？」とでも言うようにパチパチさせている。

「何で？」

「ほら……あの、姉弟になって1ヶ月以上経つのにさ、あんまり正臣の事知らないし。最近少し解ってきたくらいで……。あ、好きな料理とかあつたら言つてよ。作つたげるから。私、ずっとお母さんが働いてて家の事やつたから、上手なんだよ。何が好き？」

「セックス」

ぐっ！予想だにしない言葉に、真理は思わず、冷ましてから飲むと思つていたココアをガバツと口の中へ入れてしまい、その熱さでむせ返った。

「……あつっ……！ゴホッ……やだ……もう……」

舌を出して息を吸う。ちよつと涙目になってしまった。

そんな真理の横に、正臣が座ってきた。

「何？お前、猫舌？」

「ほーよあ……。わういー？」

「そうよ。悪い？」と、言おうとした。しかし、熱さで舌が痺れて口が回らない。

突然変な事言わないでよ！！

口に中を冷まそうと、口で息をする。

半開きの唇から、少し舌を出して。

「そついう口するとよあ……」

正臣が真理の手からカップを取って、テーブルに置いた。

「そそる、よな・・・」

え？と、真理が正臣のほうを向いた瞬間、正臣の唇が、真理の半開きの唇に重なった。

適度に温かい正臣の舌が、まだ熱さで痺れている真理の舌に絡まり、執拗に舐め上げる。

ココアの甘い味が、2人の口の中に広がった。

「時間はたっぷりあるし・・・。2人つきりだし・・・。犯んねーテはないよな。・・・なあ？真理・・・」

半分唇を付けたまま、正臣が真理に言う。いつもの口調。どこか人を馬鹿にしたような口調。

真理が唇を離して、正臣を見た。

正臣は無言で真理をソファの上へ押しなおす。その勢いで、ソファの上のクッションがひとつ床に転がった。

しかし、真理は抵抗しなかった。声も出さなかった。ただ黙って、正臣を見詰めた。

「・・・何で、抵抗しねーの・・・？」

正臣が真理を見詰める。黙って、悲しそうな目で、自分を見上げている真理を。

綺麗なストレートの髪がソファの上に広がり、無造作に少し顔にかかっている。

正臣は、顔にかかる髪を手で避けた。その手を真理がつかむ。つかんだまま、頬に当てた。

「正臣」

真理は正臣の前髪に指を触れ、少し避ける。

いつもはぼんやり隠れている目が、真理を見ている。黒い綺麗な瞳。優しいところが父の正孝に似ている。

「ほら。やっぱり・・・。綺麗な目・・・」

真理は嬉しそうに笑った。

「正臣。私、「太陽」になるよ」

「え？」

「あなたの、「太陽」になる……」

「……」

「私が「太陽」になるから」

しばらく2人とも、何も言わなかった。ただ黙って、見詰め合っていた。

「親父に……何か聞いたのか？」

「やっと正臣が口を開いた。」

「正臣の、お母さんの話……」

真理がそう言うのと、正臣は真理から離れて、そのままソファの上に乱暴に腰を下ろした。

「だから……なんだよ……」

苛ついた様に、憎々（いび）にくにく（しげ）な口調で、言葉を絞り出す。「だから何だつてんだよ！」

真理が体を起こすと、正臣はその両肩をつかんで怒鳴った。

「同情してんのかよ！目の前で母親に捨てられて、その上、目の前で自殺された男によ！」

「正臣……」

「大きなお世話なんだよ！今更！同情なんて、まっぴらだ！！」

「同情なんかじゃないよ！」

真理は、自分の両肩をつかむ正臣の腕をつかんだ。

怒鳴られて怖い気持ちよりも、正臣と話がしたい気持ちのほうが大きい。

真理は必死だった。必死で正臣の顔を見上げて言った。

「正臣と話がしたいの！ちゃんと向き合いたいの！正臣に笑って欲しいの！だって、正臣が傷つく必要なんて何もないんだもの！正臣は何一つ悪くないんだもの！」

正臣は真理の顔を驚いたように見た。こんなに必死に、自分に何

かを言つて来る真理は、いや、言ってくる女は初めてだ。

「それに、正臣は……」

真理が正臣の顔を見ながら、ちよつと赤くなる。

「私と……」「恋愛」してるんでしょ？」

恥ずかしかつたが、それでも頑張つて、目を逸らさず正臣を見詰めた。

「「恋愛」してる相手と、話をしなくてどうするの？ 笑顔を見せなくてどうするの？」

正臣の手の力が弱まる。真理はその腕を外させて、正臣の両手を自分の膝の上に置き、両手で握つた。

「私が、正臣の「太陽」になるから……。だから、笑つて」

真理は正臣の目を見詰めて「太陽の笑顔」でにこつと笑つた。

「正臣はきつと綺麗に笑える人だよ。だから、笑つて。正臣」

「……」

「正臣。笑つて」正臣の脳裏に「声」が蘇る。

「大好きよ。正臣の笑顔大好き」そう言つて、笑う「声」。

「正臣」自分呼びながら笑う。その笑顔は「太陽のような笑顔」。

「……真理……」

正臣の、真理を見る目がフツと優しげになり、声が和らいだ。その時、

「お前なんて、いなければいい！！」「声」が叫んだ。

正臣がいきなり両手で自分の頭を押さえ、グツと目を閉じて、苦しそうな顔をした。

「正臣？」

「私の前に出てこないで！ お前なんて要らない！」 さっきまで笑っていたはずの「声」は、怖いほどの罵声を発する。

「うそだ……」

正臣が呟く。苦しそうな口調。真理は正臣を覗き込むように両肩に手を置いた。

「嘘だ……。笑え、なんて……。嘘だ」

「正臣？」

頭を押さえて、何かを振り払うように、頭を振る。

「いらぬ、って、言つたらう？……。太陽に月は必要ない、って。言つたらう？……。太陽の前に出てくるな、って、言つただろ……」

正臣は真理に話しているのではなかつた。

記憶の底にずっとあり続け、正臣を縛り付けている、「声」に、話しかけていた……。

20・「私が「太陽」になるから」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

正臣が「過去」から抜け出そうと苦しんでいます。

真理はそんな正臣を助けてあげることが出来るのでしょうか？

・・・それはまた、後ほど・・・。

21・「泣いていいよ」

「俺の存在なんて、無くなってしまうえ、って言ったろう！」

正臣が叫ぶ。

苦しそうに叫ぶ。

両手で頭を押さえて。記憶の奥底から響く「声」と戦うように。

「正臣！！」

真理は正臣の肩をつかむ手に力を込めて、まるでどこか遠くに行つてしまいそうな意識を呼び戻すかのように、正臣の名を呼んだ。

「正臣！」

正臣は頭を押さえたまま項垂れた。手が震えている。

震える手が、金色の髪の毛をわしづかみにしていた。

「笑え、なんて・・・嘘だ」

正臣は繰り返す。それは今まで、6歳の時から今まで、ずっと正臣の中で繰り返されてきた言葉。

「嘘だ・・・。笑ったって「あんた」はどこか行つちまう・・・。

月は、太陽より輝いちゃいけないんだ。月が輝けば太陽は隠れて・

・不幸になるから・・・」

「そんなことないよ・・・」

自分を責めるように言葉を繰り返す正臣の記憶に、真理が入り込む。

優しく、言い聞かせるように、正臣に語り掛けた。

「月が、太陽を隠す、なんて事ないよ・・・。月のせいで、不幸になんてならない。それに「私」は、どこにも行かないよ・・・」

項垂れた正臣の額の辺りに、自分の額をくつつける。そして、囁くような声で言った。

「私は、あなたの「太陽」になっても、どこにも行かないよ・・・。月を責めたりしない」

自分の髪をわしづかみにしていた手が、ゆっくりと離れた。正臣

が顔を上げかける。

「・・・真理・・・」

正臣とは思えない穏やかな声が聞こえた時、再び、「声」が正臣を縛る。

お前の存在なんて、なくなればいい！！

正臣は再び、苦しそうに頭を抱えた。

「やめる・・・」

お前なんて、いらない！！

「・・・やめてくれ・・・」

肩が震える。目をグツと閉じて下唇を噛む。

幼い頃から、否定された自分の存在と、一人で戦い続けて来た。

「声」が聞こえる度、記憶が蘇る度、彼の心はボロボロに成り続ける。

「正臣・・・」

そんな正臣を見てみると、真理も辛かった。

辛くて苦しくて、胸が張り裂けそうな思い。

正臣と向き合おうと決めた時に、自分が正臣を変えて上げられるような「太陽」になるう、と決めた。

姉として、苦しい過去を背負ってきた弟を助けてあげたい。そんな気持ちだった。

しかし、今の真理にはそれ以上の思いがあった。

正臣を助けてあげたくて堪らない。

正臣の為に、何かしてあげたくて堪らない。

正臣が、・・・愛しくて、堪らない・・・。

「正臣・・・泣いていいんだよ」

真理は頭を抱えている正臣の耳元で、優しく囁く様に言った。

「・・・泣いていいんだよ・・・苦しかったら、泣いていいよ」  
肩で笑うように、正臣の肩が一度揺れる。

「・・・んな、かつこ悪い事、出来るかよ・・・。バーカ・・・」

「泣く事は、かつこ悪くなんてないよ」

俯むついたままの正臣の前髪を指ですいた。さつき見た、綺麗な黒い瞳が見える。

「泣いた数だけ、人は強くなれるの。泣けない人は強くなんかないよ。悲しい事や辛い事があつたら、泣かなきゃ駄目。涙が辛いことを全部流してくれるんだよ」

それから真理は、ちよつと恥ずかしそうな口調になった。

「私だつて、いつも正臣に乱暴にされて・・・毎日泣いてたんだから。でも、泣いて頑張つてたから、毎日まあまあ元気だつたですよ？」

再度、正臣の肩が揺れる。今度は続けて、笑うように揺れた。

「何言つてんだよ・・・。バーカ・・・。その泣かしてたヤツに、何で・・・お前、こんな」

正臣の言葉が止まる。言葉を出せないかのように口に手をやる。

「こんな・・・」

真理はハツとした。声が震えている。込み上げてくる何かを堪こたえるように。正臣の声が震えている。

「何で、ここまですんだよ・・・」

ドキン・・・。何故か、真理の胸が鳴った。

どうして・・・。ここまで・・・？

「バカ・・・や・・・ろ・・・」

正臣の手が、目元を覆おおうように押さえる。真理は思わず正臣を胸の中に入れるように抱き締めた。

正臣の肩が小刻みに揺れる。声は出ない。しかし、その様子に真理は確信した。

正臣が、泣いている・・・。

声を押し殺して、泣いている・・・。

「正臣・・・」

真理は正臣の頭を撫なでた。

まるで小さな子供をあやす様に、愛しそうに頬をつける。

正臣の腕が、自分を抱きしめる真理の背中に回り、真理の服をグ

ツと握った。

まるで、しがみ付く様に握った。

「ま……り……」

正臣の声は泣き声だった。

「まり……。まり……」

泣き声のまま真理の名を呼び、しがみ付く手の力が強くなる。

「正臣……」

真理が正臣の髪を撫でながら、抱きしめる腕に力を入れる。

「泣いていいよ」

しっかりと抱き合ったまま、2人は暫くひまじそのまま何も言わなかった。

真理の胸に抱かれながら、正臣は不思議な感覚に陥おちいっていた。

「泣いていいよ」そう言われてから、心の鍵が外れたように次から次へと涙が出てくる。

こんなに涙を流すのは、何年ぶりだろう……。

「あの事」があつてから、泣いた覚えなどない。

泣かない事が、強くなる事だと思っていた。

泣かないでいる事で、記憶の中に響く「声」に抵抗しているつもりだった。自分は、負けない、と。

そして、泣かなくなった。笑わなくなった。人を受け入れなくなった。

「泣いていいよ」真理の声が優しく心に響く。

「泣かない人は強くななんか無いんだよ」正臣の心の中に、真理の声だけが響き続ける。

正臣が安らかな気持ちになり掛けた時に、それを許さないかのよううに心に響き続けていた過去の「声」。正臣を、否定する「声」。その「声」が聞こえない。

真理の胸に抱かれて、今までの分を全て流すように涙を流し続け

る正臣の心の中に、過去の「声」は聞こえない。  
「私が太陽になるから」ただ、真理の声だけが、優しく響いている。

「正臣」

いつまで2人、抱き合っただまだったろうか。

正臣の肩の震えがやっと治まってきた頃、真理が正臣に声をかけた。

正臣の前髪を避け、俯き加減のその瞼の上に唇を付ける。自分の服の袖口で、まだ目に浮かぶ正臣の涙を拭った。

正臣の頬に両手を当てて上を向かせる。

泣いて、まだ少し潤んだ虚ろな目。ちよつと弱々しい表情。

しかし、何かが抜け落ちたような綺麗な表情に、真理は一瞬ドキツとした。

「まり・・・俺・・・」

真理の背中をつかんでいた手を離して、自分の頬にあてられている真理の両手を握る。

「俺・・・お前が・・・」

何かを言いたかった。喉まで出掛かっている。

でも「その言葉」が出てこない。

何の言葉なのか、正臣自信よく解っていない。

でも、真理に伝えたくて堪らない言葉。

「正臣」

そんな正臣を、真理は優しく見詰めた。

「正臣さ・・・前に、「自分に「恋愛」のセックスが出来たら」って、言ったよね・・・」

「え？」

「だから・・・」

真理は正臣の前髪を横に避け、そのはつきりとした綺麗な瞳を見

詰めながら言った。

「「恋愛」のセックス。しよう」

21・「泣いていいよ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

「泣くこと」「っていうのは、本当に良い事だと思います。

泣くことで、心がすつきりしたりします。

泣くことをしなかった正臣は、全てを心の中に溜め込んでしまっていたんですね。

なんか2人、いい感じになってますが、次回も「超いい感じ」です。（笑）

終わった台詞が台詞ですしね。

私事で申し訳ないのですが、玉紀はいつもBGMをかけながら下書きをします。

今回、下書きから投稿用の文字打ちまで、ずっと中嶋美嘉さんの「ORION」という曲がかかってました。

なんかちよっと、今回のお話のイメージで、凄く早く執筆が進んだんですよ。

ファンの方がいたらスママセン！

勝手な戯言ですのでご容赦ください！

でも、いい曲ですよ。

・・・それではまた、後ほど・・・。

## 2.2. 「恋愛」のセックスしよう（前書き）

### 注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。

苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方はその場面にきたらとばすなど。してください。

R - 15 指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

## 22・「恋愛」のセックスしよう

「カーテン、閉めて・・・」

真理の服を脱がせようと手をかけた正臣に、真理は恥ずかしそうに言った。

真理の部屋の窓から、まだ午前中の明るい陽射しが入ってくる。

「閉めたほうがいいのか？」

正臣が「どうして？」という風に聞いてくる。

「恥ずかしいから・・・。服脱いで・・・なんて、初めてだし・・・」

考えてみれば、「服を脱いで」というのは最初に正臣が真理を犯した時以外にない。その時だって、「脱いで」などという状況ではなかったし、部屋も夕方過ぎで薄暗かったのだ。

正臣はベッドから立ち上がると、窓辺へ寄ってカーテンを引いた。遮光カーテンが外の光を遮る。部屋の中が日没後のように薄暗くなつた。

「真理・・・」

正臣がベッドの上にながって、自分に背を向けて腰掛けている真理の体を後ろから抱き締めた。

真理は胸がドキドキした。自分から「恋愛」のセックスしようなどと言ってしまった物の、自分自身どうしたらいいのか分からない。

「なあ、真理。「恋愛」のセックスって、どうしたらいいんだろ」  
真理自身が思っていた事を正臣が聞いてきた。真理がボソツと答える。

「よく・・・わかんない」

「何で？」

「だって・・・正臣。そんな風に、してくれた事、ないし・・・」

「でも、お前、井関と・・・」

正臣はそこまで言って言葉を止めた。

言いたくない。口に出したくない事実。

一度でも、真理が違つ男に抱かれた事実。

「バカね・・・」

真理はちよつと困つたように笑つて、自分を抱き締める正臣の腕を抱きながら、彼を見上げた。

「朝の、あんなあわただしい時間に、何が出来ると思つての？迫られて。何かわたわたしてたら、終わつてたわ」

「そう・・・なのか？」

「・・・うん・・・」

真理は恥ずかしそうに頷いた。正臣は何となく胸の痞えが取れたような気がして、再び、今度は嬉しそうに、真理を抱きしめた。

「・・・ザマーミロ・・・」

「ん？何？」

「何でもない」

そう言つと、腕を回したまま真理の横に座り、そのまま唇を重ねた。

正臣の胸の中には、井関よりも上に立つた優越感ゆうえつかんが生まれていた。唇を重ねながら、ゆつくりと真理の服を脱がしていく。脱がせながら、正臣はちよつと指先が震えていることに気付いた。

思えば、こんなにゆつくり、優しく、女の服を脱がせたことはない。

「あのね・・・正臣・・・」

正臣が真理の唇を優しく舌でなぞる。

真理は吐息を吐くように、正臣に語りかけた。

「私も「恋愛」のセックス」なんて、よく解んないけど・・・でもね・・・」

正臣が一度強く真理の唇を吸い上げ、そしてまた触れなぞる様に唇を動かす。その動きは、あくまでも優しい。

「・・・相手の事を、想いながら」する」のが・・・それなんじゃないな

いかな・・・」

正臣はキスの間に一糸いっしまとわぬ姿にした真理を、優しくベッドの上に横たえた。

びくん・・・。

真理の体が小さく震える。

正臣の唇が首筋をなぞるたび、正臣の手が真理の体を撫なでるたび、真理の体は小さく震える。

意識している訳ではない。自然に震えてしまう。まるで、初めて抱かれる少女のように。

しかし、井関の時を除けば、真理は犯されるだけの、苦痛を伴ともなうセックスしか知らない。

自分を犯していたその手が、今、この上なく優しく、自分の体の上を彷徨さまよっている。

真理はとても幸せな気分だった。

正臣は包み込むように真理の胸に触れると、ゆっくり堪能たんのうするかのようもに揉み上げる。唇と舌が、もう片方の乳房の上で遊び、ピンク色の乳首を甘噛あまがみみした。

「・・・あつ・・・」

びくんっ・・・。真理の体が震え、その声が出た時、正臣は思わず手を止め顔を上げた。

真理の顔を見ると、真理は正臣から顔を逸そらすように横を向いて、両手で口を押さえている。薄暗い部屋の中でも分かるくらいに真っ赤になって。

「真理。感じた・・・？」

正臣の言葉に、真理は目を逸らしたまま小さく頷うなづいた。

思わず声が出てしまった。こんな事は初めてで、真理は恥ずかしくて恥ずかしくて堪たまらない。

正臣はそんな真理を見て、嬉しい気持ちが湧き上がって来る。

自分のしたこと、真理が感じてくれる事が、凄く嬉しい。

「真理……。手え、はずせよ……」

正臣は、自分で自分の口をふさいでいる真理の手を外させると、自分の手と重ね、グツと握った。

「俺。凄く嬉しい」

そう言っただけキスをする。嬉しい気持ちを隠せない。吸い付くような、ちよつと強いキス。

「正臣……」

真理は頬を赤くしたまま正臣を見詰めた。

正臣が「嬉しい」と言ってくれる事が、真理も凄く嬉しかった。

真理の両手を握ったまま、正臣の唇が再び胸の上を遊び始める。さつきと同じような刺激が与えられた。乳首を舐め上げ小刻みに転がす。

「……！」

真理が口をふさぐとした手は、正臣がつかんで離さない。

「……ま……さお……み……手……」

言葉を出すと、息が荒くなる。その間にも乳房への愛撫は続けられていた。

「手え……はなし……て……。ああつ！」

我慢の出来なくなった体が大きな声を上げる。真理は首を左右に振った。

「正臣……。ダメ、だよ……。手……手え、離し……。つ。あつ！んっ！」

正臣が手を離すと、真理は今更ながらに口をふさいだ。

「真理……。かわいい……」

正臣は真理の体を優しく抱きしめ、耳元で幸せそうに囁く。

「俺、女抱いて、こんなに嬉しいの……。初めてだ……」

真理も正臣の体に腕を回した。

「私も……。正臣に抱かれて嬉しいの、初めてだよ」

「真理……」

正臣が愛しそつに真理の名を呼ぶ。

さつきから何回目だろう……。

正臣の動きに合わせて、真理の体が揺れる。

息を荒く吐いて、体から自然に出そうになる声を抑えた。

今、一言でも、声を出せばきつと止まらなくなる。

そう思ってしまうくらい、真理は自分の体の変化に戸惑っていた。

正臣自信が真理の中に入ってくる時から、自分でも驚いてしまうくらい、感じ濡れているのが解った。

もちろん、いつものような痛感はまだたくない。

正臣もちょっと驚いたようだったが、それだけ真理が感じているのだと察し、嬉しそうに笑った。

「真理……」

しかし、正臣がちょっと強めに真理自信を貫いた瞬間、真理の防御は破られた。

「ああっ!!」

切なそうな高い声が部屋中に響いた。

そんな声を聞いてしまうと、正臣はもう堪らない。

正臣の動きが早くなる。深く深く、もっと真理を感じたいかのよつに、真理の体を貫いた。

「んっ!あっ……ああ!」

「真理……真理……感じる?」

「まさあ……み……っ。あっ!だめえ……!ああっ!!」

「真理……真理の中、すっげえ温かいよ……。感じてる?……真理……」

「うん。うん……。かん……じるよ……。あ!はああっ!!」

正臣の問いかける声は凄く幸せそうだった。真理は、普通でいたら恥ずかしくて答えられないような正臣の問いよりも、今自分の体に起こっている反応に付いて行くのに必死だった。

体がおかしい。自分の言う事をきかない。

「正臣……！ああっっ！！」

真理は助けを求めるかのように正臣の体にしがみ付いた。そんな真理の頭を撫でながら、正臣は幸せそうに笑った。

「かわいいよ……。真理……」

「まさおみい……」

自分にしがみ付いてくる真理を受け止めながら、正臣は、思いの全てを真理の中に吐き出した。

「これも、初めてだ……」

正臣が真理の肩を抱きながら、肩にかかった綺麗なストレートの髪をいじる。

「何？」

正臣の胸に頭を乗せて、真理が答えを求めた。

「したあと、さ。こうやって、いつまでも誰かの傍に居るの」

ベッドの中で真理を抱きしまたまま、正臣はさっきから真理を離さない。

「正臣。いつつも、すぐにどっか行っちゃってたもんね」

真理が思い出すようにクスツと笑って、正臣を見上げた。

「真理の傍なら……。ずっと居たい」

正臣が優しい目で自分を見ていて、ちょっとドキツとした。

「なあ、真理」

正臣が、思い出したようにちょっと身を起こして真理を見下ろした。

「これで、いいんだよな？」

「何？」

「「恋愛」のセックス」

真理は、正臣を見詰めたまま、こくんと頷いた。

「じゃあさ、お前、もう、井関と会わないよな」

「え？」

「俺、「恋愛」のセックス出来たから、もう井関に会うの止めるだろ？」

「……」

真理はすぐに返事が出来なかった。

しかし、目の前では正臣が必死な目をしている。

「うん……。会わないよ……」

そう答えると、正臣は子供のようになり、嬉しそうに真理に抱きついた。

真理は正臣の背中に腕を回して、今度は真理がお願い事をする。

「ねえ。正臣。……もう少ししたらでいいから、答え聞かせてね」

「ん？」

「正臣の気持ちがちやんと落ち着いてからでいいから。昨日の答え、聞かせてね」

昨日の答え。

正臣がずっと心の中に引っ掛けている、真理の問い。

私の事、好きなの？

22・「恋愛」のセックスしよう（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

しちゃいましたねえ……。

それも幸せモードで、しちゃいましたねえ……。

正臣は真理に心を許してくれたようです。

ただ、まだ真理には問題が残ってるんですね。

そう「先生」です。

先生も真理が好きですから……。

……でも、それはまた、後ほど……。

23・「ごめんなさい！先生！」

「俺、椎茸しいたけヤダ」

「何言ってるの。食べなよ」

「キレイだから、イヤなんだよ。真理食べよ」

「食べなさいっ。栄養あるんだからっ」

「他のモンで採るからいいって」

目の前で繰り広げられる姉弟の椎茸をめぐる攻防を、両親は信じられない思いで見ている。

特に正臣の父、正孝まさたかは、まるで物珍しい物でも見るかのように自分の息子を見ている。

・・・正臣が？・・・笑ってる・・・？

食卓で真理と喋りながら笑顔を見せている息子を見て、正孝は目を押しさえた。こんな風に楽しそうな正臣を見たのは、本当に10年以上ぶりだ・・・。

「どうしたんだよ。親父」

自分を見ながら泣きそうになっている父親に声を掛け、正臣はちよつと照れくさそうに頭を掻き、横目で真理を見た。

我ながら、はしゃぎ過ぎを感じたらしい。それは真理も思っていた。

真理はクスツと笑って

「正臣がいきなりそんなに楽しそうにしてるから。お父さんびっくりしてるんだよ。・・・はいつ、正臣。あーん」

箸で、正臣の皿の端に除けられた椎茸の薄切りを数枚取ると、正臣の口元に持っていった。

「な・・・何だよっ。それっ」

「食べなさいっ。お姉さんの命令だからね。はいつ、あーん」

「・・・」

仕方なく、その箸先に食い付いた。

彼的に言つなら、真理の言つことだから仕方なく。といった所だ  
った。

「ねえ、真理。正臣君さあ……」

夕食の後片付けをしていた母の真澄は、キッチンで食器を洗つて  
いる真理に、後ろから小声で声をかけた。

「いつもと様子が違うけど、何かあったの？」

……何か、あったよ……。心の中でそう返事をして、今日の  
事を思い出し、真理はポツと赤くなつてしまった。

結局あの後、正臣は夕方近くまで真理を離さなかつた。

「真理」。何度も名前を呼んでは、真理の体を抱きしめる。

自分に、泣く事を教えてくれた真理を。

自分の「太陽」を……。

「あら？真理、手が冷たいんじゃない？」

真澄が真理の手元を覗き込む。冷たい水で洗い物をしているのが  
気になつたようだ。

「んー？体あつたかいから大丈夫」

体温が高いから、という意味だつたのだが、そう言つてまたまた  
ポツと赤くなつてしまった。

正臣の体の温かさが、まだ真理の体にも残っている。

手の感触。唇の感触。重ねた体の感触。

思い出そうと思えば、すぐに体に蘇よみがえってくるくらい……。

「そうだ。ねえ、お母さん」

真理は話を逸そらすように、気になつていた事を訊きく事にした。

「正臣の部屋つて、入つたことある？」

「正臣君の？一度だけあるけど」

「どんなの？散らかつてて人に見せられない、とか？」

「ううん。ちゃんと片付いたお部屋よ。掃除も自分ですから触ら  
ないでくれつて、引つ越してくる前に言われてたくらい。……そ

うねえ、ああいうタイプの子のイメージとしては、ちゃんとし過ぎててビックリしたかな・・・」

「ふうん・・・」

散らかってるから入られたくない、訳ではないんだ・・・。

「お母さんね・・・」

真澄は真理の横で、洗い終わった皿を拭き始めた。

「正臣君みたいなタイプの子と姉弟になって、真理は大丈夫かな、って、結婚前から思ってた。でもね、正臣君にお部屋を見せてもらった時、「大丈夫かもしれない。きちんとしてる子なのかもしれない」って思ったの。・・・まあ、ちよつと、大変な目に遭っちゃったけどね・・・」

最後のほうの台詞は、声が小さく辛そうだった。

「大丈夫かもしれない」そう思った少年が、自分の娘を犯したという事実は、母親の胸から消えない。

たとえ娘が「大丈夫」と言い、その少年の様子が良い方向に変わって来ているとしても。

「真理・・・」

真澄は、横で自分を見る娘の頭を撫でた。

「頑張ったね・・・」

「・・・会えない・・・って。どうして・・・」

井関は驚いたように真理を見た。

いつもの放課後。いつもの風紀委員室。

朝も時間はあったが、避けて行かず、放課後に顔を出すと先に井関が来て待っていた。

朝、顔を出さなかったのを責める訳でもなく、相変わらず優しく接してくれる井関を見ると、真理は胸が痛くなった。

「井関と会うのやめるよな」正臣の必死な目と声が、真理の中から離れない。

やっと自分に心を開いてくれているような感じになっている。それを守る為には、真理は井関に会ってはいけないのだ。

だから井関に言った。「もうここには来ない。会えない」と。

「気にしてるのか？立花が僕を殴った事。君といたら、立花がまた僕に何かする。とても思ってるのか？」

それもある。

正臣に何も言わず井関に会っていたりすれば、正臣は間違いなくまた井関に嫌がらせをするだろう。

「僕は、そんな事気にしない。そんな事より・・・」

井関は真理の両腕をつかんだ。

「・・・真理とこうして、会えなくなる方が辛い」

真理は自分を見詰める井関の顔を、切ない思いで見詰めた。

井関が必死に自分を見詰める目が、正臣が必死で「井関と会うな」といった時の目と重なる。

井関がどれだけ自分のことを思ってくれているかが、痛いほど解る。

「・・・立花が、何か言ったのか？」

井関の眉が寄った。

「また立花に乱暴されて脅されたのか？だから、そんな事」

「違うの・・・先生・・・」

「だから、会えない、なんて・・・」

「違うよ先生。正臣はそんな子じゃないよ！」

思わず正臣を庇う。井関が驚いた顔をする。

正臣の事情を知らない彼にしてみれば、驚くのは当たり前だ。

自分に乱暴して、仲間に襲わせ、嫌がらせをしていた男を、どうして庇うのか・・・と。

「真理・・・君は・・・」

井関が真理の腕をつかむ手に力を入れた。

「君は・・・立花が好きなのか？」

「先生？」

「立花のことが好きなのか？あいつは君に酷い事をしてたんだぞ。それに、それに仮にも義理であつても弟だろう？！」

「違つよ先生！私は、先生が……！」

真理はそれ以上言葉が出なかつた。いや、出せなかつた。

……先生が……？……何……？真理は自分の言葉に驚く。そして、その言葉を何故繋げなかつたのか不思議に思う。

確かに井関の事は好きだ。

正臣に酷い仕打ちを毎日のように受けて辛くて苦しかつた時、ただ一人真理のことを分かつて優しく接してくれた。

真理を好きだと言い、真理の心の安らぎになつていた。

……この「好き」は、「恋愛」の「好き」なんだろうか……。真理は昨日の正臣の事を思い出した。

泣いている正臣を抱きしめていた時、真理は正臣を愛しいと思つた。

正臣に抱かれていた時、幸せで堪らなかつた。

……私は……正臣が……。

「真理！」

井関が真理を抱きしめた。

「……せんせ……ごめんなさい……私！」

「どうして？納得できない！」

「ごめんなさい！先生！」

正臣の為にも、もう会えない！

ガラツ！いきなりドアが開いた！驚いた2人が、ぱつと離れる。

「先生？先輩？……何やってんですか？」

風紀委員の2年生の女子が3人、そこに立っていた。

「びつくりしたあ。抱き合つてたよね。あれ。絶対」

女子生徒が3人、コソコソするように話している。

「先生と日野先輩って、何か仲良いところあつたけど、やっぱり……」

・って感じ」

「でも日野先輩って、アレでしょ？ほら・・・立花正臣と・・・」

「本当なの？その噂って」

「本当らしーよお」

「大人しそうな真面目な先輩だと思ってたのに。凄いよねえ。義理の弟の次は先生よ」

歩きながら、自分達だけのつもりで話す女子生徒の話しを、彼は、いつもの茂みの陰で聞いていた。

「会わない、って・・・言っただよな・・・真理・・・」

正臣が、煙草の煙を吐いた。

23・「ごめんなさい！先生！」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

ちよつと、アットホームな所から始めてみました。

立花家は平和になりかかっています。真理と先生はちよつと微妙にマズイ感じですよ。

会つた事を耳にした正臣も黙ってはいません。

次回、先生が立場上ピンチに立たされます。

先生と生徒ですからねえ。。。

。。。でもそれはまた、後ほど。。。

24・「裏切るなよ」

「真理、携帯貸せよ」

出掛けていたらしく、真理が学校から帰って30分後に正臣は帰ってきた。

一応、自宅謹慎じたくきんしんを受けているので、本当は家に居なければならぬのだが、両親ないしよに内緒ないしよにしている手前、朝一応家を出て行った。それから帰って来てはいなかったらしい。

帰ってきてすぐ、部屋に居る真理の所へ来たとたんそう言った。

「携帯？何するの？」

不思議に思いながら正臣に携帯を渡すと、正臣は何か操作を仕出した。

「何してるの？」

正臣は答えない。ただひたすら携帯のボタンを押している。

仕方が無いので、真理は別の事を訊きく事にした。

「正臣、今日、どこに行ってたの？」

「学校」

「え？」

「暇だからよ。達也達とフケてたら、生徒指導の佐藤に見つかってよお。あいつ、竹刀でぶつたたくんだぜ。暴力教師にもほどがあるよな」

「だって正臣。自宅謹慎じたくきんしんって言われてるんだもん。しょうがないじゃない」

「あ、月曜から、学校行ってもいいらしいぜ」

「本当？」

「んー。なんかしらねーけど、井関の奴が佐藤に頼み込んだんだよ。謹慎と処分を解といてくれ。って」

「……」

真理は言葉が出なかった。まさか、井関がそんな事をしてると

は思わなかったのだ。

それが、自分のクラスの生徒の為の物なのか、真理が気にしないようにと、真理を思ってしまったことなのかは解らない。しかし真理は、今日あの後、井関から逃げるように帰ってきてしまったことを少し後悔した。

電話で、御礼だけでも言おうかな……。

「これでよし。そらよ」

何が「よし」なのか解らないが、正臣は真理の携帯を投げてよこした。落としそうになりながら真理が受け取る。

「俺の番号入れといた。短縮1番な」

「あ……うん」

そういえば、一緒に居るのに正臣の番号を知らない事に今更ながら気付いた。

「でも正臣。短縮1番って自宅番号の筈なんだけど」

「いいじゃん。自宅なんて登録しなくても。真理、真面目すぎ。あ、それとな……」

腰に手を当てて、真理の顔を覗き込むように見下ろす。必要以上に顔が近付き、真理はドキツとした。

「井関の番号。消しといたからな。メルアドも」

真理の、携帯を持つ手がピクツと震えた。

「着信履歴も、全部消した。ついでに、着信拒否にしといた」

「……そこまで……」

「もう、必要ないだろ」

そこまでしなくても。そう言おうとした言葉を正臣が遮る。

「それに……。今日、井関に会ってたんだった？おしゃべりな2年が話してたぞ。2人っきりのところ見たって」

「……」

「真理。会わない。って、言ったよな」

ちよっと怒るように正臣の眉が寄った。真理は誤魔化す様に、必要以上に近づいている正臣の唇に、人差し指を当てた。

「だって。会わないと「もう、会えません」って、言えないでしょ？」

にこっと笑う。

「「もう、ここには来れません」って言いに行っただけ。2年生の子達はその時に来たのよ」

「・・・抱き合ってた、って、言ってた・・・」

「見間違いよ・・・腕をつかまれてたから」

正臣は唇にあてられた真理の指を避けると、そのまま自分を見上げる真理にキスをした。

「本当だよな」

「本当よ」

そのまま真理を抱きしめる。

「良かった・・・」

子供のように嬉しそうな声を出す。真理はクスツと笑った。

「正臣は、やきもちやきね」

「なんだよ。それ」

真理の体に腕を回したまま、正臣が真理の顔を見る。ちよっと顔が赤い。

「私は「どこにも行かない」って、言っただでしょ？」

真理は正臣の両頬に手を当てた。外から戻ったばかりで、まだ頬が冷たい。

「太陽は、月の傍にいるよ・・・。いつも・・・」

「・・・裏切るなよ・・・」

ちよっと厳しい顔でそう言う正臣の前髪を避けて、今度は真理のほうからキスをした。

「裏切るなよ」

その温かい唇を感じながら、正臣はもう一度繰り返した。

井関はその日一日、落ち着かなかった。

早めに学校に来て校門前に立ったが、それよりも早く来てるのか、最後まで真理の姿は見当たらなかった。おまけに、心なしか通り過ぎる生徒が自分のほうをチラチラ見ていく。

「生徒に殴られた先生」のせいかな……。と思いながら、ちょっと情け無い気分になった。

立花の謹慎きんしんを解いてくれるように、佐藤主任に必死で頼んだ。それだって、真理に余計な心配をさせないためだったのに……。

「真理……」

思わず口から出てしまい、誰かに聞かれなかったかと、慌てて左右を見回した。

幸運な事に、職員室には、自分と数名の教師しかおらず、自分の席の周りには誰も居ない。今は授業中で、井関はちょうど自分の授業が無い空き時間だった。

放課後、風紀委員室に行ってみようか……。でも、真理は来るだろうか？

今日は金曜日。今日会えなければ、また2日空いてしまう。正臣が「着信拒否設定」をしてしまった事など何も知らない井関は、昨日何度も真理の携帯に電話をしたが、一向に通じなかった。

自分自身、こんなにも真理を好きになるなど思ってもいなかった。教師になった時からずっと、気になり続けていた女の子。

「教師だから」と、その想いは胸にしまい続けていた筈なのに。真理が正臣にされた仕打ちを知って、その鍵は外れた。

真理を助けてあげたい。笑顔を取り戻してあげたい。そして、真理を自分の腕の中に感じるようになってからは、誰にも渡したくない、と思うようになった。

なのに、よりによって「恋敵」が義理の弟とはね……。

井関が小さく溜息をついた時、誰かがポンツと彼の肩を叩いた。

「井関君。ちよつといいかい」

生徒指導部主任の佐藤だった。

「実は、変な噂が今日の朝から流れているのを知っているかな？」

佐藤は、職員室の奥にある応接セットのソファにどかっと座った。井関にも、座るようにと指で示す。

「何ですか？」

「君が、3年の日野真理と「デキテル」って話した」

佐藤のストレートな言い方に、向かいの椅子に腰を下ろそうとしていた井関の動きが止まった。

「噂の出所は2年生らしいぞ。何だか君たち2人が抱き合っているのを見たとか見ないとか。それ以外にも、毎朝校門前で2人でコソコソ話をしていておかしかった。とか。まあ、色々と言われている様だな」

チラツと鋭い目で、井関を下から見上げる。

「井関君。君は優秀な教師だと思うよ。あの問題児の馬鹿どもが居るクラスをちゃんとまとめ上げている。若いのに風紀顧問ふうきかんもんもしつかり務めてつといるし。私としては、下手な問題を起こして君の教師としての経歴に泥を塗って欲しくはない」

「どついう事でしょうか・・・」

「人の、惚れたはれた、にとやかく言いたくは無いがね。「生徒」はマズイ、という事だ。・・・解るだろ？」

佐藤は、返事をしない井関を見ながら、パンツと自分の両膝むちを叩いた。

「まっ。君も子供じゃないんだから。よく考えなさい」

そう言って立ち上がると、さっさと歩いて行ってしまった。

後に残された井関は、誰も居なくなつたソファをただ見詰めながら小さく頭を振った。

真理。

僕は、君を好きでいちゃいけないのか・・・？



24・「裏切るなよ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

井関先生が悩み始めました。

釘を刺されてしまいました。このまま会わないでいるなんて事が出来るのでしょうか？

正臣は小さい頃に大好きな母親に「裏切られて」

心を閉ざした子なので「裏切る」という事に凄く敏感です。

その傷に触れないように、うまくこの三角関係を、真理は解決できるでしょうか？

・・・それはまた、後ほど・・・。

25・「噂って何だよ」

「失礼します。井関先生はいらっしゃいますか」  
そう言つて職員室に入ったとたん、お目当ての人間と目が合い、  
真理は一瞬ひるんだ。

職員室の前扉を開けると、ちょうどドアが一番近い所に井関の机がある。おまけにクラスの生徒2人がプリントを配るように指示されていたらしく、入った途端に3人の注目を浴びてしまった。

「真……日野。どうした？」

思わず「真理」と呼びそうになってしまい、慌てて呼びかえる。

が、顔が何となく嬉しそうな笑顔を作つてしまい、クラスの生徒がいる手前、咳払いで誤魔化した。

「あ、すいません。そちらの用事が終わつてからで」

「いいよ。もう終わったから。じゃあ、お前たち頼むな」

生徒2人は「はい」と返事をして、プリントを持って真理の横を通り過ぎた。すれ違いざま「やーね、こんな所で」という声が聞こえたが、何のことが解らない真理は気にも止めなかった。

井関と真理の噂は、今日2年生の間で広まり始めた。3年生に広まるのも時間の問題かもしれない。

真理は横向きに座る井関の前に立つと、深々と頭を下げた。

「井関先生。弟の謹慎の件で、佐藤先生に口添えして頂いて、有難うございます」

どこかよそよそしい口調。井関はちょっと寂しそうに笑った。

「そんな事、後でも良かったのに」

「あ……私、もう……」

「後でいつもの所で」の意味だった事に気付いた真理は、もう行かない事を再度言おうと思つたが、昼休みの職員室。周りに人が沢山要るのが気になって、言い出せなかった。

「今日は、風紀委員長、としての「仕事」があるからね」

井関は切り札を出す。

「週の遅刻者の集計。委員長の仕事だろ？」

「あ……」

そうだった。今日は金曜日。嫌でも風紀委員室に行かなければならない。

「来てくれるだろ？」

ただでさえ真理は責任感の強い子だ。「いけない」とは言えない。委員長としての自分の仕事がある。

「解りました」

真理がためらいながらそう答えると、井関は微妙な笑顔を作った。

「噂？<sup>うわさ</sup>真理と？井関が？」

健の話に、正臣は面白く無さそうな声を出した。

昼過ぎのアミューズメントパーク。客層として、学生風な者から社会人風な者まで。始終色んな人間が出入りしている。

彼らのように学校をサボって溜まるには丁度いい<sup>ちょうど</sup>。

「噂って何だよ」

カフェオレの缶を少し振って口を開ける。紅茶メーカーで出している少し甘めのカフェオレ。真理が見たら「また正臣って甘い物飲んでる」と笑われそうだと、思いながら……。

「今日の朝から。まあ、2年の間でツスけどねー」

「あ、オレもそれ聞いた」

健の赤い髪に、ふざけて黒髪用スプレーを掛けながら秋光が口を出した。「やめっつーの」と言って、健がスプレーを取り上げる。

「井関と正臣のネーチャンがデキテルって。特に女の間で広まってさ。女って、そういう話し好きだろ。ネーチャンが井関とデキちゃったから、正臣が井関を殴った、って所まで話しは出来てたな」「なんだよそれ。俺すっげー可哀想な男みたいじゃん」

ジュースの自動販売機の横の壁に寄り掛かり、正臣は不満そうだ。

と、最後まで何にするか悩んでいた達也が、結局いつも通りコーラのボタンを押してニヤニヤしながら正臣を見た。

「でよお、実際のところ、正臣、ネーチャンとどうなんだよ？犯<sup>ち</sup>つてんの？」

達也としてはもちろん「無理矢理」の意味で言ったのだが、正臣はその言葉にちよつと照れたように笑った。

「まあな・・・」

そんな正臣の顔を見たのは初めてで、他の3人は目をぱちくりさせた。

「遅刻、少し減りましたね」

週の遅刻者の集計を取りながら、真理は急ぐように用紙にペンを走らせた。井関には申し訳ないが早めにここを出よう。そんな気持ちだった。長くいれば、また昨日みたいなやり取りの繰り返しになってしまう。そう思ったのだ。

「1、2年の君の信者が頑張ったんだよ。引き継ぐまでは、君に委員長でいて欲しいらしい」

真理はペンを止めた。進学や就職活動で忙しくなる3年役員は2学期中に引退する。3年生である自分の役割もそろそろ終わり。後を1、2年生に引き継がなければならない。

「真理は、看護<sup>かんご</sup>学校に行くんだっけ」

井関が、真理が集計をしている会議用の長机に手を付いた。

「はい・・・お母さんと同じ仕事がしたいんで・・・」

真理は顔を上げない。ひたすらペンを走らせる。

「真理は優しいから、向いてるよな。家も病院だし」

井関の優しい声が頭の上で聞こえる。今顔を上げたら、今また井関の優しい顔を見てしまったら、自分はまた迷ってしまう。そう思った真理はひたすら仕事を続けた。

「真理。卒業したら、また会ってくれるかい？」

予想だにしない井関の言葉に、真理が思わず顔を上げる。やっと顔を上げた真理を見て、井関は笑った。

「立花に、僕に会うな、って、言われてるんだろ？」

正臣はおそらく真理の事が好きだ。井関はそう思っている。

しかし、真理がどうなのかが気になるどころだった。

「僕は君が悲しむ顔は見たくないんだ。君が困ってるって言うなら、こうして会うのは止めよう。僕は我慢するよ。でも、卒業したら、普通に会ってくれるかい？」

「先生……」

「そのかわり、辛い事とか、助けが欲しい事とかあったら、必ず僕に相談してくれ。約束だよ」

真理は井関の顔を見ながら立ち上がった。

自分が辛かった時、悲しかった時、助けてくれた人がそこにいる。笑えなくなるほど傷ついた真理に、「笑って欲しいんだ」と言つて、抱きしめてくれた人がそこにいる。

「先生……。ありがとう……」

その時、風紀委員室のドアが、音もなく小さく開いた。二人はそれに気付かない。

こんなに優しくしてくれた人を、私は無下に引き離そうとしていたんだ……。

真理が泣きそうな顔をしているのを見て、井関は机を回って真理の横に立ち、頭を撫でた。

「泣くんじゃない。僕は真理を泣かせるために言ったんじゃないぞ」  
「……先生……」

耳を澄ますと、小さく開いたドアの隙間から、他に物音がない部屋の中で話す声が小さく聞こえてくる。

「先生……ごめんなさい……」

井関は自分を見上げる真理を見詰めた。

大きな瞳が涙で潤んで、とても綺麗に見える。

「真理。笑って」

そう言つて、真理にキスをする。真理もそれを受け入れた。

「僕は、真理の「太陽みたいな笑顔」が大好きなんだから」

ドアを小さく開け、押さえていた手がピクツと震えた。

隙間から2人の姿が見える。

「好きだよ」

井関はそう言つて真理を抱きしめた。真理も井関の背中に腕を回す。

いつか・・・正臣がちゃんと落ち着いてくれたら、先生にも正臣の事をキチンと話そう。そう思った。

風紀委員室のドアが音もなく閉まる。

開いた事も、閉まつた事も、二人は知らない。

恋人同士のような2人の姿を、ブロンズ系の金髪にグレーのメッシュ。180センチ近い背の高い少年が見ていたことを。

誰も知らない。

25・「噂って何だよ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

井関先生は大人ですね！。

優しい人だなーって、書いてて思います。

でも、こういう優しい人が、本当に追い詰められた時、  
どうなっちゃうんでしょう……。

2人を見てたのは……。

言わなくても解りますよね。

三角関係は解決……？

さあ？どうでしょう？

ではまた、次の話しで……。

26・「俺だけのものでいいんだろ」（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。

苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は  
その場面にきたらとばすなど。してください。

R - 15 指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

26・「俺だけのものでいいんだろ」

「あつ……指、ダメ……」

真理は切ない声を上げて、自分の中で指を暴れさせている正臣の手を押さえた。

「ダ……あつ……メえ……」

中指だけならともかく、人差し指まで入り込んできた。まだ潤みきつていなかったその部分に、ちよつと押されるような苦しさがもたらされる。

「いた……正臣、ちよつと、いたい……」

真理の言葉を、正臣はまるで聞いていないかのように、更に指を奥へ差し入れた。

「ああつ!!」

喉が仰け反り、正臣の腕をつかんだ手に力がこもる。

「正臣……」

息が荒くなる。今日は、何かおかしい……。と、真理は思った。

「恋愛」のセックスが出来てから、正臣は毎日のように真理を求めてくる。セックスをしていること自体は以前と変わらないが、やっぱり「無理矢理」の時とは気持ちも体も全然違った。

「入れるぞ……」

正臣は指を引き抜くと、真理の両足を折り曲げて抱えるような体勢で、真理の中へ入ってきた。

「あつ!はあ……っつ!!」

あまり大きな声が出ないように口元を押さえるが、それは無駄な抵抗に終わる。

正臣がいきなり最初から深く突くように入ってきて、一瞬下半身が引きつり、真理の背が反り返った。

「アアツ!ダメ……やつ!奥……だめ……」

深く深く、子宮の奥まで突かれる様な感覚に、真理の体が痺れた。

「まさおみ……だめえ……」

本当に辛そうな真理の顔を見て、正臣の動きが止まり、抱え込んでいた足を離す。

「……ごめん、真理。……辛かった……？」

真理の赤くなつた頬を撫でる。

「ちよつとだけ……」

真理は正臣の前髪を横によけながら、小声で答えた。

正臣の綺麗な目が、自分を愛しそうに見ている。

前髪、もし少し切ればいいのに……。

正臣はその目を細めて笑うと、今度はゆつくりと腰を動かし始めた。

……今日は、どこかおかしい……。

正臣が真理に心を許し、「恋愛」セックスをするようになって1週間ほど経つが、今日の正臣はどこかおかしい。と、真理は思った。

いつもより、抱き方が、乱暴な気がする……。

「ああ、はっあ……ああ……」

大きな声が出てしまいそうになるのを必死で抑える。

いくら夜中とはいえ、下の階には両親も居る。

正臣は真理の中で動きながら、必死で声を出さないようにしている。真理の唇に唇を重ね、激しく舌を絡めた。

片手で真理の胸をつかみ揉み上げる。

「んっ……！ハア……あっ、っっ……！」

新しい刺激が加えられた体に、快感が重ねられる。

真理は、重なった唇の端からとめどなく吐息を漏らした。

「真理……きもち、いい……？」

「ハア……うん、あっ！きもち、いい、よ……あんっ……！」

「俺……も……イキそ……」

真理の中が妙に自分を締め付けてくる。真理もイキそうになっている事を感じると、正臣は奥を擦り付けるように動いた。

「いやあ！ああ、ダメ、まさおみ……あぁっ……！」

「真理、そんな、しめんなって……。俺、も、ダメ……。」「あああつっ！！」

息を大きく吐くように、真理が最後の声を上げる。そして、正臣の動きも止まった。

「ム力つくんだよな……。」「

火照った体を冷ますどころか、これでは冷めないのではないかと  
いうくらい、ベッドの中で真理の体を抱きしめながら、正臣は不満  
を口にした。

「何が？」「

「あの噂。何とかなんねーの？」「

「うわさ？」「

真理は、あつ、と気付いた。今週に入ってから、真理と井関が付  
き合っているのではないかという噂が広まっている。

先週2年生に見られてしまった時、少し覚悟はしていたので、噂  
を耳にした真理はさほど慌てなかった。

井関も同じらしく、特に変わった感じはない。

今週に入って、朝、校門前で会っても、普通に挨拶をするだけ。

特に話し込むようなこともしない。

「なんかよお、俺のこと、かわいそーな目で見ていく奴とか居るん  
だよな。かと思ったら、ザマーミ口みたいな顔する奴も居るし……」

前から囁かれていた、正臣と真理の関係についての噂話。そこに  
井関が入り込み、素行的そこてきにあまり宜しくない正臣から、井関が真理  
を助けた……。などという話になっているらしい。

「今週に入ってずっとだろ。今日辺りム力ついてしょうがなくてよ  
お……」

だから抱き方が乱暴だったのかな……。

真理は正臣の胸に頭を寄せたまま、正臣を見上げた。

「気にしないの。噂なんて、いつか無くなるわ。皆最初は面白がつてるだけ」

「ご機嫌治して。とでも言うように、真理がにっこり笑った。

「太陽の笑顔」こうやって笑うと、正臣も笑い返してくれる。真理はその事に最近気付いた。

正臣は微笑むように笑うと、真理の少々乱れたストレートの髪を撫でた。

「まあ、真理」

「何？」

「それは、俺だけの」笑顔だよな・・・」

ん？つと、真理は問いかけるように小首を傾げた。

「お前。俺の「太陽」になっってくれるって言ったる。だから、お前の笑顔は、俺だけのものでいいんだろ？」

真理は体を起こすと、ベッドに手をつけて正臣を見下ろした。

「私は、正臣の「太陽」になる、って、決めたの・・・。だから・・・正臣のもので、いいんだよ」

「「笑顔」だけじゃなくてか？」

「え？」

聞き返そうとした真理を、正臣は腕を伸ばして抱きしめた。覆い被さる様に腕の中へ入ってきた体を、隠すように抱き込む。

「俺だけのものでいいんだろ・・・」

「大丈夫でしたか？井関先生」

2年2組副担任の川村が、心配そうに井関に声を掛けた。

「え？あ、まあ」

金曜日、朝の職員室。井関は曖昧な返事を返し、自分の席に座った。

井関は風紀顧問としての仕事があるので、毎朝早めに来る。今日、出勤した早々に、教頭室に呼ばれた。

「生徒と付き合っている」そんな噂が教頭の耳にも入り、**嚴重注**意を受けたのだ。しかも一緒に生徒指導の佐藤主任付だ。

真理とは、自分が新任でこの高校に来てから、ずっと一緒に風紀委員に携たずなわってきた。気心の知れた生徒ではあるが、それ以上ではない。親が再婚して、色々悩みを聞いてあげていた事があるので、そういう場面を見た生徒が誤解したのだろう。・・・と、一応は説明をした。しかし、

井関は溜息をついた。

佐藤主任は、納得してないみたいだったな・・・。

生徒達には話しのサカナにされ、主任には目を付けられ、教頭には怒られ、か・・・。

考えれば考えるほど、自分の気持ちが落ち込んでくる。

こんなに落ち込んだのは、久しぶりだ・・・。

前は、そうだ、新任で来て2年目の、一人で手掛ける風紀顧問としての委員会の時。・・・でも、あの時は・・・。

頭の中に、真理の笑顔が思い浮かんだ。

先生。一緒に頑張りましょうね。

真理が・・・真理の笑顔が助けてくれた・・・。

井関は頭を抱えた。真理の為とはいえ、「会うのをやめる」と言った事を、ちよつと後悔した。

・・・まいったな・・・。

26・「俺だけのものでいいんだろ」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

真理と正臣はいい感じですね。でも・・・何か正臣は胸に一考ありそう・・・？

参ってきたのは井関先生。

やっぱり、大人には大人の、立場、つてものがありますから。

自分の立場と、真理への想いで潰れてしまうのは、井関先生？  
それとも・・・。

それは、次回のお話で。

27・「何やってんの？真理」

「おい、お前」

そう話しかけられた瞬間、彼は息が止まるかと思った。

金曜日の朝から、まるで悪夢を見ている気分だった。

大体、何故自分が声を掛けられたのかが解らない。

目に前に居る。学校の問題児であり、同じクラスの立花正臣たちばなまことおみに。

「な、何？」

根本は上擦ねもとる声で答えた。ほかの仲間は一緒ではないが、正臣一人だけでも充分に迫力がある。

ここは、教室前の廊下の真ん中。通り過ぎる2年生やクラスメイ卜達は、関わりたくないとはかりに早足で通り過ぎる。

「お前よお、確か風紀委員だったよな」

「・・・そ・・・そうだけど・・・」

もしかして以前、真理に対して委員会で文句を付けたのを知られて、それで、報復ほうふくにでも来たのではないか。何と言っても「元祖・噂の2人」だ。根本はそう思い、冷や汗が出て来た。

「今日の放課後。用事あるか？」

「え？」

「失礼します」

こそつと言って、風紀委員室に入る。しかし中には誰も居なかった。

気を使って、来ないかもしれない・・・。

真理はそう思うと、スチール棚から今週分の遅刻者チェック表を出し、集計表を持って窓側に置かれた長机の前に座った。

金曜日は集計をしなければならぬ。どうしようかと迷ったが、自分の仕事だ。

井関の様子も気になったので、放課後になつて風紀委員室に来た。しかし中に井関は居なかつた。

しかし、真理が曜日ごとにチェック表を揃<sup>そろ</sup>えて集計を始めようとすると、部屋のドアが開き井関が入ってきた。

「真理。来てくれてたんだ」

井関が笑顔を作る。が、その笑顔はどこか元気が無い。

「はい。仕事ですから。・・・先生、どうしたんですか？」

「何がだい？」

「・・・元気、ないみたい」

机の上で、チェック表をトントンと揃える。そして、井関を見上げ、にこつと笑つた。

「元気出してください」

多分、噂の件で、ちよつと参つてるんだ。先生は、生徒である私とは違う。先生の立場つて云う物が有るだろうから。

そう思うと、井関に悪い事をしているような気がする。

真理は井関に笑いかけたまま、彼の顔を見詰めた。しかしその笑顔を見て、井関は堪<sup>たま</sup>らなく切なくなつた。

真理が自分に向けた「太陽の笑顔」は、今の自分にとってあまりにも切な過ぎる。

「真理」

井関は思わず真理を抱き締めた。

「先生？」

真理の手からチェック表が落ちる。

「真理・・・」

「また誰かに見られたらどうするんですか？」そう言って引き離すことも出来た。しかし、今の井関は、真理がそれを言えないくらい見た目にも辛そうだった。

「先生・・・。大丈夫？」

真理は気遣うように声をかけ、少し体を離して井関の顔を見上げた。少し顔色が悪いような気がする。

「真理の笑顔を見たら、少し元気が出たよ」

そう言われて、真理はもう一度にこつと笑った。すると井関も、真理に笑い返す。

「真理」

井関は、真理の体に腕を回したまま顔を近づけた。軽く唇が触れた……その時。

「……何やってんの？」

突然声がして、2人はハツと声のした方を向いた。

「何やってんの？真理」

いつの間にか開け放たれたドアを足で押さえ、正臣がそこに居た。

「まって……正臣、ちょっと……」

真理は早足で歩いて行く歩調についていけず、転びそうになりながら、正臣の後を駆ける様に足を進めた。

自分の手を引きながら、無口で歩いて行く正臣。

いつかもこんな事が有った。あの時もやっぱり、正臣が井関の元から真理を引き離れた時だ。

今日が金曜日で、放課後、真理が風紀委員室に行くことが解っていた正臣は、同じクラスの風紀委員である根本に白羽の矢を立てた。

「集計ならコイツにやらせるよ」そう言って、連れて行った根本を部屋の中へ入れると、無言で真理の手を引いて部屋を出たのだ。

そして今、2人で帰りの家路に付いた訳だが……。

「正臣おねがい……ちょっと、まって……」

真理は正臣のペースに付いて行くのがやっとだ。ほとんど走っている様な物だが、正臣が手をつかんだままなので止まる事も出来ない。以前の時と違うのは、この帰り道で、正臣が真理にあわせて歩くという優しさが無いという所か。

立花小児科医院の看板が見え始めた時、いきなり正臣がぴたっと止まった。正臣の背中にぶつかるように真理の足も止まる。

「まさ・・・おみ？」

まるで走った後の様に、真理は息が切れて苦しかった。走る様な歩く様な変な歩き方をしたせいか、足がつつた様に痛い。

「何やってんの？真理」

正臣は真理の手を引いたまま、今度はゆっくりと歩き出した。

自分の後ろを歩く真理を振り返る事も無く、静かな声でもう一度問いかける。

「何やってんの？真理」

「正臣・・・あのね・・・」

キスしそうになつていたところを見られた。抱き締められたところを見られた。いったい正臣はいつから見ていたのか。

「お前。先週も同じ事やってたよな」

ピクツ。真理の手の震えが、つないでいる正臣の手にも伝わる。

正臣・・・。見てた？

「井関は、お前の笑顔が好きらしいな。お前も井関にちゃんと笑いかけてやるもんな」

「正臣、あのね」

「先週だけなら、今生しんごうの別れと思って見逃したのに・・・」

「正臣・・・」

正臣の声が怒っている様に低くなっていく。真理は言い訳をしようとするが、何をどう言っても良いのか解らなかった。

抱き締められた事も、キスしそうになつていた事も事実だ。

真理の手を離し、正臣は家の門を開けた。

「正臣。あのね、私は、委員長としての仕事をする為にあそこに行ったのよ。会いに行った訳じゃないの・・・」

振り向かない正臣の後ろに付いて門の中へ入る。正臣は家の鍵を開けドアを開くと、少し振り返ってチラッと真理を見た。

真理の体がピクツと震えた。

その目は、以前までの正臣の目。

冷たく、人を嘲あざわらむ目。

「・・・俺だけのものだ・・・って、お前、言ったよな」

「正臣・・・」

正臣は離れた手をもう一度つかむと、思いつき真理の手を引き、家の中へ突き飛ばした！

廊下に真理の体が投げ出され、崩れた体勢から起き上がろうとした真理を、正臣はそのまま冷たい床に押し付ける。

そしてその体の上に押し掛かると、いきなり制服のスカートを捲り上げた！

「・・・正臣?! やっ・・・!」

真理の体の中に、以前までの恐怖が蘇る。

これじゃあ、前までと同じ・・・!

「やめて! 正臣!!!」

真理は必死で叫んだ。すると、正臣の手が止まり体が離れた。そのまま真理に背を向け、立ち上がる。

「・・・正臣・・・」

真理は体を起こし、手を伸ばして正臣に触れようとした。

「裏切ったのか・・・」

その言葉に、真理の手が止まる。

「裏切ったのか?! 真理!」

正臣?!!

27・「何やってんの？真理」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

一度ならず二度までも。

正臣にしてみたら、そんな気持ちでしょうか？  
さすがに二度目は見逃せなかったようです。

真理に裏切られたと思い込んだ正臣。

ちよつと様子がおかしくなっていました。

真理はどうする？

それは、次回。

「正臣君、今日は帰ってこないのかしら」

真澄が、正孝の前にコーヒーを置きながら言った。

「あいつだつて、たまには友達と付き合ひがあるだろう？最近ずっと家に居たんだ。いいじゃないか。たまに」

正孝が嬉しそうに笑う。最近笑顔を見せるようになって来た息子の存在が、彼は嬉しくて堪らなかつた。

自分のせいで、息子が心に傷を残す過去を作ってしまった。

ずっとそう思い込んでいた彼は、その事を真理に話した直後から、少しずつ息子が変わり始めたのに気付いた。

正臣を変えてくれたのは、真理ちゃんなのかもしれないな。

正孝は、今タオルを頭から被つて、パジャマ姿でバスルームから出て来た真理に目を向けた。

あの子には、凄く酷い思いをさせてしまったが……。

自分の息子が真理にしていた事を知った時のショックは、今でも忘れない。

「ねえ、真理」

真澄は、冷蔵庫から湯上りの一杯（と言っても牛乳）を出している真理に声を掛けた。真理がダイニングテーブルに置いたコップに牛乳を注ぎながら「何？」と訊く。

「正臣君、今日帰って来るって言ってた？」

ぴくつ。手が大きく震え、牛乳の白い滝がコップからはみ出した。「あら。何やってるの」

しょうがないわね、とでも言うように、真澄が布巾でテーブルを拭く。

真理はコップの牛乳を半分飲むと、極力普通の声で答えた。

「わかんない……。帰ってきて、すぐ何も言わないで出掛けちゃったから……」

「そう？まあ、鍵は持つてるだろうから、チェーンだけ外しておけばいいかしら」

そう言っつて、牛乳で汚れた布巾を洗いに行く。

「裏切ったのか真理！」真理の脳裏に、今日の正臣の言葉が蘇よみがえつた。正臣はそう言っつた後、真理の言葉も聞かず家を飛び出して行っつてしまった。

私が、悪かつたんだ……。

真理はコップを口に付けたまま、小さな溜息をついた。

正臣は私を信じてくれていたのに。「太陽になる」って言っつた私の言葉を、信じてくれていたのに。

いくら先生の事が心配だったからつて、どつちつかずな事ばつかりして……。

しかし、真理の心は、正臣と井関と、自分がどちらに重点を置いているのが解りかねていた。

井関はいつでも自分に優しい。そして、何より自分をとつても大切にしてくれる。

真理が辛く苦しかつた時、何よりも心の支えになつてくれた。

先生の傍にいと、凄く落ち着いて楽しい気持ちになる。

でも……。

真理は、きゅっ……と、身を縮めた。

正臣に触れていると、正臣を愛しいと感じる。

抱かれていますと、幸せで堪らなくて、……泣きたくなる……。

考えるとすぐに思い出せる。正臣の手の感触。

唇の熱さ。

そして、正臣が自分の中で自分を感じてくれていると思つ、あの幸福感。

私は、正臣が好きなんじゃないだろうか……。

そう思つてしまうほど、正臣を愛しく感じる時がある。

しかしその想いを「姉弟なんだから」といふ、真理の理性がいつもストップを掛けて隠してしまふ。

「姉弟なんだから……」

真理は小声で呟いた。まるで自分の心に言い聞かせるように。

夜中にフツと目が覚めた。

何故かは分からないが目が覚めてしまい、枕元の時計を手に取って見てみると、午前3時。

何でこんな時間に……。真理は時計を戻して、もう一度布団を被り直した。

と、その時、部屋の外から、カタン……カタン……と、階段を上るような音が聞こえてくる事に気付いた。

もしかして、正臣？

そう思い、ベッドから出て部屋のドアを静かに開け、暗い廊下に目をやった。

暗い廊下を、正臣がゆっくり歩いて来るのが見えた。片手に缶ビールを持っている。

「……真理？」

真理がドアを開けて覗いているのを見つけ、正臣が笑いながら寄ってきた。しかしその笑いは、最近の正臣の物ではなく、以前までの正臣がよくしていた、人を馬鹿にするような笑い方だった。

「おねえさん、何やってんのー。こんな時間にー？」

「こっちの台詞よ。今帰ってきたの？」

正臣がフフンと笑う。アルコールの臭いがした。今手に持っている他にも、十分に飲んできたようだ。

「たのしかったぜー。皆でオンナひっかけにいつてさー」

「……正臣……」

「やっぱ楽だねー。気を使わないで犯っちゃうのってー」

「酔ってるみたいだから……。早く寝なよ」

聞いていられないという思いでドアを閉めようとすると、そのドアを正臣が押さえた。

「一杯付き合えよ……。どうせ起きたんなら……」

「私。飲めないから……」

正臣から顔を逸らして答える。今の正臣の目を見ると、昔の正臣を思い出す。それが真理には耐えられなかった。

「飲めないなら……。飲ませてやるから……。さ……。」

正臣はそう言って、手に持っていたビールを口に含むと、吸い付くように真理にキスをした。

「……。ん……。っ……。!」

正臣の口の中のビールが、真理の口の中に入り体の中へ流れ込む。

正臣の体を思い切り突き飛ばし、その場に座り込んだ。

いきなり入ってきた未経験の液体に、味覚が拒否反応を起こし、喉のどの奥の不快感が止まらない。

「一口でへばるなよ……」

正臣はそう言うと、真理の腕をつかんで立たせ、再び唇を合わせて口の中にビールを流し込む。

今度は体を抱くように押さえられていて、突飛ばす事が出来ない。そのまま後ずさり、足がベッドにぶつかった。

「人を裏切つといて、酒の一杯も付き合えねーって話も無いよな……」

そう言ってまたビールをあおる。真理は驚いて反論した。

「裏切つてなんかいない!」

しかし正臣はその口を塞ぐように唇を重ね、真理の口から体にアルコールを流し込みながら、ベッドの上に押し倒した。

「裏切つてなんかいない」

唇が離れ、真理は繰り返す。

急激に入ってきたアルコールが、それを感じたことの無い体に回り始めた。

「何? もう酔ってきた? じゃあ……」

もう一度ビールをあおる。それで空になつたらしい。缶をポイツと何気なく放り投げて、また強く唇を重ねた。

「……んっ……」

口に入りきらないビールが、唇の端を伝ってこぼれた。

正臣の唇が離れる。真理は頭がくらくらしてくるのを感じていた。

「酔ってホワンとしてる時に犯るとき、最高にキモチイイんだぜ・

・。だから、犯ろうぜ……真理」

薄暗い部屋の中で、ニヤツと笑う正臣が見える。

真理はアルコールが回って、視界さえもぼやけてきた。

「何……いつて……るの……。やめ……て……」

呂律ろだじが回らない。少しでも意識をハッキリさせようと頭を振った。

「……そんな……こと、しないで。……前みたいな、こと……」

「

「お前が裏切ったからだろ」

真理は、ぼやけた視界で正臣を見た。

「お前まで、俺を裏切ったんだろ！」

怖い目。しかしそれは、哀しそうに細まる。

「……お前も……。うらぎったんだろ……」

「お前も」その言葉に、真理はショックを受けた。

正臣……私に、裏切られたと思ってる……。

死んだお母さんのように、自分を裏切ったと思ってる……。

アルコールが回った真理の体は、抵抗する力を失い、意識は朦朧もうろう

とした。

ちがうよ……正臣……。

裏切ってなんかいない！

正臣の手が、真理のパジャマを捲めくり、ズボンへと掛かった。

それを止める力は、真理には無い。

裏切ってなんかいない……。

だって……正臣……。

私は、あなたが……。あなたの事が……。

正臣に何かの気持ちを抱こうとした心を、真理の理性がフツと止める。

そして、真理の意識も……。

28・「裏切ってなんかいない！」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

正臣が戻ってしまいそうです。

幼い頃と同じ。また裏切られたと思っているんです。

真理はもう一度、素直な正臣を取り戻すことが出来るんでしょうか。

しかし、この後、真理に大変なことが起こります。

それは、次回！

29・「もしかして、私・・・」

「具合悪い・・・」

目が覚めた瞬間、その言葉は口をついて出てしまった。

目の奥がちかちかする。胸がムカムカして・・・ちよつと頭が痛い・・・。これが、二日酔いふじがよってやつなんだろうか・・・？

真理はベッドの上でゆっくりと身を起こし、頭を押さえた。

ハアッと大きく息を吐く。枕元まくらもとの時計を見ると、もう午前10時を回っていた。

「すっごい寝坊しちゃった・・・」

いくら土曜日で学校が休みとはいえ、休みでも意外と規則正しい生活を送る性格の真理にしてみると、この時間に起きるといふのは、普通の時ではありえない話だった。

ベッドから下りようとして、自分が裸の上にパジャマの上着だけを肩からかけている状態であることに気付いた。

下半身に、最近では感じることも無かった痛感つうかんが残っている。

原因は考えなくても解っていた。ビールで意識が無くなってしまった真理を、それにも関わらず正臣が犯してしまった。それだけの事だ。

口の中に残る、ビールの不快ふかいな苦さ。

早くうがいをしようと、急いで着替えを始めた。

ああ・・・本当に気持ち悪い・・・。

真理は少しでも頭をハッキリさせようと、激しく頭を振った。振りすぎて余計にクラクラしてしまい思わず机に手を付く。

ブラジャーを着けようとして、フと思い出した。

そうだ・・・今日、買い物に行こうと思ってたんだ・・・。

最近少しブラジャーがきつく感じる。この歳で今更胸の成長があるとも思えない。それと連動れんどうするようにスカートのウエストも少々きついを感じ、「太ったのかな？」と思った。

それで今日ワンサイズ上のブラジャーを買いに行こうかと思つていたのだが……。

具合悪いしなあ……。どうしよう。でも、二日酔いの薬も欲しいから薬局にも行きたいし……。

まさか父親に「二日酔いのクスリ頂戴」と言う訳にもいかない。

真理は薄手のセーターを頭から被<sup>かぶ</sup>つて、Vネックの胸元を整えてから、自分の胸にちよつと手をやった。

そういえば「毎日触ってもらうと大きくなる」って話し、あるよね。そう思つて、一人で赤くなつてしまった。

毎日……。触られてたしなあ……。

しかし、それで本当に大きくなるものなのか。話しに信憑性<sup>しんぴょうせい</sup>は無い。

やっぱり太つたのかな。真理は、女の子としてあまり考えたくない方向で問題を解決し、ちよつと溜息をついた。

「びっくりしたわ。真理がこんな時間まで寝てるなんて」

下へおりて行くと、真澄が本当に驚いたような声を出した。

「ちよつと、夜更<sup>よよ</sup>かししちゃつて……」

そう言つて急いで洗面所に入り、歯ブラシを口に入れる。

「!……」

一瞬吐きそうになり、思わず口を押さえた。

ダメだあ……。本当に二日酔いの薬、買つて来なきや。

具合は悪いが、薬局だけには行こう。そう思つて急いで洗顔を済ませた。

「真理。半端な時間だけど、何か食べる?」

真澄が洗面所に入ってきた。

「うーん、いいや。先に買い物に行つてくる」

「ああ。そういえば、行かつて言つてたもんね。おなか空<sup>す</sup>いてない?」

「うん。大丈夫」

気持ちが悪くて、食べ物も多分喉を通らないだろう。

初めて味わう「二日酔い」の気持ち悪さに、「自分は二十歳になつてもお酒なんか飲まない」と心に誓った。

「お母さん。正臣は・・・起きた？」

おそ 恐る恐る聞いてみると、真澄は不思議そうな顔をした。

「正臣君？帰ってないわよ」

「え？」

「靴もないし、部屋にも居ないみたいよ。夕べは帰ってないみたい・・・」

正臣は確かに3時頃帰ってきた。じゃあ、自分を辱めてまたどこかに行ってしまったのだろうか。

「お前も裏切ったんだろ・・・」正臣の言葉と、哀しかなそうに細まった目を思い出した。

裏切ってなんかいない。でも、正臣にしてみれば裏切った様な物なのかもしれない。

どうしたらいいんだろう・・・。

また正臣に信じてもらうには、どうしたらいいんだろう・・・。

「ねえ。お母さん。私、太った？」

真理は髪にスタイリング剤を塗りながら、真澄の前でクルツと回った。

「え？別に、分からないけど。太ったの？」

「っていつか、最近おなか周りが張る、って言うか、スカートもきついし。何か、ブラジャーもきついから・・・」

「生理前なんじゃないの？生理前って、胸が張ったりするでしょ？」

「そうかな・・・」

それなら、「太った」って考えるより、ソツチのほうが良いや。

真理はそう考えて「そうだね」と、舌を出して笑って見せた。が、次の瞬間、「ある事」に気付き、持っていたヘアブラシを思わず落としました。

「どうしたの？真理」

ブラシを落としても拾おうとせず、洗面台の前で立ちすくんでいる真理に、真澄が不思議そうに問いかける。

「お母さん……。ちよつと、かいものに、行ってくる……。」「それだけを言って、真理は急いで部屋へ向かった。

……。もしかして……。私……。

部屋へ戻って、机の上の卓上カレンダーを手に取る。

11月の表示から前の月に戻す。そして、もう一枚戻す。

9月の初めのほうに、赤い丸印しるしが付けられた日が5日間あった。

10月を見る。そこには、赤い丸の印は無かった。そして11月。もちろん無い。

真理はカレンダーを机の上に乱暴に置いた。

置いた手の指先が冷たい。血の気が引くように、胸がドキドキした。

私……。

もう一度カレンダーに目を落とす。何度見てもそれは同じ。

私……。

この家に来てから……。

生理が来てない。

「二日酔い」で吐き気がする口元を、両手で押さえた。

真理は生理不順ではない。どう考えても次の生理の予定日から、4週間以上遅れている。

この家に来てから、あまりにも精神的に慌あわただしくて、そんな事を気にしている余裕は無かった。

もしかして、私。

妊娠したのかもしれない……。

「10代のうちは、生活環境の変化や、ストレスなどで遅れることが多い。……っか……。」

真理はその紙を声に出して読み上げ、フーッと息を吐きながら、机の上に置いた。

「今机の上には、さっき急いで薬局に行って買って来た、未使用の「妊娠判定試薬」が置いてある。」

取扱説明書と一緒に入っていた別紙べっしを読んでいたのだ。

確かに、生活環境は変わった。大きなストレスも沢山あった。本当にそのせいであってくれれば、どんなに良いだろう。と、思う。

「とりあえず、使ってみよう・・・」

真理はそう呟いて、試薬スティックを手に部屋を出た。

29・「もしかして、私……」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

余談では有りますが……。

真理が買ってきた「妊娠判定試薬」は、知る人ぞ知る  
「製造・販売 葉山製薬」です。（笑）

判定結果はどっちだったのでしょうか？

ストレスで遅れているだけ？

それとも本当に妊娠？

でも、だとしたら……。

正臣と先生。どっち？

それは、次回。

「正臣、お前、ネーチャンとケンかでもしたのか？」

自分の煙草たばこに火をつけてから、達也たじやはライターを正臣に渡した。

「何で？」

正臣がそのライターで煙草に火をつけながら訊きかえす。

寝起きでぼやけた頭を冷ますように、ブロンズ系の金髪をグシャグシャツと掻かき回した。

「最近付き合い悪かったのによお。昨日からずっとここで溜たまつてるなんて・・・久し振りじゃん」

家具らしい物といえば、ベッドとテーブルくらいしかない殺風景な8畳ほどの部屋。達也はここで独り暮らしをしている。必然的に仲間の溜まり場になっていて、以前は正臣もよく来ていた。

真理と一緒に暮らすようになって、それも無くなっていたのだが・・・。

午前10時。床にはまだ健と秋光が転がっていた。

「別に。何もねえよ・・・」

呷くくように言つて、寝起きの一杯、とばかりに缶ビールの口を開ける。

明け方、一度家へ行つた時、真理に無理矢理飲ませたことを思い出し、何故かちよつと辛つらくなつた。

・・・あいつが、悪いんだから・・・。

「正臣のものでいいんだよ」そう言つた真理の笑顔と、井関に向けていた笑顔が重なり、正臣は腹立たしい気持ちをぶつけるかのよう、乱暴にビールの缶をあおつた。

意識が無くなつた真理を勝手に犯して、またここに戻つてきた。

しかし真理を犯した時、以前感じていたような満足感のような征服感ふくかんは一切なく、かえつて後味の悪さだけが正臣の中に残っていた。体を重ねた時、真理の肌の暖かさを感じるのが好きだった。

自分を感じてくれて、泣きそうに笑う真理の顔が好きだった。

「正臣……」そして、自分を呼ぶ声。

無理矢理抱いたところで、何の満足感も彼は得ることが出来ない。俺、どうしちまったんだろう……。

真理が自分だけのものではない。そう感じるのが辛かった。

「正臣の太陽になるから」その笑顔は、自分だけのものだと思っていたのに……。

裏切られたと思った。

俺が信じた人間。

俺を想ってくれていた筈の人間。

真理も、俺を裏切ったのか……？

そう思うと、あまりにも苦しくて、あまりにも切なくなる。

その気持ちは何なのか、正臣にはまだ解らない

正臣はヤケ気味に、再びビールの缶をあおった。そんな正臣を、達也が微妙な顔で見ている。

正臣、あのネーチャンと暮らし始めてから、変わったよな……。前はちよつと触ったら切りつけられるんじゃないかってくらいピリピリした奴だったのに。

正臣とは一年の時に知り合った。全てを捨てたような排他的な正臣を、達也は直感的に気に入りそれからずつとつるんでいる。

正臣は誰に対しても、何をするのでも、容赦がない。その度胸のよさが、また達也は面白く気に入っていた。

そのピリピリしたところが、最近の正臣にはなく、達也はちよつと面白くない。

昔の正臣に、戻るかもな。

正臣を見ながら、達也は期待をこめて煙草の煙を吐いた。

「……」

真理は、ずっと「ソレ」を眺めていた。

机の椅子に座りながら、目の前に置かれた使用済みの「妊娠検査判定試薬」のスティック。

朝御飯どころかお昼も食べずに、ずっとそれを眺めていた。

「妊娠」の場合に浮き出る、「陽性」窓に浮き出た、赤い印。

「うそ……」

陽性反応が出て、決定ではないので必ず医師の診察を受けること。説明書にはそう書かれていた。しかし、検査薬の正確性は99.9パーセント、とある。

そのあまりのショックに、「二日酔い」の具合悪さ……いや、恐らく「二日酔い」ではない気持ち悪さも、今はあまり気にならない。

真理は時々、吐き気が襲う口元に手をやった。

……「つわり」……？

朝よりは楽になったが、時々軽い吐き気が襲う。

私……。

妊娠したんだ……。

その事実を思うと、真理は目の前のスティックを見詰めたまま身動きできない。

しかし、真理にはもうひとつの問題があった。

……「誰」の……？

正臣に初めて犯された時から、ずっと正臣だけであったなら、何も考える事はない。けれど、たった一度だが井関と体を重ねてしまったことがある。

こういう事は「回数」ではない。「排卵日」という日に避妊をしないと妊娠してしまう。という事くらい真理でも知ってる。

「排卵日」って、いつあるものなんだっけ……。

真理は焦る心の中で、学校で時々女子だけ集めて行われた「性教育」の時間を思い出していた。

確か、生理があった初日から数えて、約2週間後……。

机の上の卓上カレンダーを手に取り、日付を指で追う。最後にあ

ったのは9月の始め頃……。それから、2週間……。日付を追っていた真理の手が止まった。ちょうど、2週間目……。

それは、初めて真理が正臣に犯された日。

冷たいナイフで真理の服を切り裂き、面白がりながら、泣き叫ぶ真理を正臣が陵辱した。あの日。

「どうして……」泣きながら自分を抱き締めた。あの日。

「シーツ汚さないように」中に出して「おいてやったからさ」馬鹿にするように言った。

「楽しかったよ。」「姉さん」「愛想の無い口調で。冷たい目で。

あの時の?!

あまりのショックに吐き気が襲い、思わず両手で口を押さえた。

胸が苦しくなり、本当に吐いてしまうのではないかという不安に、トイレへ行こうかと立ち上がるが、真理の動きはそこで止まった。どうしよう……。

正臣の?子供?

姉弟なのに……。

それも、あんな……。あんな風に犯された時の……。

同じく正臣の子供を妊娠したというのなら、最近の一期期だけでも心を許しあえた時の子供であるほうが精神的にどんなに楽だったろうと思う。

よりによって、あの時の。

真理にとつての最悪の記憶。

決して思い出したくない、正臣が蘇る。

真理は自然と、自分の下腹部へ手をやり、グツと力を入れた。犯された時の?子供?

「真理、具合悪いんだって?」

その夜、夕食後に帰ってきた正臣は、早々にベッドへ入っていた

真理の部屋へ、そう言って入ってきた。

夕食もあまり喉のどを通らず元気が無いので、帰ってきた正臣に真澄が話したのだろう。気遣う言葉の割りに、正臣の表情は面白そうに笑っていた。

「もしかして「二日酔い」か？あのくらいで？弱すぎねー？」  
「……」

真理は何も言わず、ベッドの中でクルツと背中を向けた。

「でもまあ、意識が無いより、ある分良いか……」

そう言つと、上にかけていた布団を捲まくり、横向きになっていた真理の体をうつ伏せに押さえ込んだ！

「まっ……さおみ……?!」

うつ伏せになった瞬間、胸が押されて吐き気が襲う。それを我慢がまんするように、枕に顔を押し付けた。

正臣は真理が抵抗しないのを良い事に、両膝ひざを少し立たせてパジャマのズボンを下着すごと擦り下ろした。

「やめ……てっ!」

枕に顔を押し付けたまま、抵抗の声を出すが、正臣は真理が暴れ出さない様に、上半身をのし掛けて押さえ込み、以前のように後ろからいきなり真理の中へ入り暴れだした！

「ま……さ……やめっ!」

上半身を動かそうとするが、正臣が押し掛かっているので動けない。下半身に痛みが走る。それと共に腹部が張ってくるのを感じ、真理は泣きたくなった。

「こんな事したら……赤ちゃん、死んじゃうよ!

「やめてっ……。正臣……」

真理が泣き声を上げる。と、一瞬、正臣の動きが止まった。が、お前が悪いんだろ……」

「そう言つと、さっきよりも激しく強く、真理の中を突き始めた。  
「……い……や……!やだっ!」

「お前が悪いんだろっが!」

怒ったような正臣の言葉を聞きながら、真理は涙がでて止まらな  
かった。

私が……。悪いの……？

でも、正臣。私の中には、あなた……。

「おねがいつ！やめ……て……」

あなたの、「命」が入ってるんだよ……。

「おねが、い……い……」

たとえそれが、犯されしいた虐げられた時の「命」でも。

たとえ私達が、「姉弟きょうだい」でも。

「やめ……て……」

私の体に、あなたの「命」が宿ったのは、

……事実、なんだよ……。

30・「あなたの、「命」」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

はい、正臣の、でした。

それも最初の頃の、最悪な状態の時、です。

真理はどうしたら良いのでしょうか？

よりによって正臣は今こんな状態。

弟の子供が出来たなんて親には言えません。

誰かに相談する？

・・・誰に？

真理の最悪の事態は続きます。

では、次回。

31. 「姉弟なんだよ・・・」

「3ヶ月ですね」

その医師は、真理の気持ちを考えることもなく、診察結果をあまりにも簡単に言い放った。

とは言っても、それが彼の仕事である。いちいち患者に「言ってもいいですか？」と訊く医者も居ないだろう。

「ちょうど9週目に入ったところですから、妊娠3ヶ月目ですよ」「はあ・・・」

真理は生返事しか返せない。産婦人科の医者に改めて言われると、覚悟はしてきたものの、本当に自分は妊娠してしまったんだという事実を思い知らされる。

月曜日。学校へ行くと言って家を出てから、家から少々遠い所にある小さな個人経営の産婦人科を訪れた。大きな病院だと、知っている人間に会うかもしれない。そう思ったのだ。

「本当だったら、血液検査とか色々したいところなんだけど・・・」  
医師はちよつと言いつらそうに真理を見て、それからカルテを眺めた。

「産むのだったら、再来週くらいにまたいらっしやい。その時に妊娠初期の検査をしますから」

「再来週ですか？」  
元気なく自分の膝に置かれた手を見つめている真理に、医師は決定的な言葉を言う。

「もし、産まないのなら、12週に入る頃までに決めてください。それを過ぎるとお腹の赤ちゃんもだいが育ってしまいます。母体にも影響が出るかもしれないので「そう破」が難しくなりますから」

「そう破」その言葉に真理の体が震えた。

早い話が・・・「墮胎する」・・・墮ろす、って事だよね・・・。  
学校へ行くと見せかけて出て来たので、真理は制服姿だ。

学生であることや、一人で来ていること。そこから「親には内緒なのだろう」と、仕事柄、医師には解つたらしい。

「それと・・・」

軽く咳払いをして、医師は続ける。

「妊娠初期は、外からの刺激や精神状態が胎児に影響しやすいです。

・・・あまり、無理な性交はしない様にして下さいね」

「え？」

意味が解らなくて思わず顔を上げると、医師が「しょうがないな」  
とでも言うような顔をした。

「産道が、ちよつと傷ついています。あまり無理な性交は、出血などを伴うと細菌が入ったりしますから。・・・控えてください。一応、細菌の繁殖を防ぐ飲み薬を出しておきますから」

真理は恥ずかしくなって、赤くなつた顔を思わず伏せた。

「産道」や「性交」など、医師は仕事用の言葉を使つてくれるが、  
ようは、正臣が乱暴なセックスをしたせいで真理の中が傷ついている、と言う意味だ。

・・・まさか、犯されました、とは言えないし・・・。

真理は恥ずかしさで「はい」と小さく返事をするこしか出来なかった。

「おい。お前」

いきなりそう呼び掛けられて、足が竦んだのは、太田綾だ。

何で自分が、いきなり友達の弟に呼び止められるんだろう・・・。

いや、友達に弟だから別にいい様なもんだけど、この人だけには  
声を掛けられたくない！！

3年1組の教室の前。正臣としては呼び止めるのは別に誰でも良かった。偶然それが真理の友達だっただけだ。

「真理、呼べよ」

正臣一人だが、それだけでも嬉しくはない。ついでに「自分の姉

さん」を呼んで来いと命令口調。綾はどもりながら言い返した。

「・・・やつ、休みでしょっ・・・」

「は？」

正臣が目を見開いて訊き返してくる。

「だからっ、今日、休みでしょっ。来てないわよ」

何で一緒に住んでて知らないのよ！！

「・・・」

正臣はクルツと踵かかとを返すと、そのままスタスタと歩き出した。

「・・・何よ・・・あれ・・・」

綾はそう呟いて、何事もなく済んだ事にほっと胸をなでおろした。

「・・・3ヶ月・・・」

真理は産婦人科の診察券を眺めながら一人呟いた。

紙コップに入ったオレンジジュースを吸い上げる。ごくん、と大きく喉のどを鳴らしてから、ハーッと息を吐いた。

ハンバーガーショップの店内。お昼近くという事もあって、店内には小さな子供を連れた母親などもちらほら見られ、妙にその姿が目についた。

もしかしたらまだ10代ではないかと思うような若い母親が、小さな子供にハンバーガーを干切ちぎつてあげていたり、こぼしたジュースを拭ふいてあげていたり。

もし産んだら・・・。私もあなるのかな・・・。

そう考えて、ポテトを摘つまんだ手がちよつと止まった。

産んだら・・・？

だって、これは、正臣の子供なんだよ。「弟」の子供なんだよ。

それも・・・、犯された時の・・・。

真理の頭の中に、さつき医師に言われた「そう破」という言葉が思い浮かび、ゾクツと背筋を冷たいものが走った。

「そう破」・・・お腹の赤ちゃんを、殺す、って事だよね・・・。

真理は下腹部に手を当てた。

ここに・・・違う「命」がある。

ここに、自分じゃない「命」が入っている・・・。

でもそれは・・・。

真理はテーブルに肘を付き、両手で顔を押しさえた。

「姉弟なんだよ・・・」

弟の、子供なんだよ・・・。

「お前、やるじゃん」

夕方遅く帰ってきた正臣は、そう言いながらノックも無しに真理の部屋へ入ってきた。

机に置いた靴から、今日病院でもらった飲み薬の袋を眺めていた真理は、慌ててそれを靴の中にした。

「今日、学校フケたんだろ？どこ行ってたんだよ」

そう言って後ろから真理の顔を覗き込む。

「別に・・・。ちょっと、行きたくなかっただけ」

「ふうーん。オカーサンに言っちゃおうかなー。オネーサン学校さぼったんだってー。って」

脳天気にからかう口調が、妙に癪に障る。思わず正臣を睨み付けた。

「何？怒ってんの？」

「別に・・・」

「怒るなよー。黙っててやるからさー」

そう言つと、後ろから真理の体に腕を回し、耳元でからかうように囁く。

「だからー。しようよ・・・。たまには優しくしてやるからさ・・・

「

離してー！」

思い切り身を抜いて正臣の腕を外した。

「ふざけないで！もうやめて！！」

泣き声で叫ぶと、正臣の体を突き飛ばし、逃げるように部屋を飛び出した。

正臣を突き飛ばした時、机が揺れて鞆が倒れた。鞆の中の教科書の間から、何か白い紙袋が飛び出しているのを見つけた正臣は、何気なくそれに手を伸ばした。

「何打これ？」

しかし、その袋に印刷されている病院名を見て、正臣の眉が寄る。

「・・・産婦人科の、薬・・・？」

31・「姉弟なんだよ・・・」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

3ヶ月。

妙に現実味のある言葉を医師に告げられてしまいました。

それも「そう破」という言葉つきです。

真理は一人で思い悩みます。

よりによって弟の子供だ、と・・・。

「産む」？「そう破」する？

どちらにしても簡単に決められる事ではありません。

さあ？どうしましょう？

では、次回。

32・「お前！変だぞ！」

「真理、お前どっか具合でも悪いの？」

その朝、学校へ行くと家を出た真理の後ろを、正臣がずっと連いて歩いてきた。

「どうして？」

真理は早足でズンズン歩いて行く。後ろを振り向くことも無く。

「なんか・・・昨日からすっげー機嫌悪いじゃん」

正臣が気になっていたのは、真理の鞆の中から見つけた産婦人科の薬だった。

何で、あんな物持ってたんだ？俺、なんか病気でもうつしたか？そう思って、一瞬心配になった。男の浅い知識として、妊娠している女に病院が薬を出すとは思っていない。

正臣の中での薬は、真理が何か病気にでもかかってもらって来た物なのだろう。という決着が付いていた。

真理は何も言わず、ただひたすら早足で歩いた。

確かに、悪阻つわりで気分も悪いが、機嫌きげんも悪い。

精神の不安定。妊婦にんぶには良く起こりがちな症状だ。

「正臣、連いて来ないでよ」

前を見たまま、後ろを連いてくる正臣に冷たい一言。

「学校に着いたら、私、井関先生に会いに行くんだから」

井関に相談してみよう。

それが、真理が出した答えだった。

親には言えないし、こんな風に戻ってしまったている正臣に言うなんてもつての他だ。その前に、言えない。

先生なら、冷静に相談に乗ってくれるんじゃないだろうか。それに、何かあったら相談するように、って、言ってくれていたし。

それが、真理が出した結論だった。

しかし、相談するために、井関に会う、と堂々と正臣に言ってしまう辺り、真理の神経はかなり昂たかぶっていたといえる。

しかし今、井関がとんでもない立場に立たされている事を、真理は知らなかった。

「参まっているようだね」

生徒指導部主任の佐藤が、自分の席に座って頭を抱かかえていた井関に声を掛けた。

いきなり声を掛けられ、慌てて井関が顔を上げる。

「昨日は、随分ずいぶんやられたみたいじゃないか」

「・・・はい・・・」

昨日、授業が全て終わった後、また教頭室に呼ばれた。

何かと思つたら、今度はPTAだ。

義理の姉弟で付き合っていた非常識な女生徒を、その弟から奪つて付き合っている先生がいる。と、親に言った生徒がいて、その事がPTA役員に広まったらしい。

何も無い、誤解です、と説明するも、「こんな非常識な先生に任まかせておけない」だの「生徒に手を出すなんていやらしい」だの。1時間以上、散々責められた。

おまけに最後には、再度教頭の嚴重注意付だ。

「気をつける。下手したら本当に「先が無くなる」ぞ」

そう言つて、佐藤は井関の肩を叩いた。

先が無くなる。生徒と不祥事を犯した教師。そんな肩書きが付いたら、教師を続けていけなくなる。

井関は大きな溜息ためいきをついて、職員室の時計を見上げた。

そろそろ、朝の仕事に出なければならぬ時間だ。

「学校の中に入りなさいよ」

真理は時計を見ながら、そろそろ井関が遅刻チェックの為に校門前に出てくる時間だと思った。しかし、校門前に立っている真理の横に立ったまま、正臣が動かない。

「いいじゃん別に。お前こそ中に入れよ」

「言ったでしょ。先生に用があるの」

「フン。堂々としたモンだな。裏切ったのがばれた途端とたん、これかよ」その言葉に、真理はムカツとした。今日は本当に機嫌が悪い。自分でもそう思う。

誰のせいで、こんなに悩んでると思ってるの！！

「そんなんじゃないわよ！私はね・・・」

怒りかけてフと止まる。私はね・・・の後が続かない。

正臣に言う訳にいかないじゃない・・・。妊娠したなんて・・・。

真理は急に泣きなくなつた。

本当なら、正臣に一番最初に言わなければならぬ事だ。正臣がこんな風に戻ってしまったてさえないければ。

「真理？」

真理が急に泣きそうな顔をしたので、正臣はちよつと驚いた。

真理が俯うつむき、手で目を拭ぬぐっている。

何泣いてんだよ！何だつてんだよ！

「お前、変だぞ！今日は！」

いや、昨日から変だった。「ふざけないで！もうやめて！」あんな風に、ちよつと投げやりに怒つた真理は初めてだった。

泣いている真理に、横で戸惑とまどう正臣。通り過ぎる生徒達がちよつと面白そうに眺めて行くが、それに気付いた正臣に睨み付けられ、慌あわてて顔を逸そらす。

見せモンじゃねえ！つての！！

「立花？何やってんだ？」

校門の上から、背の高い正臣の金髪が見えてその存在が分かつたらしい。ちよつと校門前を出てこようとしていた井関がヒョイッと

顔を出した。

「真理？どうしたんだ？」

泣いている真理がすぐに目に入る。しかし、つい名前を呼び捨てで呼んでしまい、他に聞かれてやしないかと思わず口を噤んだ。

おまけにそれを聞いて、正臣がこの上なくムツとした顔をしている。

「先生……」

真理はもう一度目元を拭って、井関を見上げた。

「相談があるんですけど」

「え？」

井関はちよつと驚いた。正臣が横に居るのに、そんな話をして良いのだろうか？それとも二人揃って自分に話しがあるんだろうかと。

「放課後……。いいですか？」

「別に、構わないけど」

「じゃあ、放課後。待ってますから」

「おい！真理！」

その話の内容に、耐えられなくなった正臣が怒鳴った。

何だよ！俺の目の前で堂々と会う約束かよ！

真理はそんな正臣に目もくれず、井関にぺこりと頭を下げるとスタスタと歩き出した。

「おい！」

正臣が後を追う。そんな二人を、不思議な思いで井関は後ろから眺めた。しかし、噂の三人が何かを話している。と、遠巻きに数人の生徒達が見ている事に気付いて、ワザとらしく咳払いをしながら目を逸らした。

「お前！変だぞ！」

正臣はいきなり真理の腕をつかんで、怒ったように叫んだ。

何といつても登校時間の玄関前。目の前で繰り広げられている痴話喧嘩わけんかのような光景を、通り過ぎる生徒達が面白そうに眺めていくが、それに気付いた正臣にギロツと睨まれて、慌てて目を逸らした。「何よ！」

真理は思いつきり正臣の手を振り払った。

「何だよ！あれ！俺に対する当て付けかよ！」

「ほつといてよ！正臣に関係ないでしょ！正臣なんて自分勝手に怒って好きにしていればいいじゃない！！！」

「ふざけんなよ！誰が自分勝手に怒ったよ！」

「勝手にじゃない！自分勝手に怒って、私の言いたいことも聞かないで、勝手にそんな風に戻っちゃって！……それだから私がこんな思いしてんのよ！」

「……なんだよ……それ……」

正臣は言葉を失った。真理の様子がおかしい事が、俺のせいだつて言うのかよ。……なんだよ、それ……。

真理は泣きそうな目で正臣を見て、それから目を逸らすと、何も言わずに校舎の中へ入っていった。

「お前！変だぞ！」

その後姿へ、とどめのように叫ぶ。

その変な原因が、俺？

正臣はしばらくその場に立ち竦すくみ、様子のおかしい真理を不思議に思いながら、その後姿を見詰めていた。

32・「お前！変だぞ！」

（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

マタニティブルってやつですね。

妙にイライラしたり、急に悲しくなったり。

今までに無い真理の様子に、正臣が驚いてしまつのも当たり前です。

真理が自分の子供を宿してしまった事にまだ気付いていないんですから。

とりあえず、先生に相談することにしました。

それが、「良かった」で終わるかどうかは・・・。

わかりませんが・・・。

では、次回。

### 33 「私、妊娠したんです」

「真理、大丈夫？」

3時限目が終わった後、友達の太田綾おおたあやが耐え切れず声を掛けた。

「・・・うん、大丈夫。ごめんね」

「どうしたの？真理が授業中に居眠りなんて・・・」

ちゃんと睡眠すいみんはとっている。しかし、眠くて堪たまらない。

悪阻つわりの時にはよくある症状だつて、昨日買った本に書いてあった

な・・・。真理はそう思い出して溜息ためいきをついた。

朝から、つい授業中にウトウトしてしまっていたが、さっきの3

時限目、とうとう少し居眠りをしてしまい数学担当の南に怒られた。

「あいつ、イヤミだからさあ、めったに怒れない生徒を怒れたと思つてニヤニヤしてたよね。あーいやな奴！」

綾はさつき、ネチネチと真理に嫌味を言い続けた南に腹を立て、あからさまに嫌そうな顔を見せた。

「ねえ・・・綾」

真理が次の授業の用意をしながら、真剣な目で綾を見上げる。

「・・・頼みがあるんだけど・・・」

「昨日はデートですか？井関先生」

いきなりそう言われて、井関は少々面食らった。

「は？」

思わず不思議そうに訊きかえす。職員室で次の授業の準備をしていたら、突然数学教師の南にそう声を掛けられた。

普段そんなに親しく話す間柄あいだからではない。いったい何の事なのだろう。と、井関は首を傾かしげた。

「いやあ、さつき、3年1組の授業だったんですけどね」

井関は知らずのうちに眉を顰ひそめた。3年1組といえば真理がいる

クラスだ。

「日野真理なのですけどね、居眠りをしているんですよ。いやあ、こんな事、実に初めてでね。・・・で、昨日はデートだったのかな、と思ひましてね」

「・・・どうして、僕に訊くんですか・・・」

「どうして、って。そんなの・・・」

「僕に関係ないでしょう!」

思わず大声を出して、机を叩いた!すぐに我に返るものの、普段、真面目で温厚な人柄で通っている井関の奇行きぎょうに、周りに居た教師仲間や生徒達が驚いた顔で自分を見ている。当の南は、逃げるように自分の席へ戻っていった。

井関はなんでもないふりをして、授業の準備を続けた。

同じ教師仲間にも、こんな・・・。井関は下唇を噛んで、悔しい気持ちを堪こらえる。

と、その時、

「井関先生」

自分と呼ぶ声。顔を上げると、自分の横に見たことのある女子生徒が立っている。

「君は・・・えつと・・・」

「3年1組の、太田綾です。真理の友達です」

ああ、そうだ。よくまだ真理が朝のチェックに立っていた頃、二人で話し込んでいたっけ。

綾は井関の前に立って、ちよつと身をかがめると、小さな声で言った。

「真理に、頼まれたんですけど・・・」

「え?」

「放課後、じゃなくて、昼休みに。・・・って。それだけ言えば解るって言われたんですけど」

「・・・」

相談があると言った時、立花も一緒だった。もしかして、立花を

撒くために目の前で  
放課後」と言ったのだろうか……。井関はちよつと考え込んだが、  
すぐ綾に笑顔を見せた。  
「解ったよ。ありがとう」

きつとまた正臣は、自分の様子を見に来るだろう……。  
真理はそう考えた。

前のように話をしている時に、いきなり部屋に入ってこられたら  
困るもの……。  
放課後に会うと思ひ込んでいるだろうから、昼休みは邪魔されな  
いと思うし。

「私さえもハッキリと答えが出せない状況で、正臣になんて  
言えないもん……。妊娠したなんて……」

真理は、出そうになる欠伸あくびを何とかかみ殺しながら、下腹部に手  
を当てた。

本当なら、一番最初に言いたいんだよ……」

正臣……」

昼休み。昼食もそこそこに、真理は風紀委員室へ向かった。

「そこそこに」と言うより、ハッキリ言っただけではない。口  
の中が気持ち悪くて、何となく物が食べられない。

風紀委員室のドアを開けて驚いた。なんと井関がもう来ていたの  
だ。

「先生……。早いですね。びっくりした……」

そう言っただけ、窓辺にいる井関の傍へ寄ると、井関がにこつと笑っ  
た。

「せっかく真理が呼び出してくれたからね。それもワザワザ立花を  
撒いて……。よっぽど大事な相談かい？」

「はい、あの・・・」

真理は相変わらず優しい顔で自分を見ている井関を見詰め、それからちよつと俯うつむいた。

「私・・・妊娠したんです・・・」

「え？・・・」

井関は、今真理が言った事を確認するように訊きかえした。

今・・・なんて言った・・・？

妊娠、した・・・？

もちろん真理はこの後、これが正臣の子供であり、親に言ったほうが良いか、それとも誰にも言わないで墮胎だたいしたほうが良いのか、どんな状況であろうと正臣にもちゃんと言ったほうが良いのか、学校はどうしたら良いのか。など、ちゃんと話して相談するつもりだった。

しかし、真理が妊娠したという話を聞いた井関の頭の中では、最近自分に降りふりかかってきている出来事が一気に駆け巡り始めたのだ。

生徒指導の佐藤に責められ、二度に渡る教頭の嚴重注意。PTAからの責任追及。生徒達の好奇こぎの目に、教師仲間の冷やかし。

「先が無くなるぞ」佐藤の言葉を思い出し、一気に背筋が冷たくなった。

身に覚えが無いなら、平気だったろう。

しかし、井関はたった一度、真理を抱いてしまった事がある。

会えなかった寂しさで、自分を忘れ、急ぐように真理を抱いた・・・。

真理が僕にこんな相談をするという事は・・・。

僕の子供・・・なのか・・・？

「生徒と不祥事ふしょうじを犯した教師」そんな言葉が井関を押し潰しそうになる。

子供の頃から夢だった「教師」という職。頑張つて教員免許を取った時、自分は一生教師をやつていこうと心に決めた。

・・・その思いが、崩れていく・・・。

たった一度の、過ちあやまちで・・・。

「誰にも言えなくて・・・。だから、先生に相談したくて・・・」

真理は言葉を続け、井関を見上げた。井関が驚いた顔で自分を見ている。

当たり前だろう。いきなりそんな事を言われれば・・・。

「だって、この子。実は・・・」

正臣の子供なんです。そう言おうとした瞬間、真理の耳に、信じられないような井関の言葉が飛び込んできた。

「・・・始末しておいで・・・」

「え？」

真理は改めて井関の顔を見た。

「始末しておいで。真理」

「・・・先生・・・？」

井関は真理から顔を逸らし、窓の外に目をやった。

窓に自分の顔が映る。青ざめて、動揺を隠せない自分の顔が。

「費用なら、僕が出してあげるから。・・・駄目だよ・・・こんな  
の・・・」

真理は井関が言っていることが信じられなかった。こんなにも簡単に「始末しろ」と言っている事が。

お腹の子供を、「殺せ」と言っている事が。

「始末しておいで・・・すぐに・・・」

井関から出るとは思っていなかった言葉。

いつも真理に優しくかった井関から、いきなり出るとは思っていなかった、酷い言葉ひどい言葉。

「それと・・・。こういう風に会うのも、もうやめよう・・・。その方がお互いの為だから」

「・・・先・・・生・・・？」

体中の血が引いていく。  
真理は、自分の心も体も冷たくなっていくのが解った。

33・「私、妊娠したんです」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

自分が周りから押し潰されそうな時、さらに押し潰されそうな相談をされて、

井関先生は自分を見失ってしまいました。

ちゃんと話を聞きもしないで。

勝手な誤解をしてしまったんですね・・・。

さあ、予想だにできなかった先生の裏切り。

真理の心は傷つきます。

どうする？

それは、次回。

34・「ふざけんなよ……」

「おい！お前！」

そんな風に怒鳴られて、いきなり後ろから腕を引つ張られたら、誰でも驚く。いや、物凄く驚く。

綾も例外ではない。

放課後、進路相談などを受けた後、帰ろうと教室を出た途端いきなり腕をつかまれた。

それもあまり話しかけられたくない人物に。

「真理、どこに行った！」

正臣は、今にも綾に殴りかかりそうな勢いで怒鳴った。

彼としては教室前で捕まえるのは誰でも良かったのだが、3年1組の前に来てタイミングよく出て来たのが綾だったのだ。

「ま……真理なら、早退……した、けど……」

綾は正臣の迫力にちよつと泣きそうになりながら、小声で答えた。

「早退？」

「昼休みの後、帰ったわよ……。具合悪いって」

「……」

正臣は綾の腕を放るようにはずすと、早足で廊下を歩いて行った。

残された綾は、目をぱちくりさせて体が固まったまま動かない。

「……なんだって言うのよー！こわかったーあ！！」

放課後、正臣は風紀委員室の様子を見に行った。

あそこまで俺の目の前で、堂々と会う約束をしてくれたんだ。行ってやるーじゃねーか！

そう意気こんで行ったものの、そこに二人の姿はない。職員室を覗いてみると、井関は仕事でどこかに行く様子はない。もちろん真理が傍に居る訳でもない。携帯を鳴らしてみたが、もちろん出る

訳がない。

「ふざけんなよ……」

正臣は手に持っていたジャンパーを羽織ると、走るように家へと向かった。

正臣は怒っていた。本当に、久々(?)に怒っていた。

ふざけんなよ！真理の奴！

何か人に当り散らすと思ったら、今度は人を騙だましやがって！

おまけに機嫌が悪い原因まで人のせいにして……。

冗談じゃねえぞ！！

「おい！真理！！」

正臣は家の玄関に真理の靴があることを確認すると、二階に向かって叫んで、階段を駆け上がった。

「ふざけんなよ！お前！」

ドアが壊れるのではないかという勢い。真理の部屋へ踏み込んでいくと、まだ着替えてもない制服姿で、真理が机に向かって座っている後姿が目に入った。

「おい！真理！」

グイッと、倒れてしまいそうな勢いで肩をつかみ、真理の顔を覗き込んだ正臣は、ハッと息を呑んだ。

「真理……？」

真理が、泣いていた。

ただ黙って机に向かって、いつからそうして泣いているのか、目がすっかり赤くなってしまうている。

「頭にきたんなら……好きにしなさいよ……」

真理が小声で呟く。それから真っ赤な目で正臣を睨み付けると、つかまれていた肩の手を思いっきり振り払って叫んだ。

「私に腹が立つてんなら！いつも通り、犯しなさいよ！！」  
立ち上がった、正臣のジャンパーを両手でつかむ。

「抱きなさいよ！いつもみたいに無理矢理！！好きにしたらいい！  
！私に腹が立つてるんでしょ？裏切り者に腹が立つてるんでしょ？  
だったら、気の済むまで好きにしなさいよお！！」

いきなりの真理の迫力に、正臣は言葉が出ない。

「最初の時みたいに！私が泣こうが叫ぼうが、好きなように犯して  
みなさいよ！メチャクチャにしてみなさいよ！！・・・そしたら・・・  
！！」

そこで真理の言葉が止まる。正臣の顔を見ていた目がだんだんと  
下へ下がり、そして、真理の体も床に座り込むように崩れていった。  
「・・・そしたら・・・きつと・・・死んじゃうから・・・」  
「お前。何言ってるんだ？」

正臣の目が、真理の机の上に置かれている物を何気なく捕らえる。  
産婦人科の診察券と本。本のタイトルに「はじめての妊娠」とあ  
る。いわゆる、初産ついでんの女性のためのHOW TO本だ。

何で、真理が。こんな本・・・。  
そこで正臣はハツとした。

具合が悪そうだった真理。どこか情緒不安定じょうちゆうふあんていだった真理。産婦人  
科の薬、診察券。そして、妊婦用の本。

「・・・真理・・・？」

まさか。という思いで、正臣は真理を見下ろした。

「お前。まさか、ハラん中に・・・」

急に信妙しんみょうになった正臣の口調が、妙におかしく感じる。真理は馬  
鹿にするようにハツと笑った。

「そっよ・・・」

正臣を見上げる。

「妊娠したのよ・・・」

「・・・」

「あなたの子供よ・・・。正臣・・・。あなたが、私を犯し続けた

時に出来た子供よ!!」

睨み付けてやるうと思った。しかしその目は、どこか悲しそうに正臣を見詰めただけ。

「言えるわけないでしょ! 弟の子供よ! 犯されて出来ました、なんて、誰が言えるのよ!!」

正臣が真理の目の前に屈かがんだ。

「正臣にだって、言えないじゃない」。私の事、裏切った、って。怒ってるのに」

正臣はただ黙って、真理の顔を見ていた。

「だから、先生に相談したのよ」。どうしたらいいか。って。・。そしたら」。・。

真理は小さく笑い出した。情けないとでも言いそうな顔で。

「。先生。何か勘違いしたみたい。正臣のなのに、自分の子供だと思っただけ。始末しておいで。って、言われちゃった」

正臣の眉がピクツと動く。

「よかったね、正臣。費用は先生が出してくれるってさ。これでも、何もなかった状態に戻るよ。赤ちゃん、殺しちゃうんだから」

小さく笑っていた真理の肩が、大きく揺れだす。可笑おかしくて揺れているのか、泣いて揺れているのか、もう分からない。

「もう、会うのやめよう、って言われた。どう? せいせいした? 本当にこれで、私、先生となんて、会えなくなつたよ。あんたの思い通りでしょ。いい気味でしょ! 私がこんな目に遭あって!」

真理は正臣のジャンパーの襟元を両手でつかむと、顔を近づけて泣き声が漏れ続ける唇を合わせた。

「抱きなよ。正臣」

悲しそうな目で、正臣を見詰める。

「楽しいでしょ? 裏切り者が、散々な目に遭あってるんだもの。楽し

くて堪らないでしょ？・・・じゃあ、抱きなよ・・・。いつもみたいに、私の事、犯しなよ！！」

「・・・やめろ・・・真理・・・」

「そしたら、もしかしたら、お腹の子供なんて流産ながれちゃうかもしれないから！その方がいいでしょ？！その方が、私がボロボロになるもん！！私をボロボロに傷つける事が、あんたの最初の目的だったじゃない！！」

「やめろ！真理！！」

耐え切れず、とうとう正臣が思い切り怒鳴った。

真理が目を見開いて言葉を止める。そして再び、崩れるように床に体を伏せて泣き出した。

「・・・抱きなさいよ・・・。・・・ボロボロにしなさいよ・・・」

泣き続ける真理を見ながら、正臣は両手をグッとにぎりしめた。

彼の目が、だんだん鋭く細まっていく。

「ふざけんなよ・・・」

腹の底から湧わき上がってくる、憎々（にくにく）しげな声・・・。

「・・・井関い・・・」

正臣の声が、怒りで震えた。

34・「ふざけんなよ・・・」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

真理はもう半狂乱です。

投げ捨てるように正臣に全てを話してしまいました。

真理に怒っていたはずの正臣。

真理が自暴自棄になっている理由と、今立たされている状況を知って、怒りの矛先が変わります。

正臣がこのままでいる訳がありません。

さて、正臣は、何をするんでしょう・・・。

それは、次回。

35・「面白い事しようぜ」

「おい、面白い事しようぜ」

その言葉に、仲間達が飛びつかない訳がなかった。

昨夜、正臣から3人にメールが入った。「明日、朝7時に教室に集合」と。

何でそんな早い時間に？と思いつつ、3人がほぼ同時に2年2組の教室に入ると、誰もいない教室で正臣が不可解なことをしていた。黒板一面に、白のカラースプレーを吹き付けている。

スプレーは、まるで黒板をホワイトボードのように変えていった。「何やってんだ？正臣」

達也が声をかけると、正臣は振り向いてニヤツと笑う。そして、教卓きょうじょうの上に置いてあったホームセンターの袋をひっくり返した。中から、黒や赤や青のカラースプレーが転がり出る。

「おい、面白い事しようぜ」

制服の襟元えりもとを整ととのえて、真理はフーッと息を吐いた。

気分が重い。昨日散々泣いたせいか目も重い。

相変わらず悪阻つわりのせいで体調すくも優れない。

「さいあく・・・」

何で私、こんな事になっちゃってるんだろ・・・。

ベッドの上に腰を下ろす。起きてからまだ整えていない薄ピンクのタオルシーツの表面を、手のひらで撫なでた。

明け方まで、ここで正臣が寝ていた。正確には、起きたまま真理をずっと抱き締めていたのだ。

昨日、あの後正臣は何も言わずに家を出て行き、しばらくしてホームセンターの袋かかを抱かかえて帰ってきた。

「ちよっと具合が悪いから」と言っ、早めに部屋へ戻った真理の

ところに来て、朝までずっと彼女を抱き締めていたのだ。

抱く訳でも、犯す訳でもなく。

ただ黙って、眠りもせず、真理を抱き締めていた。

優しく。守るように。

「今日、学校休めよ。具合悪いんだろ」

明け方、ウトウトと目を覚ました真理にそう言っただけで部屋を出て行った。

「正臣……」

昨日。勢いで全部言っちゃったな……。

興奮して、当り散らして。びつくりしただろうな……。

妊娠したと知った時の、正臣の神妙な顔を思い出して、一人複雑な笑いを漏らす。

びつくりしない訳がない。義理とはいえ私は、姉、なんだから。

真理は両手で下腹部を押さえた。

この子は、産まれてきてはいけないんだ……。

姉弟の子供なんて、産まれてきちゃ駄目なんだ……。

何であんな事を言ってしまったのだろう……。

井関は職員室の自分の席に座りながら、頭を抱えた。

昨日から、何度この言葉を繰り返していたか分からない。

いくら自分が窮地に立たされているからといって、自分の教師としての立場が危ういからといって、真理にあんな酷い事を言ってしまうなんて。

誰にも言えなくて、悩んで辛い思いをしていたのは真理だって同じなのに。なのに僕は、自分の事ばかりを考えて……。

井関は頭から手を離して、そのまま机の上を見詰めた。

真理に謝ろう。

すぐに許してもらえるかは解らないけど、でも、真理に謝ろう。

あんな酷い事を言ってしまった事を。

始末なんてしなくていいじゃないか。僕がずっと好きだった女の子の子供なんだ。

その事でもし教師の職をおわれたとしても、何も人に教える仕事は学校の先生だけじゃない。ちょうど友人に塾の講師に転職しないかっていう話してもらってる。

井関は以前までの明るい真理の笑顔を思い出し、自然と笑みが漏れた。

僕は、真理が好きだ。あの子を失いたくない。真理に、謝ろう。

井関がそう決意して顔を上げた時、息を切らして慌てながら、副担任の川村が職員室に飛び込んできた。

「井関先生！大変です！教室で、立花達が！！」

それは一種異様な光景だった。

2年2組の前は、廊下に溢れ返るほどの黒山の人ばかり。

2年生だけではない。話を聞きつけた1年生や3年生までが教室前に集まって、前後のドアから教室の中を覗き込んでいる。2年2組の生徒でさえ、中には入れない。

その理由はたった一つ。教室内で好き勝手をしている彼らにある。

「おい、正臣。窓はどうする？」

「外から見えるようにやっつけ。でっかくな」

「はいよー！でっかくなー！」

楽しそうな声をあげ、笑いながら秋光と健が教室の窓ガラスに、カラスプレーで落書きをする。

外から読めるように、逆文字で。

「淫行教師！」「やめちまえ！」と。

達也もスプレーを使って教卓に落書きをしまくった。

まるでどこかの寂れた公園のトイレにでも書かれているような、卑猥な言葉の羅列。

「変態教師にや、お似合いの机になつたる！」

楽しそうに笑う。そして、自らが真っ白にした黒板に決定的な一言を書き、腕を組んでそこに寄り掛かっている正臣を見た。

やっぱり正臣はどっか違う！こんな事、何のためらいもなくやっちまうなんて、奴はやっぱりどっかキレてる！

最高に面白いダチだぜ！

「何やつてるんだ！お前達！！」

その声の主ぬじに、教室内の4人が注目した。

「待ってたぜ・・・」

正臣が腕を組んだまま、溜たまっている生徒を押し退け飛び込んできた井関を睨み付けた。

「井関センチ・・・」

教室内は色とりどりのカラーズプレーで落書きされていた。

とても教室には見えない。まるで何処どこかの廃屋はいあくのよう。

「お前達・・・なんでこんな・・・」

井関は教室内に踏み込み、そして言葉を失う。

落書きの内容が目に入り、凍りつく。

卑猥ひわいな言葉や絵の他に書かれた言葉。

「ここのセンサーは生徒とデキてます」「生徒に手を出したスケベ教師です」「淫行教師！」そして、正臣の後ろの、元黒板に大きく書かれた赤い文字。

「女がはらんだ子供を殺せって言った人でなし！」と・・・。

「何怒つてんだよ・・・」

顔を近づけ、井関の目を下から舐めるように睨み付ける。そして、井関にしか聞こえないような小声で言った。

「真理に、言ったんだろ？「殺せ」って」

「立花あ！！」

その瞬間、井関の理性が吹き飛んだ。正臣の襟元をつかむと、思い切り殴りつけたのだ！

廊下で見ていた女生徒達から悲鳴が上がる。

「てめえ！」

勢いでよろけて倒れそうになったが、何とか持ちこたえた。正臣は井関に飛び掛り、そのまま床に突き飛ばした！

床に倒れた井関の上に馬乗りになり、顔を1回2回と殴りつける！こつという事は正臣のほうが悪れている。どう考えても井関は不利だ。

「いいぞ、正臣！やっちまえ！！」

「ぶっ殺しちまえよ！そんな奴！」

仲間の囃し立てる声。正臣は井関の胸倉をつかみ上げ、ぐっと自分の顔を近付けた。

「真理を泣かせた分の報いは受けてもらうぞ……。井関」

「……。八つ当たりだな……。そんな嫉妬。見苦しいぞ……」

「嫉妬だとお……」

「お前は嫉妬してるだけだ。だから僕が気に入らない。だから僕を、真理に近づけたくないだけだろう！」

「てめえ！！」

殴りつけようと大きく右手の拳を振り上げた！と、突然その腕に、何者かが抱きついてそれを止めた。

「！」

正臣が驚いてその人物を見る。

「何してるのぉ！！」

真理が泣きながら、正臣の腕に抱きついていた。

35・「面白い事しようぜ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

真理に言ったことを後悔する先生に、追い討ちをかけるような正臣の行動。

先生を陥れようとしたことで、かえって自分の凶星を突かれた正臣。

そんな二人を見た真理は・・・。

この勝負、どちらに軍配を上げますか？

それは、次回。

「何でこんな事してるの?!」

真理の出現で、教室内どころか溢れかえる野次馬達のざわめきまでもが静まった。

「こんな・・・こと・・・」

真理は目を見開いて教室内を見回した。

カラーズプレーで書かれた落書きが、教室内を彩っている。しかしその彩の内容は、恥ずかしくなるような卑猥な言葉やいたずら描き。そして、井関への中傷。

重い体を引きずる様に学校へ来た。校舎へ近付いた時、2年生の教室の窓に何かが書かれているのを見付けた。

「淫行教師!」「やめちまえ!」

一気に血の気が引いた。正臣達が何かをしている!直感的にそう思ったのだ。

黒山の人だかりを必死に押し退けて、教室内を覗いた時に見えたのは、正臣が井関に殴りかかっていく姿。

私のせいだ!そう思った瞬間、涙が溢れた。

「お前・・・。今日は学校休めって、言っただろ・・・」

正臣は井関の上から退くと、真理の両腕をつかんで涙が流れ出る彼女の顔を覗き見た。その表情と声は、心配そうに真理を気遣う。

しかし真理は、涙を持って正臣を責めた。

「何で・・・こんな事、したの・・・?」

「真理・・・」

正臣としては、真理を巻き込むつもりはなかった。学校を休ませ、真理が居ないうちに井関へ報復するつもりだったのだ。

「あいつが、お前に・・・」

「こんな事してくれなんて、言ってるない!」

野次馬が再びざわめき出した。

今話題の3人が顔を揃えているのだ。誰がどう見ても、色恋沙汰の喧嘩にしか見えない。

しかし、そのドラマを見ているような修羅場は、騒ぎを聞きつけた佐藤主任教諭の怒鳴り声によって終わりを迎えた。

「井関君！立花！お前達も！いますぐ指導室へ来い！！」

その日一日、学校中、朝の話題で持ちきりだった。

達也、健、秋光の3人は、正臣に唆されて落書きをただけ、という事で、とりあえず自宅謹慎を言い渡されすぐに解放されたが、井関と正臣、そして真理は、1時間以上生徒指導室に軟禁された。

「正式な事は会議で決まる。それまで2〜3日間、日野と立花は自宅謹慎だ。日野にはそれほどお咎めは来ないと思うが、立花、お前、無期停学くらいは覚悟しておけ」

佐藤はそう言つて、竹刀で床をコツコツ叩きながら、相変わらず腕と足を組んで大きな態度で椅子に座っている正臣を睨み付けた。

それから神妙な顔をして座っている井関に、厳しい目を向ける。

「井関君。君の処分も会議で決める。君も2〜3日自宅謹慎だ。ただな、今日の騒ぎの原因を作ったうえ、今君はPTAからも睨まれている。おまけに相手が立花とはいえ、生徒を殴ってしまった・・・」

。「それなりの処分」は覚悟しておきたまえ」

井関は息を呑み、体が固まった。

「それなりの処分」・・・懲戒免職・・・良くて、依願退職。そんな井関を見て、正臣がニヤツとする。それから、おもむろに横に座る真理の腕をつかんで立ち上がった。

「じゃあ、佐藤センサー、俺ら自宅謹慎してるからよ、「処分」って奴が決まったら教えてくれよ。行こうぜ真理」

真理は「お騒がせしました」と小さな声で佐藤に一礼すると、自分を見ている井関には目を向けず、正臣に促されるままに部屋を出た。

「真理！」

井関は思わず立ち上がった。

今伝えなければ、この先ずっと真理に自分の想いを伝える事ができない！そんな気がしたのだ。

「井関君！」

佐藤が止める声も聞かず、井関は部屋を飛び出す。と、真理と正臣が、廊下を歩いて行く後姿が見えた。

「待ってくれ！真理！」

走り寄って真理の腕をつかもうとした井関の腕を、そうはさせまいと正臣が素早くつかんだ。

血が止まってしまつのではないかと思うくらい力を入れて腕を押さえ、黙って井関を睨み付ける。「真理に触るな」その目は無言で威嚇する。

「離せ立花！僕は真理に話しがあるんだ。お前には関係ない！」

井関は正臣の手を力一杯振り払った。そのまま正臣を睨み付ける。「先生。ごめんなさい」

と、先を歩いていた真理が、ぴたつと止まり、振り向く事無く井関に話しかけた。

「真理、僕は君に話が・・・」

「ちがうの・・・」

「え？」

「・・・この子、先生の子供じゃないの」

井関は言葉を失った。

「・・・正臣の子供なの・・・」

「！」

驚いて正臣の顔を見る。正臣は何か勝ち誇つたようにフンツと笑った。

「誰にも相談できなくて・・・だから先生に言ったの・・・先生、勘違いなのよ。先生の子供じゃないもの」

真理は振り向かないまま、真実を話し続けた。

きつと井関は、とても驚いた顔をしているだろう。そう思いながら。

「ごめんね。先生。こんな事に巻き込んで・・・」

井関は信じられない思いでいつぱいだった。よりによって自分が好きになった女の子が身ごもったのが、自分をずっと敵視していた男の子供。それも、その男は、弟。

井関は言葉が出ない。

どう考えたらいい？僕は勘違いで、取り返しの付かない事を真理に言ってしまったっていいのか？

言葉が出ない井関に、真理は決定的な一言を投げかけた。

「さよなら。先生」

真理は少しだけ井関を振り返った。

しかし、その目は井関を見てはいない。目を伏せ気味に、悲しそうな表情。泣きたいのを堪えるように、真理の声が震えた。

「好きになってくれて・・・ありがとう・・・」  
顔を逸らし歩き出す。逃げる様に早足で。

「真理！」

それでも、たとえそれが立花の子供でも、僕は・・・！  
真理を追いかけようとした井関の前に、正臣が行く手を塞ぐように立ちはだかった。

「立花！どけ！」

「もう二度と真理に近づくな！」  
金色の前髪の間から、鋭い眼光を放って井関を睨み付ける。

「二度と！真理の前にそのツラ見せんじゃねえ！！」  
そう怒鳴りつけ、真理の後を追うように歩き出した。

さよなら。先生。

その場に一人取り残された井関の頭の中を、その言葉だけが駆け巡る。

「真……理……」

井関はその場に、力なく膝を崩した。

さよなら。先生。

全てを失った。

そのくらい気分だった。

真理も。真理への想いも。

自分の信用。教師としての未来までも。

全てを失った。

……そんな、気持ちだった……。

奈落なじくのそこに、落とされたような……。

絶望的な虚脱感きょだつかんに、井関はそのまま動けなかった。

36・「さよなら。先生」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

今年最後の更新で、何とも歯切れの悪い話になってしまいました。話の流れ上、申し訳ないのですが、多分次回は、新年一発目から重い話になりそうです・・・。

井関に完全な別れを告げた真理。

正臣は満足そうですが、果たして彼にとって良い展開にばかりなるのでしょうか？

それは、次回。

37・「バイバイ。正臣」

「産むんだろ？」

その言葉に、真理は思わず立ち止まった。

処分が決まるまでの自宅謹慎<sup>したくきんしん</sup>。並ぶ事も無く早足で家路<sup>いえじ</sup>を辿<sup>たど</sup>る真理の後ろで、正臣がそう一言、言ったのだ。

「産むんだろ？真理」

正臣が真理の前に立つ。真理は正臣を見上げ、その顔をジッと見詰めた。

「・・・産んで・・・。どうするの？」

この子が、どういう子か。解ってるの？

「私たちは「姉弟<sup>あひだち</sup>」なんだよ・・・」

「関係ねえよ」

「・・・無責任だよ・・・正臣・・・」

「無責任だよ」その言葉に、正臣の眉<sup>まゆ</sup>がちよっと寄った。

「じゃあ、どうすんだよ。殺すのか？井関<sup>あいつ</sup>が言ったみたいに。・・・

その方が無責任だろうが」

「・・・」

真理は答えなかった。

先の事も解らず、「姉弟」の間<sup>ま</sup>に出来た子供をただ「出来たから」という理由で産むのが「無責任」なのか。

「産めない」という理由だけで、自分の中の違う命を殺してしまふことが「無責任」なのか。

どちらが正しいのか。どちらが間違っているのか。

答えたくなかったが、考えたくも無かった。

今は、何も考えたくなかった・・・。

「ねえ正臣。お願いがあるんだけど」

急に真理は話題を変えるように明るい声でそう言つと、「コートのパケットから三つ折の財布<sup>さいふ</sup>を出した。

「薬買ってきてくれない？栄養剤」

「栄養剤？」

正臣の手に水色の財布を握らせる。小さな鈴が付いた花のチャームが付いていて、渡した瞬間チリンと可愛い音を立てた。

「うん。妊娠中、特に悪阻の時って、物があまり食べられなかったり具合が悪かったりで体調が悪いでしょ。そういう時って栄養剤みたいな物とか飲むと効いて元気が出るだって。ただ「用法」のところに「妊娠中の栄養補給に」って書いてあるやつね。・・・10本入りの箱で売ってるやつが良いな。ちよくちよく買いに行かなくて良いから」

それから、弱々しくではあるがにっこりと笑う。

「自分で行けばいいんだけど・・・。体調悪いから、早く家に帰って休みたいの・・・お願い。正臣」

久し振りに見る真理の笑顔。正臣はドキツとして何故か嬉しい気持ちになった。

「解った。じゃあ、先に帰って休んでろよ」

正臣は自分の手の中にあつた水色の財布を真理のコートのポケットに戻すと、ちよつと赤くなり、

「俺、買ってくるよ。真理が元気出るなら・・・」

と言つて、軽く片手を上げ、背を向けて歩き出した。

真理はそんな正臣の後姿を見ながら、何故かちよつと悲しそうな顔をした。

カチャリ・・・。

聞きなれたドアの音。

音は同じだが、開けること自体初めてのドア。

正臣の部屋のドア。

栄養剤が欲しいというのは口実だった。

ただ正臣を、しばらく家へ近付けたくない。自分の傍に居させた

くない。それだけだった。

ぜったに誰も入れなかった正臣の部屋。そのドアを開けて、真理は中へ入った。

机。本棚。ベッド。パソコンやCDMDデッキ。サイドボードにクローゼット。いたって何の代わり映えもしない部屋。しかし・・・  
「すごい・・・片付いてる・・・」

真理が思わず呟いてしまうほど、その部屋は綺麗に片付いていた。以前に母が、一度だけ部屋に入った時あまりにも綺麗に片付いていて驚いた。と言っていた事を思い出した。

「大丈夫かもしれない。きちんとした子なのかもしれない。そう思ったの」その母の言葉に納得してしまうくらい、正臣の風貌ふうぼうからは想像が出来ないくらいの几帳面きちょうめんな部屋。

真理は本棚ほんだなに近付いて、綺麗に並べられた本の背表紙を眺めた。

漫画や写真集などもあるが、本棚を埋める大半が、大学受験用の参考書じょうしんりがくしょや児童心理学たぐい書の類。

「小児科医の心得」・・・？」

父親の本だろう。医療関係の本も沢山並んでいる。

正臣、もしかして・・・。小児科のお医者さんになりたいの・・・？

お父さんと同じ・・・。

正臣が子供が好きだった事、成績は良く、大学受験圏内に居ることなどを思い出した。

「・・・バカみたい・・・」

思わず呟く。多分正臣は、あんな風にスレた行動をとっているくせに、小児科医になりたいって夢をちゃんと持って誰にも言わずに勉強してたんだ・・・。

これだもの。部屋に誰も入れたくないよね・・・。

女の子を連れ込んだって、自分の部屋になんて入れられないよね。真理は笑いが込み上げて来た。小さく肩を震わせて笑い出す。

「バカみたいだよ・・・。正臣・・・」

どっちが本当のあなたなの？

いつも人を馬鹿にしたような目をして、怖い事ばかり、人を傷付ける事ばかり平気です。それがあなたの本質？

それとも、小児科医になりたいっていう、ちゃんとした夢を持って、人知れず頑張ってる。それがあなたの本質？

「もう・・・わかんない・・・」

真理は泣きそうな顔で笑った。

解らない……。もう解んないよ。正臣。

「産むんだろ？真理」真剣な顔で言った。

子供を殺す事を、墮胎する事を「無責任」だと。

真理は正臣の机に近付いた。

綺麗に片付けられ、端に詰められた参考書やレポート用紙。

その陰に隠れるように「ある物」を見つけた真理は、それを手に取った。

正臣の手の平くらいの大きさの柄。きゅつと握ると、パチンッと音がして鋭く光るナイフの刃が飛び出した。

真理は目の前にかざし、その刃先を見詰めた。

鋭い刃先。それは「あの時」真理の服を切り裂いたナイフ。

初めて正臣が真理を犯した日。

あの運命の日。跡形も無く真理の服も心も切り裂いた物。

あの日から・・・全て始まったんだ・・・。

真理の心の中を、あの運命の日から今までの出来事が次々と駆け巡った。

毎日正臣に好きなようにされた。学校でも嫌がらせされて、仲間に犯されそうになった事もあった。

本当にあの頃の正臣は、私をただ傷付けたいだけだったんだらう。笑う事も出来なくなるくらい、滅茶苦茶に壊したかったんだらう。

自分を裏切った母親に復讐する様に、私を傷付け続けた・・・。

でも幼い頃に正臣が負った傷を知って、そんなトラウマを背負った正臣が可哀想になった。

「私が太陽になってあげよう」そう思った。

正臣があんな風になってしまったのは、正臣が悪いんじゃない。幼い頃心を閉ざしてしまっただから。心を閉ざして人間として成長できなかつたから。正臣は悪くない。・・・そう思って、正臣を受け入れた。

正臣も、そんな私の想いを、受け止めてくれた。

・・・一時期だけど・・・。幸せだった・・・。

正臣に対して抱いてはいけない想いが、私の心を苦しめるほど・・・。

抱いてはいけない。想い。

「正臣・・・」

あなたに対して。私が抱いてはいけない想い。

「産むんだろ？真理」それが出来たら、どんなに良いか・・・。

そう思う、自分がいる。

姉弟なんだよ。産める訳が無い。・・・そう止める私の陰に、違う自分がいる。

私は・・・あなたが・・・。

「・・・正臣・・・」

真理の瞳から、いつの間にか溢れ出していた涙が流れ落ちた。

私はいつまで、こんな思いをしなければならぬ？

正臣への想いで苦しんで、私の体に宿った命の事で迷って・・・。片手で下腹部を撫でる。

ここに、正臣の子供がいる。

正臣はこの子を殺すことを「無責任」だと言った。

この子だけを、無かつたことにするのは「無責任」だと。

「ごめんね・・・」

真理はまるで、お腹の子に話しかけるように呟いた。

「一人になんて・・・しないよ・・・」

涙が流れる。

悲しいはずなのに、真理はちよつと笑った。

右手に持っていた、運命のナイフ。

真理はそれを見詰めた。

「バイバイ。正臣……」

ナイフの鋭い刃が、真理の左手首を切り裂いた。

「バイバイ……」

37・「バイバイ。正臣」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

「出来ちゃったから」それだけで子供を生んでしまうのと、「産めないから」それだけで子供を殺してしまうのと。どちらが本当に「無責任」なんでしょう？

本来ならばケースバイケースですよ。

では、この二人の場合は？

考える事に、真理は疲れてしまいました。

でも、お腹の子を一人で死なせはしない。そんな想いで、以前自分を切り裂いたナイフで自らを切り裂いてしまいました。

産む事を切望した正臣。

彼はどうするのでしょうか……。

それは、次回。

「有難うございました」

店員のお決まりの台詞を背に受けながら、正臣はドラッグセンターを出た。

真理に言われた通り栄養剤を買いに来たまではよかったが、実際選ぼうとするとその種類の多さに驚いた。

疲労系、風邪系、二日酔い系、美容系、とさまざま。

「疲労系」だと思い、そこから選ぼうとするがこれまた種類が多い。

迷った挙句よくテレビや広告で見るとような銘柄の物に決めた。

「用法」にちゃんと「妊娠中の栄養補給に」と書かれているのを確認して。

「俺、栄養剤なんて買った事ねえし・・・」

栄養剤ひとつ買うのに散々(さんざん)迷ってしまった。そんな自分に言い訳するように呟いて、正臣は家へ急いだ。

家へ帰ると真理が居る。その思いが正臣の足を速めさせていた。

真理の陰にずっとあり続けた、井関という存在。

目障りで堪らなくて、いつも何とか消してしまいたいと思い続けていた存在。

その存在が無くなった今、正臣は晴れ晴れとした気分だった。

これで真理は、自分だけのものだ、と。

その時、制服のポケットで携帯が鳴った。達也からだった。

「よお。どうだった?無期停くらい喰らいそうか?」

面白そうに訊いて来る。後ろで他の二人の声もする。多分達也の部屋にいるのだろう。

「ああ。多分な。まあ、無期停だったってすぐ解けるし」

今度無期停学なら、1年生の時から3回目になる。

以前佐藤が言った。「そのやんちゃなところを直さないと、内申に

ひびいて大学になんか行けないぞ」と。・・・さすがにそろそろヤバイかな。

「井関のヤローはどうだったよ」

「多分辞めさせられるぜ。大目に見てもらっても「いがんたいしょく依頼退職」ってやつだろ」

電話の向こうで「センサー様ご退職だぜ！」という冷やかしの声と、それで盛り上がる声が聞こえた。

「ザマーねえな！最初っから気に入らなかつたんだよな！井関の野郎、真面目な正義感ばっか振り回しやがってよ！」

達也がゲラゲラ笑うのを聞きながら、正臣も満足そうにフンツと笑った。

「正臣も来いよ。自宅謹慎だったって、家に居る気なんてねーだろ」

「ああ。そのうち顔出すさ。今日はやめとく」

「何だよ。ネーチャンと二人つきりかよ」

「まあな」

少々嬉しげになった正臣の声。達也の声がちよっと曇る。

「正臣。お前、ネーチャンの事よお・・・」

「何だ？」

達也は正臣が真理の事を本気なのではないか。そう思った。

しかし、どんな女だろうと、たとえ友達の水であるうと平気で抱いてしまうような男が、一人の女に本気になんてなるだろうか。

「なんでもねーよ」

そう言っただ達也は口をつぐんだ。自分の友達が、今までと変わってしまっているのではないか。そんな不安を抱えながら。

「真理」

呼びかけながら家のドアを開けた。

返事は無い。リビングに居るのではないかと思ったが違うようだ。具合悪いって言ってたから、部屋で寝てんのかな・・・。そう思

いながら二階に上がった。

「真理」

もう一度呼びかけながら真理の部屋のドアを開いた。  
しかしそこに、真理の姿は無い。

ベッドの上に真理のコートと鞆かばんが投げ出されている。

おかしいな。どこに行ったんだ？

靴はあった。家に居るのは間違いない。

台所かな？そう思ってもう一度下に戻ろうと思いき真理の部屋のドアを閉めた時、自分の部屋のドアが少し開いている事に気付いた。  
まさか。俺の部屋か？

部屋へ入るな。とは言っているが、別に鍵を掛けている訳ではない。いつ入られても不思議ではないのだが、何となく隠していた自分を見られた気がして正臣は少々罰の悪い顔をした。

「真理。ここに居るのか？」

自分の部屋のドアを開け中に入る。

部屋を見回すと、真理は居た。

正臣のベッドの上で、仰向けあおむけに横たわっている。

「真理。お前、何俺のベッドで寝て・・・」

そう言いながら真理に近づいた正臣の言葉は、そこで止まった。

「・・・真理・・・？」

真理は、見て解るくらい青白い顔をしていた。

体はちゃんとベッドの上に乗っているのに、何故か左腕だけをベッドの下に落としている。

右手に、正臣が良く知っている物が握り締めにぎられていた。

いつも持ち歩いているのに、今日はたまたま机の上に置きっぱなしにしていたナイフ。

・・・ナイフの刃の一部が、赤く染まっている。

「真理?!」

正臣は思わず持っていた荷物を投げ出し、ベッドの上に飛び乗ると真理の体を抱き上げた。

「！」

抱き上げた瞬間、下に落としていた左腕が上がり、それを見て正臣の息が止まる。

「……な……に……?」

正臣の目に映ったのは、真理の左手首。

血まみれの左手。自己主張するように血で真っ赤に染まった手首。ずつと手を下にしていたせいだろう。流れ落ちるように指先から血したたが滴り落ちている。

真理が左手を落としていた所には血溜りちづたまが出来ていた。

正臣は右手に握られたナイフを見た。

これで手首を切った……?

どうして……!

「真理！おい！……何やってんだよ!!」

怒鳴るように呼びかける。しかしそれで真理が目覚ます訳も無かった。

「真理！……真理!!」

真理は目を開かない。

いつやった?！どのくらい時間が経たってるんだ?!

正臣は時計に目をやった。真理と別れて1時間経ってはいない。手首を切ってから、長くてもまだ30分くらいだろう。微かすかだが、息があるのは解かる。

「真理!!」

正臣は声を震わせながら叫んだ。

えも知れぬ不安と恐怖が、彼の心に襲い掛かってくる。

冷や汗が出て、鼓動うぶどうが早くなる。

「真理！どうして……!!」

どうしてこんな事!!

俺の目の前でこんな……。

「お前まで」俺の目の前で、自分を捨てようとするのか!

「お前まで」「俺の目の前から居なくなるつとするのか！

「まじい！…！」

正臣がどれだけ叫んでも、真理の目は開かなかった。

38・「真理!どうして・・・!!」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

恋敵(?)が居なくなつて満足気だった正臣ですが、真理の自殺を目の前にして、一気にその気持ちは地に落とされます。

真理は目を覚ますでしょうか?

お腹の子は?

それは、次回。

「どうして・・・。どうしてこんな事に・・・。」  
救急車の中でも、今いる病院の処置室の前でも、母の真澄ますみはそう  
言って泣き続けた。

病院の処置室の大きな扉の前。

廊下に置かれた長椅子に座って、正孝まさたかに肩を抱かれながら真澄の  
涙は止まることを知らない。

その横の壁に腕を組みながら寄り掛かって、正臣はずっと自分の  
足元を見詰めていた。

正臣の部屋で、手首を切った真理。

使ったのは、初めて正臣が真理を犯した時に使ったナイフ。

青白い真理の顔と赤く染まった手首を思い出し、正臣は思わず硬  
く目を閉じた。

真理・・・なんでお前。自殺なんか・・・。

ガチャツ・・・。静まり返った病院の廊下に、やけに大きく聞こ  
える処置室のドアの音。

処置室のドアが開き、ストレッチャーに乗せられ眠ったままの真  
理が、数人の看護師に付き添われて出て来た。

正臣が顔を上げ、正孝と真澄も立ち上がった。

「安心して下さい」

処置に当たったらしい若い医師が最後に出てきて、笑顔で3人に  
話しかける。

「もう大丈夫です。傷口の手当も無事終わりました。出血が多かつ  
たので少々輸血はしましたが、応急処置をしてくれたお陰で大事に  
は至いたりませんでした」

医師は正臣のほうを見て、褒ほめるように笑いかけた。

「救急の人の聞いたよ。君が止血しゅけつをしてくれたんだってね。そのお  
陰だよ」

あの時、真理の手首からまだ血が滴り落ちていた事に気付いた正臣は、手近なところでベッドに敷いてあったシーツを例のナイフで細長く切り裂き、真理の腕にきつく巻きつけて止血を行った。どうやらそれが役に立つたらしい。

「後は目を覚ましてくれるのを待つだけです。心配いりませんよ。明日には目を覚ますでしょう。このまま病室のほうへ運びますから」  
真理を乗せたストレッチャーが病室へ向って動き出した。

医師の言葉に、3人は同時にほっと息を漏らす。あまりの安心感に思わず真澄は倒れそうになり、正孝に支えられたくらいだ。

「ああ、それと」

今思い出した。という様に医師が付け加える。

「お腹の赤ちゃんも大丈夫ですよ。心配いりません」

「！」

今安心したばかりの正孝と真澄が、驚いたように医師を見る。

「……赤……ちゃん……？」

真澄が呆然と呟いた。医師が不思議そうに眉を寄せ、

「……ご存知……無かったですか？」

といった時、正臣が医師の前に進み出て頭を下げた。

「有難う御座いました」

そのしつかりとした口調に、正臣が子供の父親なのであるうと思つた医師は、笑顔で彼の肩を叩く。

「大事にしてあげて下さい。何があつたかは知りませんが、お腹に赤ちゃんがいるっていう事は女性にとつて、とても大変な事ですからね」

「……はい……」

頭を下げたまま返事をする。そんな正臣を頼もしそうに見て、医師は正孝と真澄に頭を下げ廊下を歩いていった。

「……正臣……」

静まり返つた廊下に、深刻な正孝の声が響く。

「……お前、まさか……。お前が、真理ちゃんの……」

信じられないという声。正臣が顔を上げ、正孝を振り返る。

「親父、俺……」

パシーンツ！！！！

その瞬間、響き渡る大きな音。

正臣の左頬が、腫れた様に真っ赤になった。

「正臣君！」

真澄が涙目で正臣を睨み付ける。今正臣の頬を叩いた手をグツと握り締めて。

「あなたは……どれだけ真理を苦しめたら気が済むのお！！」

泣き声で叫んだ。

「どうして……どうして真理を苦しめる事ばかりするの！！」

正臣を許そう。そう思っではいても、どうしても母親の胸から消えない思い。

自分の娘が犯されていたという事実。親の幸せの為にそれを隠し、一人で耐えていた現実。

それを知ったときの悲しみ。大きな大きな、悲しみ。

「真理に……あんな事して……。妊娠させて……。自殺みたいなことまでさせて！」

何故真理だけがこんな目に遭わなければならぬの？！

真澄は心の中で叫ぶ。娘の母親として、やりきれない思いが彼女の中をいっぱいにした。

「真理が何をしたって言うの？！」

真理がまだ幼い頃に夫に先立たれ、女手ひとつで真理を育てた。

看護婦と云う職業柄、いつも一緒にはいてあげられなかった。帰りが夜遅かったり、夜勤の時もある。

小さな真理は寂しかっただろう。泣きたい夜もあっただろう。

しかし、母親を心配させてはいけないと、泣き言ひとつ言わず、いつも笑顔で母の帰りを待っていた。

「真理が、あなたに何をしたって言うの?!」

母に心配を掛けまいと、一生懸命に勉強をしていつも優等生だった真理。

仕事で疲れて帰ってきてても、真理が見せてくれる「笑顔」が母の安らぎになっていた。

周りに気を使い、いつも笑顔<sup>た</sup>を絶やさなかった真理。

明るくて人気者で、本当ならば誰よりも幸せになる権利がある子のはずだった。

「教えてよ！真理があなたに何をしたの！真理が何をしたって言うの！どうして真理だけが、こんな目に遭わなきゃならないの!!」

真澄は正臣に掴みかかり、その胸元を揺すった。

「真澄！落ち着きなさい！」

正孝が慌<sup>あわ</sup>てて止めるが、真澄はその手を離さない。

正臣はそんな真澄を、目を見開いて見ていた。

「かえして・・・真理の幸せを返して!!」

自分が再婚したいと言ったとき、まるで自分の事のように喜んでくれた。「よかったね。お母さん」最高の笑顔を見せてくれた。

すぐに正孝を「お父さん」と呼び、真澄が不安だった正臣ともうまくやっているように見えていた。しかし、その裏で・・・。

「そんなに真理が憎いの?!そんなに真理を傷付けたいの?!」

真理は正臣に犯され、一人で苦しんでいた。しかし親の幸せを壊さないために、一言も口に出さず一人で耐え続ける。

それを知った時のショック・・・。

それでも正臣を受け入れて、過去の経験から立ち直らせようと頑張っていた真理。

そして、それはうまくいったのだろうかと思っていた。なのに・・・。

真理は妊娠をしていた。義理とはいえ、弟の子供を。

それを誰にも言えず、一人で苦しみ。そして・・・。

「そんなに真理が憎いなら、今すぐ・・・いつそ、今すぐ真理を殺

しなさい！その手で！！」

そして・・・自殺未遂を起こした・・・。

それに気付けなかった、母親の悲しみ。

「そしたら、その後で・・・私があなただを殺してやる！！」

涙を流し続けたまま、真澄は正臣を睨み付けた。

「これ以上真理を苦しめるなら、私があなただを殺してやる！！」

真澄は半狂乱で叫んだ。

「真澄！！」

正孝は力づくで真澄を正臣から引き離し、その肩を思い切り揺すった。

「しつかりしなさい！！」

真澄が床に泣き崩れる。

「・・・まり・・・まりい・・・」

娘の名をうわ言のように呟きながら・・・。

誰よりも幸せになる権利があつたはずの娘。

その娘が、自殺未遂を起こすほど窮地きゅうちに追い込まれていた現実。

やりきれない母の思い。

切なくて、苦しくて、原因を作った男を本当に殺してやりたいと思つほどの、母の思い。

ガクン・・・。

まるで糸の切れた人形のように、正臣の膝ひざが崩れた。

血の気が引いたように、彼の顔は蒼白そうはくになっている。

何か大きな現実気付いたように、大きく目を見開いて・・・。

俺の・・・せいなのか・・・？

俺が真理を、ここまで追い詰めたのか・・・？

俺が……。

正臣は両手を床についた。そのまま頭を床にこすり付けんばかりに下げる。

まるで、土下座のように……。

「ごめん……」

俺が……真理を……。

「ごめん……。お母……。さん……。親父……。」「  
真理を、苦しめた……。」

俺が!!!

39・「11めん・・・」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

娘を思う母親の気持ちが爆発しました。

正臣を許そうとしていた気持ちは、真理の自殺未遂で押さえきれなくなってしまうたんですね。

「自分が真理を苦しめていた」本当の現実に気付き始めた正臣。彼の気持ちに変化は現われるのでしょうか？

それは、次回。

40 「好きだ……」

「墮ろさせるわ……」

誰に言うのでもなく、ひとり言のように真澄は呟いた。

「真理の意識が戻ったら……子供は墮ろさせる……」

土下座をするように床に座り込んでいた正臣が、驚いて顔を上げ、同じく泣きながら床に座り込んでいた真澄を見る。

それに気付いた真澄は、正臣のほうへ顔を向けて、感情の無い声で言い放った。

「当然でしょ……？      あなたと真理は「姉弟」なのよ……」

私達は、姉弟なんだよ……。

真理が言った言葉と、今の真澄の言葉が重なる。

「でも……」

真理の中に宿った命を、そんな理由で殺してしまうのは納得がいかない。正臣は言い返そうと口を開いた。しかし、

「正臣君」

強い口調。真澄は正臣に反論の余地を与えない。

「……これ以上……真理を不幸にしないで……」

睨み付けるように正臣を見る。

本来ならば義理の親子。いつもは正臣にも優しくかったはずの義母の面影は、今は見る影もない。

実の娘を窮地に追い込んだ男を、母親は許さない。

「わかるでしょ……」

そう一言だけ言って、正臣から顔を逸らした。

正臣は床についたままの自分の手を見詰める。今の真澄の言葉に震え出した自分の手。

殺す……？

子供を・・・？

真理の体の中にある「命」を・・・？

「・・・やめて・・・くれ・・・」

正臣は呟く。しかし、その呟きは小さすぎて二人には聞こえない。

正孝は真澄の体を支え、ゆっくりと立たせると、「病室のほうへ行こう」と促して歩き出した。

そんな二人の後姿に向って、正臣は小さな声で哀願する。

「頼む・・・殺さないでくれ・・・」

真理の中にある「命」を・・・。

「殺さないでくれ・・・」

俺と、真理の・・・。

雲の無い夜空。

浮かび上がる、ぼやけた月。

病室前の廊下の窓から、正臣はそんな月を見上げた。  
霧がかかった様な、薄くぼやけた月。

ちょうど、「あの日」と同じ月。

バイバイ。正臣・・・。

そう言って、歩道橋の上から身を投げた母。

正臣は月から目を逸らした。

こんな日に、そんな物を見ていたくは無い。

信じていた大切な者に裏切られ、それを失った日の月。

その月の日に、真理が自殺未遂をした。

「・・・俺なのか・・・？」

正臣は壁に寄り掛かり、目の前にある病室のドアを眺めた。

病室の中には真理が居る。今は両親が付き添っている。

俺が真理を、追い詰めたのか？

両手を頭にやり、髪を鷲掴みにして苦しそうに顔を歪める。

「俺が・・・真理を・・・」

胸が苦しい。押し潰されてしまいそうな重圧感。

それは、「正臣」という人間が、初めて感じる「罪悪感」。

初めて感じる「責任」という物の重さ。

「真理・・・」

正臣の口から無意識のうちに出るのは、ただ真理の名前。

・・・最初は、本当にただ傷付けただけだった・・・。

高校に入学して、ひとつ上級生の真理の噂はすぐに耳に入ってきた。

「太陽みたいな先輩」いつも校門の前で笑顔を振りまき、そう言われていた。

何が「太陽」だ。そんなイイ子な顔をした女だって、女なんて皆同じだ。そんな思いしかなくて、たいして相手にもしてなかったのに・・・。

親父の再婚相手の娘だと知った時、俺の中で何かが叫んだ。

「太陽」が、また俺の傍によって来る。

俺を裏切った「太陽」が。

最初から何の躊躇いも無く、臆することも無く、俺に接してくる

真理を見て無性に腹が立った。

どうしてそんな顔をする？

どうしてそんな顔で、俺に笑いかける？

お前だって同じだろう？女なんて皆同じだ！どうせいつかは男に狂って、大切な者を裏切つて捨てるようになるんだ！

そして、犯した・・・。

滅茶苦茶にしたいだけだった・・・。

「太陽みたいな笑顔」なんて作れないくらい、傷付けてやりたいだけだった。

自分の「道具」にだけなっていればいい、と……。

その気持ちが変わり始めたのは、いつ位からだったろう……。

おそらく、井関が真理を好きだと気付き始めた頃。

感じた事も無い、恐ろしく不安で、信じられないくらいの苦しさを伴う感情。

その気持ちを「嫉妬」だと、井関は言った。

俺は、嫉妬をしていると……。

真理を犯して、自分のものにして、優越感に浸っていたはずの気持ちは、何故か焦りに変わっていった。

真理を、とられる……。

「恋愛」のキスは優しい。

そう教えてくれた真理は、その後俺の過去を知って、もっと大切な事を教えてくれた。

泣くこと……。

相手の事を想いながらする

「恋愛」のセックス……。

そして、もうひとつ……。

「真理……」

頭を押さえていた手を下ろして、正臣は上を向いた。閉じていた目から、一筋涙がこぼれ落ちる。

人を、好きになるという事……。

「好き……だ……」

傷付けたいだけだったに……。

いつの間にかお前は、俺の心を照らし始めた。

俺だけのもので居てくれる。そう思っていたのに、井関と一緒にいるのを見てどうにも自分が抑えられなくなった。

「また裏切られた」そう思って。

「真……理……い」

人を好きになったことなんか無い。

女はセックスの道具でいい。そんな気持ちしかなかったのに。

真理が、全てを変えた……。

真理が、半狂乱で子供が出来たと言った時、その事に驚くより先に「子供を始末しろ」と言った井関に腹が立った。

真理を泣かせたことに腹が立った。

ずっと目障りめざわりだった男。

もう二度と真理の前に顔なんて出せないようにしてやる。そう思った。

私達は、姉弟なんだよ……。

だから何だ？

俺は、嬉しかったんだ。

真理の中に、俺と真理の、切れない「繋がり」が出来た。その事が……。

それが、どんな出来事の末に出来たのであると。

俺達が、姉弟であろうと。

「子供」という大きな「繋がり」

何者にも負けられない。大きな大きな「繋がり」。

でもそれは、結局真理を一番苦しめる要因になっていた。

犯されて出来た子供。

姉弟の間に来た……。

最初から最後まで……。

俺は真理を苦しめ続けていたんだ。

真理を慈しみ続けて来た母親が、俺を殺すと叫ぶほど。子供を、墮ろさせると言うほど。

「やめてくれ……」

正臣は壁に力なく寄り掛かり、病室のドアを見詰めたまま呟いた。

「殺さないでくれ……」

俺と、真理の……「繋がり」を……。

「真理……」

俺が……お前を苦しめ続けた俺が……。

こんな事を、想っていいのか解らない。

けど……。

「俺は、お前が好きだ……」

泣く事を教えてくれた。

相手を思いやるキスを……セックスを教えてくれた。

人を好きになる事を、教えてくれた……。

「……好きだ……」

月の霧きりが、晴れていく・・・。

霧がかかっていた、ぼやけた月が・・・。

だんだんハッキリとした、綺麗な月に変わっていく・・・。

今、「月」が。

「太陽」に、恋をした・・・。

40・「好きだ・・・」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

正臣の心に、変化が現われました。

やっと自分の気持ちに正直になった彼ですが、もしかしてそれは、遅かったのかもしれない。

「繋がり」を消したくない正臣。

母親は「墮ろさせる」と言っています。

意識を取り戻したら、真理はどうするのでしょうか・・・。

それは、次回。

41. 「真理が好きだ」

「正臣」

廊下の壁に寄り掛かって、膝を抱え込むように座り込んでいた正臣に、いつの間にか病室から出てきていた正孝が声をかけた。

「病室に入れ。風邪をひくぞ」

正臣は自分の膝先を見詰めたまま、黙って首を振った。

病室の中には真澄がいる。自分を殺すとまで言って責めた義母が、真理に対して自分がしていた事を再認識してしまった今の正臣に、真澄の顔を見る勇氣は無かった。

いつ目を覚ますか解らない真理を待つて、いつの間にかもう夜中の12時を回っている。

暖房は入っているが、やはり病室内より廊下は冷えるようで、暖かい病室から出て来たばかりの正孝はちよつと身震いした。

そして、膝を抱え、ただ自分の膝先を見詰めている息子に目をやる。

こんな正臣を見るのは、あの時以来だ……。

あの時。母親が自殺した直後……。

正臣はいつも膝を抱えて、黙って膝先を見ていた。

泣くこともなく……。何か言う訳でもなく……。

「正臣」

正孝が正臣の横に座った。同じように膝を抱えて。

「お前……。赤ん坊をどうしたい？」

正臣が小さな声で、しかしハッキリとした口調で言った。

「殺したくない……」

「お前はまだ17歳だ。……高校生だ。今「父親」になってどうするっていうんだ？」

「……高校なんて辞めて、働いたっていい……」

正臣はそう言うてから、辛そうな声を出した。

「真理が、許してくれるなら・・・」

泣きそうに顔を歪める。そんな息子を見ながら、正孝は一番大切なことを訊いた。

「正臣は真理ちゃんをどう想っているんだ？ただ「出来たから産んで欲しい」だけじゃ、ただの男の体裁ていさいじょう上の都合でしかないぞ」

「俺は・・・」

正臣は病室のドアに目をやった。

あの向こうに真理が居る。

俺の・・・「太陽」が・・・。

「・・・真理が好きだ」

こんな俺を、ずっと照らし続けていてくれた。

俺の太陽・・・。

「姉」だなんて思っ  
てない。「弟」なんて肩書きは  
いら  
ない。・・・

・真理が・・・あいつが好きなんだ」

・真理が、許してくれるなら・・・。

失なくしたくない。

俺と真理の「繋がり」。

正孝はそんな息子の横顔をじつと見ていた。

確実に、何かが変わり始めている。息子の横顔を。

全身がだるい・・・。

頭がぼうつとする。

何も考えられない真っ白な頭で、真理はゆっくりと目を開いた。

真っ白な天井が、ぼやっと見える。

「真理・・・？」

誰かの声・・・。

「真理！」

自分の名を呼び、必死な顔で自分を覗き込んでいるのが母だと気付いた時、真理の意識はやっとハッキリし出した。

「・・・お母・・・さん・・・」

真理の虚ろな目が、やっと真澄を確認する。

「真理！良かった！」

ベッドにうつ伏す様に娘を抱き締める。そんな母を見て、真理は申し訳無さそうな顔をした。

「お母さん・・・私、生きてたの・・・」

「当たり前でしょ！なんて事言うの！」

真澄が怒ったように顔を上げる。しかしその時、真理の右手が布団の上から自分の腹部を押さえているのを見てハツとした。

「真理」

その手を取り両手で握ると、真澄は優しく娘に言い聞かせた。

「・・・やり直しましょうね・・・」

娘を見詰めて、優しく優しく。壊れ物にでも触るように言う。

「あなたはまだ高校生なのよ・・・。まだまだ、やり直しはできるから・・・。だから、お腹の子は・・・、諦めましよう」

「お母さん・・・」

母に知られた。母に迷惑を掛けてしまった。その事実が、真理の心を痛めた。

「墮ろすのは、女にとって辛い事だけど。・・・でも、その子は」

「お母さんの言う通りにするよ」

「正臣君の、弟の子供なんだから」そう言おうとしたが、その前に真理は自分の気持ちを口にした。

「お母さんが言った通りにするから。心配しないで」

真理が悲しそくに笑う。真澄はそれ以上言葉が出なかった。「母の言う通りにする」そう言いながらも、真理の表情はあまりにも悲しそうだ。

真澄の心の中を、考えたくない思いが駆け巡った。

真理？あなた、まさか・・・産みたいの・・・？

母親が「諦める」と言ったから、真理は「言う通りにする」と言った。

真理は、自分がどうしたいのかを言っではない。

「真理ちゃん。気が付いたのかい？」

部屋の中から話し声がすることに気が付いて、廊下にいた正孝がドアを開け中に入ってきた。

「お父……さん……」

正孝が真理の傍に歩み寄り、にこつと笑う。迷惑を掛けてしまった自分へ向けられる両親の優しい笑顔。親思いの真理にとっては何よりも心が痛い。

「お父さん、ごめんなさい。私……迷惑掛けて……」

「真理ちゃん」

申し訳無さそうな真理を正孝は特に責めもせず、ゆっくりとした口調で言った。

「正臣と、話しをしなさい」

「……正臣と……?」

「今、正臣を呼ぶから。正臣とちゃんと話しをしなさい」

「駄目よ!そんな事……!」

慌てて口を出す真澄を、正孝は強い表情で見据えた。

「二人に話しをさせなくてどうするんだ。親だけの判断で決めていい事じゃないだろう」

真澄は口をつぐんだ。いつもは穏やかな性格の正孝が、こんな強い口調で物を言うのは初めてだ。

それに真澄には、さっき真理が見せた悲しい目が妙に心に引っかかっている。

正孝はドアを開け、廊下にいる正臣を呼び入れた。

正臣が病室に入ってくると、無意識のうちに真理の顔がほころぶ。

「……正臣……」

微かに嬉しかすそうな、真理の声と表情。

真澄はそれを見て目を見張った。

「真理!」

正臣は真理の傍に走り寄ると、その右手を両手で取って自分の胸

の所でぎゅつと握った。

「・・・良かった・・・真理・・・」

「正臣・・・」

正臣は真理の手を何度も何度も握り直した。

まるで真理が逃げて行くのを止めるかのように

正孝が洩る真澄の背を押して病室の外へ出た。ボタンとドアが閉まり、病室の中に二人だけが残される。

「正臣。安心して・・・」

自分の手を何度も握り直す正臣に、真理は静かな声で言った。

「子供は・・・墮ろすから・・・」

「！」

「お母さんもそのほうが良いって言うから。すぐにでも・・・」

「駄目だ!!」

正臣は叫ぶ。そんな言葉言わせない!そんな思いで。

「駄目だ!そんな事させない!」

「・・・正臣・・・?」

いきなり必死になった正臣に、真理は小首を傾<sup>かし</sup>げた。

「そんな事。絶対にさせない」

真理の手をもう一度握り直す。

「真理。俺は・・・」

真理の目を見詰めて。

そして、言った。

「真理が好きだ」

41・「真理が好きだ」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

自分の思いで、産むことを望む正臣。

親の思いで、墮ろすと言つ真理。

二人の意見は分かれます。

ついに自分の気持ちを伝えた正臣。

真理の反応は？

それは、次回。

42・「私の月」

「正……臣……?」

真理が驚いて目を見開いた。

「真理が好きだ」

正臣が、長めの金色の前髪の間から真剣な目で真理を見詰める。

私の事、好きなの？

以前真理が、正臣に投げかけた疑問。

いつか、教えてね。

そう約束した。

その答えを、今正臣が出した。

「真理が好きだ」

「正臣……」

あまりにも真剣な正臣の目に見詰められたせいなのか、それともその言葉のせいなのか、真理の顔がどんどん赤くなっていた。

「墮ろすなんて、言わないでくれ……」

正臣が、真理の右手を握る両手に力を込める。その手がちよつとしつとりしてきた。正臣が汗をかくほど必死なのが、真理の手に伝わった。

「俺が、こんな事を言っているのか解らない……。お前を犯して、ずっと苦しめた俺が。でも、俺は、真理が好きなんだ……。だから、墮ろすなんて言わないでくれ。俺と真理の子供なんだ……。殺さないでくれ……」

真理は驚いた。正臣が、自分を犯した事を悔いている。

正臣が……。こんなに必死に……。

こんなに真剣に……。

もっと早く、この言葉を聞けていたら……。

「真理は？」

「え？」

「真理は……俺を……」

正臣はそこまで言って口を噤んだ。彼の胸を不安が襲う。

自分にそんなことを訊く資格があるのだろうか。真理を傷つけていた自分が。そんな事を訊いて良いのだろうか？

俺の事を、どう思っているか。なんて……。

正臣は訊けない。

聞くのが怖い。

自分は確かに真理が好きだ。けれど、真理が自分をどう思っているかなんて解らない。

自分に優しくかったのは、過去の事があるから。

自分を受け入れて、黙って抱かれていたのは、過去から立ち直らせるため。

「太陽の笑顔」を向けていてくれたのも、優しい真理が自分に同情していただけ。

傷付けるだけ傷付けていた自分を、真理が自分と同じ気持ちを持って、好きでいてくれるはずがない……。

そんな思いが一気に襲ってきて、正臣は胸が苦しくなった。

何も言えず目を伏せ気味にして下唇を噛む正臣を、真理はただ黙って見ていた。

正臣？何て言おうとしたの？

もしかして、私が、正臣をどう思っているか。訊こうとしたの？  
私が……。

私は、正臣を、どう想ってる……？

いつも、考えようとするたび、想おうとするたび、真理の理性が止める。

「姉弟」きょうだい「なんだよ」と……。

私は

正臣を……。

「月が綺麗ね……」

真理のその言葉に、正臣は伏せ気味にしていた目を開き彼女を見た。

真理は首を傾けて、カーテンが開きつぱなしの窓から見える、月を見ている。

明るい……

綺麗な月を。

「あの二人に話しなんかさせてどうするの？またおかしな事になったらどうするの？」

病室の外の廊下で、真澄は掴みかからんばかりに正孝へ詰め寄った。

「正臣にだって自分が言いたい事はある。真理ちゃんだって同じだろう。二人の問題なんだ。親が口を出すのは、二人がこの先どうするか結果を出してからでいい」

「……どうするか……って。何を言っているの？あの二人は姉弟なのよ……。たとえ義理でも、そんな事許される訳がないでしょう？真理に弟の子供を産めって言うの？そんなあの子が不幸なだけじゃない！」

真澄は正孝を見上げたまま、ちょっと嘲笑う様な悲しい顔をした。「あなたは……所詮、正臣君のことしか考えてないのよ」

「真澄……」

「自分の子供だもの。当たり前前よね。だから正臣君に強く言えないのよ。昔の事があるからって言ったって、あなたは正臣君に甘すぎ。真理があんな目に遭あったって、正臣君を殴り付ける事もしないじゃない」

責めるように正孝を見る。そのうち真澄の瞳から涙が溢れた。

好きで再婚した相手に、こんな事は言いたくない。相手の子供を悪く言いたくは無い。

しかし、真理の事を考えると言わずにはいられなかったのだ。

「こんな中途半端な歳で、中途半端な関係の子供を産んで、もし真理がこの先、一人でその子を育てて行かない様な事になったらどうするの？私はね、真理にそんな苦勞をさせたくないの」  
女が一人で子供を育てて行く事がどんなに大変か……。

真理に自分と同じような思いはさせたくない。

娘にはちゃんとした恋愛をして、結婚をして、幸せになって欲しい……。

真澄だけではない。

母親ならば、誰もが思う。当たり前前の思い。

学生のような若いうちに子供を産んだものの、相手と長く続く事無く、結局子供を若い母親が一人で育てている。そんな例が多い事を、長い事、小児科医をしている正孝は良く知っている。

確かに自分は正臣に甘いのもかもしれない。

しかし、真澄が母親として真理を思うなら、正孝だって父親として正臣を信じたかった。

幼い頃、自分の不注意で傷を負わせた息子を、信じてやりたかった。

「真理が好きだ」そう言った時の正臣は、見た事がないくらい真剣だったから。

「私は、真理に幸せになって欲しいだけなの……」

真澄は泣きながら正孝に背を向けた。

病室のドアノブに手をかけ、ドアを開けようとした時、中から真理の声が聞こえた。

「子供の頃の、夢を見たの……」

穏やかな優しい、娘の声。

その声は、静寂の中で、ドアの前に立つ両親にも聞こえた。

「夢？」

正臣が聞き返す。

真理は相変わらず、窓から月を見ていた。

まるでその月に話しかけるように。真理は話し出す。

「子供の頃、ずっと寂しかった。……お父さんが死んで、お母さんと二人だけ。お母さんはいつも仕事で居なくて。……いつも一人で……寂しかった……」

ドアの前で聞いていた真澄の手が震える。

「寂しかった」そんな言葉を、幼い頃の真理の口から聞いた事などなかったからだ。

「でも、そんな事、言えないでしょう？お母さんに心配かけちゃいけないもの……。一人の夜なんて、寂しくていつも泣いてたわ……」

真理は月を見詰めて、嬉しそうにフツと笑った。

「でも、そんな時ね。……いつも月と一緒に居てくれたの……」

膝を抱えて寂しさを堪え、一人で泣いていた幼い真理。

そんな真理を、窓から覗く月が優しく見守る。

「月はね、いつも優しく私の事見ていてくれた……。見守るよう

に、いつでも傍にいてくれた」

幼い真理は、月を見上げ笑いかける。

「寂しい夜も、明るく照らしてくれた・・・」

寂しい夜も、悲しい夜も、幼い真理は月に話しかける。

「私は、そんな月が・・・大好きだった・・・」

真理は正臣に目を向けた。

ずっと握り締められていた右手を外して、正臣の前髪に触れる。

指で正臣の髪をよけると、自分を見詰める彼の瞳が現われた。

「正臣・・・」

真理はその目を見詰めながら、正臣に笑いかける。

「太陽の笑顔」で。

「あなたは・・・私の月・・・」

私は・・・正臣を・・・。

いつもここから止める、真理の理性。

許されなかった、想い。

「私の月」

今は

止める物はない。

「好きよ・・・正臣・・・」

太陽が、輝く。

月に愛を囁きながら・・・。



42・「私の月」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

真理が自分の気持ちに正直になりました。

真理は真面目な分、自分の中でセーブをかけてきていたんですけどね。でも、正臣の言葉を聞いてセーブできなくなってしまいました。

気持ちを通じ合った二人ですが、最大の問題があります。

そう、二人は「姉弟」なんです。

では、次回

43・「好きよ。正臣」

「大好きよ。・・・正臣・・・」  
許されなかった想い。

口に出してはいけなかった言葉。  
しかし、真理の心は、もうそれを抑えられない。

「真理・・・」

正臣は両腕でしっかりと、ベッドに横たわったままの真理を抱き締めた。

愛しそくに。掻き抱くように。  
嬉しくて嬉しくて堪らない。

真理が自分を好きだと言ってくれた。その事実が。

「正臣・・・」

真理はそんな正臣に、ゆっくりと両腕を回した。  
包帯の跡が痛々しい左手。その手でしっかりと正臣の背を掴む。

「真理。好きだ」

正臣が真理を見詰める。  
今、夜空に浮かぶ月のように晴れた、綺麗な目で。  
そして、優しく唇を重ねる。

それは、真理が教えてくれた。  
「優しいキス」

月が見詰める。

そんな二人を。

明るい、綺麗な、月が・・・。

「真・・・理・・・」

病室の前で話を聞いていた真澄は、真理の言葉を聞いて、両手で顔を押しさえた。

涙が止まらない。

「真理が正臣を好きだと言った。

幸せそうな、優しい声で。

自分を傷つけた男を、「好きだ」と……。

「真澄……」

正孝は後ろから、肩を震わせて泣き続ける妻の両肩に手を置いた。

「親が思う幸せと、子供が思う幸せは、違うんだよ……」

「真理……真理……」

正臣はひたすら真理の名前を呼び、その体を優しく抱き締める。

暗闇に居た自分を照らし、心に光を注いでくれた。

自分だけの、太陽。

「正臣……」

名前を呼ばれる事に、こんなに幸せを感じた事があっただろうか。

真理は正臣の背に腕を回したまま、目を閉じて、自分を抱き締める正臣の腕の強さを感じていた。

寂しい時も、悲しい時も、きつといつも自分の傍に居てくれる。

自分だけの、月。

「真理。好きだ……」

月が、太陽に恋をする。

「好きよ。正臣……」

太陽が、月に愛を囁く。

寄り添い、離れる事無く。

それは続く……。

まるで、永遠に天上で輝く  
太陽と月のように……。

その日、正臣は一日中真理の傍を離れなかった。

手首を切る。という自殺行為はリストカットとも言われ、その後、再発の可能性がないか等、精神面での診療も受けなければならない。その為、通常2週間程度入院して様子を見られる。

しかし真理の場合、「絶対に再発はない！」と、正臣が噛み付かんばかりに担当医師に詰め寄った事と、妊娠中で、あまり体と精神面に負担をかけてはいけないという事で、「1週間の入院で良い」という事になった。

「駄目だよ、正臣。あんな怖い顔しちや。先生びっくりしてたじゃない」

病院の自動販売機で買ったココアを飲みながら、病室のベッドに猫座りをしている真理が、叱るしかるように正臣の鼻先へ指を突きつけた。「ああでもしなかったら、2週間入院してなきゃならなかったかもしれないんだぞ」

さつき担当医師に入院期間の事で噛み付いた事を注意され、正臣はちよつと不満そうだ。

「2週間も……病院に来なきゃ真理に会えないなんて……。俺は、嫌だからな」

照れるように横を向いて小声で言う。それから自分のココアをグツとあおった。

「早く……一緒に帰りたいのに……」

そう言われると、真理も照れてしまう。それを隠すように、真理も横を向いてココアの缶をグツとあおった。

そんな二人を、一度家へ帰り用意してきた入院道具を棚に整理しながら、複雑な顔で真澄が見ていた。

幸せそうに笑う、娘を。

正孝は自分の病院の仕事が有るので先に帰った。真澄も整理が終わったら仕事に戻らなければならない。

親が思う「幸せ」と、子供が思う「幸せ」は、違うんだよ。

正孝の言葉を思い出しながら、真澄は後ろから正臣の肩を叩いた。

「正臣君」

正臣がちよっとピクツとして真澄を見上げる。

正直、話しかけられるとは思っていなかったもので、本当に驚いた。「今度は何を言われるか」と覚悟をしたものの、真澄の口から出たのは、正臣の予想とはかけ離れた言葉だった。

「真理はもう大丈夫だから。夕方には帰っていらっしやいね。昨日からまともに食べてないでしょ？お夕飯作って待ってるから」

正臣は目を見開いた。

まさかそんな言葉を掛けられるとは思っていなかったのだ。

「解ったわね。返事は？」

親が子供に言い聞かせる口調。

正臣は少々戸惑いながらも「はい」と返事をした。

「じゃあ、真理。明日また来るわね」

そう言っって病室を出ようとした真澄を、真理があわてて呼び止める。

「お……お母さん！」

「何？」

「……あの……ありがとう……」

正臣を責めないで、優しい言葉をかけてくれた事。

自分に子供の事を問い詰めないでいてくれる事。

そんな思いを込めて感謝の気持ちを口に出すと、真澄は優しく、母親の笑顔、を向けて病室を出て行った。

「……ありがとう……お母さん……」

ドアが閉まってから、真理にも聞こえないような小声で、正臣は  
呟いた。

真澄はしばらく、病室のドアの前で立ち尽くしていた。

「私が思う幸せと、真理が思う幸せは、違う……」

正孝の言葉を思い出し。呟く。

……でも、二人は「姉弟」……。

「真理……あなたの幸せは……」

目を閉じて、切なそうに顔を歪める。

あなたの幸せは……

お母さんが……。

そして、何かを決意するように、目を開いた。

43・「好きよ。正臣」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

お母さん、二人を認めてくれそうです。

真理の幸せのためには、正臣を認めなければならない。そう思ったのかもしれない。

でも、何かを「決意」したようです。

母親として、娘の為にした「決意」。

それは、二人の「将来」のための決意かもしれません。

でも、その前に、次回は「あの人」が出ます。

では、次回。

#### 44・「じゃあな。井関」

「どうしたの正臣。その格好かつこう」

その日の朝、病院に正孝と共にやってきた正臣の服装を見て、真理は驚いた声を上げた。

正臣が制服を着ている。

城南高校の男子は詰襟つめえりなのだが、真理は一度も正臣のそんな姿を見た事がない。

その正臣が、きつちりではないが、制服を着ているのだ。

「何だよ。変か？」

「・・・変って言うか・・・なんか」

と言つて、小さく吹き出す。見慣れないせいもあるが、正臣の金髪に詰襟の学生服が妙に似合わない。

「何だよ。笑うなよ」

「ご、ごめ・・・っ。でも、正臣の制服って、随分ずいぶんと真新しいね」

まるで入学仕立ての1年生の制服のように、正臣が着ている制服は真新しく、生地もピツとしている。

「俺、普段制服の上着なんて着ないし・・・。今まで着たのって数えるくらいしかないし」

「入学式を除けば、全部親同伴で学校に呼び出された時ばかりだけだな」

今日は珍しくスーツを着た正孝が、正臣の背中を少々強めにバシツと叩いた。

「え？何か呼び出されたの？お父さんと？」

真理の顔が不安げに変わる。呼び出されるとしたら「例の一件」しかない。

ちよつと言葉を濁にごす正臣に代わって、正孝が答えた。

「昨日、生徒指導の佐藤先生から電話が来てね。正臣は「無期停学」だぞうだ。これから承諾書しょうたくしょにサインして学校へ行くんだよ」

「無期停学？」

心配そうな顔をする真理を見て、正臣が慌あわてたように言った。

「でも、無期停つたつて、1ヶ月もないんだぜ！これで3回目だけど、前の2回だつて2〜3週間だつたし」

「3回目なの？」

「うん・・・まあ・・・」

正臣が罰の悪そうな顔をする。正孝は苦笑しながら、もう一度息子の背中を強めに叩いた。

「これで最後にしてくれよ」

よつぽど力が入っていたのが、正臣の体が前に揺れる。

まだ心配そうな顔をしている真理を見て、それから小声で「わかってるよ」と呟いた。

「あ、真理ちゃんはずぐにでも学校に出て良いそうさ。・・・ただ、今ちよつと事故で入院中ですつて言つておいたから、安心して休みなさい」

父の優しい言葉に笑つて頷うなずくと、真理はちよつと厳しい顔で正臣を見た。

「正臣。佐藤先生に会つたら、ちゃんと謝るんだよつ。また反抗したら駄目だよつ。それと」

「解つた、解つた！」

お説教が始まりそんな雰囲気、正臣は慌あわてて真理の言葉を止めた。

「お前。なかなか似合うじゃないか」

生徒指導室で、佐藤が上から下まで正臣を眺め、面白そうに言う。無期停学の承諾書にサインをしてから、病院の仕事があるので正孝は早々に帰つてしまった。

今、生徒指導室にいるのは佐藤と正臣だけだ。

「そつやつて、制服をちゃんと着て、普通に学校に来てりゃいいん

だ。お前、成績は良いんだからな。その「やんちゃ」振りで、大分損をしているんだぞ。解つてんのか？」

足と腕を組んで椅子に座っている正臣の正面に座り、身を乗り出すように指を突きつけた。

また「うるせーよ！」と反抗してくるだろうと思っていた佐藤の期待（？）は、予想もしなかった正臣の言葉に裏切られる。

「ああ。そうするよ」

特に腹を立てている風でもない。普通の口調。いつもと違う正臣の様子に、佐藤は一瞬言葉を失う。

「無期待が解けたら、そうする」

佐藤は勢いよく立ち上がると、正臣の後ろへ回り、その金色の頭をパシツと叩いた。

「なんなんだ！いきなり大人しくなりやがって！気持ち悪いぞ！」

叩かれた瞬間、正臣の体が前に揺れる。「いてーな！！」と怒鳴り返してくるか、またもや期待（？）したが、それもまた裏切られた。

「俺よ・・・「父親」になるんだ・・・」

叩かれた頭を押さえたまま、正臣が呟くように言う。

佐藤は目をぱちくりさせた。

「だから・・・もしかしたら、学校になんて来れなくなるかもしれないけど・・・」

佐藤を振り返る。

「居る間は、よろしく頼むよ。佐藤先生」

照れたような顔と口調。

見た事のないそんな正臣の様子に、佐藤は呆気あっけに取られた。

しかし、すぐに我に返り、ガシツと正臣の両肩つかを掴むと思いきり揺する。

「なんだ！なんだ！何か知らんけど「良い子」「ぶりやがって！！」こいつは！」

佐藤は笑いながら嬉しそうに言う。正臣の妙に素直な態度が気持

ち悪いくらいくすぐつたいが、教師をしている佐藤にとっては、この上なく嬉しいのだ。

「何が「父親」だ！ガキのクセしやがって!!」

冷やかすように言ってから、フツと思いつき、正臣の顔を後ろから覗き込んだ。

「・・・もしかして・・・。日野、か？」

相手は真理なのか？と訊きいてくる。正臣は無言のまま笑って首を縦たてに振った。

佐藤は正臣から手を離し、驚いたように小さく息を吐く。

「そうか・・・そういう事か・・・」

腕を組み一人で頷うなずきながら、再び正臣の前の椅子に座った。

「大変なことだぞ」

「分かつてるよ」

真剣な言葉に、正臣も真剣に返す。佐藤はちよつと笑った。

「さすが、我校きつての優秀な風紀委員長様だな。いつダストシートの中でくたばってもおかしくないようなお前を、ここまで言わせるくらいにしちまうんだから」

「何だよ。それ」

正臣はちよつと吹き出す。ダストシートはねえだろう!!

「ただな、お前の「仲間」は、お前がそうやって真面目に学校生活を送ろうとする事を承知してるのか？」

「・・・」

心の隅すみにひっかけてはいたものの、さほど考えていなかった達也たちの事。今まで自分が中心になって散々（さんざん）やりたいうにやってきた。今更、自分が手の平を返したようになって、仲間達が黙もくっているか・・・。

「ま、大事おほごとにならないようにしろよ・・・」

佐藤はそう言つと、今思い付いたかのように話題を変えた。

「そつだ。お前の「標的」だった井関先生だがな。・・・懲戒免職ちよつがいめんしよくに決まった」

「懲戒免職？」

正臣が、顔を上げて佐藤を見る。

「何とか、せめて、依願退職いがんたいしょくに持つていけないかと私も頑張ってみ  
たが……。彼は今、PTAのお偉いえらいさん方に睨えらまれていてな。・  
・駄目だった……。」

佐藤は溜息をついた。未来のある優秀な教師。出来れば助けてや  
りたかった。

「今、校長の所で話しをしていると思うが、お前や日野が学校に来  
る頃には、もう居ないだろう」

正臣はただ黙って、佐藤の話しを聞いていた。

「申し訳ありませんでした」

感情がこもらなくなる位の回数、今日、その言葉を口にした。

もう、その台詞せしごに何の思いも入らない。

「失礼します」

深々と一礼して、井関は校長室を出た。

校長に教頭。PTA会長に役員達。あまりにも痛すぎる視線にさ  
らされ続け、頭痛がしてくる。

・・僕は・・いつたい、何をしているんだ・・。

井関は廊下に立ち竦すくんだまま、大きく息を吐いた。

懲戒免職。

もう、教壇きょうだんには立てない・・。

大きな大きな溜息。

井関の目の前は真っ暗だった。

ちょうど授業中という事もあり、静まり返った廊下。そこを井関  
は、ゆっくりと踏み締めるように歩き出す。

と、廊下の向こう側から、生徒が一人歩いてくるのが目に入った。  
背の高い男子生徒。きちんと制服を着ていたので最初目を疑った  
が、ブロンズ系の金髪見て、それが誰かハッキリと解かった。

正臣も井関に気付いた。ゆっくりと廊下をこちらへ向って歩いてくる。

二人はお互いを確認したが、特に睨み付けるのでもなく、顔を逸そらしたまま歩き続けた。

一瞬のスライド。

「じゃあな。井関」

肩が触れるのではないかという近さで、二人がスライドした。

瞬間、呟くように正臣が井関に言葉を投げかける。

井関が立ち止まる。

が、正臣はそのまま、背を向けたまま歩き続けた。

立花・・・正臣・・・。

井関はその名を頭に刻み付けるように繰り返し、ゆっくりと正臣を振り返る。

・・・立花・・・。

決して自分を振り返る事無く歩いて行く、正臣の背中。

・・・正臣・・・。

井関はその背中を見詰め続けた。

無機質な、冷たい瞳で・・・。。

#### 44・「じゃあな。井関」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

井関先生の処分が決まりました。

佐藤先生も悩むほど、厳しい処分を受けてしまいました。

最後の最後に顔を突き合わせた二人。

井関先生はいつたい、何を思ったのでしょうか……。

正臣は「無期停学」という処分を受けましたが、変わろうとする  
彼には現実的な問題がありました。

「仲間」です。

彼は真理の為に「変わる」事が出来るのでしょうか？

それは、次回。

45・「俺と真理の子供だから」

「うっ……わぁ……。あわぁ……。すげー。わーあ」  
きつと無意識のうちに出てくる正直な反応なのだろう。

しかし、それを聞いている若い看護婦はさつきから肩を震わせ笑っているうえ、医師も必死で笑いかみ殺している。

「はーあ……。？」

「正臣っ」

ついに恥ずかしさが頂点に達したか、真理が口を開けてモニターを眺めている正臣の腕を引っ張った。

「恥ずかしいでしょっ」

「だっ、だっつっ、これっ。これよ……。？」

小声で注意を促す真理と目の前のモニターを交互に見ながら、目を見開いて驚いたようにモニターを指差す。

そのモニターには今、「胎児」が映し出されている。

早い話が、真理のお腹の中に居る「赤ん坊」が、白黒のモニターに映し出されているのだ。

「映し出される」といつても、真理はまだ11週目。3ヶ月の後期に入ったばかり。そんなにハッキリと映っているわけではない。

診察台の上に仰向けになった真理の腹部の上を滑るエコーカメラから、子宮内の様子が目の前のTVモニターに映し出されているのだ。

黒く映る子宮内で、白く映る胎児が漂っている。まだ、手や足はハッキリとは確認できない状態だ。

「これが心臓ですよ。こっちが頭で、こっちが足。あ、この薄く見えるのが、へその緒です」

医師が、エコーカメラを真理の腹部で動かしながら、モニター内にあるポインターを手元の機械で操作し、胎児の映像にあわせて説明する。

「はあ……」

正臣はそれを見ながら、開いた口が塞がらない。

「まっ、真理っ。これ本当に人間になるのかっ。こっ、この白い塊……」

ついに看護婦が小さく声を出して笑い出した。

「正臣っ」

もう一度真理が「落ち着きなさい」とでも言うように注意をする  
と、医師が笑いながら言った。

「大丈夫ですよ。初めて見た男性は大体こんな感じですよ。若いお父  
さんなら尚更ですよ」

「若いお父さん」と言う言葉に照れたのが、正臣がちよっと頭を  
掻きながら黙った。

そんな照れている正臣を見て、真理がクスツと笑う。

「大丈夫ですよ。順調です」

若い父親と母親を微笑ましく見ながら、医師が笑顔で言った。

「すげーなあ……本当に、すげーなあ……」

正臣はそう言いながら、さっきから真理の腹部を撫でている。  
モニターで胎児の映像を見てから、ずっと興奮を隠せない。

真理が入院して1週間。

明日退院が決まっている真理は、入院している総合病院の産婦人  
科で、診察を受けさせてもらったのだ。

「赤ちゃん、見てみますか？」という医師の誘いに乗って、一緒  
に診察室に入った正臣だが、その驚きにさっきのような反応を繰り返  
返していたという訳だ。

「ここに、あんなのが入ってた……。すげーな……」  
ベッドの上に座って、感心するように腹部を撫でている手をフと  
止めると、真理の顔を見る。

「まだ、男か女かわかんねーの？」

「まだ判<sup>わか</sup>らないよ。でも男の子だと5ヶ月くらいで判<sup>わか</sup>るんだって。エコーにね、映<sup>うつ</sup>って見えるんだって。……あの……男の子の……が」

真理が言いづらそうに言う。と、正臣が「あー」と気付く。

「ああ。チン……」

と言いかけた瞬間、真理の手が正臣の口を勢い良く塞<sup>ふさ</sup>いだ。

「いつ、言わないでよっ！ 恥ずかしいから！」

正臣が真理の手を外しながらニヤ〜っとする。

「でもよお。男の子の母親って、そーゆー言葉とか平気で言えるようになってるよな。うちの病院でもよく母親がオムツとか換<sup>か</sup>えながら平気で口に出してるぜー」

「……そ……そうかな……」

「男だったらいいなあ。真理の口からそーゆー言葉が聞けるんだー？」

「正臣っつー！」

からかい続ける正臣をぶってやりましょ。と腕を振り上げる。

が、反対にその腕を掴<sup>つか</sup>んだ正臣は、真理を引き寄せ抱き締めた。

「どつちでもいいや……」

真理も正臣の背に腕を回し、もたれる様に体を預ける。

「俺と真理の子供だから」

いつも通り正臣は夕方病院を出た。

「明日、早めに来るから退院の用意しとけよ」そういい残して。

病院を出てから、携帯の電源を入れる。

本来ならば、病院内は携帯電話禁止だ。

話しは出来ないまでも、正臣が病院を出た後は二人の間でメールのやり取りが始まる。

いつ真理からメールが届くか解らない。別れた後、すぐ携帯の電源を入れるのが正臣のクセになっていた。

電源を入れた瞬間、待つていたようにメールが入ってきた。どうやら、送信されたが電源が入っていなかったなので待機になっていた物らしい。

達也からだった。

「連絡くれ！」と一言。

それを見て、正臣はちよつと苦笑いを漏らした。この1週間、仲間とは連絡を取っていなかった。達也も痺れを切らした、というところだろう。

達也の番号を押して、携帯を耳に当てる。

ワンコール鳴ったか鳴らないかという早さで、大袈裟な達也の声が聞こえてきた。

「おう！生きてたか?!」

3人とも口をきかなかった。いや、口をきけなかった。

驚いたように目を大きくして、達也のアパートの玄関先に立つ正臣の顔を見ているだけ。

「・・・つまり」

一番最初に口火を切ったのは、健だった。

「もう、オレ達とバカはやれない。って事ツスよね」

「ああ」

間髪入れず正臣は返事を返す。

健は赤い髪をグシャグシャと搔くと、一番「信じられない」と言う顔で、あんぐりと口を開けたままの達也を振り返った。

「だつてさ。解ったツスか？達也」

名前を呼ばれて達也がハツとする。そして早口でまくし立てた。

「ま、まてよ！そんな、いきなりどうしたっていうんだよ！無期停くらいでビビるようなお前じゃねえだろ?! 何考えてんだよ!」普通に学校に行く」って、お前らしくねーよ!!!」

「無期停が解けたら普通に学校に行こうと思ってるから、お前達

とつるめなくなる」それが、ここへ来て正臣が告げた言葉だった。

「子供が、出来たんだ」

「・・・は？」

正臣のその言葉に、3人は再び言葉を失う。

正臣はちよつと照れたように苦笑して、自分の金髪を引っ張った。「だから、いつまでもこんな格好してられねえだろ？学校だって、いつまで行けるかわかんねえし。・・・多分辞めて、働かなきゃなんねーしな」

今は何も言われていないが、真理が退院したら恐らく、子供の話  
を親がするだろう。

親が姉弟の間に出て来た子供を「産んで良い」と言う訳がない。

そうしたら正臣は家を出て、学校を辞め自分が働いてでも、真理と子供を守っていこうと決心していた。

「ま。そういう事だ。悪いな」

正臣は軽く片手を上げると、踵かかとを返しドアを開ける。

「何かあったら連絡くれよ。つるまなくなつてダチなのはかわんねーから」

今まで見せた事のない笑顔でそう言うと、部屋を出て行った。

部屋の中には、言葉を失つたままの3人が取り残される。

今回口火を切つたのは、秋光だった。

「子供・・・って。本当に・・・」

信じられないと言う口調。達也がムキになつて言い返した。

「バカ言うな！そんな簡単にガキなんて出来る訳ねーじゃん！」

「やればできるツスよ」

アツサリ言つてのける健を、達也が睨み付ける。と、相変わらず  
呆然ぼうぜんとした声で秋光が疑問を投げた。

「誰に出来たんだ？」

「「おねーちゃん」じゃねーツスカ？」

「またもやアツサリと健が言う。」

「思いつく相手つたら、「おねーちゃん」だけツスよ。・・・だと

したら、正臣が異常に井関にこだわった理由も、何となく解るツスね」

「冗談じゃねえよ！」

いきなり達也が怒鳴った。二人が驚いて達也の顔を見る。

「冗談じゃねーぞ……。あんなフヌケた正臣……。信じられねえ……」

さっきの正臣は自分が知っている正臣ではなかった。自分が知っている正臣は、あんな目はしない。あんな笑い方はしない。

「……あの女……」

達也が握り拳を作り、いきなり部屋の壁を思い切り殴りつけた！

「人の大事なダチ……。フヌケにしゃがって……」

他の二人が、達也の様子にちよつと危険を感じる。ただでさえ達也は血の氣が多い。

「冗談じゃねーぞ……。姉ちゃん……」

45・「俺と真理の子供だから」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

一緒に診察に行ったり、子供の話しをしたり。

真理と正臣は幸せモードですが、「正臣の問題」についてはそろそろ行かないみたいです。

いままで「好き勝手していた代償」

さて、どうなるか・・・。

でも、その前に、次回は二人の将来について決定的な事が起こります。

では、次回。

46・「俺が、守るから」

「そういう服着ると、ハラ出て見えるな」

退院用に用意しておいてもらったローウエストのワンピースを着た真理を、正臣は上からしたまで繁々（しげしげ）と眺めた。

「ちよつと・・・お腹出て来たみたいだから・・・」

服の上からでも分かる。腹部の辺りが少々突き出てしまっている。マタニティ用ではなく、普通のワンピースなのでしょうがない。

真理は恥ずかしそうに腹部を撫でた。

「普通のスカートはもうキツイから、とりあえずゴムウエストのスカートとかワンピース、ジャンパースカートとかで何とかするわ」

病室には大きな鏡が無いので、自分の姿を見る事が出来ない。真理はキョロキョロと自分の姿を眺め見て「変？」と不安そうに正臣に尋ねた。

「いいや。別に変じゃないぜ。ハラ出てて本当に妊婦みただけど」

「・・・妊婦ですっ」

誰が妊婦にしたと思ってるのよお！心の中で聞こえない文句を言っている、真理を眺めていた正臣が無言のまま真理の後ろに立ち、いきなり抱き付くように腕を回した。かと思うと、両手で持ち上げるように胸に触ってくる。

「なっ！ちよつ・・・ちよつとお、正臣っつ！！」

「あー、やつぱさうだー。何か見てておかしいと思っただ。真理、おっぱいおつきくなってるじゃん」

「赤ちゃん出来たら、大きくなるのっ！」

赤くなりながら胸を両手で庇い、正臣の腕から逃げる。と、正臣が不満そうな顔をした。

「せつかくだから、もう少し触らせるよ」

「やだっ」

「なんでっ」

「・・・今はヤダ・・・」

真つ赤になつて真理が答えると、正臣はベッドに腰掛けて下から真理を見上げた。

「じゃあ、後でなら、いいか・・・？」

恥ずかしそうに真理が頷く。正臣はそのまま腕を伸ばして真理の腰を抱き寄せると、ちょうど目の前に来る腹部に頬を当てた。

「・・・やっと、真理と一緒に帰れるな」

その声が嬉しそうで幸せそうで、それを聞いている真理も嬉しくなつてくる。

「真理、俺、何があつても、お前と子供は守るからな・・・」

真理の腰を抱いたまま、正臣が真剣な声を出した。

「親父と、お母さんが、何を言つても・・・絶対」

ビクッ！小さく真理の体が震える。

真理も正臣と同じ事を思っていた。きつと退院したら子供の話しをされるだろう。「姉弟」の間に来た子供を、両親が産んでいいと言つ訳がない。と。

「絶対、俺が守るから」

父の正孝は、その日早めに病院を閉めた。

せつかく真理が退院してくるので、皆で食事にも、と思つたが、入院生活と言うものも意外と疲れるものだ。

真理の体の事を考え、家で退院祝いをする事にした。

夕食の時、「心配かけて本当にごめんなさい」と、真理は何回も正孝と真澄に謝った。

そして夕食後、「話があるから」と、部屋に戻ろうとした二人を引き止め、リビングに残るように言ったのだ。

きつと子供の話しをされる。そう不安な顔をする真理を、正臣はソファの隣に座り、優しく手を握って元気付けた。

「大丈夫だ・・・」

言い聞かすように、そう言って。  
「俺が、守るから」

何となく気まずい沈黙の時間が流れていた。

後片付けを終えた真澄が正孝の横に座り、リビングに4人が揃そろつ。これから何の話題が出されるかは見当がつく。両親が何を言おうとしているのか、手に取るように分かる。

正臣と真理は、神妙しんみょうな顔でソファに並んで座っていた。

「真理」

呼びかけと共に口火を切ったのは真澄だった。

「な・・・何？」

伏せ気味にしていた顔を上げる。正面に座る母の顔を見て、真理はドキツとした。

真澄がちよつと怒ったような顔をしていたからだ。

これは確実に、子供の件で叱しつたられるのだろう。そう思った真理に告げられたのは、予想もしない言葉だった。

「お母さんね。離婚するから」

「え?!」

驚いてソファから立ち上がりかける。正臣も驚いた顔で真澄を見た。

真澄はハアと息を吐くと、軽蔑するような目で正孝を見る。

「だってこの人。真理があんな酷ひどい目に遭あっても、ちつとも正臣君の事を怒らないんだもの。息子の一人も叱しつれないなんて、そんな頼りない人と夫婦でなんか居いられないでしょ」

「お母さん!」

真理は慌あわてて口を出した。

「待つて!そんな事言わないで!今回のことは私が悪いの!!お父さんはちゃんと私の事も考えてくれてるし、優しい人だよ!頼りなくななって無いよ!!」

自分のせいで父と母が離婚してしまう。せつかく幸せになった母を、そんな目に遭わせたくない。真理は必死になった。

「ごめんなさい！本当にごめんなさい！私が悪いの！だからそんな事言わないで！！」

母の幸せを壊したくない。そう思っていた自分が、今母の幸せを壊そうとしている。押し潰されそうな思いに真理はだんだん涙が溢れて来た。

そんな真理を見て、いたたまれなくなった正臣が口を出す。

「いいや。俺が悪いんだ。最初から全部。俺がしていた事が全ての元凶だから」

立ち上がりかけていた真理の腕を引き、ゆっくりと座らせると、

「落ち着け」とでも言うようにポンポンと背中を叩いた。

「俺が・・・家を出て行くから・・・。だから、お母さんはこの家に居てくれ。親父と離婚するなんて、本気な訳じゃないだろ？・・・俺が目障りなら、俺が出て行くから・・・」

「だめ！正臣が出て行くなら私も・・・！！」

真理が慌てて正臣の腕にしがみ付いた。正臣が真理の肩を抱き寄せる。

そんな二人を見て、真澄が小さな溜息をついた。

「駄目よ。真理はこの家から出さないわ。・・・もちろん正臣君もね。・・・私だって、離婚したってここに居るわよ。嫌いになった訳じゃないもの」

二人は顔を見合わせた。真澄が何を言いたいのかが解らない。

と、今まで黙っていた正孝が、笑顔で真理に訊いた。

「真理ちゃん。子供が産まれる予定日はいつだい？」

「え・・・あの・・・。6月、ですけど」

「6月か。じゃあ、大丈夫だな。・・・正臣、お前の誕生日は何月だ」

一人納得して、今度は正臣に問いかける。

「何だよ。自分の息子の誕生日も忘れたのかよ。4月だろ」

「そつだよな。4月だよな。丁度良かった」

また一人納得する。

真澄といい、正孝といい、両親が何を言いたいのかが解らない。二人は再び顔を見合わせた。

正孝はそんな二人を優しく見詰めながら、彼らしい静かな声で言い放つ。

「4月になれば、正臣は18歳になる。そつしたらお前達二人が、籍せきを入れなさい」

正臣と真理が、二人揃って正孝を見た。二人とも驚いたように目を見開いて。

「子供が6月に産まれるなら、充分に間に合うだろう。その子はちやんと、戸籍上父親の居る子供として産まれてこられるんだ」

「・・・お父・・・さん・・・」

真理の声が震える。

真理の肩を抱いていた正臣の手に、強く力がこもっていた。

#### 46・「俺が、守るから」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

「産ませてはもらえないだろう」そう確信していた二人に、両親が出した答え。

それは二人の、そして、子供の将来を考えた末の答えでした。

しかし、何よりも母の幸せを願っていた真理と、娘の幸せを願う真澄。

二人のお互いを思う気持ちは、ちゃんとまとまるのでしょうか・  
・？

それは、次回。

\*補足\*

今回、両親にこの決定を出させるストーリーを組み立てる時点で、民法の「婚姻」の欄や、法律相談サイトなど、色々調べてからお話しの中に組み込ませて頂いています。

決して話しを都合よく進めるために、出来もしないことを（義理の姉弟間の結婚）適当に書いている訳ではありませんのでご理解下さい。

47・「幸せになるからね」

「駄目……だよ……」

真理の声が震える。

「そんなの。駄目だよ……」

産まれてくる子供の為に、戸籍上こせきじょうちゃんと父親の居る子供にしてあげるために、正臣と真理が籍せきを入れ、婚姻こんいんを結ぶ。

確かにそれは、二人にとって何より幸せな事かもしれない。

しかしその為に、両親が離婚するという。

「お母さん……」

真理は黙って、自分を見詰める真澄に目をやった。

一生懸命、一人で自分を育ててくれた母。

母を安心させる為に、今まで「いい子」で生きて来た。

自分を育てるために大変な思いをして生きて来た母の幸せを、何よりも壊したくはなかった。

その母が、自分の為に、その幸せを捨てるという。

「駄目だよ……お母さん……」

真理の声は泣き声に変わった。それと連動するように涙が流れる。正臣にしがみ付いている手に力がこもった。

真澄はそんな娘の姿を見て小さく息を吐くと、おもむるに立ち上がり、今度は真理の横に座った。

「言ったでしょ。お父さんが嫌いになった訳じゃないの。ずっとこの家にも居る。ただ「夫婦」ではなくなるだけなのよ」

正臣が真理の肩を離す。真理は真澄のほうを向き、向かい合った。「色々調べてもらってね。お父さんと離婚しなくても、連れ子同士

なら結婚できるって話も聞いたんだけど、やっぱり、なんていうか、親同士も夫婦。子供同士も夫婦。じゃ、おかしいでしょ？」

真澄はふざけたように言っただけで笑う。真理の気持ちを解ほくそうとしたのかもしれないが、真理はかえって追い詰められた気持ちになった。「だって・・・お母さん。私のせいで・・・そんな・・・」

「真理」

あくまで自分を責めようとする真理の両手を取って、真澄は優しく諭さとし始めた。

「真理はいつでも、お母さんの事を考えてくれたね。小さい時からずっと。お母さんを安心させる為に泣き言ひとつ言わないで。心配させない為に一生懸命勉強して、学校でもいつもいい子で・・・」

まだ残る、真理の大きな目に浮かんだ涙を、母の暖かい手が拭う。

「お母さんの幸せを守るために、辛い事があっても耐えて・・・」  
横で聞いていた正臣が、膝ひざに置いていた両手をグツと握にぎった。

「お母さんは、充分真理に幸せにしてもらったよ。真理の笑顔が、いつでもお母さんを幸せにしてくれた」

母の暖かな手。小さな頃から大好きだった母の手が、真理の髪を優しく撫なでる。

「だから今度は、お母さんが、あなたを幸せにしてあげる番なの・・・」

真澄が優しく笑った。真理が大好きな「母の笑顔」。

「幸せになりなさい。真理。あなたの幸せが、お母さんの一番の幸せなの」

「お母さん！」

耐え切れなくなった真理が、真澄に抱きついた。

「お母さん・・・私・・・私・・・私・・・私・・・私・・・」

真澄は真理を抱きとめながらクスツと笑う。

「バカね。幸せになる人が泣いちゃいけないでしょ」

そして顔を上げると、正臣を見る。正臣はそんな母娘を黙って見ていた。

「正臣君」

真澄は一瞬、正臣を睨み付けた。その目に正臣が表情を引き締めると、優しい笑顔を作り彼に向ける。

「真理を、よろしくね」

正臣がその言葉を受け止めようように、力強く頷く。

「ほら。抱きつく相手が違うわ」

真澄は笑って真理を自分から離すと、押し付けるように正臣の腕の中へ入れた。

驚くように赤くなって自分の腕の中へ入って来た真理を、正臣は両手で抱き締める。

愛しそうに自分の娘を抱き締める正臣の表情を見届けて、真澄は再び正孝の隣へ戻った。

「但し、条件がある」

幸せそうに身を寄せる二人を見ながら、正孝が口を出した。

「正臣。お前、必ず小児科の医者になれ」

「は？」

正臣が驚いて顔を上げる。

「父さんが知らないと思うな。お前がよく私の書棚から医療関係の本を持ち出しているのは知っているし、大体、お前の部屋を見れば医者になりたがっている事くらいすぐ解る」

「えっ、あっ・・・」

正臣がちよつと照れるように赤くなった。彼としては父親にはしつかりと隠しているつもりでいたのだらう。

そんな正臣を見て、真理がクスツと笑う。

「私も、すぐ解った」

「えっ？」

更に驚いて真理の顔を見る。

「正臣。バレバレだよ」

クスクス笑う真理を腕に抱きながら、正臣は照れくさそうに天を仰いだ。

「だから必ず医者になって、この病院のあとを継げ」

正孝は真剣な声で息子に告げる。

「お前がすっかりとこの病院を継ぐこと。それが条件だ。その条件がのめるなら、お前も真理ちゃんも、そして子供も、ずっとここに居ていい。お前が一人前になるまで、親として私達が面倒を見よう」

正臣は真剣に話す父の顔をジッと見詰めた。

そして、その条件を「嫌だ」という理由は、自分にはない。

「解った」

正臣は真剣な顔で、しつかりと返事をした。

瞬間、真理を抱く手に力が入る。

「俺、必ず医者になる。・・・親父の跡を継げるように」

今まで聞いた事のないような真剣な声。

決意を感じるその口調に、正孝は満足そうに頷いた。

「真理」

正臣の腕の中で微笑む娘に、真澄は再び声をかける。

「・・・幸せに、なりなさいね」

真理は笑う。

幸せそうに。嬉しそうに。

「幸せになるからね」

太陽の笑顔、で。

「・・・結婚する、って・・・事だよな・・・」

今更ながら、正臣は戸惑うような声を出した。

「籍入れるって言ったでしょ。そうだよ」

真理も何となく赤くなってしまう。改めて考えると、何となく気恥ずかしい。

話し合いを終えて、入浴後一息ついてから部屋へ戻った。

最初別々に部屋へ戻ったのだが、どうも落ち着かない真理は、正臣の顔を見に行こうかと部屋のドアを開けた。すると、同時に正臣の部屋のドアも開き、正臣も顔を出したのだ。

「どうやら、同じ事を考えていたらしい。」

そして今、真理の部屋で二人並んでベッドに腰掛け、今日両親とした話を思い返していた。

「真理、俺さ、絶対、医者になるからな」

正臣が真剣に言っていると、真理がちよつとからかった。

「そうよ。なつてくれないと、子供共々追い出されちゃうんだからね。友達と遊んでる暇なんてないよ」

その言葉に、正臣はフツと笑う。

「心配しなくても。あいつらには、もうつるめないって言ってるさ」

「本当？大丈夫なの？」

真理が小首を傾げる。

「ああ。言つてわかんねー奴らじゃない。中でも健は意外と物分りのいい奴だし。秋光だつて言われればやるけど、そうじゃなかったら黙つてるタイプだ」

ただ一人……。達也だけが正臣にとって少々不安の種だった。

ちよつと血の気が多い性格な上、自分の思い通りにならないとキレまくるところがある。

そのうえ達也は、自分達とつるんで「面白い事」を考える正臣を異常に気に入っていた。

「とにかく、心配すんな」

少々不安げな真理の肩を抱く。そして、真理の顔を見詰めた。

「真理……」

優しく囁いて、真理の唇に静かに自分の唇を重ねる。

両手に真理の綺麗な髪を絡めながら、何度も何度も向きを変え、唇を吸い舌を絡めた。

真理が正臣の背に腕を回し、それを受け入れる。

そんな二人を、カーテンの隙間から、明るい月が見守るようつに見ていた……。

## 47・「幸せになるからね」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

とりあえずひとつの問題は解決しました。

将来のビジョンに向って歩き出そうとする二人の、次の問題は？

でも、とりあえず一安心なので、少し二人には幸せを感じてもらいたいと思います。

次回「閲覧注意」です。苦手な方はご注意ください。

では、次回。

\*お知らせ\*

先日、この物語について「常識的な視点に欠けたおかしな話だ」という評価を頂きました。

その内容の大部分は「レイプした人間を許して交わっていける女の子なんて居る訳がないし、それが身内なら尚更だ」という物です。

今、読んでくれていてる方の中にも同じ事を思っている方がいるかもしれませんが、ひとつ分かって頂きたいのは、これはノンフィクションやドキュメントではありません。

あくまでフィクションであり「恋愛」視点で書いている「物語」です。

最悪の状況から、少しずつ少しずつ二人がどうやって心を通わせて行けるか。

それを感じていただきたくて書いてきたものです。

物語が「義理の姉弟の恋愛」という、ちょっと重苦しい難しいテーマですので、私のように文章力のない人間には背伸びしすぎたテ

ーマっただたのかと反省しました。

このような意見を頂ける事も、作品を見つめ直すいいきっかけになりますので、コメントを返した後、評価欄に載せたままにしてありましたが、この2、3日ほどでそのコメントに対する驚くほど大量のメールを頂きました。

そのほとんどが「見ていて不愉快だ」「評価欄が使いにくい」「あんなのただの中傷」との、困っている物、怒っている物ばかりでした。

私としては頂いたご意見のひとつとして残して置きたかったのですが、やはり読んで下さっている方に気持ちよく閲覧して頂きたいという観点から、その問題のコメントを評価欄から削除させて頂きました。

その評価を下さった方はもう読んで下さっていないかもしれませんが、そういう理由があつての削除です。どうかご理解下さい。

その評価を見た事があるのに無くなつてると、不思議に思っていた方も居るかもしれませんが、こちらに書かせて頂きました。

長い文章でスママセン。

物語も架橋に入っています。

ストーリー展開に納得が行かない方もいらっしゃると思いますが、このお話しは私がずっと書きたかった物語です。決していい加減な気持ち、いい加減な態度で書いてきたものではありません。

どうか最後までお付き合い下さい。

宜しく御願います。

最後まで読んで頂き、有難う御座いました。

48・「愛してる・・・」（前書き）

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。

苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は  
その場面にきたらとばすなど。してください。

R - 15 指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

「このまま入れても……いいんだよな……」

ここまでしといて、今更何を言っているのか。と、真理は大きな目をぱちくりさせた。

しかし、そう訊いてきた正臣の表情はいたって真剣だ。

お互いの肌を重ねあい、高まり続ける体温を感じている。

久し振りに優しく抱かれる快感に、真理の体は高揚を隠せない。

正臣の手が真理の体の上を優しく彷徨い、唇が首筋をなぞる。

妊娠時の特徴として、いつもより大きさを増した真理の胸の膨らみを、正臣は楽しそうに手と舌で愛撫した。

心も体もいいところまで昂り、もうお互いを感じたくなかった時に、正臣がいきなりそう言ったのだ。

「普通にやっても、大丈夫なんだよな？……子供……」

あまりにも真剣に訊くので、真理はクスツと笑った。

「正臣、この子、「最初の頃」の出来ちゃってた子なんだよ……」

知らなかったとはいえ、その後も普通に「してた」じゃない……」

まあ、「普通」じゃない時のほうが多かったけど……」

それも言ってやるうかと思っただが、とりあえずやめた。

「そういうや、そうか」

正臣が、少々バツの悪そうな顔をして頭を掻く。そんな彼の前髪を掻き上げるようによけて、真理はハッキリと現われた、明るい月のような瞳を見詰めた。

「……でも……優しくしてね……」

正臣も、真理の潤んでキラキラした太陽のような瞳を見詰めながら、言葉を返す。

「……優しくするよ……」

見詰め合っただまま、唇を重ねた。

「好きだ……真理」

明るい月が見える。

半開きになったカーテンの隙間すきまから。

霞かすみの無い。明るい月が……。

「あ、あんっ……。んっ、んっ……」

控えめに漏れる真理の声が、それでも静かな部屋の中では響き渡るように大きく聞こえる。

「正・臣……。あぁっ。はぁっ、あぁ……」

正臣が一度動かたび、自分の中が擦り上げられる感覚に体が震える。そしてそれは、快感となって体中に広がった。

「真理、大丈夫か？」

正臣はあまり真理の腹部に押し掛からないように体を重ね、正臣自身を離さないかのように締め付ける真理を感じ続けた。

「苦しく、ないか……？」

さつきから正臣は、真理の上で動きながら、真理を気遣うように声を掛けてくる。

「大……丈夫よ……。苦しくなんて、ない、よ……。やつ……

あんっ……」

「ちゃんと、感じる？」

「う……。ん。くうん……。あんっ。感じ、るよ……」

正臣は真理の耳元に唇を寄せ、耳朶みみたぶを甘噛あまがみした。そして耳元で囁く。

「……。きもちいい……。？」

「や……。だ。あんっ、そんな事……。きかないで……。あぁっ  
っ」

真理は焦らすような正臣の動きに身を振った。

一定の速さを保っていた正臣の動きが少し激しくなり、新たな刺激に真理の背が反り返る。

「あんっ！だ、めえ……。あああつっ！！」

「真理。好きだ……。好きだよ……」

正臣は夢中になって、真理の中で動きながらその言葉を繰り返す。  
「好きだっ。まりっ……」

「私も、私も好きよ……。ああっ！あんん……。やあんっ！」

「まりっ。好きだ……」

「正……臣っつ。んっ、はああ……。あんっ。好き。あっ！」  
体の奥から、次々に快感の波が襲う。

だんだんと自分の心も体も、高みへ昇りつめていくのが解る。

「きもち、いいよ……。ああっ！正臣……。っ！」

「真理……。まりっ！」

夢中になって真理の名前を呼び続け、正臣は真理を感じ続ける。  
体が止まらない。欲望に忠実になり続ける自分がそこに居た。

「好きよっ！正臣っ！私……。ああっっ！！」

「まり……。俺、もうっ……」

自分の欲望を解き放ちたい気持ちに駆かられる。それを促うながすかのよ  
うに真理が正臣を締め付け、正臣はもう我慢が利きかない。

「真理。ダメだ……。俺っ！」

「きて……。私も、ダメ……。は……。あんっ！ああっ、！」

「まりっ！好きだ……。！あ……。っ……」

「まさお……。み……。っ！！んっ……。ああっつあ！」

最後に大きく動いて正臣の動きが止まる。

真理は正臣に抱き付いたまま、彼の全てを受け止めた。

「……。大好き……」

愛しそうに正臣を抱き締めたまま、幸せそうな声で真理が囁く。

まだ静みきらない荒い息を吐きながら、顔を上げて正臣は真理を見詰めた。

「まり……」

赤く染まった頬。ちよつと汗ばんだ体。潤うるんだ瞳で自分を見詰める真理に、正臣は軽くキスをして、そして囁く。

「愛してる……」

正臣の無期停学はまだ解けないが、とりあえず真理は週明けから学校へ行く事になった。

とは言っても、本人が妊娠中という状況が状況だ。

予め両親は、正臣が言ったことで少々事情を知っている佐藤に相談をし、何があっても対応できる体制を作ってもらった。

真理が妊娠をしている事。その相手が正臣である事。正臣が3年生になり、4月に本人が18歳になったら籍せきを入れ、6月には父親になる事。

学校でそれを知っているのは、校長、教頭、佐藤、真理の担任、養護教諭、そして井関の後に2年2組の担任に納おさまった川村。この6人。

そして、もう一人……。

「おはよーございまーす」

週明けの月曜日、太田綾は、少々気取って飛び切り元氣の良い声で立花家の玄関を開けた。

真理が母親と二人で居た時の市営住宅には良く遊びに行っていたが、綾がこの家に足を踏み入れるのは初めてだ。

本来なら友人の家。遊びに来た事があっても良いようなものだが、姉弟になった弟が弟なうえ、学校でも色々合った。

遊びに来たくても来られなかった。というのが本当の所だ。

「おはよう綾。ありがとう。迎えに来てくれて」

一番の友人の綾に、真理は自分の事情を電話で話した。

綾も最初は驚いていたが、決して真理が中途半端な気持ちではないと感じ取ると、真理が学校に居る間彼女の力になると約束してくれた。

とりあえず登下校時に何かあつたら困るから、という事で、朝迎えに行くと言し出てくれたのだ。

電話では話したものの、直接顔を合わせるのは久し振りだ。

真理は何となく気恥ずかしくて、照れ笑いをしながら綾の前に出る。そしてちよつと肩を竦めた。

「照れるな。照れるな。そんな幸せそうな顔見てたら、こつちまで恥ずかしいぞっ」

綾が冷やかす。友人同士二人で笑い合っていると、リビングから正臣が出てきて、それを見付けた綾がビクツとした。

「おはよう。太田さん」

「あつ・・・おはようございます・・・」

何となく敬語になってしまう。明らかに自分を見ておののいている綾を見て、正臣が小さく吹き出した。

「そんなにおっかながなくなつて、何もしねーから」

その顔は、明らかに学校で見たものと違う。真理に話しは聞いていたものの、半信半疑はんしんはんぎだった綾は言葉を失った。

「大丈夫だよ。綾・・・」

真理がクスクス笑う。

「正臣は、もう大丈夫だから」

そう言つて正臣に笑顔を向けると、正臣も真理に笑いかける。

あら・・・、何か幸せそう・・・。そんな二人を見て、ついつい綾が赤くなつてしまった。

「うわっ。本当に少しお腹出てるー」

歩きながら真理の腹部に触れた綾は、驚いた声を上げた。

「うん。だから制服のスカートがもう合わなくてさ。お母さんが、ウエストがゴムで同じ様な箱ヒダスカートを探して来てくれたの」

そう言われれば、同じ紺で似てはいるが、微妙に生地きじや感じが違う。

「卒業する頃はまだ6ヶ月の中くらいだし、お腹もそんなには大きくならないらしいから、何とか誤魔化しまかせるんじゃないかと思うんだけど……」

真理が自信無げに言うと、綾は真理の背中をポンポンツと叩いた。

「私も協力するからさ。頑張ろっ」

頼もしい友人の言葉に笑顔を返す。と、その時、

「……やっと、ご登校かよ……」

そんな声が背後から聞こえた。

振り向いた二人は声をかけて来た者を見て、同時に体を硬かたくする。

「待ちくたびれたぜ……。「オネーチャン」」

達也達3人が、腕を組んで真理を見ていた。

48・「愛してる・・・」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

これから幸せのビジョンが広がっていくはずだった真理の前に現われた、新たな不穏の陰。

真理を待ち伏せした、3人の目的は・・・？

それは、次回。

\*お礼\*

前回のあとがきに書かせて頂いた「お知らせ」に関して、沢山の励ましのメールを頂きました。

本当に有難う御座います！ご心配をおかけしまして申し訳ありません。玉紀はとても元気を頂きました！

メールを頂いた方全員に直接お返事をしたいのですが、メルアドが記載されていないものがほとんどで、お返事をする事が出来ません・・・すみません。

ですので、この場を借りてお礼申し上げます。

私なんか暖かいお言葉を沢山頂き、本当に本当に有難う御座いました！

ラストまで頑張ってお書いていきますので、どうぞ宜しく御願います！

49・「正臣の話して、何？」

「随分ずいぶんと長い事お休みだったようだな」

冷やかすような口調で、達也は真理の前に立った。

「ん？」

腕を組んだまま、真理の顔を覗き込む。反射的に真理は一步後ろに引いた。

その時、真理のオーバーコートの袖そでを掴つかんでいた綾あやの手が震えているのに気付いた。チラツと綾に目をやると、明らかに綾あやは怯おびえている。

真理は達也たちに絡からまれるのは初めてではない。

今まで色々有って、良い事ではないが少々めんえきの免疫めんえきは出来ている。

しかし、綾にそんな経験はない。

このままではいけない。と思った真理は、自分を落ち着かせるように息を吐きながら言葉を出した。

「何の用？」

「ちよつとな。話があるんだよ」

「何の話？」

「正臣の話しに決まってるだろうがよ！」

達也の声色こわいろが変わった。

その迫力に怯おびえる綾を庇かばうように、もう一步後ろへ引くが、健と秋光が後ろへ回って先をふさぐ。

正臣は、もう付き合えないって言った、って言っていた。その事で私に何の話があるって言うの？

「悪いけど。学校に行ってからにしてくれない・・・？」

ここはあまりにも人通りがなさ過ぎる。真理は怯おびえる綾を安心させようと、自分の袖そでを掴つかむ綾の手をグツと握にぎった。

しかし、その言葉に気分を害したか、達也の口調が更に荒くなる。「学校じゃ話せねえからここまで来てんだらうがよ！つべこべ言わ

ねえで連いて来りゃあいいんだ!!」

そして、綾に目を向けると、いきなり綾の腕を掴む。

「ネーチャンがダメなら、こっちのネーチャンに話し聞いてもらったっていいんだぜ!」

「や・・・だつ!」

綾が肩を竦める。真理は慌てて達也の腕を掴んだ。

「やめて!」

達也が真理の顔を見てニヤツと笑う。

「・・・どうする?ネーチャン・・・」

「・・・話し、聞くから。私が行くから。やめて」

達也は綾から手を離し、真理に向かつて「連いて来い」とでも言うように顎をしゃくると、先に立って歩き出した。

「綾。学校に行つて。私ちよつと行つてくるから」

そう綾に告げるが、こういう場合で「はい、いつてらっしゃい」という友達は居ない。綾は慌ててもう一度真理の袖を掴んだ。

「駄目だよ真理。・・・何か有つたらどうするの・・・」

真理はその手を掴み、少々引きつってはいたが、にこつと笑う。

「大丈夫よ。正臣の話じゃ聞かない訳にもいかないでしょう?」

手を外させ、達也の後ろを追う様に歩き出す。

それに合わせるように、健と秋光が綾の横を通り過ぎ、まるで逃げるのを防ぐように真理の後ろを歩き出した。

「真理!駄目だよ!」

綾が半泣きになりながら叫ぶ。と、その声に反応したのは健だった。

健が赤い長髪がなびくくらいの勢いで振り返り、早足で綾に近づいてきたのだ。

真正面に立って身を屈め、綾の顔を覗き込む。

「どうしよう!殴られる?!」

綾が恐怖に身を縮めると、健は綾に顔を近づけ、彼女に「ある事を言った。」

え・・・？綾が顔を上げると、健はそのまま踵きびすを返して、早足で先を歩く3人を追った。

その場に残された綾が呆然ぼうぜんとする。

・・・あの赤い髪の人。何で、あんな事を言ったの・・・？

健は一言、綾にしか聞こえない声で言ったのだ。

「早く、正臣に知らせろ」。と・・・。

「マジで？いいのかよ。本当に？」

正臣は少々信じられない思いで、電話の向こうの佐藤の話聞いていた。

「ああ。マジだぞ。お前の無期停学は今週いっぱいだ。来週から真面目に出て来い。・・・いいか、しっかり勉強しないと、担任の川村君を脅おどして、進学なんか出来ないような内申を付けさせるからな」  
からかうように佐藤が大声で笑う。

「なんだよそれ！」

正臣は、真理が学校へ行く前にしつかりと釘を刺されていた。

「いい？正臣。ちゃんと家で勉強してるんだよ。遊びに行っちゃ駄目だからねっ」と。

本当は学校に真理の様子を見に行ったりしたかったので、正臣は不満そうな顔をした。が、真理は、正臣が大好きな「太陽の笑顔」を作って、「頑張つてね。私と子供のためでしょ？」と言ったのだ。それを言われては、正臣はもう従したがわざるを得ない。

何か俺、今から尻に敷かれてねーか？少々今後に不安を感じる。言われた通り勉強でもするか。と、勉強前の一杯（と、言ってもオレンジジュース）を飲んでみると、佐藤から電話が来たのだ。

来週から学校へ出てもいい。という知らせだった。

正直まこと、教師をひとり懲戒免職ちやうがいめんしよくにするくらいの騒ぎを起こしたのだ。1ヶ月近くを覚悟していた正臣は信じられない。

「とにかく、頑張れや。・・・親になるんだからな」

佐藤が聞いた事のないような優しい声を出す。

正臣は何となく気付いた。きつと自分と真理の事情を知っている佐藤が、自分が真面目に学校へ行こうとしているのを聞いて、校長や教頭に掛け合ってくれたのだろう。そしてそれは、本当に当たっていた。

色々問題を起こし手こずった生徒ではあるが、そんな正臣が自分を改めようとしている。教師として、そういう生徒の姿を見るのはとても嬉しいのだ。

「佐藤先生・・・あの、ありがとう・・・な」

正臣が礼を言つと、言われた当人は嬉しいが照れくさい。

「気持ち悪いぞ、立花！」そう言つて大笑いした。

「やだ、まだ話し中」

綾は泣きそうになりながら、携帯電話で何度も何度も立花家の番号を押した。

家には正臣が居るはずだ。しかし、さっきから何度かけても話し中なのだ。

もつともその時、正臣は佐藤と話していたのだから当たり前なのだが。

「早く立花に知らせろ」赤い髪の人がそう言っていたもの。きつと、正臣君に助けに来させる。って事なんだよね。

綾はめげずにもう一度ダイヤルする。

でも・・・真理を連れ去った人達の仲間が、どうして助けに来させろ、みたいな事を言つんだらう？

健の口調は脅しているものではなかった。むしろ心配げな口調だったのだ。

・・・あの人。どうして？

綾の疑問が解決しないうちに、やっと電話の呼び出し音が聴こえ出した。

繋がった！綾が、縋るように携帯を耳にくくと当てる。

3コールほどで、これまた綾には想像が付かないような丁寧な正臣の声が聞こえた。

「はい。立花です」

「正臣君?!」

鉄筋の階段を登る。下に3部屋、上に3部屋の古びたアパート。先に歩いていた達也が、2階の左端にある部屋の鍵を開けた。「入れ」と言うように顎でしゃくる。

真理が中に入ると、後ろから連いて来た二人も入りドアを閉める。殺風景な部屋。達也が鍵を開けていたのを思い出して、ここはこの人の部屋なんだろうか……。と考えていると、秋光が真理の背中をドンツと押した。

上がれ、という意味らしい。靴を脱いで中に上がったのは良いが、どうしたらいいのか解らない。

真理は不安を隠すように一度大きく息を吐いて、目の前の達也を見た。

「……正臣の話して、何？」

「正臣の奴。もうオレ達とつるめないうって言ってきた。知ってるか？」

「……知ってるわ」

「真面目に学校行くとか、馬鹿なこと言い出してよお」

「……」

「あなたのさしがねか？」

真理は達也から目を逸らした。答えない真理に、達也は違う質問を投げかける。

「正臣……。ガキが出来たって言いやがった」

「……」

「あなた……。正臣のガキ、ハラに居るのか？」

「　　そうよ・・・」

真理が小さめの声で答える。傍にいた健が「大当たりッス」と咳き、秋光に肘ひじで突かれた。

「冗談じゃねえよ・・・」

達也が憎々しげな声を出す。いきなり真理の腕をグツと引つ張つた。

「てめえと暮らすようになってから、正臣はおかしくなりやがったんだ・・・。正臣は、あんなフヌケ野郎じゃなかったのによ！」

掴んでいた腕を投げ飛ばすと、真理は体ごと飛ばされ、その勢いで壁にぶつかった！

「どうやって正臣を丸め込んだんだ！あいつをたらし込むなんて、たいした女だよな！真面目なフリして、とんでもねえ女だぜ！」

壁にぶつかつた体勢のままの真理を、達也はコートえりもとの襟元を掴み上げ、力任せちからまかに傍にあつたベッドの上へ投げ飛ばした！

慌てて真理が身を起こす。しかし達也は、すぐに真理の上に馬乗りになった。

「あの正臣がたらし込まれたんだ・・・。よっぽどいい体してんだろうな・・・」

ニヤツと笑つてコートのボタンを外す。

「やつ・・・め！」

真理の声が突然の恐怖に震える。自分の制服に手をかける達也の手を掴んだ。

「考えてみりゃ、ガキが出来たから真面目になる。なんて夢みたいな事を言い出したんだ。・・・じゃあ、そのガキ、居なくなりやあ

いいんだよ・・・」

「！」

達也が真理のブラウスの襟元を両手で掴んだ。

「・・・妊娠してる女って・・・「どんな感じ」なんだろうな・・・」

布が裂ける音が大きく響き、真理のブラウスが大きく引き裂かれ



49・「正臣の話して、何？」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

仲間を取られた恨み……っていうんでしょうか。

仲間意識が硬い人間ほど、そういつた心理は濃いものです。

ましてや達也は正臣を異常に気に入っていた奴ですから。

でも……。

これはマズイです。へたをするとお腹の赤ちゃんが……。

健が少々不可解な行動を起こしていますが、とりあえずそれは置いて、次回は少々、乱暴なシーンが続きます。

別な意味で、苦手な方はご注意下さい。

では、次回。

50・「赤ちゃん、死んじゃう」（前書き）

\* 注意 \*

今回は本文中に、喧嘩等の暴力シーンの表現が含まれて居ます。そういった表現が苦手な方、嫌いな方はご注意ください。

50・「赤ちゃん、死んじゃう」

「いやあ！触らないで！」

真理はありつたけの声を出して叫んだ。

達也の手から逃れようと身を振り腕を振り上げるが、かえって動けば動くほど達也が制服を剥ぎ取る手助けになってしまう。

「やめて！離して！！」

古びたアパート。もしかしたら薄い壁を通して、叫び声を隣人や階下の人<sup>かいが</sup>が聞き付けてくれるのではないかと微かな期待<sup>かす</sup>を抱いて大声を出してみるが、真理の期待は達也の一言で打ち消された。

「大声出したって無駄だぜ。平日のこの時間に、誰かいると思うかよ。だいたい、隣と下は空き部屋だ」

「やつ……」

声を聞いた誰かが、警察にでも通報してくれるのではないかと考えた思惑<sup>おもわく</sup>は見事に裏切られ、真理の脳裏に絶望だけが広がる。

自分が置かれた状況に対する恐怖感に、体中の血が引いていくのが解った。

「やめて……」

声が震えた。涙が浮かんできて、目の前で薄ら笑いを浮かべる達也の顔が滲<sup>にじ</sup>んでいく。

ブラウスが剥ぎ取られ、スカートも簡単にずり下ろされた。

「……やめて……赤ちゃん、死んじゃう……」

正臣の、赤ちゃん……。死んじゃう……。

「やめてえ！！」

震える声を抑えて、真理は再び大声で叫んだ。

その時だった。

壊れるのではないかというくらいの勢いでドアが乱暴に開き、そ

の音が何の音かを考える前に、真理の体の上から達也の体が転がり落ちたのだ！

いきなり何が起こったのか解らなかつた真理は、そのままの体勢で、床に落ちた達也と、それと入れ替わるように自分の視界に現れた人物を交互に見た。

「テメエ！ふざけんじゃねえ！！」

正臣が、真理の前に立ちふさがって怒鳴った。

綾からの電話で、真理が正臣の仲間に連れて行かれた。と聞いた正臣は、学校以外で連れて行くとすれば自由に出入りできる達也の部屋しかないと思当を付け、すぐにここへ向った。

もしも達也の所でなければ時間の無駄になるところだったが、ドアの近くまで来た時に「やめて！」という真理の声が聞こえ、ここに居ると確信したのだ。

「正臣……」

正臣の姿を見た途端、体中の力が抜ける。

正臣は真理の方を振り返ると、ゆっくりと上半身を支え起こし、すぐ傍に落ちていた制服を拾い上げて真理の手に渡した。

「大丈夫か？服着てる」

そして再び、達也を睨み付ける。

「何のつもりだ達也。テメエ……何のつもりで……」

「お前の訳わかんなくなつた頭、ハッキリさせてやるうと思つてよ」  
薄ら笑いを浮かべながら、達也が立ち上がる。

「ガキなんか居なくなれば、お前の頭も冷めるだろ……。どうやってその女に丸め込まれたんだか知らねえけどよ、「いい子」ぶりやがつて……。気持ちわりいんだよ！正臣！！」

正臣は達也の胸倉を掴んで引き寄せると、思い切り殴りつけた！  
ガタンッ！！達也の体が吹き飛び、壁にぶつかる！

「今度真理に手え出してみろ！テメエ、ぶっころしてやる！！」

殴られて口の中を切ったらしい。口に中に溜まった血をペツと吐くと、今度は達也が正臣に掴みかかってきた！

「おもしれえ！出来るモンならやってみやがれ！！フヌケになったテメエに何が出来るってんだ！！」

正臣は自分の胸倉を掴む達也の手を引き剥がし、足で腹を蹴り飛ばす！再び達也の体が壁に叩きつけられた！

身長は正臣のほうが高い。しかし、体格は断然達也のほうが良い。血の気も多くキレやすい達也が、正臣をリーダーにして付き従っていたのは、正臣の腕っ節の強さと度胸の良さに惚れ込んだせいだ。そんな二人がやり合ったところで、勝ちが決まっている。

「真理に手を出すな！もう2度とな！！」

まだ座り込んでいる達也の胸倉を掴み、顔を近付けて睨み付けると、その時、真理が叫んだ。

「正臣！喧嘩しちゃ駄目！」

「真理……？」

「喧嘩……しちゃダメ。……また学校、行けなくなっちゃう……」

もしもここで大喧嘩にでもなったら。

もしもどちらかが大怪我をして、それが大事になったら。

または、騒ぎを聞きつけた近所の住人が、警察にでも通報したら。せつかく正臣に、将来の希望が見えてきているのに……。

真理はボタンが止まらない状態のブラウスの前を押さえ、ゆっくりとベッドから下りた。

「帰ろう。正臣。今すぐ。……もういいから。もういいから、すぐにここを出て行こう！」

真理の事を考え、正臣が達也を掴んでいた手を離し立ち上がりかける。と、その時！

ドガツッ！！達也が、立ち上がりかけていた正臣の体を思い切り蹴飛ばした！

体勢を崩し正臣が仰向けに床へ倒れると、達也はその上に馬乗り

になって、1発2発と連続で正臣を殴りつける！

「女のいう事はつかきいてんじゃねえよ！このフヌケ野郎が！！あんな女に丸め込まれやがって！ム力つくくったらねーんだよ！！」

自分を殴る達也の両手を、正臣が素早く掴む。そして、真剣な目で達也を見上げた。

「ム力つくんなら・・・おさまるまで殴りゃあいい・・・好きなだけやれ・・・でもな。2度と真理には手出しするなよ」

しかし、その落ち着いた口調は、更に達也の怒りを刺激する。

「ふざけんな！！」

達也は立ち上がると、今度は正臣の胸を踏みつけた！

その瞬間、息が詰まる。体を捻ひねってうつ伏せ気味になり咳せき込むと、それと一緒に血が出て来た。

「そんなテメエ、見てられねえんだよ！望み通り好きだけやってやらあ！！」

何度も何度も連続して正臣の体を蹴りつける！

正臣は達也に背を向けて自分の体を庇かばったまま、決して手出しをしなかった。

「やめて！もう、やめて！！」

真理が叫びながら正臣の傍へ駆け寄ろうとした。

しかし、その時・・・。

ズキン・・・！

「！！」

いきなり腹部に、刺すような痛みが走り、真理の動きが止まる。

「・・・い・・・た・・・」

腹部の痛みは下半身に広がり、重苦しく真理の全身を包み込む。

「いた・・・い・・・」

真理は両手で腹部を押さえ、思わずその場に座り込んだ。

お腹が痛い・・・。下半身が、刺すみたいに痛い・・・。

その痛みに真理は動けない。顔を上げると目の前には、自分の為  
に手出しをせずに達也に蹴りつけられる正臣の姿が見える。

「・・・正・・・臣・・・」

真理のその異常に最初に気付いたのは、ずっと正臣と達也の様子を傍観ほうかんしていた健と秋光のうち、健のほうだった。

「おい！ネーチャン、変ツスよ！」

健の声で正臣が真理を見る。

真理が両手で腹部を押さえ、前屈まえかがみに座り込んで、苦しそうに体を震わせている。

真理の顔は苦痛に歪み、冷や汗が流れていた。

「ま・・・さ・・・おみ・・・」

助けを求めるように絞り出される声。

「真理！」

正臣は達也を押し退けると、蹴られて痛む体を引きずるように真理の傍へ寄った。

「真理！どうした？！真理！！」

真理の両肩を掴む。

真理は苦しくて息が荒くなっている。腹部を押さえる両手に力がかもった。

「まさ・・・お・・・み・・・。赤ちゃん・・・死ん・・・じゃう・・・」

突然の腹部への痛み。体中を突き抜ける苦痛。

その苦痛に耐えられなくなった真理の意識が、フツと、途切れた。  
「真理！！」

50・「赤ちゃん、死んじゃう」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

犯されそうな恐怖に、正臣への暴行。

精神的にも肉体的にも、妊娠初期の女性には決して良いものではありません。

いきなり腹部に痛みを感じた真理。

まさか？

それは、次回。

## 51・「幸せにするから」

「切迫流産です」

医師の言葉に体が固まった。

我ながら、とんでもなく驚いた顔をしてしまったに違いない。と、正臣は思う。

流産・・・？じゃあ、子供は・・・？

診察室で医師と向かい合い、膝の上の両手を握り締めながら愕然がくぜんとしている正臣を見て、目の前でカルテを広げていた医師は慌てた。「切迫流産は、流産が始まりかけの状態の事ですよ。本当に流産した訳ではありません。奥さんの場合は進行した物ではありませんでしたから、妊娠はちゃんと継続されています」

一気に体の緊張が解けると。あまりにも一気に力を抜いたので、一瞬椅子から落ちそうになった。

達也の部屋で急に腹痛を訴えた真理を抱えて、病院へ駆け込んだ。先週まで真理が入院していた病院だ。

若い父親と母親だったせいか、ちょうど居た産婦人科医が正臣を覚えていてくれた。

「奥さんは・・・まだ11週ですよね・・・」

医師がカルテをペンの背でなぞり、確認するように口に出してから、正臣に目を移す。

「特に、初産ついでんの場合、妊娠初期っていうのは非常に流産しやすいんです。激しい運動や、お腹をぶつけるなどの肉体的なもの他に、精神的ストレスなんかも流産のきっかけになったりします」

正臣はついさっき、達也の部屋で起こった出来事を思い出していた。

見知らぬ場所に連れて行かれ、犯されそうになる恐怖を味合わされる。

更に、目の前で正臣が暴行を受けた。

精神的に、決して良いものではない。

「精神的なものは、本人が気をつけていても奥さんだけではどうにもならない事が多いですので、ご主人も気を付けてあげてください」  
医師の言葉に、正臣は「はい」と返事をして頷いた。

頷いてから、もともと義姉弟であり苗字が同じなのでしようがないが、完全に正臣と真理を夫婦だと思い込んでいた医師に「ご主人」「奥さん」と呼ばれていた事に気付き、遅ればせながら少々照れた。

出血は少量だったものの、失神するほどの痛みを伴っていたこともあって、様子を見るために真理は3日間入院することになった。  
「せっかく・・・退院したばかりだったのにな・・・」

正臣はそう呟いて、病室のベッドで眠る真理の顔を撫でた。  
両親にはさつき連絡をして、真理がまた入院をする事になったのを伝えてある。

本当の事は伏せて、登校途中で腹痛を起こした、とだけ説明した。  
時間を作って、後から真澄が様子を見に来るらしい。

「ごめんな。真理」  
真理の髪を撫でる。

「俺のせいで・・・こんな思いさせて」  
と、その時、ドアにノックの音がした。

真澄が来たには早すぎる。とは思いつつ、「はい」と返事をする  
と、小さく開いたドアの隙間から赤い髪の毛がパラリと見える。

「ネーチャン・・・どうツスカ？」  
健がひよこつと顔を出した。

真理の傍らに座る正臣に、健は黙ってコーラの缶を差し出した。

正臣がそれを受け取ると、健が苦笑する。

「達也からツス」

「達也？」

正臣は改めて缶を見た。ジュースを買う時、何を買おうか迷うものの結局いつもと同じ物で決まる。そんな達也がいつも選ぶコーラの缶だ。

「達也は、何だかんだ悪態ついても、正臣を気に入ってたしムチャクチャ慕<sup>した</sup>ってたツスよ。．．．あんだけ血の気が多い奴が、自分の女を寝取られてたって文句言った事がなかったくらいツスからね」  
健が制服のズボンに両手を入れて、大きく息を吐く。

昔自分がやってた事をチクリと言われて、正臣は缶を眺めながら困ったように笑った。

「正臣を、取り戻したかったんだと思うツスよ。．．．やり方は、どうあれ．．．それは解<sup>と</sup>けてやって欲しいツス。．．．そんな事、無理かもしれないツスけどね」

「いや。解<sup>と</sup>ってる」

正臣はコーラの口を開けた。大きく炭酸が抜ける音かして泡が吹き出す。その泡がこぼれない様に慌てて口をつけて数口飲む。そして大きく息を吐いた。

「あいつが、そういう奴だつてのは、解<sup>と</sup>ってる」

血の気が多くてキレやすくて。でも、自分が信じた人間や仲間は、本当に大事にする奴だ。

正臣は冷たい缶を、右手から左手に持ち替えた。ずっと同じ手で持っていたら手が痺<sup>しび</sup>れてしまいそうなくらい冷たい。

きっと外の自動販売機で買って、すぐ正臣に持って行ってくれと頼んだのだろう。

「なあ、健」

正臣は横に立つ健を見上げた。

「お前、真理の友達に、早く俺に知らせるように言ったらしいな。．．．どうしてだ？」

すると健は照れ笑いをして、赤い髪をグシャグシャッと掻いた。

「恩返し」

「恩返し？」

「入学当初、まだ知り合っていない頃、オレ、こんなんだから当時の3年生3人に絡まれて……。そんなオレを、正臣が助けてくれたツスよ。覚えてない？」

正臣はちよつと頭を捻<sup>ひね</sup>って考えた。……そんな事……あつたよ。うな、ないよ。うな……。

とにかく、あの頃は、思い付いたら、やりたいようにやっていた。健を助けたというのも、あまり深く考えずにやっていた事だろう。変な話、あの時思ったツスよ。オレみたいなのが、正臣の手助けなんて出来るとは思えないけど、この先、本当に手助けが出来ることがあつたら、絶対しよう。って」

そう言ってから、自分が言っている事がおかしいとも言つように、フンツと鼻を鳴らして笑った。

「こんな事くらいで……。って、思われるかも知んねーツスけど」  
「そんな事無いぜ。……。ありがとうな」

正臣に礼を言われ、健は照れるを通り越して赤くなってしまった。  
「ありがとう」など、そんな言葉を人に言われたのは久し振りだ……。

「じゃあ、オレ。行くツスよ。……ネーチャンとガキ……。子供、大丈夫で良かったツスね」

照れながら正臣に背を向けるが、すぐにクルツと振り返る。

「ちよつと……。教えてもらいたいんツスけど……」

「何だ？」

「ネーチャンと一緒にいた友達、なんていう名前ツスか？」

健は、別の意味で赤くなっていた。

「良かった。赤ちゃん無事で」

ベッドの上上半身を起こして、真理は腹部に両手を当てながら安心したように言った。

「正臣。有難うね。助けに来てくれて」

真理が笑顔で言うと、正臣は真理をぎゅっと抱き締めた。

「ごめんな・・・真理。俺のせいで」

「大丈夫だよ。赤ちゃん、無事だったんだもん。・・・私は、大丈夫」

正臣は、切迫流産の痛みに苦しんでいた時の真理を思い出すたびに辛くなる。

平気なはずが無い・・・きつと、凄く辛くて、不安だったに違いないのに。

正臣は真理をより強く抱いた。

俺は・・・ずっと真理を苦しめて来た・・・

真理と子供を守ろう。そう決めたのに。

また、俺のせいで真理を苦しめて・・・

「真理」

正臣は真理の髪を撫でた。ストレートの綺麗な髪。スタイリング剤がシャンプーか、顔を近付けるととてもいい匂いがする。

お前を苦しめ続けてしまったから

だからこそ・・・。

「俺、絶対、幸せにするから」

真理おまえの事、幸せにするから。

51・「幸せにするから」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

真理も赤ちゃんも大丈夫でした！

健がちよつと目立ちましたね。

何か綾が気になるようです。

改めて、真理を幸せにすると誓う正臣。

今回はそんな正臣の風貌がちよつと変わります。

では、次回。

52・「じゃーん。母子手帳！」

「ただいまー！正臣　！見て見てー！」

用事を済ませて家へ帰ってきた真理は、えらく興奮した様子で嬉しそうに叫びながら家へ入ってきた。

そのあまりの興奮ぶりに、リビングで呑気のんきにマカダミアナッツチョコを摘つまんでいた正臣の手が止まる。

「どうした？真理」

リビングから顔を出すと、正臣は部屋に居るのだろうと思い、階段の手すりに手を掛けていた真理が彼を振り返る。

「あー！勉強してなさいって言ったのに！サボってるー！」

「ひと休みしてんだっ！」

慌あわてて言い返す。

真理が、出掛けると言つて家を出て行ったのは朝の9時半。今は11時。1時間半近くも机に向つていれば、休憩のひとつもしたくなる。

月曜に入院して木曜に退院した真理は、どうせだから正臣の無期停学が解ける来週の月曜日から、一緒に学校へ行くことにした。

今日は金曜日。「ちよつと用事があるから」と言つて、朝出掛けで行つた。

何の用事かは言わなかったが、連いて行こうとした正臣に「ダメ！勉強してなさい！」と一言クギを刺したのだ。

改めて正臣は、「俺、絶対、尻に敷かれる・・・。」と不安になつたのだが・・・。

「それより、見て見て！今日、貰つてきたの！」

着ていたダツフルコートを脱いで、真理は斜めがけにしていたバッグから小さな薄い本のようなものを取り出した。

「じゃーん。母子手帳ウチのていぼ！」

葉書はがきくらいの大きさの小さな手帳。表紙には可愛い動物のイラスト

トが入っている。

正臣はそれを受け取ると、表紙をしげしげと眺めた。

「「妊娠届出書にんしんとうけいしゅ」っていうのを市役所に出して、それから貰えるんだけど、その届出書にね「赤ちゃんのお母さんの名前」っていうのと「赤ちゃんのお父さんの名前」っていう欄があるの。・・・何か書く時、照れちゃった」

と言うわりには、真理の口調はとても楽しそうだ。

母子手帳を貰ってから、嬉しくてすぐに書き込んだのだろう。表紙の父母の名前を書く欄に、すでに自分達の名前が書いてある。

それを見て、正臣は照れくさくて頭を掻かいた。

「何か・・・こういう物があると、余計に実感がわくよな・・・」

二人でリビングに入り、ソファに座る。

ソファの肘にコートを引っ掛けて、真理は再びバッグをゴソゴソ探った。

バッグから、コンビニのマークが付いた袋を出し、顔の前でかざす。

「そのコンビニで「あんまん」買ってきたの。食べよっ。お茶入れるから」

そう言っ立ち上がり、キッチンに入っていく。

程なくして、湯気の立つほうじ茶が入った湯のみを二つと、小皿を2枚、トレイに乗せて真理が戻ってきた。

コンビニの袋から「あんまん」を出して、紙包みと後ろの紙をはがし、小皿に乗せて、ほうじ茶と一緒に正臣の前に置く。

別にコンビニで「あんまん」を入れてくれる紙包みのままでも良いのに。そう思いはするものの、真理が自分の為にかかしてくれるのがとても嬉しい。

幼い頃に母親を亡くし、自分ひとりで好き勝手をやってきた彼にとっては、くすぐったいくらいに嬉しいのだ。

「ほら。ちゃんとしまっとけよ。汚したら大変だ」

正臣から母子手帳を受け取ると、真理はニコニコしながらバッグ

の中に入れる。と、それと入れ替えに、今度はドラックストアの小さな袋が出て来た。

「真理……。いつたい、そのバッグの中にはどれだけの物が入ってたんだ？」

女の鞆かばんは重い。とはよく言うが、妊婦にんぶがそんなの下げちゃマズイだろ……。

呆れた顔をする正臣の前で、その袋から「ある物」を取り出す。

「大事な物よ。ホラ」

真理が出して見せたのは、自家用ヘアカラーリングキットだった。

「カラー……って。真理、茶髪にでもすんのかあ？」

驚いたように言う正臣を、真理がちよっとキツと睨む。

「正臣のよ！ほらっ。ここ見て。ここっ」

キットの箱に書いてある文字を指差す。そこには「黒髪戻し用」と書いてあった。

「え?!俺?!」

正臣は思わず両手で自分の金髪を押さえた。

「当たり前でしょ!ちゃんと髪のもも黒くして、来週から学校に行こう!前髪ももう少し切ろうね!私、切ってあげるから!」

「いいって!別にこのまんまで!いきなり黒くなんてしたら気持ちワリーだろう!」

「キンキラキンのままでいて、生まれて来た赤ちゃんが、自分のパパは外人なんだって思ったらどうするのよ!」

はつきり言っつて、そんな事はない。

しかし、生まれてくる子供の話しをされると、正臣はそれ以上は何も言えない。

「せっかく、ちゃんと学校に行くなって決めたんだもん。……私の為にも……ね?」

お願いするように両手を合わせて小首を傾かしげ、笑顔を作る。正臣は真理から顔を逸そらし、頭を掻かいた。

「解ったよ……」

今の真理の仕草が、妙に可愛い。少々赤くなってしまった自分に気付く。

「……何か俺。本当に真理に逆らえなくなってるねー？」

自分に呆れつつ真理を見ると、ちょうど「あんまん」に口を付けているところだった。

「真理。気を付けないと、あつついぞ。お前、猫舌だろう？」

「大丈夫だよ。買って10分以上経ってるし。ほら、そんなに熱くな……あつつ……！」

平気な顔で食べていた真理が、いきなり顔を歪めて口を押さえた。

「ほらみる。コンビニの「あんまん」はな、外側が冷めてても中のアンは異様にあつついんだよ。だから言ったらろうが」

「ほんはほほひっはっへ……」

「そんな事言ったって……」と言おうとしたのだったが、舌が回らない。

唇を半開きにして、舌を冷ますように少し出し、口で息をする。

正臣はそんな真理をジツと見て、おもむろに真理の肩を抱き寄せ、その唇に自分の唇を重ねた。

いきなり何？とは思うものの、特別真里も抵抗はしない。

正臣の程よく暖かい舌と、真理の熱さで痺れた舌が絡まる。

肩を抱き寄せていた腕を真理の腰に回し、より自分に密着させるように真理の体を抱き締める。

真理の唇を吸い上げながら唇を離すと、正臣は不満そうに真理の唇に親指を当て、なぞった。

「……そういう口すんなよ……。「そそる」だろ。昼間っからよ……勉強できねーよ……」

真理が赤くなってクスツと笑う。

「前にもあったね。こういう事」

以前、正臣が井関を殴り、自宅謹慎を受けた時。

二人で家に帰ってきて、熱いココアで真理が舌を傷めてしまった。

二人が、初めて心を通じ合わせた日。

初めて、「恋愛」のセックスをした日。

「真理」

正臣はもう一度、真理を強く抱いた。

「好きだ・・・」

でも今は、初めて心を通じ合わせたばかりの頃とは違う。

「正臣」

幸せそうな声でその名を呼んで、真理は正臣に寄り掛かった。

「大好きよ」

今の二人には、強い確かな繋がりがある。

お互いを愛する気持ちがある。

「大好きよ。正臣」

真理はもう一度囁いて、正臣の腕の中で微笑んだ。

立花家の門の前。

その男は、真理が中に入った時から、ずっとそこに立っていた。

正確には、真理をコンビニで見かけて、それから後をつけて来ていた。と言った方が正しい。

冬の冷たい風が吹く。

その風と同じくらい冷たい目で、男はその家の中に居るであろう人間に目を向けている。

「立花・・・正臣・・・」

弦く声は、無感情だった。

52・「じゃーん。母子手帳！」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

前回、「風貌が変わります」って書いたんですけど、キスさせてたら変わるところまで行きませんでした。すみません。

幸せそうなので許して下さい。

とりあえず正臣には金髪はやめてもらいます。（笑）

さてさて、幸せな雰囲気のはずなのですが、何か誰かが見えていますよ。

何でしょうか……。

では、次回。

53・「クリスマスでしょっ」

「まあ……」

真澄は感動するように声を漏らし、お茶を出そうとしていた手を止める。

「……」

正孝は呆然ぼうぜんとして、新聞を持つ手も止まり「それ」を凝視ぎょうしした。

「何だよ、親父。そんな顔すんなよ」

照れながら怒る。そんな言葉があるのかどうかは解らないが、今の正臣まひこが正に「それ」だ。

夕食後、真理が正臣を引っ張り、「正臣。ほら、お風呂行くよ」と言った。

いくら親公認とはいえ、こんなに堂々と二人で入浴か?!と両親は焦あせったが、どうやらそうではないらしく、浴室からは二人の言い争う声が延々（えんえん）と聞こえていた。

「真理! やっぱ、やめようぜ!」

「駄目っ! やるって決めたんでしょ! いい加減、観念かんねんしなさい!」

「やっぱり変だっ! マズイっ!」

「大丈夫だっ! ほら、暴れないの!」

……何をやっているんだ?と不安になりながら放っておくと、30分ほどしてから、真理に押されるようにして正臣がリビングに入ってきた。

金髪が、真っ黒に変わった、正臣が。

「まあ……」

「……」

そして真澄は感動の声をあげ、正孝が呆然とした。

「似合うでしょ? 前髪も少し切ったんだ」

正臣の後ろから、ヒョコッと顔を出し真理が笑う。

言われてみれば、いつも目を隠し気味にしていた長めの前髪が少々短くされ、正孝似の目がしつかりと前髪の下に出ている。

相変わらず父が呆然としているのを見て、正臣は自分の後ろにいる真理を振り返った。

「ホラ見る真理！やっぱ変なんだ、って！親父何も言えなくなっ  
てんじゃん！」

「そんな事ないよね！お父さん！」

真理が正孝を見る。と、正孝はやはり呆然とした顔のまま首をたてに振った。

「こんな正臣を見るのは・・・何年ぶりかと思ってね・・・」

小学校はともかく、中学生の頃にはもう金髪になっていたのだ。

黒い髪 of 正臣を見るのは5年ぶりくらいか・・・。

「あとはだんだん本物の黒い髪が伸びてくるから、カラーリングが落ちてきちゃったら、ちゃんと自分の髪が伸びてくるまで、そこに黒い色入れておけば大丈夫でしょ」

真理は後ろから正臣を覗き込んだ。

「似合うよ。正臣」

につこり笑う。真理に褒められると嬉しい。正臣は照れくさそうに、黒い髪を搔かいた。

「本当に変じゃねえ？」

「・・・しつこい・・・」

「変じゃないってば。今度言ったら怒るよ」

怒るよ、と言いつつも笑いながら、鞆かばんの中身をチェックする。

明日の月曜日から、正臣の無期停学も解とけ、真理も2週間ぶりに登校する。

「明日行ったら、最初に佐藤先生に挨拶に行かなきゃね」

それを聞いて、壁の鏡を眺めつつ、何度も横を見たり後ろを見た

りを繰り返していた正臣が、はーっと大きく息を吐いた。

「絶対ハラ抱えて笑うぞ。『気持ち悪いぞ、立花!』とか言ってさ」「そうかな?褒めてくれるよ。きつと」

「いいや。絶対笑う。あいつはそういう奴だ」

すると真理は、正臣の横に立ち、ツンツと横顔を突つていた。

「『あいつ』なんて言っちゃ駄目。・・・私たちの事、解ってくれてる数少ない人なんだから。ちゃんと挨拶しようね」

「解ってるよ」

正臣は抱っこするように真理を持ち上げると、そのまま静かにベツドの上へ寝かせた。

流れのままにキスをしようとする、真理が素早く止めるように顔の前で手をかざす。

「キスだけだよ」

「・・・なんで?」

「そのあと」「もしようとしていたらしい。」

「明日学校だもん」

「いいじゃん。別に」

「2週間ぶりに行くんだもん。授業中にポーっとなっちゃったら困るでしょ?」

「・・・なっちゃうの?」

真理は赤くなって、大きく首をたてに振った。

嘘ではない。実際今までだって、体を重ねた事を思い出して、ポーっとしてしまった事が何度もある。

正臣は笑いながら、真理に優しくキスをした。

「じゃあ、今日は我慢する」

そしてもう一度、唇を重ねる。

「我慢してくれたら褒美に、いい事教えてあげる」

真理が正臣の唇に人差し指を当てた。

「今日、お母さんと買い物に行った時ね、ケーキの予約してきたんだよ」

「ケーキ？誰かの誕生日？」

「・・・正臣。今、何月？」

正臣が真理の部屋の壁にかかるカレンダーを見る。  
ソフトフォーカスがかかった花の写真が使われた、月めくりカレンダー。

真理らしく、学校の予定や個人的なスケジュールなどが、日付の下に書き込んである。

ちなみに明日の所には、「正臣と学校」と書いてあった。

「12月」

「12月といえば？」

「師走しわす」

ぺしっ。髪が短くなって叩きやすくなった正臣のおでこを、軽く叩く。

「クリスマスでしょッ」

正臣は「あーそうかー」という顔をするものの、すぐにまた不思議そうに訊く。

「で？何でケーキ予約すんの？」

「普通するでしょ？」

「だって。クリスマス当日でも普通に売ってんじゃん」

「限定とか、クリスマス用とか、普段出ないようなやつは予約しないと駄目なのっ」

「へーえー」

本気で驚いている。思えばクリスマスなどというイベント事とは、あまり縁のない日々を過ごしてきた。「クリスマスのケーキは予約するもの」などという女性的行動を知らないのも無理はない。

「おっきいの予約してきたから、いっぱい食べようね」

正臣が甘党なのを知っているので、真澄に「え？」と驚かれながらも大き目のケーキを予約したのだ。

「クリスマスか・・・。変な気分だな。なんか」

正臣は口にするだけで何となくすぐったい。

真理はちよつと照れたような顔をする正臣の髪を撫でた。

「これからは、ずっと、ずっと一緒のクリスマスだよ……。来年はもう一人増えるし」

真理だつて、幼い頃を除けば、今まで友達や母と過ごすクリスマスは知らない。

「家族」で、しかも「好きな人」と一緒に過ごすのは初めてなのだ。少々大きめのケーキを予約してしまったのも、やはりどこか浮かれていたからかもしれない。

自分を撫でている真理の暖かい手。正臣はその手を取って、しげしげと眺めた。

「真理。お前さあ……」

「何？」

そのまま真理の手をジーンと見て、思い直したように自分の頬に持つていく。

「キスしていい？」

さつき、何を言おうとしたんだろう？ そう思いながらも、「いいよ」と真理が笑う。

「いっぱいしても、ポーっとしないか？」

「しないよお。キスくらいじゃ」

真理がクスクス笑う。正臣はちよつとにやっと笑った。

「よし。じゃあ、ポーっとさせてやるっ」

そう言つて唇を重ねる。

何度も何度も。唇を重ね、離して。

何度も何度も。お互いの吐息が絡み、一緒になった。

「……ポーっとしそっ……。正臣……」  
真理が囁く。

「……していいぜ」

幸せな時間を刻み続ける運命の時計。

その時計の針が、時を急ぐように早回りし始める。

月の満ち欠けを・・・急がせるかのように・・・。

53・「クリスマスでしょっ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

今が2月だというのに、クリスマスの話ですみません。

物語の進行上、12月になっています。

何となくお気付きになったかと思いますが、物語も終盤に入ります。

これから、ある運命が回り始めます。

二人に。

では、次回。

54・「誰が見てる」

「なあ。真理」

「変じゃないよ」

正臣に何か訊かれそうな雰囲気を感じて、すぐに答える。

髪の毛が黒くなったのを本当に変じゃないか、しつこく訊こうとしているのだろうと思ひ返事を返したが、正臣はちょっとムツとして、真上から真理の頭をコンツと指の関節で叩いた。

自分より30センチも背が高い人間に、真上からこれをやられると、意外に痛い。

「正臣い。痛い」

「俺そこまでしつこくねーよ。そーじゃなくてさあ……」

月曜朝の通学路。同じ制服を着た生徒達が行きかう中、正臣は辺りをキョロキョロと見回す。

「何か、さつきから見られてるような気がする」

「今までキンキラキンだった人が、真っ黒い髪になって制服着てるんだもん。そりゃ見るよ」

その前に真理と一緒に歩いているのが「あの」正臣だと、すぐに気付く人が居るのかどうか問題だ。

「いや。そういうんじゃないよ……」

なんて言うか……もつと「違う意味の視線」っていうか……。「誰が見てる」

正臣が何か考えるような顔をしているのを見て、真理が首を傾げる。と、その雰囲気吹き飛ばすような元気な声が、道の向こうから聞こえた。

「おはよー！まりーい！」

綾だった。

今日から正臣も一緒という事で、朝迎えに行くのは遠慮した。いつも大体、学校の前くらいで一緒になる。

「おはよう綾」

「大丈夫？具合悪くない？・・・悪阻は？」

最後のほうだけコソツと小声になる。真理は嬉しそうに笑った。「心配してくれて有難う。たまにちよつとだるくなるけど大分治まったみたい。もう4ヶ月目に入ったしね」

「へーえ。そういうもんなんだ？良かったね」

素直に真理の体調を喜んでから、そういえば一緒に居る正臣に挨拶をしていなかったと思ひ出し、真理の横に目を向けた瞬間、口を開けたまま目を見開いてしまった。

「おはよう。太田さん」

先に正臣が挨拶をするが、綾は言葉が出ない。思わず正臣を指差して、びっくりした顔のまま真理を見てしまった。

「私がやってあげたんだよ。似合うでしょ」

「まっ・・・まっくろになつてるっつ」

「・・・やつぱり、変なんじゃねーの？」

正臣は再び不安になった。

「気持ち悪いぞ！立花！」

「・・・言つと思つた。」

正臣はしかめっ面をして、横に立つ真理を肘で突いた。学校へ来て、一番最初に職員室の佐藤の所へ来た。

挨拶するために二人できたのだが、正臣を見た瞬間、正臣の予想通り佐藤がそう叫んだのだ。

「真っ黒じゃないか！思いきつた事をしたな！！」

しかし、口調はとても楽しげだ。

「佐藤先生。変じゃないですよね」

真理が、ムーっとする正臣を横目に助け舟を出す。

と、佐藤は椅子から立ち上がり、正臣の背中をバンバンツと叩いた。

「おー！立派なもんだ！よくやった！頑張れよ！！・・・おとうさんっ」

最後のほうだけ、顔を寄せてからかうように小声で言う。それから心配そうに真理を見た。

「日野は大丈夫なのか？先週から来るって言ってたのに、また1週間休みだったから心配したんだぞ」

「すみません。もう大丈夫です。今日から普通に来られますから。・・・って言っても、2学期ももう2週間くらいですけど」

「まあ、でも、具合が悪くなったらすぐ保健室に行って寝てろよ。養護の先生も事情は知ってるから大丈夫だ。あ、一応あとから挨拶はしとけ」

「はい。ありがとうございます」

からかったりはするが、本気で自分達の事を心配してくれている。それが伝わってきて、真理は本当に嬉しかった。

と、その時、2年2組の担任になっている川村が横を通りかかった。正臣のことが解らなかつたらしく、そのまま通り過ぎようとする。

「川村君、川村君。ちょっと、生徒を無視するんじゃない」

佐藤に呼び止められて、不思議そうな顔をしながら川村が寄ってくる。

「川村先生。おはようございます」

目の前に居る、制服を着た黒髪の生徒が、感じのいい挨拶をする。その声が、グレーのメッシュが入った金髪の間から、いつも人を睨み付けていた、制服姿など見たこともない少年の声と重なる。

「立・・・花、くん・・・？」

川村は手にしていた教科書等を、バサバサッと床に落とした。

その瞬間、教室中が静まり返った。

2年2組の教室。ホームルームが始まるまであと15分。その時、

前のドアから見知らぬ男子生徒が入ってきたのだ。

「え？転校生？」教室に居た誰もがそう思った。

しかしその男子生徒は、見知った場所のように教室を後ろへ進み、廊下側の一番後ろの席に鞆かばんを置いたのだ。

そこは、クラスの誰もがあまり関わりたくない人物の席。

「あの・・・君？」

風紀委員であり、クラス委員長でもある根本が、男子生徒に声をかけた。

転校生が来るなんて聞いてはいないが、もしそうでも、その席はマズイ。そこは絶対にマズイ。

「その席は・・・」

「俺の席のはずだけど」

そこはクラスの、いや、学校の問題児。立花正臣の席。

しかし、男子生徒の声を聞いた瞬間、根本はハツとしてその顔を食い入るように見た。

「・・・え？あの・・・」

その声に聞き覚えがある。その目に見覚えがある。

根本が言葉を失くしているのを見て、正臣は苦笑した。

「・・・まつ、しょうがねーか。」

と、その時、

「おい！転校生が居るぜ！」

という、からかうような声と共に、後ろのドアが勢い良く開く。

クラス中に緊迫きんぱくした空気が走った。

それは、間違いなくあまり関わりたくない人物達。正臣と共にクラス中を、いや、学校中を騒がせた人物達。

「誰だろーなあー。見たことねーなあー」

達也がニヤニヤしながら正臣の前に立った。

正臣が自分の後ろを振り返ると、ドアをふさぐように後の二人が立っている。秋光はどこか心配そうな顔で。そして健は苦笑いを漏らしていた。

正臣は特に睨み付けるのでもなく、フツと笑うと達也を見た。

「ダチの顔。見忘れたのか？」

次の瞬間、達也は正臣の横っ面を殴りつけた！

倒れるまでは行かなかったが、一步よろける。教室内に居る女子が悲鳴のような声を上げた。

喧嘩になるのではないかとクラス中が思ったが、正臣は特にやり返す事もなく、今殴られた頬に手の甲を当て「いってえ・・・」と呟く。

それから、達也の顔を見る。

「もう、終わりか？」

達也の顔が険しくなり、正臣の胸倉を掴み上げるが、すぐに忌々（いまいま）しげにその手を離れた。

「クソおもしろくもねえ！おい！行くぞ！」

そう叫び、教室を出て行った。後の二人もそれに続くが、見送るようにその姿を見ていた正臣は、教室を出る間際に振り返った健と目が合い、お互いニヤツと笑いあった。

静まり返っていた教室が、ざわめき出す。

正臣はフーッと息を吐いて、今達也に殴られた頬をさすりながら席に着こうとすると、

「あの・・・大丈夫かい？・・・立花君・・・」

根本が恐る恐る声をかけて来た。

正臣が根本を見る。それと一緒に、クラスメイト達が自分のほうを心配そうに見ているのが目に入って、ちよつと照れくさいような変な気分になってしまった。

「・・・ああ。すまないな・・・。騒がせて」

少しずつ変わっていく正臣が、そこにいる。

全ては、真理の為に・・・。



54・「誰かが見てる」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

少しずつ正臣の周りが変わっていきます。

彼もそれを受け入れていきます。

全ては真理の為に。彼は頑張ります。

そしてそんな彼に触発されるように、彼を取り巻いていた仲間達の気持ちも変わっていきます。

それは、次回。

「ほい」

階段の踊り場で座り込んで、考え込むようにじっとしていた達也の前に、お気に入り(?)のコーラの缶が差し出された。

「冷たいツスよ」

健が達也の前に立って、早く缶を取れ、とばかりに缶を揺らす。

「お前のおごりか？」

「そのつもりツスけど。くれる？120円」

缶を持っている手とは別の手を達也の前に差し出すと、達也はその手をパシッと叩いて、笑ってコーラの缶を奪い取った。

「いいトコあるじゃないツスカ」

サイダーの缶を、壁に寄りかかる秋光に渡し、自分の分のココアの缶を開ける。

いつもはココアなんて飲まない。ただ、いつも正臣が飲んでいたので思い出して買ってみたのだ。

「いくら真面目ぶって制服着て学校に行っただって、今まで散々色々なコトやってきたんスから、すぐにクラスのやつらになんて受け入れてもらえない。でも、オレらと縁が切れてると思わせるように一発殴っておけば、少しは違うだろう。・・・そう思って、正臣を殴ったんスよね。・・・な？達也」

「うわっっ！甘っ！ココアを一口飲んで、健は思わず顔を顰めた。」

「正臣のやつ、いつもこんな甘いもん飲んでたツスカ？！」

「達也は何も答えず、黙ってコーラの缶に口を付けていた。しばらくしてボソツと呟く。」

「俺の、無い脳みそで思いつくのはよお・・・このくらいだ・・・」

「・・・いいトコあるじゃないツスカ」

「今頃わかったのかよ」

照れ隠しのように勢い良く缶をあおるが、まだ中身が結構入って

いた為、口から溢れそうになり慌てて缶ごと下を向いた。

缶を見ながら、フーッと大きく息を吐く。

「ダチの顔。見忘れたか？」そう言った正臣を思い出す。

「・・・忘れる訳ねーだろ。・・・お前は、最高に面白い俺のダチだっただんだ・・・」

「なんか・・・おもしれー事、ねーかなあ」

溜息混じりに呟いた時、携帯の着信音が響いた。

3人がそれぞれ自分の携帯に手をやるが、どうやら着信元は達也だっただらしい。

「おう？」

誰からの着信かも確認せずに出ると、やけに元気な女性の声が聞こえた。

「たーつやーあ？何シケタ声出してんのーお？」

「亜子かあ？」

達也の声がちよつと柔らかくなる。

「亜子は達也の彼女だ。」

正臣が真理だけに構うようになるまで、よく正臣を誘って体の関係を持っていた。

達也もその事を知ってはいたが、何となく見てみぬ振りをしてしまっていたのは、相手が正臣だから、というのと、下手に怒って亜子に嫌われたくない。という、彼にしては気弱な思いがあったからだ。

それだけ達也は、少々亜子に入れ込んでいるところがある。

「お前、こんな時間に起きてるなんて、めずらしーな」

「んー、昨日さー12時前にあがったんだー」

亜子はキャバクラで働いている。真理が正臣と抱き合う亜子を見た時、自分より幼く、もしかしたら中学生ではないかと思っただが、単に亜子が童顔だけで彼女は真理より年上の19歳だ。

「ソレヨリー。シケタ声してたよー。どしたん？」

「んー？なんか面白い事ねーかなー、なんて思ってたよー」

「ん？あー、あるある。あるよー」

「何？何？」

達也の聲が飛びつくように弾む。しかし、次に彼女の口から出た言葉は、衝撃的といえば衝撃的過ぎるものだった。

「あたしねー、赤ちゃん出来たんだー。あ、言っとくけど、間違いないく達也んだかね！」

一瞬の沈黙の後、達也はコーラの缶を握り潰しながら、驚きの叫び声を上げていた。

「正臣っ」

いきなり教室の後ろのドアがこっそりと開き、真理が顔を出した。後ろのドアのすぐ横の席に居る正臣は、ギョツとして半分席から立ち上がりかけた。

「ま、真理っ。どうしたんだよ」

ホームルーム後、あと10分で1時限目が始まるというこの切羽詰った時間帯。どうして真理がここに来ているのか……。

「喧嘩してない？ちゃんと挨拶した？先生に名前呼ばれたら、ちゃんと返事してる？クラスの子、睨み付いたりしてない？授業中はちゃんと教科書出すんだよ。それと……」

「真理」

止まらなそうな真理の言葉を「ストップ」とでも言うように、片手をかざして制する。

正臣は呆れたように立ち上がり、ドアの隙間で心配そうにちんまり立っている真理を覗き込んだ。

「お前。そんな事言いに来たの？」

「だって、正臣、普通に教室に居た事ないでしょう？授業中に出しておく物も解らないんじゃないかと思っいたら心配で……」

俺は新1年生か……。

いささか納得行かない顔で、真理の頭にポンツと手を乗せる。

「大丈夫だよ。喧嘩なんかしてねーし、返事もしたよ」

真理がホツとしたように笑うと、クラス中の生徒が自分達を見ている事に気付き、ちよつと気恥ずかしくなった。

無理もないだろう。2学期中ずつと言つても過言ではないほどお騒がせしていた「噂の二人」が、実に和やかな雰囲気、笑顔さえ湛えて話をしているのだ。

「いったい何があったのか」と、イヤでも勘ぐつてしまう。

と、自分達を見ている生徒の中に根本を見つけた真理は、正臣の陰からヒョコつと顔を出し、根本に手を振った。

「根本くん！正臣、解らないことがあつたら教えてあげてね！大丈夫よ、もう殴つたりしないから！悪さしたら私に言つて！」

「はっ、はいっ！先輩っっ」

慌てて根本が返事をする。

根本も、風紀委員長としての真理をずつと慕つていた一人だ。

その習慣は抜けない。いい返事を返した根本に、真理はにこつと笑いかけた。

根本が憧れた「太陽みたいな先輩」の笑顔。

何となく嬉しくて、根元は赤くなって照れくさそうに頭を掻いた。お前は保護者か……。正臣はそう思いながらも、自分を心配して3年生の教室から急いで来てくれた事が、凄く嬉しい。

「真理。もう戻れよ。時間ぎりぎりになつたつて、お前走れないだろ？」

「大丈夫だよ。小走りくらいなら」

「駄目だ。走つて転んだらどうすんだよ。ゆっくり歩いて戻れっ」

「心配性だね」

「どつちがだよ」

真理はクスクス笑いながらも、心配してくれる正臣の気持ちが嬉しくて、幸せな気持ちになる。

嬉しそうに笑う真理の頭を、正臣は優しく撫でた。

そんな恋人同士のような二人の姿を、事情を知らないクラス中の

生徒達が不思議そうに見ていた事は、言うまでも無い。

ゆっくり戻れ。と言われたので、もうすぐ1時限目のチャイムが鳴る、と思いつつもゆっくり歩く。

3年の教室の前まで来て、後ろのドアの前に誰かが立っているのを見つけた。その姿を見て、ちよつとギョツとする。

赤い髪あかみの細身の少年。それは間違いなく、今まで正臣とつるんでいた健だった。

まさか、また自分を連れに来たのではないか。そう考えて足が止まった。

しかし、ドアの所で健と誰かが話しをしている。その人物を見て、真理は蒼白そうはくになった。

その相手は、綾だったのだ。

もしかして、私が居なくて綾がからまれてるんじゃない？！

「綾！」

慌てて真理は「歩け」と言われていた事も忘れて綾のそばに走り寄ると、庇かばうようにその前に立った。

「何の用？」とばかりに健を睨み付ける。が、それを見て、健はちよつと困ったように笑った。そして綾に向かって言う。

「じゃあ、授業始まるみたいツスから、行くわ」

「うん。またね。健君」

・・・は？健、君？

立ち去る健に、綾がにこやかに手を振る。

「あ・・・あや・・・？」

何が何だか解らないと言う顔をしている真理を見て、綾が赤くなつて笑う。

「何かさー、先週、真理の連れ去り事件の後に「一目惚ひとめぼれした」って告つくられちゃって・・・。悪い人じゃないよ。あの人」

そんな綾を見ながら目をぱちくりさせて、5秒遅れて真理は驚き

の声を上げた。  
「えーっ！っ！！」

55・「心配性だね」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

正臣が変わっていくように。

回りも変わっていきます。

徐々に徐々に……。

次回は正臣が「ある買い物」をします。

何を買うのかな？

話の中では「クリスマス」が近いですからね……。

と、すると……。

それは、次回。

「そうですね。やっぱり一般的に多いサイズは9号か7号ですね。体が小さくても9号や11号の方もいらっしやいますし、体が大きくても7号の方もいらっしやいます」

何の解決にもなっていないじゃん。

クリスマスシーズンの「かきいれ時」。自分の販売成績を上げようと必死なジュエリーチェーンショップの女性店員の白々しい笑顔を、正臣は少々しらけた様子で見っていた。

世間はクリスマスシーズンで大いに盛り上がっているこの時期。

正臣にとってみれば、好きになった女の子と、初めてクリスマスという大きなイベントを迎えられるという嬉しい事実が待っている。

そんな事実気分が良くなったせいもあるが、先日真理がクリスマスケーキの話をした時、真理に何かプレゼントしようかと思いついた。だが、本人に「何欲しい？」と訊いても、真理のことだ、「いらぬいよー」と笑って誤魔化ごまかされるに違いない。

そう思い、内緒で選ぶ事にした。

何となくクリスマス前の男の定番に流されているような気がして少々気恥ずかしいが、指輪にしようかと思いついた。

しかし、問題がひとつ。

サイズが解らない。

こっさり真理のアクセサリーボックスを覗いてみたが、ネックレスのようなものばかりで指輪類がなかった。

そこでジュエリーショップに入ってから、サイズの事を店員に相談してみたのだが……。

「そうですね、解りやすく言えば」

茶髪に厚化粧の女性店員は、自分の後ろで商品のラッピングをしていた同僚をグイッと引つ張った。

「私の薬指で7号。こっちの子の薬指で9号です」

女性二人の手が目の前に差し出される。が・・・  
さほど変わんねーよ！よけいにわかんねーっての！  
男性の正しい思いだろう。

同僚の女性は「太いほうの見本にしないでよっ」と、不快そうな顔をしている。

そんな気にするほど、太くねーよ。正臣は「9号の女性」を心の中で庇かばつてから、目の前に置かれているビロード張りのトレイに目を移した。

その中に、指輪がひとつ置かれている。

どんな感じのものが好きなのか良く解らない。けれど、持っているネックレスは意外とシンプルな物が多かった。シンプルなもの方がいいのかな・・・と考えて探していた時、それを見つけた。

三日月が、大小2つのダイヤを抱えているデザイン。

全体の素材がプラチナなので色的にはシンプルだ。だが、デザインが凝こっていて可愛らしい。

・・・何となく、狙いすぎかな・・・。

月をモチーフにしたデザインというのが、何となく意識しすぎかな。と余計な事を考えてしまったが、まあ、クリスマスみたいな浮かれあがるイベントの時くらいはいいだろう。と、自分を納得させてそれに決めた。

あと、問題は本当にサイズのみなのだが・・・。

「安全策で、大きいものを購入されておけば、大きい場合は後からサイズのお直しが出来ますよ」

それを早く言ってくれ・・・。

「じゃあ、9号で」

その一言を最初に言ってくれば、サイズで悩む事も無かったのに。正臣は心の中で少々文句を言いながら、売り上げ成績をまたひとつ上げ、満面の笑みを見せる女性店員の作り笑いを眺めた。

買ってしまった……。

正臣は、ジュエリー用の柔らかい布地で作られた小さな巾着きんちやくを目の前にかざし、じっとそれを眺めた。

「ラッピングしますよ」とにこやかな笑顔で言ってもらったのだが、指輪の何倍もあるような立派なリングケースを更に箱に入れ、包装の後ろボンをかけ、そして更にエナメル調の紙袋に入れる。とどめに持ち手の下にクリスマスオーナメントのようなリースの飾りが付けられる。

そこまでされると……貰ったほうが引かないか……？

真理辺りだと、きつと見た瞬間に「受け取り拒否」を起こしそうだ。

それなら何気なく手を出してもらって、「はい、あげる」と手の中に落とすくらいの方がサツパリしてて良いのではないだろうか。

サイズの次は、渡し方。何となく悩みは尽きない。

「箱もラッピングも要いらない」そう言ったのだが、いくら何でもそれでは……。と、この小さな巾着に入れてくれた。「プレゼントするまでの傷付き防止にもなりますから」と。

指輪が入った巾着を手でグツと握ぎにって、そのままジャンパーのポケットに手を突っ込む。

何となく、見ているだけで照れくさくなってしまふ。

真理、喜んでくれるかな……。もしかして指輪とか嫌いだったらどうしようか……。その可能性もあるぞ。真理のアクセサリーボックスの中、指輪類が一個も無かつたし。

ちよつと悪いほうに考えてしまい、正臣は気を取り直すように、ポケットの中の巾着をもう一度握った。

いや。大丈夫、大丈夫。余計な事は考えないでおこう。

とりあえず「プレゼントを選ぶ」という、自分にとっては初めての大事な事を終えて、正臣はホツとしたように息を吐いた。

すっかり陽も落ちて暗くなった空を見上げる。息を吐くと、白い息が夜の景色と一体になる。

意識しなくても、耳に飛び込んでくるクリスマスソング。

右を見ても左を見ても、目に入るのはクリスマスの飾りつけ。  
鮮やかなクリスマスデコレーション。

この時期って、こんなにあっちこっちクリスマス一色になるんだっけ？

ずっと、クリスマスなんて意識しない生活を送ってきた。

こんなにも街がクリスマスで賑わい、それが近付いてくるにつれ気持ちも高まってくる。そんな行事だった事を、正臣は知らなかった。

これからは、ずっとずっと、一緒のクリスマスだよ。

真理の言葉を思い出して、無意識のうちに嬉しそうな笑みがこぼれた。

・・・と、その時・・・。

「！」

得体の知れない物を感じ、正臣は思わず表情を固めて正面を見た。そして、何かを探すように右、左、と視線を走らせる。

何だ・・・？今・・・。

もう一度、今度はゆっくり、自分の周囲を見回した。

「視線」を感じた・・・。

何故だか解らない。しかし正臣は最近、「誰かに見られてる」。そんな視線を良く感じている。

何だろうな？「誰かに見られてる」なんて、これじゃあ俺、自意識過剰かノイローゼじゃんか。

ポケットの中で指輪を握る。気持ちをリセットするように息を吐いて、踵を返し歩き出した。

真理が待つ家へ・・・。

自意識過剰、でも、ノイローゼ、でもない。

確かに「彼」は、正臣を見ていた。

信じられないくらい、風貌も表情も変わってきた。そんな正臣を。  
忌々（いまいま）しそくに……。

「お帰り。正臣」

正臣が家へ着くと、真理が小走りでリビングから出てきて彼を出迎えた。

「ただいま……って、真理っ、走ったら駄目だったのっ」  
家の中での小走りくらい許して欲しいものだ。

「用事は済んだの？」

「済んだよ」

真理は玄関に立つ正臣の両頬に手を当て、「つめたーい」と言っ  
て笑った。

学校が終わってから真理を家へ送り、「ちょっと用があるから  
と一人を出掛けていた。

「寒かったでしょ？ココア作ってあげようか？」

ポケットの中の「大事な物」を落とさないようにジャンパーを脱いで、リビングを覗き込むと、テレビの音だけが楽しげに響いている。両親はまだ帰っていないようだ。

「親父達は？」

「ちよつと遅くなるって。先にご飯食べててって言った。ココア  
作ったら、ご飯用意するね」

「ふーん」

正臣はチラツと横に居る真理を見ると、いきなりガバツと胸の中  
に抱き込んだ。

「真理、あつたけーえ！」

「まつ、まさおみつっ、やだっ、つめたいいっ」

外から帰ったばかりの冷たい体を、真理の体温で温めるといっ荒  
技！？ 擦り付けるように体を抱きこまれて、真理はちよつとくす  
ぐったい。

「やだ。やめてよお」

台詞の割には笑顔でクスクス笑う。抱き締められて体温は更に上がった。

正臣は体を離すと、ちよっと赤くなった真理の顔を見詰める。

「真理はいつも温かいよな」

「当たり前でしょ？」

真理がにっこりと笑う。

「私は『太陽』だもん」

その笑顔を見て、正臣も笑顔になった。

そして、どちらからともなく唇を重ねる。

正臣は唇を重ねたまま真理の体を持ち上げると、傍にあるソファに横たえ、そのまま長いキスを続けた。

「俺の『太陽』だもんな・・・」

それを聞いて、真理が笑う。

「そっだよ・・・」

もう一度唇を近づけて、

「正臣だけの『太陽』だよ」

再び長いキスを始める。

正臣が、私だけの「月」だから。

私は

正臣だけの「太陽」だよ・・・。

クリスマスまで、あと10日。

56・「俺の『太陽』」(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

クリスマスプレゼント、って。彼の柄ではないような気もしたのですが、やっぱりそこは、ねえ？(何だ?)

本当は昨日更新できたはずなのですが、バレンタインも近いし、何かいいシチュエーションはないものかと考えていたら、一日延びてしまいました……。バカですねー。

本当は家に帰ってきてからのベタベタシーンは無かったんです。

(笑)

更新日がバレンタインデーなので、少々幸せパターンでいいですよね。(同じバレンタイン更新でも、もうひとつの連載のほうはえらい事になっているというのに……。汗)

今回は、クリスマス前日の話になります。

「前日」ですけど「閲覧注意」になります。(笑)

では、次回

## 57・「一生言つよ」（前書き）

### 注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。

苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は  
その場面にきたらとばすなど。してください。

R - 15 指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

「ねえ、正臣。明日一緒にケーキ取りに行こうね」

パチン。指でコマを押し付けするように置き、白で挟んだ黒いコマ4つを白にひっくり返す。

「ケーキ？ああ。予約したってやつ？」

真理が白いコマを置いた場所を見て、正臣がニヤツと笑った。

「ひっかかったな。真理」

白いコマに囲まれ、ひとつだけ開いたマスに、黒いコマを置く。

「あつ！」

真理が、今気付いた。というように慌てるが、時すでに遅し。

正臣の手で、黒いコマに挟まれた白いコマが大量に黒へと変わり、マス内に置かれたコマの4分の3は黒に変わった。

「やだつ。正臣つ。引つ掛けじゃないの。それっつ」

「気が付かなかった真理がわりのっ」

ニヤニヤしながら、オセロのコマを数枚手の中でカラカラいわす。

正臣は元々頭が切れるせいか、それともずる賢いがしこのが、意外と頭脳系ゲームに強い。

正孝の病院の待合室にあったオセロゲームを見つけて、真理が「なつかしー」と借りて来たのだが、昨日から正臣相手にやり続け早20戦目。その上、8勝12敗。微妙に正臣にリードされている。

何だかんだ言っても、真理も年上。まあ、ひとつだけだが……。妙なプライドが湧き出てきて、負ける度に「もう一回！」と言っていたら、いつの間にかこの回数になっていた。

「あら。正臣君、強いのね。真理も同じくらいの歳の子に負けたこと無いのよ」

二人が座っているソファの向かいで、普通は向かい合ってするゲームを、何故か隣同士でくっつきながらしている息子と娘を微笑ましく見ている正孝の前に、真澄がお茶の湯のみを置きながら笑った。

「真理は、自分に一番有利な手と、次に相手が置いてくる手は読めるんだけど、相手の引つ掛けは読めないよな。だからやられるんだよ」

「スイマセンねえ。読みが甘くて。正臣がずる賢いのよっ」

自分の欠点を言い当てられて少々真理が拗ねると、正臣が自分を指差しながら真理の顔を覗き込んだ。

「だから『ずる賢い奴』に引つかかるんだよ」

「あら？引つ掛けたの？」

「いいや」

真理の頭を抱き寄せ、こめかみの辺りにチュツとキスをする。

「俺が、『引つかかっちゃった』んだよ」

真理が赤くなった。……ちよ、ちよっとお！お父さんとお母さんの前でえ！

という真理の思い通り、正孝がわざとらしくコホンと咳払いをする。

「お前達……。部屋でやりなさい。部屋で」

あまりにも幸せそうな娘の姿に、真澄まで赤くなって後ろを向いてしまった。

学校も昨日、2学期の終業式を迎え、今日から冬休みに入った。

明日はクリスマス・イブ。お昼過ぎに二人でケーキを取りに出掛ける事にしたものの、正臣は「プレセントって、いつ渡せばいいんだろう」と、その日を目前に再び悩み出していた。

「正臣ってば……。お父さんとお母さん、困ってたじゃない」

ベッドの中で、横向きで横たわる自分を後ろから抱き締めていた正臣の手が、パジャマの中へ忍び込んできたのを感じながら、真理は困ったように文句を言った。

「目の前でキスなんかしてえ」

「いいじゃん」

正臣は片肘かたひじを付いて、上からもう一度真理のこめかみにチュツとキスをする、パジャマの中に忍び込ませていた左手で、真理の左胸をキュツと掴つかんだ。

「どーせ、ふーふになるんだしっ」

「正臣が18歳になるまで、なれないんだよ」

左の胸を掴んだ手が、そのままゆっくり揉みしだくように動く。

真理はちよつと喉のどの奥で呻うめいて、肩を竦すくめた。

「あと4ヶ月だ。すぐだよ」

こめかみから耳元へ唇を這わせ、耳に息を吹き掛けるように舌で耳の線をなぞる。左胸を揉んでいた手が右胸に伸び、妊娠中期に入ったせい、最初の頃より大粒になった乳首を指ですり合わせるように摘つまんだ。

「あつ・・・ん。やだあ・・・」

びくんつとしてパジャマの上から正臣の手を押さえるが、もちろん本気な訳ではない。

正臣もそれが分かっている、構わずそのまま乳房への愛撫を続けた。

「でも、悔しいなー」

「何が？」

「子供産まれたら、コレ、赤ん坊のものになるんだよな」

「まあ、ちゃんと母乳が出ればね。・・・って、ああん、こらあ・・・」

会話の途中でも正臣の手は止まらない。その左手がパジャマのズボンの中へ入り込んできた。

「俺、子供にしつかりと言いついて聞かせておこつと。貸してやるけど、

このおっぱいはパパのモンなんだからな。って」

「バカねー。赤ん坊と張り合ってどうするの。・・・あつ！や、んっ！」

正臣の言葉にクスクス笑うものの、さっきから真理の体の上で悪さをする正臣の手が、真理の内腿の間に滑り込み、敏感な部分をキ

ユツと掴むように包み込んだ。

「んっ・・・やだあつ。ああ・・・」

「マズイぞ。真理」

耳元で、ちよつと息が荒くなつた正臣が囁く。

包み込んでいた手から伸ばされた中指が、何の抵抗も無く、引き込まれるようにヌルリとその部分に滑り込んでいった。

「すっげえ・・・濡れてる・・・」

「真理・・・どう？」

どう？つて。そんなの答えられるわけ無いでしょ！バカア・・・。

真理は枕に顔を押し付け、大きな声が出そうになるのを必死で絶えながら、両手でグツとシーツを握り締めた。

「バックからするの、苦しくないか？」

あ、そつちの意味？後背位バックの感想を求められているのかと勘違いした真理は、ちよつと恥ずかしそうに枕から顔を上げ、チラツと後ろを振り返つた。

「大・・・丈夫・・・。苦しくな・・・、ああっ！あんっ、だめっつ！」

あまり慣れない、四つん這いのような格好が恥ずかしくて、真理が枕に顔を押し付け声を出さないようにしている事に気付いていた正臣は、真理が顔を上げた瞬間、ここぞとばかりに腰の動きを早めた。

「やつ、あああっつ！正・・・臣っ！あんっ、はああっつ！だめっ、だめえ！」

思わず背が反り返る。逃げるように落ちそうになつた腰を正臣は両手で支え、そのままゆっくり時折激しく真理の中で動いた。

「んっ・・・んっ、ああ！！やああっんっ！まさおみ・・・い・・・っ・・・」

いつもはあまりしない体位で突かれると、真理の中でいつもとは

違う部分が強く擦り上げられる。

いつもと違う行為が、いつもと違う快感を真理にもたらした。

「まさおみいい・・・ああ・・・ん・・・だめえっ」

泣き声で喘ぐ真理を見ながらクスツと笑うと、正臣は支え上げていた腰を下ろして、自分を真理の中に沈めたまま両足から真理の体を回して仰向けにさせた。

「真理。かわいい・・・」

「・・・いじわる」

頬を赤く染めて、拗ねるように自分を見上げる真理。

それを見ると、正臣の胸の中は真理に対する愛しい気持ちでいっぱいに満たされる。

「真理・・・」

愛しい・・・愛しい・・・。

「愛してるよ・・・」

俺の、太陽。

太陽が、俺の為に輝き続けてくれるなら。

月も、お前を照らし続けるから・・・。

「真理。愛してる・・・」

真理の、ふくよかに膨らみ始めた腹部に押し掛からないように、正臣は体を起こしたまま脚を抱え上げ腰を動かした。

「あっ・・・！あっ、私、もっ・・・。ああんっっ！あ、愛して・・・る・・・っ！」

「本当？もっと言って・・・。真理。もう一回、言って」

「愛してるっ！愛してるわ・・・正臣・・・っ！ああっ！はっあんん」

「真理、愛してるよ・・・真理・・・真理・・・」

愛しそくにその名を呼び、よりいっそう真理を感じるかのように深い所まで自分自身を埋め込む。円を描くように腰を動かすと、真

理の背が大きく反り返った。

「んっ、ああんっ！だめ、だめえ正臣っっ！そんな・・・ああっ  
！！」

さっき、慣れない体位で、散々（さんざん）体が刺激されている。そのせいもあって、真理の体はもう全身が痺れたような感覚と体の奥の疼き（うず）が止まらない。

「正・・臣っ！だめ・・・だめっ！イカせて・・・もうイカせてえ  
！」

言われなくたって、その刺激のせいで異様に高まる真理に更に刺激されて、正臣だつてもう我慢の限界だ。

「まりっ・・・俺・・・ダメだっ、もうイキそ・・・」

「いいよっ！いい、よっ！きて・・・きてっ、もうイクっ！！」

真理が強く強くシートを握り締め、体中が硬直するようにつる。

糸を引くような細い切なげな声を漏らし、正臣に抱え上げられていた脚がピクピクツと震えた。

それと同時に正臣の動きも止まり、その後の余韻（よゐん）を楽しむように数回ゆっくりと腰を動かした。

「まり・・・」

正臣が、真理の顔にかかる乱れた髪をよけて、ちよっと強めの吸い付くようなキスをする。

「真理・・・最高・・・」

頬を染めて正臣を見上げる真理は、両腕を正臣の肩から回し、額（ひたい）同士をこつんとくつつけた。

「正臣・・・。これからも言ってくれる？」

「何を？」

「『愛してる』って。夫婦になったら、男の人って言ってくれなくなるって、聞いたことがあるの」

正臣は軽く真理に口付けて、目を開いたまま、夢を見ているようにうつとりとした真理の瞳を見詰めた。

「俺は、一生、言っよ」

お前にだけ。一生。

「愛してる・・・って。一生」

お前だけに。言い続けるよ。

軽く合わさっていた真理の唇が、幸せそうに微笑む。そして二人は再び、唇を合わせた。

明日は、クリスマス・イブ。

57・「一生言つよ」（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

妊娠中にあんまり激しいのは・・・。（汗）

でも、若いし、安定期に入ったからいいか。（本当か？）

さあ、物語もラストスパートに入ります。

予定では、2月末には完結する予定です。

1〜2日置きの更新でやらせて頂いていますので、あと数回ですね。

それで、次回から最終話になるまで、あとがきは書きません。どうしてもお知らせしたい事が出た時だけ書きます。

正臣と真理。

最悪の状態から育てた二人の愛がこれからどうなるか・・・。  
どうぞ、最後まで、お付き合い下さい。

よろしくお願ひします。

「真理……？」

まどろみの中で目を覚ました。

体に残る、とけてしまいそうな温かさ。

真理の体の温かさが、まだ自分の体に残っている。

ベッドの中で目を覚ました正臣の横に、真理の姿は無かった。

ちよつと首を上げて部屋の時計を見ると、午前9時半。

真理は休みの時でも、普通どおりに起きる。きつと7時頃に正臣を起こさぬよう、こつそりとベッドを出たのだらう。

俺もそのうち、ダラダラ寝てたら怒られるようになるのかな。そんな事を思つて、一人くすつと笑つてしまった。

昨夜愛し合つた後、自分の胸の中で寝てしまった真理の寝顔を、明け方までずつと眺めていた。

幸せで、幸せで。いつまでも離したくなくて。

ゆっくりと上半身を起こし、うんつと伸びをした。

以前までなら、ここで煙草に火をつけるところだが、正臣は枕もとの目覚まし時計の横からブラックミント系のガムを取り、ひとつ口の中へ放り込んだ。

真理と子供を守つていこうと決めてから、正臣は煙草を吸つてはいない。

元々真理は煙草の煙が苦手だし、正臣が吸えば「間接喫煙かんせつきつえん」になつて、妊婦には良くないらしい。もちろんお腹の子にも。

物心ついたときから吸つていたので、やめられるか不安だったが、真理の為だと思つと特に難しい事ではなかった。

カチャ……。控え目を開くドアの音が、朝の静かな部屋に響いた。

「正臣……起きてたの？」

真理がドアの隙間すきまから顔を出す。

「おはよう」

正臣が笑顔で言うと、真理も夕べの余韻よゝんが覚めやらないのか、少々恥ずかしそうに「おはよう」と言って部屋へ入り、カーテンを開けた。

朝の光が部屋の中へ入ってきて、薄暗かった部屋の中が一気に明るくなる。

光、と言っても、今日は曇り。しかし、暗い曇りではなく、明るい曇り空。

「今日はね、午後から雪が降るかもしれないって。天気予報で言ってたよ」

「雪？」

そういえば、雪が降る前の曇り空は明るい。今日雪が降れば、初雪だ。

「ホワイトクリスマスになるかな・・・？」

窓辺に後ろ手を付いて、真理が笑う。

空は曇りなのに、ここには太陽が輝いてるな。そう思った時、真理の服装がちよっといつもと違う事に気付いた。

ストンとした、たつぷり目のジャンパースカート。暖かい暖色系のオレンジにチェックの模様。何というか、ムチャクチャ楽そうな服装。

「真理。そのスカート・・・」

正臣が気付くと、真理が照れくさそうに笑いながらベッドの上に乗ってきた。

「マタニティ用のスカートなの。ほら昨日、祝日でお父さんとお母さん、二人で出掛けていたでしょう？マタニティ用の服。何着か買ってきてくれたのよ。その他にもね・・・さっき、二人が仕事に出る前に見せて貰ったんだけど・・・」

すすすく笑う。思い出し笑いのようだが、その笑い方はとても嬉しそうだ。

「赤ちゃんあかちゃんの肌着とか、おくるみとか、色々買ってきてるのよ。ま

だ男か女か判らないから、とりあえず白とか黄色とか。どっちか判つたら、今度は一緒に買い物に行きましようね。だって」

「へーえ」

まだ4ヶ月だというのに、なんとも気が早い。

しかしそれだけ、両親が楽しみにかけていてくれるのだと思うと、自然と正臣も照れ笑いが漏れた。

「何か・・・嬉しいな」

「うんっ」

正臣は口の中のガムをティッシュに取ると、目の前で嬉しそうに笑う真理にキスをした。

ちよつと舌をチュツと吸い上げると、辛いミントの味でいっぱいだった口の中に、蜂蜜はちみつのような甘さが忍び込む。

「・・・真理。甘い・・・」

「さつき朝食に、ハニートースト食べたの。正臣のキスはスーリースるね」

「ガム噛んでたからな」

そう言ってもう一度。今度は強めにキスをする。舌を絡めて、もう一度甘さを吸い取った。

「ウマっ。真理のキスは本当に美味しいな」

「馬鹿ねー。口の中が甘いだけでしょ？」

正臣のからかうような言葉にクスクス笑う。それからストンとベツドを下りた。

改めて見ると、そんなにお腹が大きく出ている訳ではなくても、マタニティ用の服を着ているだけで何となく妊婦に見えてしまう。

「正臣にもハニートースト作ってあげるから、着替えて下りておいでよ」

「あつ、蜂蜜たっぷり目な」

「分かってるっば」

クスツと笑う。本当に甘いものが好きなんだから。

「それと、厚切りで2枚な。タベ頑張って体力使ったから、腹減っ

たし」

その瞬間、真理が赤くなる。恥ずかしそうに「やーねえ」と言つて部屋を出て行った。

そんな真理を見送つてから、正臣は本日の問題を考え始める。

さて、指輪プレゼント、いつ渡そうか？

「真理、正臣君、顔上げて」

真澄の声がして、ソファに並んで座り、昨日両親が買ってきてくれた子供の服などを眺めていた二人は、何気なく同時に顔を上げた。カシャツ。小さなシャッター音。

「ダメネエ。二人とも笑つてよ」

そんな事を言つても、いきなり呼ばれたのだ。いきなり満面の笑みで顔を上げる人間も居ないだろう。目の前では真澄が、真新しいデジカメを手にニコニコしている。

「お母さん。そのデジカメ、どうしたの？」

「病院で使っていたやつ、調子が悪いから新しいの昨日買ったのよ。試し撮り、試し撮り」

そう言いながら、寄り添う娘と息子を何枚も撮つていく。

「うーん。やっぱり新しいのはいいわ。綺麗に写ってる。いいやつプリントしてあげるからね」

画像を確認しながら母はご機嫌だ。画像の中の娘が、この上なく幸せそうに、嬉しそうに写っている。

「あ、そうだ。今晚も撮りましょうね。クリスマスする時」

「お母さんってば。病院の備品でしょ？それ」

「今日は注射の予約が無いんだもの。せつかく買ったんだから、使いたいじゃない？」

立花小児科では、小さな子供が注射を怖がって泣いた時にカメラを向ける。すると、それに気をとられて泣き止む子、泣き顔を撮られてなるものか、と頑張る子など、色々と出てきて注射がしやすい

のだ。もつとも、最後まで泣き続ける子も、もちろん居る。

注射の時に写真を撮るといふのは、実は正臣の考えから来ているらしい。

3年ほど前、インフルエンザの予防接種を父の病院に受けに来ていた正臣は、注射が嫌で泣き続ける小さな子供に、いきなり携帯のカメラを向けた。「泣いてる顔、撮るぞー。いいのカー」と優しい声で脅おびした（？）のだ。するとその子は「ヤダ」と言って泣き止んだ。

それを見ていた正孝が、その案を導入したのだ。

それ以来、立花小児科の名物になっている。

「そうだ、お母さん。もうすぐケーキ取りに出掛けるんだけど、何か買って来るものある？」

お昼で戻っていた真澄は、そろそろ病院へ戻る。

そうしたらその後、二人で出掛けようと思っていた。

「特にないわよ。あ、でも、夕方くらいには戻るのよ。ホテルのリバリーが届くはずだから」

「うん。分かった」

クリスマスの料理は、ホテルのクリスマスディナーを予約してある。夕方には届けられるはずなので、あとは二人がケーキを取りに行つて来るだけなのだ。

「気を付けていくのよ。雪が降りそうだからね」

「うん」

楽しそうに話しをする母と娘を見ながら、正臣はリビングの大きな窓から、相変わらず今にも小雪が振り出しそうな曇り空へ目を移した。

ジーンズのポケットに右手を入れる。

そこには、朝からずっと、プレゼントの指輪が入っていた。

・・・さて・・・、いつ渡せば良いものか・・・。



「寒くないか？大丈夫か？」

自分としては真剣に訊きいているのだが、訊かれた本人はクスクス笑っている。

正臣は少々ムツとして、横を歩く真理の頭上をグツと押した。

「マジで心配してんだぞっ」

「ごめっ、ごめんってばっ。押さないでよ。転んじゃうよ。．．  
・だって、正臣さつきから3分に1回は訊いて来るんだもん。同じ  
こと」

白いショートコートを羽織った真理が、笑いながら正臣を見上げる。

雪が降り出す前にと、二人でケーキを取りに行くために家を出た。予約したケーキ店があるショッピングモールまでは歩いて15分。

今ちようどショッピングモールに入ったところで、ケーキ店まではあと数メートル。

「そうか？そんなに訊いてねーよ」

いや．．．訊いたかも．．．。そう思いながらちよつと照れる。

真理はクスツと笑って、ジャンバーのポケットに手をつ突っ込んだままの、正臣の左腕に抱きついた。

「でも、ありがとっ」

「おっ．．．おいつっ」

腕に抱きつかれ、腕を組んで寄り添うような形。

よく人目を気にしないカップルがやっているような歩き方に、少々戸惑いを感じたが、それが真理と一緒にだと思うとかえって嬉しい気分になる。真理も同じ気持ちらしく、腕に抱きついたまま正臣を見上げ、笑いながらちよつと舌を出した。

指輪、フリンストーン今、渡そうかな．．．。

朝からずつとジーンズのポケットに入れっぱなし。いつ渡そうか

とそればかり考えていたが、今は少々いいムード。

今なら、何気なく渡してもおかしくないかも……。と、正臣が思っていると、

「くしゅっっ！」

真理がひとつ、小さなくしゃみをした。

「お、おいつ、大丈夫か？ やっぱり寒いんじゃないのか？」

「大丈夫よー。ちよつと鼻がムズムズしただけだから」

正臣は慌てるが、真理はいたって平気だ。斜め掛けしていた小さなバッグからティッシュを出そうとした真理の目の前に、真新しいポケットティッシュが差し出された。

「はい。どうぞ」

「あ、すいませ……」

街頭のティッシュ配りの人だろう。そう思い、それを受け取りながら顔を上げた瞬間、真理の表情が固まった。

「お前達。何やってんだ？」

正臣がティッシュを差し出した相手、いや、そこに居た3人を見て呆氣にとられる。

目の前には、かつての3人の仲間。

真理にティッシュを渡した本人、達也と、そのティッシュがいっぱい詰まった紙袋を抱えた健と秋光が、ニヤニヤしながら立っている。

心なしが真理が後ずさって、正臣の後ろに隠れるように立った。

それを見て、達也が苦笑する。ま、しょうがねーよな。

それから、呆氣にとられている正臣に目を見て言った。

「ベビーベッド、買うなよ」

「は？」

「出産祝いに、つても、もちろん生まれる前に、オレらが買ってやるからよ。すっげーいいやつ。だから、買うなよ」

正臣と真理が顔を見合わせる。ベビーベッドといえば、デパートの企画物で1万円台のものから、5〜6万の物。上を見たらキリが

ないような物まである。それを出産祝いにプレゼントしてくれるというのだ。

「達也の提案なんスよ。おかげでオレらもバイト始めさせられちゃって。．．．とりあえずオレは、親戚の整備工場で毎日車ばっかいじってるツスよ」

健が、照れかけている達也の背中をバンツと叩く。横から秋光も出てきて、ティッシュがいつぱいの紙袋を抱え上げながら口を出した。

「おれなんて、自分ちの手伝いだけ。達也の手伝い終わったら店に出なきゃなんねーの。今日、イブだから、ケーキとかオードブルとかの客で急がしーんだ」

「へー。じゃあ、これからたまに会うかもな」

正臣の言葉に、真理がこそつと口を出す。

「何か、良く行くお店？」

「ん？ほら、前に真理がアンマン買ってきたコンビニ。あれ、秋光ん家」

「ええっ?!?!」

あのコンビニは、家から歩いて5分もかからない所にある。

早い話がご近所さん。小学校中学校と公立だったので、秋光は小さな頃から正臣を知っていて二人は一番付き合いが古い。

「買い物来てねー。おねえさんっ」

秋光がここぞとばかりにニヤツとするので、真理も笑うが．．．引きつった。

「なんか．．．学校、やめなきゃなんねーのは、オレの方みたいだよ．．．」

達也の口調が考えるような静かなものに変わり、正臣は首を傾げた。こんな声を出す達也は初めて見る。

「．．．オレ、もよ。何か、ガキが出来たみたいで．．．」

「は？」

「だから、何か．．．、正臣の気持ち、解った．．．っていうか．

・・・

歯切れの悪い口調。どう説明したらいいのか、達也自身よく解らない。しかし、達也はそこでハツとして、慌てて付け加えた。

「言っておくけどなっ、『オレの』だからなっ。・・・お、お前のじゃねーぞ・・・」

最後のほうは小声になった。真理に気を使ったようだ。

「亜子も、もうすぐ店に出れなくなるしよ・・・。今、亜子がいる店で、オレも働かせてもらってた・・・。多分、3学期からは学校も行けなくなると思うし・・・」

それから、正臣の後ろに隠れるように立っている真理に目を向けた。

「ネーチャン！」

「はっ・・・はいっ？」

条件反射でビクツとする。話を聞く限り何となく良い話ではあるが、今までの経験上、体がまだ達也に対しての恐怖心を拭いきれない。

「・・・すまなかつたな・・・」

そう言っつて、自分のジャンバーのポケットから、折りたたまれた小さな布を真理の前に差し出した。

「今日にでも、家に届けに行こうと思っただけだよ。どうせだから渡しとく。ウチの女から。ネーチャンに」

「え？」

真理はそれを受け取り開いてみた。

多分手作りなのだろう。柔らかいガーゼ地とタオル地で丁寧に作られた、ペパーミントグリーンの可愛い涎掛スタイけ。

「ウチの女。料理は出来ねーし、クセも悪いけど、手先は器用だよ。・・・それ、ネーチャンに、っつて。それと、『昔、借りててごめんね』っつて・・・」

スタイを手に、正臣を見上げる。「借りててごめんね」とは、正臣のことだろう。

真理はクスツと笑うと、嬉しそうにスタイを胸のところ握り締めめた。

「ありがとう。じゃあ、私からも『もう、貸さないよ』って伝えて」「俺はレンタル品かつ」

横で正臣が文句を言うが、その顔は笑っている。それから、つられる様に笑っている3人を見た。

「今度、家に遊びに来いよ。バイトの無い時でも」

「そつ、そつだよ。ご飯でもごちそうするから、遊びに来てねつ」

正臣の言葉に真理も口を出した。変な話、今まで散々な目に遭あわせてしまった真理にそんな言葉をかけられ、3人は妙に照れてしまった。

「じゃ、じゃあ、今度、顔出させてもらうな」

達也が一番照れている。そんな達也の背中をまたまた健がバンツと叩き、ティッシュの紙袋を上抱え上げた。

「さつ、急いでティッシュ配りのバイト終わらせるッスよ。終わったらオレ、デートなんだから」

そう言つて、真理の顔を見てニヤツとした。

訊かなくても解るが、綾とデートなのだろう。

「おれもコンビニあるしつ。さあ、やるぞやるぞ。じゃあな、正臣。買い物来てよ、おねえさんつ」

秋光が片手を上げると、他の二人も「じゃつ」と言つて、その辺を歩いている通行人にティッシュを配りながら歩き出した。

「何か、良かったね。正臣」

クルツとティッシュをひっくり返す。裏にはキャバクラの広告。

どうやら亜子が勤めていて、達也が世話になり始めた店のものよっだ。

真理が正臣を見上げると、正臣はどこか嬉しそうに3人の友達の後姿を見ていた。

そんな正臣の姿を、真理も手の中の小さなプレゼントを嬉しそうに握り締めながら見詰める。

そして、もうひとり・・・。

少し離れた店の陰から、そんな二人を「彼」は見ていた。

二人が歩き出す。

「彼」も、歩き出した。

「真理つてさ、アクセサリとか、あんま付けないよな」

何気なく訊いたつもりなのだが、真理は「ん？」と小首を傾げる。やべつ。ワザとくさかったかな！正臣は心の中で少々焦るが、当の真理は何を気にしている風でも無く答えた。

「ネックレスとか持ってない訳じゃないけど、何となくあんまりしないかな？」

「指輪とかは？」

「指輪？」

自分の訊き方はおかしくないだろうか……。 「指輪とか嫌いなんだよね」 って言われたらどうしようか……。

正臣はジーンズのポケットの中に、無造作に入っているプレゼントの指輪の事を考えながら、少々緊張した。

しかし、そんな正臣の緊張をよそに、何も気付かない真理は照れ笑いをして答える。

「私ねー。手の形がどつちかっていうと『子供っぽい手』なのよ。ふつくら型の手でしょ？指も長い訳じゃないし。指輪とか似合わないんじゃないかなと思って、持ってないんだ。よく、キレイだなーとは見てて思うんだけどね」

顔の前に両手をかざして正臣に見せる。確かにほっそり系の手ではないが、可愛い手なのに、と正臣は思った。

「あ、でもね、籍を入れたら結婚指輪はちゃんとするよ。せっかくお父さんが用意してくれるって言うてくれるんだもん。正臣は……まだ学校があるからできないね……」

「おっ、俺だつて、するよっ」

「駄目だよ。学校、アクセ禁止だよ」

「ピアスとか、してつてる奴いるじゃん。風紀委員長、うるさすぎっ」

あくまでも正臣は抵抗する。真理は叱るしかような目で正臣を見た。  
「・・・結婚してること、ばれたらどうするの？」

「別に俺はいいよ。真理が卒業した後だし。俺が何か言われても真理が言われる訳じゃない。バレたらバレたで、子供もいるんだぞい  
いだろ、って自慢してやる」

真剣な顔で正臣は言う。真理は凄く嬉しくなった。

嬉しくて嬉しくて、さっきのように左腕にぎゅっと抱き付く。

「正臣・・・大好き・・・」

チラリ・・・

静かに、ゆつくりと・・・  
それは、舞い降りて来た。

チラリ・・・チラリ・・・

「あー」

それを見て、真理が笑う。

空から

白い

小さな、贈り物・・・。

「雪だ・・・」

正臣の腕に抱き付いて、頭をもたげる。

正臣は右手で真理の頭を撫なで、額ひたいに唇をつけて囁いた。

「好きだよ・・・真理」

今年最初の雪。

それは、二人で初めて見る

「初雪」

白い雪は、そんな二人の周りを、次々と舞い落ちた。

二人はしばらくそのまま、雪を眺めていた。

しかし、いつまでもそのままっ立ってる訳にもいかない。

目当てのケーキ店は目の前だ。

「さあ、真理。ケーキ持って帰ろう。雪は家ででも見られるから」

真理は正臣を見上げ、幸せそうな表情でにっこりと笑う。

初雪が降り、空は灰色。

なのに・・・

ここには、太陽が輝いている。

真理が正臣に向ける笑顔。

「太陽の笑顔」

正臣は幸せな気持ちで真理の笑顔を見詰めると、自分も笑顔を返した。

ちょうど客が途切れた時間帯だったようで、ガラスの自動扉越しにケーキ店を覗くと、店内に客の姿はなかった。

これだったら時間もかからないで渡してもらえる。真理はちょっと安心した。混んでいる時に入ると、順番を待つだけで疲れてしま

う。

「何やってんだ。あいつら」

そう呟く正臣の声が聞こえ、彼の方を見ると、正臣は道の向こう側へ目を向け上を見上げている。

真理もその方向を見ると、さっきの3人が、少し先にある歩道橋の上から自分達の方を見ていた。

どうやら二人で寄り添って、しばらくそのまま見ていたらしい。冷やかすような顔をして手を振っている。

「さっさと行けっつーの。バーカ」

冷やかしをやり返すように、正臣は仲間達へ「さっさと行け」のポーズを手で取る。

しかし、さすがにずっと一緒に悪ふざけをしてきた仲間達。更に冷やかしは大きくなり、両手で大きく手を振り出した。もちろん、嫌がらせではない。

正臣もそれは解っている。とうとう声を上げて笑い出した。

「ホント、しょうがねーなあ」

そんな楽しい正臣を、真理がヒョコつと覗き込む。

「正臣っ。私、ケーキもらってくるからさ。ここで友達とジャレてなよ」

「な、なんだよ。ジャレて、って」

「いーから、いーから。待ってて。すぐだから」

そう言っつて、店の中へ入っていく。

店には他に客もいないようなので、待たされることもないか。正臣はそう思いながら、再び歩道橋の上の仲間達に目を向けた。

笑顔で自分に手を振ってくる、仲間達。

「色んなバカやったけど。やっぱり俺にとっては、最高の仲間タチだ。」

正臣の表情が、嬉しそうのほころぶ。

「……その時だった……」

「……」

自分自身、一瞬何が起こったのか、解らなかった。ただひとつ、解ったのは……。

背中に感じる。強烈な、痛み。

「・・・あ・・・」

背中から、一瞬にして体中に広がる、痺れるような強烈な痛み。

その痛みを感じた後、正臣は自分の背後に何者かが立っている事に気付いた。

立っている。・・・いや、自分の背後に、ぴったりとくっついて  
いる。

・・・ある物を手に・・・。

正臣に苦痛を与えている「ソレ」は、背後の人物の手によって、  
再び更に奥へと正臣の「体の中」へ刺し込まれた！

「・・・！！・・・」

体が飛び上がるように震える。

あまりの痛み息が詰まり、呼吸が出来ない。

正臣は、ゆっくりと、震える体で振り向くように首を動かした。  
背後の人物に、目を向ける。

同じ様な身長。同じ様な体格。

必然的に、二人の視線は嫌でも合ってしまう・・・。

「彼」は、笑った。

驚愕きょじつがくの表情を作った正臣を見て。

ニヤリ・・・と、満足げに。

そして、最後の仕上げのように、最後の力を込めて、手にしてい  
た大きなサバイバルナイフの刃を、全て正臣の体に押し込む！

「彼」が最後に、正臣に投げ掛けられた言葉。

その言葉を、そのまま「彼」は、正臣へと返した。

「じゃあな……立花！」

「……いつ……井関い?!?!」

## 61・アクシデント！

「予約の分だね。ちょっと待っててね」

ちょうど良かった。ケーキ店の店主は、店の中に入ってきて予約表を渡した真理に、笑顔で応えた。

今まで凄く混み合っていた。ちょうど客が途切れて一息ついたところだ。

予約表を渡してから、出入り口の近くに飾られたツリーを楽しそうに見ている真理を見て、店主はちょっと微笑ましい気分になった。自分にも同じくらいの結婚を控えた娘が居る。見たところ妊婦のようだ。いつか自分の娘も、子供が出来てこんな滲み出るような幸せな様子を見せてくれるのだろうか。

真理が時々、外で待っている正臣をチラツチラツつと見る。相変わらず、笑顔で友達に手を振っている。

ああ。旦那さん、外で待っているんだ。店主はそう思いながら、予約分を入れている冷蔵庫へケーキを取りに、奥へ引っ込んでいった。

ツリーを見ていた真理は、フツとショーケースの上のキャンドルに目を留めた。水が入った大きなグラスの中に浮かぶ、花の形や星の形のフロートキャンドル。

「可愛い」

呟いてニコニコしながら、それを眺める。

フロートキャンドル。買って帰ろうかな？テーブルの上とかに飾ると綺麗だよな。

「そのキャンドルね。色んな形があるんだよ」

ケーキの大きな箱を抱えながら、店主が奥から出て来た。

ケーキをショーケースの上に置いてから、「ちょっと待っていて」と言っ、レジの下の棚から大きなピンク色の箱を出す。

「飾り付け用に大量に買ったからいっぱいあるんだ。よかったらオ

マケであげるから、5〜6個好きなもの選んでいいよ」

ふたを開けると、いろいろな形のフロートキャンデルが沢山入っている。

「え？いいんですか？」

「いいよ、いいよ。可愛い奥さんにはサービスだ」

店主は上機嫌で答える。「奥さん」と呼ばれて、真理はちよつと赤くなった。

「有難う御座います。・・・じゃあ、遠慮なく・・・」

照れ笑いをして、箱の中を覗き込む。

「あつ」

覗いた瞬間、目に入った。

「これとこれ。いいですか？」

その二つを手にとって、ケーキを持ちやすいように大きな紙袋に入れてくれていた店主に見せる。

太陽の形と、月の形の、キャンデル。

「ああ、いいよ。2個でいいのかい？もう2〜3個・・・」

「いいえ。2個でいいです。有難う御座います」

「袋に入れてあげるよ」

「すいません。でも、すぐ見せたいから、このままでいいです」

真理はそれを両手で嬉しそうに握り締め、そしてそのままショートコートのポケットに入れた。

今晚、部屋で使おう。

正臣とふたりの時。

そう考えて、ちよつと赤くなった。

好きな人と一緒に、初めて過ごすクリスマス。

真理は嬉しくて、気恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。

「じゃあこれ、気を付けて持って行ってね」

大きな袋に気を使ったのか、店主はカウンターのなかから出てきて

直接真理の前で手渡ししてくれた。

「ありがとうございます」

にっこり笑って袋を受け取るが、これが意外に重い。

うわっ、これは正臣に持ってもらわなきゃっ！

そう思いながら、「有難う御座いました。いいクリスマスにしてね」と声を掛けてくれる店主に、軽く頭を下げ店を出た。

背後で自動扉が閉じる。

フウっと小さく息を吐いて、真理は笑顔で顔を上げた。

「正臣。お待た・・・」

そこで、言葉は止まった。

そして、真理の笑顔も凍った。

目の前に正臣は居る。自分が店の中に入った時のように、確かにその場に立っている。

しかし、正臣の表情は目を見開いたまま固まり、脚は体と一緒にガクガクと震えている。

正臣の両手は、自分の背後にぴったりとくっ付いている者を、まるで引き剥がそうとするかのように、その人間の黒いジャンパーを後ろ手で掴んでいた。

「正・・・臣・・・」

目の前の状況が理解できない。

真里の呟きを聞いた瞬間、正臣の背後にくっ付いていた「彼」がピクツと震え、そしてゆっくりと真理の方へ顔を向けた。

「！」

真理が息を呑む。

「・・・せ・・・先・・・生・・・？」

真理の声を聞いた瞬間、今まで憎々（にくにく）しげな形相を湛



これは・・・何かの冗談？

ガクン・・・！正臣の膝が崩れる！

「正臣！！」

真理が駆け寄り、正臣の体を前から支えた。

背中に回した手に、ぬるつとしたものが触れる。

それが正臣の血であり、そしてそれは止まること無く足元に血溜ちだまりを作っている。それに気付いた真理は、一気に体中から血の気が引いた。

「まさ・・・おみ・・・。正臣っつ！」

真理は叫びながら、正臣の顔を覗き込む。

正臣は薄く目を開いて、懸命に口で息をしている。冷たい汗が、彼の額ひたいを流れ落ちた。

「・・・どうして・・・。どうしてこんな事！」

大きな瞳。いつもキラキラして綺麗な瞳に涙をいっぱい溜ためて、真理は目の前で立ち竦すくむ井関を睨み付けた！

そして井関は、そんな真理を悲しそうに見詰めている。

自分を睨み付けているのは、かつては自分が愛した少女。

そして、その少女が愛しそうに胸に抱いているのは、憎んでも憎みきれない男。

自分から、全てを奪った男。

自分の未来も、教師としての将来も。

そして・・・最愛の少女も・・・。

「いせきい！！」

狂ったような叫び声がして、井関はハッと顔を上げた。

歩道橋から下りて来た3人が、物凄い勢いで自分に向かって走って来る。

井関は踵かかとを返し、その場から逃げ出した！

「てめえ！ぶつ殺してやる！！」

達也が一心不乱に後を追う、健は一瞬二人の傍で立ち止まろうとしたが、そのまま後を追った。

「おねーさんっ！絶対捕まえてくっから!!」

秋光もそう叫んで井関の後を追う。

今まで真理が居たケーキ店の中から、店主が出てきて叫んだ。

「今、救急車呼んだから！しっかりしなさいよ旦那さん!!」

ざわめく通行人たち。

足を止める者。

早足に通りすぎる者。

しかし・・・誰の声も、真理の耳には入らない・・・。

真理は震える両手で、自分にもたれかかる正臣を抱き締めた。

「・・・正・・・臣・・・。正臣!!」

「ま……り……」

絞り出すような正臣の聲がして、真理は正臣の顔を見た。

苦しいはずなのに、それでも笑って、自分を見ている。

「まさ……おみ……?」

真理はぺたん、とその場に座り込んだ。

血溜りの中へ。

真理の白いショートコートは、もう真っ赤になっている。

刺されたのは背中。真理が座り込んだのと同時に、正臣の体も完全に地面へ崩れる。上半身だけが真理に抱かれる形で起き上がっていた。少しでも血が流れ出さないように、刺された背中を下にしないで横向きに支えていたが、それでも真理の手に温かい物がどんどん流れてくるのが分かった。

「泣く……な……」

真理の大きな瞳から、涙がポロポロ流れ落ちてくる。

正臣は痙攣が始まった手をジーンズのポケットに入れ、指輪を握り締めた。

「笑……え……。お前……太陽だろう……。?」

「こんな時に、笑える訳、ないでしょう……。」

指輪を握り締めた手。痙攣を続けるその手で、真理の頬に触れる。

「まり……」

吐き出すような、弱々しい声。

視界が霞み始める。それでも正臣は、目の前の真理の顔だけはハッキリと見えていた。

「……あいしてるよ……」

俺の……太陽。

俺に、人を愛することを、  
泣く事を、生きることを教えてくれた・・・。  
愛しい、愛しい  
俺だけの太陽まり・・・。

真理。

愛してる。

誰よりも・・・何よりも・・・。

「正臣？」

真理は思わず正臣の体を揺すった。

さつきまでゼイゼイと荒かった呼吸が、詰まるように静かになっ  
てきたのだ。

目も虚うつろろで、何となく視線が合わない。

「ダメ・・・だよ・・・ダメだよ正臣。もうすぐ救急車が来るか  
ら・・・だから・・・」

自分の頬に触れている正臣の手。その震える手をグッと握る。

「約束・・・したでしょう？クリスマス、する、って・・・これ  
からずっと、一緒に、クリスマスだ、って・・・。約束したでしょ  
う?!」

正臣の顔がちよつと動き、虚ろだった目が真理の瞳を見詰めた。

「ずっと、私の傍に居てくれるって、言ったでしょう?!」

寂しい時も、辛い時も

いつも見守っていてくれた月のように

いつでも私の傍に居てくれる

ずっと、私の傍に・・・。

私の月。  
愛しい、愛しい  
私だけの月まごのみ……。

正臣

愛してる

あなたの事。誰よりも、何よりも、愛してる。

「一生……愛してる、って、言ってくれるんでしょう……？」

握り締めていた正臣の手の力が、フと緩む。

「約束、したでしょう……？」

正臣の目は真理を見詰めていた。

優しく、愛おしむように。

「ねえ……正臣い……。約束したでしょう……？」

真理の声は、もう完全に泣き声だった。

浅くて短い、正臣の呼吸が体に感じられ、切なくて悲しくて堪たまらない。

「……ま……り……」

息と一緒に小さな声で、正臣は真理の名前を呼んだ。

愛しそうな、優しい声で。

「あい……し……てるよ……」

スルリ……と、正臣の手が真理の手から滑り落ちる。

滑り落ちた瞬間、真理の手の中に何か小さな硬いものが残った。

真理は、手を開いて、それに目をやった。

小さな指輪。

月の形をした

小さな指輪。

「正……臣……？」

真理が正臣の顔を見る。

指輪を渡せたことに満足するように、かす微かに正臣は笑う。

そして、その瞳が……

……ゆっくりと、閉じた……。

「……！」

「正臣……？」

愛してるよ。真理。

「正……臣……？」

真理。俺の太陽。

「まさ……お……み……？」

愛してる、って。一生、お前だけに言うよ。

「……い……や……」

真理は首を振った。

激しく激しく、首を左右に振った。

俺だけの、太陽まじ。

目を閉じたままの愛しい人。

揺すっても動かない。私の月。

どうして動かないの？  
どうして私を見詰めてくれないの？

私の事、いつまでも見詰めていてくれるんでしょ？  
ずっと、私だけの月でいてくれるんでしょ？

私だけの、月<sup>まひなみ</sup>。

「いやあああああ！……！」

悲鳴のような叫び声が、雪の中に響く。

静かに降り続く、白い雪。

無情なまでに、白く清らかな雪。

そんな雪が

太陽と月を包み込み

降り続く……

。

62・ 太陽と月（後書き）

次回、最終話です。  
明日、更新します。

最終話 「お月さま、だいすき！」

「まさおみい。まーさーおーみーい」

よく通る綺麗な声。

大好きなその声が聞こえて、絵本を見ていた少年は、ヒョコつと顔を上げた。

「真臣くん。お母さんが迎えに来たよー」

保育士の女性が、幼稚園の「お預かりルーム」で最後まで残って、一人で絵本を見ていた少年を部屋へ迎えに来た。

ドアを開けた瞬間、少年は飛び出す。

幼稚園の制帽も靴も手に抱えたまま。きちんと身支度をするのもどかしいくらい、少年は母親を待ちわびていたのだろう。

「ママーあー！」

玄関に飛び出して、そこで待っていた女性に飛びつく。

「ごめんね。真臣、遅くなって」

母親は笑顔で息子を抱き上げた。

綺麗なストレートの髪。150センチくらいの小柄な女性。

大きな瞳。母親、というにはまだ若いような可愛い表情。

その笑顔は、太陽のように明るく優しい。

「良かったね真臣くん。ママ来て」

保育士の女性が、笑いながら玄関まで出て来た。それを見て、母親がちよつと申し訳ないような顔をする。

「ごめんね。綾。いつも遅くなっちゃって」

「いいんだよ、真理。気にしないのっ。こっちはそれが仕事。・・・

それに・・・」

ちよつとふざけた顔をして、親指と人差し指で丸を作る。

「ちゃんとその分の「お預かり代」は頂いてますんでー」

真理はクスツと笑った。

親友が勤める幼稚園だと、色々気兼ねがなくていい。

「じゃね。真臣くん。また明日ね」

綾が、真理が抱いている少年、彼女の息子である真臣の柔らかい頬をツンつと突く。

「うんつ。じゃあまたね。あやせんせい」

真臣は人懐つこい笑顔で、綾に手を振った。

あのクリスマス・イブの日。

正臣が刺され、真理の腕の中で息をひきとってから、4年が経った……。

正臣を刺し逃げていた井関は、もちろんすぐに正臣の仲間達によって捕まえられ、目撃者も多いことから現行犯逮捕されたが、その後彼は「精神状態に異常あり」と診断され、今も精神病院から出ることが出来ない。……多分、一生。

6月に出産予定だった真理は、その後の心労が重なったせいもあって、4月に早産で男の子を産んだ。

偶然にも、4月生まれの正臣と同じ誕生日。

真理はその子に「真臣<sup>まことおみ</sup>」という名前をつけた。

真理は出産後、1年空けて看護学校に通い、今は父の病院である立花小児科で母と一緒にナースとして働いている。

仕事柄、遅くなってしまう事が多々あるので、真臣は幼稚園の保育時間が終わったあと「お預かりルーム組」だ。

「本当にごめんね、真臣。今日はいつもよりお迎えが遅くなっちゃって」

真理は、目の前で可愛くスキップをしながら歩いている真臣の後ろで、本当に申し訳なさそうに言った。

いつもは遅くても6時半過ぎには迎えに行くのに、今日はギリギリで急患が入ってしまい7時を過ぎてしまった。

当たり前だが、陽も落ちてすっかり暗くなってしまっている。

「だいじょうぶだよ。だって、ボク、お月さまとお話してたから  
真臣がクルツと振り向いて笑う。

「まどのそのを見てたらね。お月さまがいたから、ママおそいね、  
って言ったんだ。そしたらね、『もう少しでくるよ』って」

「・・・お月様が、言ったの？」

「うんっ」

大きく笑顔で頷いて、真臣は再びスキップを始める。

真理は、自分の胸元に下がるペンダントを、キュツと握り締めた。  
元々は、ペンダントではない。

小さな指輪。

月が大小のダイヤを抱いたデザインが施されている。

プラチナのシンプルな作りだが、デザインがとても可愛らしい。

正臣からの、最初で最後のクリスマスプレゼント。

真理はその指輪にチェーンを通し、いつも肌身離さず身に付けて  
いる。

指輪なので指にしていれば良いのかもしれないが、デザインリン  
グなので仕事中は付けられない。

ペンダントにしておけば、いつも一緒に居られるのだ。

真理は夜空を見上げた。

霞のない、綺麗な月が出ている。

明るく、優しく、自分を照らしてくれている。

真理・・・。

月を見るたびに、正臣を思い出す。

正臣の声を

正臣の笑顔を

自分を抱き締める、正臣の腕を思い出す。

真理、愛してるよ。

「正臣……」

正臣、愛してる……。

今でも、あなたの事、愛してる。

真理は月を見上げてにっこりと笑う。

正臣だけの「太陽の笑顔」で。

俺の、太陽。

「私の……月……」

ねえ、正臣……。

あなたと過ごしたのは、ほんの3ヶ月くらいだったけど。

それでも私は

……一生分の愛を、あなたにもらったよ……。

「ねえ、ママあ」

いつの間にか真臣がスキップをやめ、自分の横に立っていた。

くりっとした人懐ひとなつっこい目で、ニコニコしながら自分を見上げている。

「なあに？真臣」

真理は真臣の前に屈んで、笑顔でその顔を見詰めた。

目が大きくてクリッとしたところは真理に似ているだろうか。しかし笑うと、とても正臣に似た表情になる。

真臣はニコッと笑って、夜空の月を指差した。

「ボクね。お月さま、大好き！」

真理は目を見開いた。  
その大きな瞳に、だんだんと涙が浮かんでくる。  
真理は涙が浮かんだ瞳を細め、にっこりと微笑んだ。

「ママもよ」

立ち上がり、月を見上げる。  
霞のない、綺麗な月。

真理……。

月を見ると、愛しい人が真理の心の中に蘇<sup>よみがえ</sup>ってくる。

「ママ」

真臣が真理に手を差し出した。  
真理は、その手を取って、にっこりと笑う。

太陽の笑顔で。

月を見上げ  
微笑んで……。

そして

歩き出した。

「太陽の愛 月の恋」

END

**最終話 「お月さま、だいすき！」（後書き）**

「あとがき・お礼・お願い」に続きます。  
どうぞ「」読下さい。

「太陽の愛 月の恋」 あとがき・お礼・お願い

こんにちは。玉紀 直です。

この、「太陽の愛 月の恋」は、2008年10月18日から連載を始めさせて頂きました。

最初から読んでいてくれた方、途中から読み始めてくれた方、沢山の方に読んで頂き、沢山の方にご意見やご感想を頂きました。読んで頂いた皆さんには、本当に感謝しております。

この物語は、最初に私の中でラストシーンから始まりました。

愛する人を亡くした女性が、その男性の忘れ形見である子供と一緒に月を見上げているシーンと、手を繋いで、これからはしっかりと生きていこうと歩き出すシーン。

そのラストシーンを前提に、書き出していったんです。

この二人が、もし義理の姉弟だったら。

最初、とてもじゃないけど恋愛に発展するような関係じゃなかったら。

三角関係とか絡んだら・・・。

色々と考えていくうちに物語は出来上がっていきました。

ただ、書き進めていくうちに困ってしまったのは、予定では30話くらいで終わらせるはずだった物語が、書いていくうちに感情移入が止まらなくなり、私自身、真理と正臣が大好きになってしまったことです。

大好きだから幸せにしてあげたい・・・。

でも、この物語自体のラストは最初から決まっている。

このラストの為に書いている物語なんだ・・・。

そう思いながらも、物語はどんどん長くなり、二人は予定以上に愛し合うようになってしまいました・・・。

このラストはやめよう。

何度思ったか分かりません。

いつもいつも、次の話次の話を書いていくたびに、「ラストを変えようか」「やっぱりやめようか」そう思う日々が続きました。

2月に入ってから書くのが辛くなりました。

後半ラストパートに入ってからなんて、考えると辛くて悲しくて、下書きをしながら、ワードで文章を打ちながら、正直なところ、グスグス泣いていました。（玉紀、涙腺バカ緩なんです・・・）

同居している8歳と6歳と3歳と1歳9ヶ月児が「どうしたの？どっか痛いのか？」と寄って来て頭を撫でてくれていたくらいです。

（家族多！（笑））

本当に、何度もラストを変えようかと思いました。

けれど私は、このラストが書きたくてこの物語を書いてきたんです。

まさか、こんなにもこの二人が好きになってしまおうとは思わずに。

読んで下さっている方のほとんどは「こんなのは嫌だ！」「とおっしゃると思います。

悲しすぎる。真理が可哀想過ぎる、と。

私も嫌です。

基本的に、どんな辛い事件があっても、どんなに酷い展開が途中にあっても、最後にはハッピーエンドで終わる。・・・そんな話のほうが好きなの人間ですから。

物を書く人間が、そんな偏ったことを言っていてはいけないのだとは思いますが・・・。

（玉紀はプロじゃないので偏ったこと言わせてください（笑））

「続編」を書かせてもらえますか？

真理をこのままにしておきたくないんです。

多分「正臣以外の男とくっつけようっていうの?!」と怒られるのではないかと覚悟はしています。

でも、このまま、本当にこのまま終わらせてしまうには、真理は私の中であまりにも思い出深い女の子になってしまいました。

真理を、少しでも幸せにしてあげたいんです。

それは、正臣と一緒に積み上げる幸せではないけれど……。

こんな結末にした以上、「これ以上二人に手を付けるな」と、怒られてしまうでしょうか？

どうか私に、この「太陽の愛 月の恋」の続編を書かせてください。

もし、許していただけなら、1ヶ月以内には連載を開始できるようにしたいと思います。

きっと真理を、少しでも幸せに見せますから……。

正臣を喪った以上、それは簡単なことではないと、覚悟して取り組ませて頂きます。

最後までお読みいただき、本当に有難う御座いました。

感謝を込めて。

玉紀 直

「真理・・・」

優しい声がする。

「真理、起きるよ」

誰かが優しく、肩を揺する。

「おい。真理」

そして真理は、目を覚ました。

「こんなトコで寝たら、風邪ひくぞ」

ベッドの上でうたた寝をしまつた真理を、肩を揺すりながら、正臣は優しく起こす。

「あ・・・ごめん。寝ちゃつた」

目をこすりながら体をよいしょと起こしベッドの端はしに腰掛けると、正臣は真理の前に屈んで、6ヶ月になって大分ふっくらとした真理の腹部に横顔をペタツとつけた。

「坊主ずしほ、寝てるか？」

「・・・動いてないから、寝てるのかな？」

6ヶ月の定期健診で、赤ちゃんが男の子だと判つた。

6ヶ月に入つた辺りから、時々まるでお腹の中で空気が転がるみたいに、コロコロと胎児が動いているのが解る。

今はコロコロだが、8ヶ月9ヶ月になると、お腹の中で暴れて蹴けつたりもするらしい。「蹴られると、結構イタイんだよ」と、先日産婦人科で知り合つた、3人目を産むと言う女性に冗談混じりで脅された。

「男の子だから、もっと大きくなつたら、いっぱい動くんだろうな・・・正臣の子だから、暴れん坊かもよ。どうしよつ。手に負えなかつたら」

「安心しろ。あんまりママを困らせたなら、俺がシメてやるっ」

クスクス笑う真理の腹部を、ピシツと指ではじく。  
腹部ふくたいを巻いているので、別に痛くは無い。

「それより真理、寒くないか？冷やしたら駄目だぞ」

「大丈夫。暖房入ってて部屋も暖かいし。だから、正臣を眺めているうちに寝ちゃったのよ」

いくら暖房が入っていても、2月半ばを過ぎた夜はまだ冷える。

1月に学校の卒業試験を終えた後、3年生はほとんど学校には出なくなる。実際真理も、あとは3月初めの卒業式を待つだけで、ずっと家にいる状態だ。

試験勉強をしていた正臣に夜食を作って持ってきたのだが、何となく立ち去りがたくて、ベッドに腰掛けつつ勉強中の正臣をニコニコしながら眺めていた。そのうちに気持ち良くなってしまい、いつの間にか眠ってしまったのだ。

「ねえ、正臣。こんな時に何だけど。相談があるの」

「何？」

正臣が真理の横に寄り添うように座る。

本当ならば凄く言いづらい事ではあるが、やはり自分がしなければいけない事だと決心して、真理は正臣の顔を真剣に見た。

「私・・・井関さんの面会に行こうと思っただけど。弁護士さんと一緒に」

「え？」

正臣の眉が寄り、顔色が変わった。

あのクリスマス・イブの日、正臣を刺して逃げた井関恭吾いせききょうごは、正臣の3人の友達によって捕とらえられた。

捕まえた達也の話によれば、「ボコボコにしてやるつもりだった」との事だったが、幸か不幸か捕らえてすぐ近くの交番の巡査二人が駆けつけてきて逮捕してしまったため、「ボコボコ」には出来なかったようだ。

逮捕された時から、薄笑いを浮かべた彼の表情は普通ではなかった。

「精神状態に異常あり」そう診断を受けた彼は、警察病院の精神科に今も入れられたままだ。

殺人未遂事件として、刑事裁判を受ける身分ではあるが、もちろん彼は出廷できない状態。彼の供述を何一つ聞く事ができないので、弁護士も困りきっている。

誰が面会しても、一切言葉を発しないからだ。

「私の顔を見たら、もしかしたら何か言うかもしれない・・・って。弁護士さんが」

正臣は下唇を噛んだ。彼としては、真理を井関などと会わせたくない。

「井関さんが・・・おかしくなったのは、私たちにも原因があるんだし・・・」

教師としての井関を追い詰めたのは正臣。そして、人間としての井関を追い詰めてしまったのは自分だ。

真理はずっと、そう思っている。

学校で正臣が井関を陥れる事件を起こしてから、彼の事が気にならなかつた訳ではない。

しかし、それを口に出せば正臣が嫌な思いをする。そう思い口には出せなかつた。

正臣が、一度でも自分を抱いた井関を、本当に心から嫌っていたのを真理は知っていたから。

「行って来いよ・・・」

膝に腕をかけて前屈みになりながら、正臣は吐き出すように言った。

「真理が、やりたいようにやればいい。どっちにしろ俺は、あいつに会える立場の人間じゃないから」

真理は正臣の背中に手を当てる。右わき腹側。

そこに正臣は、大きなサバイバルナイフを刺し込まれた。

どうやっても血が流れて止まらなくて、足元に血溜まりを作り、支えた真理を血だらけにした。

正臣が意識を失い、死んでしまったかと思った瞬間、救急車が着いた。「まだ生きてるよ！奥さん！」救急隊員の一言に体中の力が抜けた。流れて止まらなかつた涙は、更にボロボロと流れ続けた。

救急隊員の適切な処置もあつて、正臣は奇跡的に一命を取り留めたのだ。

今でも、あの時の事を思うと涙が出てくる。

苦しくて、辛かつた思いで胸が締め付けられる。

「・・・正臣？・・・怒つた？」

真理の声が寂しげに響く。自分が怒っていると誤解して、真理が困っているのかと思つた正臣が顔を上げるが、真理の顔を見て反対に正臣が困ってしまった。

真理が泣いているのだ。

「真理・・・？」

涙を流して。悲しげに泣いている。

「泣くなよ。・・・別に怒つてねーよ。面会、行つて来いよ。そのかわり、ちゃんと弁護士と一緒に行けよ。立会人もつけてな」

真理は涙を拭いながら、こくんと頷いた。

どちらかと言えば、その事ではなく、クリスマス・イブの事を思い出して泣いてしまつていたのだが・・・。

「あ・・・」

真理が何かに気付いたように、ハッと顔を上げる。

「どうした？」

「動いた。おなか・・・」

「マジ?!」

正臣がベッドから下りて再び真理の前に屈み、腹部に横顔をつける。

「・・・うーん、腹帯のせいかなあ・・・判るような、判んないよ

うな・・・」

真理は確かにお腹の中でコロコロと空気が転がるような感触がある。まだ小さな動きなので、腹帯をしているせいで外からは判りにくいかもしれない。

「もう少し動くようになれば、判るかな」

真理の腹部をゆっくりと撫でる。

「そうね。痛いくらい動くようになるらしいよ。そしたら・・・って、正臣？何してるの？」

「んー？」

はぐらかすような生返事。腹部を撫でていたはずの正臣の手は、いつの間にか服の上から真理の胸をまさぐっている。

「坊主に、『挨拶』しようかな・・・」

「あいさつ・・・？」

真理がポツと赤くなる。あ、挨拶、って・・・それってえ・・・。

「駄目？」

ねだる様な目で、正臣が真理を見上げる。

「ま、正臣。勉強は？」

「真理見てたら、もう勉強なんて出来なくなった」

「そ、そんな事言ったら、毎日勉強できないじゃない」

「やる時はやるよ。だから、コツチもやりたい時にヤルっ」

膝立ちで伸び上がり、真理の頭を引き寄せて唇を重ねる。

二人の舌が絡まり、強めに唇を吸いあつた。

「・・・こんなんじゃない、勉強なんて出来ねーって・・・」

正臣が真理の手を取って、ズボンの上から自分自身に触れさせる。

真理はピクツとして更に赤くなってしまった。確かにこれでは勉強どころではないかもしれない。と思わせるように、正臣が真理を求めているのが分かる。

正臣はそのまま真理と一緒にベッドの上へ倒れこんだ。

「愛してるよ」

正臣の手が、ゆっくりと真理の服を脱がせていく。

唇が胸元をすべり、真理の体がビクツと震えた。

そんな二人を

カーテンが開いたままの窓から

明るい月が、見ている……。

番外編・夢一夜・前編（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

ホワイトデー企画で書かせて頂きました。番外編です。

もしも正臣が助かっていたら、6ヶ月目くらいにはこんな感じ？  
でも、後編で、もうひとつの展開が待っています……。

明日は少々「閲覧注意」。

では、後編で。

明日のホワイトデーに更新です。

番外編・夢一夜・後編(前書き)

注意

今回は本文中に性的表現が含まれています。  
苦手な方、又は、そういう表現が嫌いな方は  
その場面にきたらとばすなど。してください。  
R-15指定はさせて頂いていますが閲覧にはご注意を・・・。

「正・臣・っ」

ゆっくり息を吐きながら、甘い声が真理の口から漏れる。

その声に誘われるように、横向きに抱いた真理の体の上を後ろから正臣の手が滑る。

「んっ・・・あんっ」

片脚を真理の脚の間に入れて、真理の中でゆっくりと動いていた正臣は、乳房を揉み込んでいた手を腹部へと落とした。

「坊主、動いてるか？」

「わかん・・・ない・・・あっ、あぁっ、はぁっ・・・」

まだそんなに頻繁に動く時期でもないし、はっきり言って正臣の動きで体が反応してしまう分、多分赤ちゃんが動いていても分からないだろう。

「入り方が浅いから・・・坊主、気付いてないよな・・・『挨拶』できねーや」

お腹や妊婦本人に負担をかけないように、妊娠時のおススメ体位らしいが、負担をかけないという分、入り込む角度が浅い。正臣としてはハッキリ言っであまり好きではない。

「でもっ、んっ・・・あんっ！きもち・・・い・・・よ、あぁっ！」

「ホントか？でもさ・・・」

正臣はよつと体を起こすと、真理を横向きにしたまま片脚を軽く抱え、正面から真理の中へグツと入り込んだ。

「あっ！あぁっっ！やぁ・・・ん・・・っ！」

深く正臣が入り込んでくる。自分の中がいっぱい満たされる感覚に、今まで甘やかされていた真理の体がピクピクツと震える。

「コッチのほうか・・・イイだる・・・」

「んっ、んっ・・・イイ、けど・・・っ。あっっあぁっ！」

「真理ン中、コッチのほうかよろこんでる・・・っ」

「あつあつっ！！ばかあつ．．！まさおみい．．っ！」

本当に「挨拶」してしまいそうなくらい入り込んでくる。

子宮まで押されてしまいそうな強さと苦しさ。そして快感が上り詰めていく感覚が同時に襲ってきて、真理はどうしたらいいか解らなくなり首を振りながら両手でシーツをグツと握った。

「．．んっ、んああっ！イイ、けどお．．！ああつあはあっ！ダメえ．．．！」

「真理？苦しいか？」

正臣がちよつと腰を引く。真理は困った顔をしながら、上気し潤んだ目で正臣を見上げた。

「少し．．．。でも、きもち、いい、よ．．．」

正臣は手を伸ばして、自分の行為で嬉しいくらい乱れてしまった真理の髪を愛しそうに撫でる。

「真理。愛してる．．．」

そして再び、真理の中で動き出した。

「あ．．んっ！まさおみっ！ああつ、ああつっ！」

月が見てる

霞の無い．．綺麗な月が．．。

「真理．．．。」

誰かが優しく呼ぶ声。

「真理。風邪ひくわよ」

「．．．」

優しく呼びかける母の声で、真理は目を覚ました。

「あ．．寝ちゃった．．．」

目をこすりながら、ベッドの上で身を起こす。

横では4歳になった息子の眞臣が、可愛い寝息を立ててスースーと眠っている。

「まさちゃんに本読んであげているうちに眠っちゃったのね。でも、添い寝したままじゃ風邪をひくわ。ちゃんとベッドに入って寝なさいね」

母の真澄が優しく笑う。

「ごめん。起こしてくれてありがとう。お母さん」

真理は真臣を起こさないようにそっとベッドから下りて、照れくさそうに笑った。

そんな真理を見て安心したように、「おやすみ」と言って真澄は部屋を出る。

パタンとドアが閉まってから、真理はベッドの上で眠る真臣を見て、それから窓辺へ寄った。

カーテンを引いていない窓から、綺麗な月が見える。

かすみ  
霞の無い、綺麗な月。

「また、正臣の夢、見ちゃった・・・」

真理は月に話しかける。微笑みながら。

時々、正臣の夢を見る。

正臣と過ごした、3ヶ月間の夢。

もし正臣が生きていたら・・・。そんな思いが見せる、「それから」の夢。

そして、そんな夢を見る時は、必ず綺麗な月が出ている。

「あなた月が、夢を見せてるの・・・？」

本当にそう思ってしまうくらい、月は真理を見詰めている。

・・・それにしても・・・セックスしてる夢を見ちゃうなんて・・・私ってば。

思い出すと顔が熱くなってくる。

しかし、そんな夢を見てしまうのは、初めてではない。

時々、自分の体が熱く火照ほてってしまって、どうしたらいいのか解らなくなる時がある。

そんな時、よく正臣に抱かれる夢を見てしまうのだ。

「これじゃあ私。欲求不満みたいじゃない・・・」

不満げに呟いて、真理は月を見上げた。

正臣に抱かれたのは、ほんの3ヶ月間だけなのに。・・・随分と体だけは「女」になっちゃったんだな。私。

そう思うと恥ずかしく感じるが、真理だってもう22歳。一度でも出産経験のある立派な「女性」だ。

そんな体の変化があつたって、まったくおかしくはない。

「・・・正臣が、先に逝いっちゃうから、悪いんだからね・・・」

真理は部屋の中をぐるりと見回した。ここは元々、正臣の部屋。

真理の希望で、何一つ動かさず処分もせず、そのままにしてある。

机も、本棚も、ベッドも。クローゼットの中身までも。

「パパのお部屋」、真臣はここをそう呼び、いつも正臣のベッドで眠る。

正臣に良く似た寝顔で。

当たり前だが、真理は真臣が大好きだ。

真臣も真理が大好きで、完全なママっ子になってしまっている。

父の正孝まよたかは、正臣によく似た真臣が可愛たまくて堪たまらないらしく猫っ可愛たまがり、母の真澄も甘やかかし気味。

昔の3人の仲間達も、よく病院などに顔を出しては、病院を遊ぶ場のようにしている真臣を可愛たまがってくれる。

そんな環境のせいもあるが、真臣は少々我侷わがままに育ってしまった。

自分の幼稚園が休みなどの時に真理が仕事に出ようとしたり、たまに朝のお迎えバスが来ている時など、「行きたくない」「おなかいたい」などと言つて真理を困らせる。

正臣が生きてたら、きつと「シメて」たんだろうな・・・。

そんな想像をしていると、クスクス笑いが漏れてしまう。

真理は机に手を付いて、ストンと椅子に腰を下ろした。

正臣の机。正臣の椅子。真理は机の上に腕を乗せて顔を付け、目を閉じる。

引き出しの中の教科書もノートも、切抜きや小物も、全てそのまま。机に付属した本立てに立ててある参考書も、ペン立てのペン類

やハサミ、蛍光ペンまでも……。

まるでまだ、正臣が生きているかのように……。  
こうやって正臣の物に触れていると、まるで正臣に触れているように感じてしまう。

「正臣……」

真理は幸せそうに呟いて、夢を見るような瞳で、微かに目を開いた。

真理……。

顔を傾けたまま目を開くと、窓から月が見える。  
月が、自分を見ているのが解る。

「正臣……」

真理が呼びかける。

真理……。

月が答える。

それはこの4年間、月が真理を見詰める夜、月が真理に夢を見せる夜、必ず繰り返されてきた行為。

「愛してるわ……正臣……」

愛してるよ……真理……。

確認した事を安心して、真理は満たされた気持ちで目を閉じる。

「愛してる……」

こんな夜は、夢を見よう。  
愛しいあなたの、優しい夢。

月が見せる

愛しい夢・・・。

END

番外編・夢一夜・後編（後書き）

こんにちは。玉紀 直です。

番外編、いかがでしたでしょうか？

「正臣が生きているバージョンが読みたい！」という多数の方のご要望にお応えして書いてみたのですが・・・。（結局は、夢才子・・・スイマセン・・・）

ホワイトデー企画なので、幸せを感じて頂きたかったのですが、かえって切なくなってしまったような気がしないでもないです。

番外編は考えていなかったのですが、書いているとやっぱり楽しかったです。

やっぱり玉紀はこの二人が好きだったんだな・・・と痛感して、治まっていた涙がまた浮かんでしまっただくらいです・・・。（バカですなー）

色々と皆さんにご意見を頂き、色々と考えたのですが、「続編」を書かせて頂く事に決めました。

今、ストーリーを組立てている最中です。

多分、4月スタートにすると思います。

いつから開始するかは、並行して読んでくれる方が多い、「理想の恋愛 完璧な愛」の前書きかあとがきでお知らせさせていただきますね。

どうぞよろしくお願いします。

ではまた。「続編」で・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3041f/>

---

太陽の愛 月の恋

2010年10月8日12時03分発行